能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

NHK放送予定（平成15年1月～2月）

◈NHK－FM能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

1月26日　「竹生島」「源氏供養」（喜多流）喜多定世ほか
2月2日　「羽　衣」（観世流）関根祥六ほか
2月9日　「藤　戸」（宝生流）金井　章ほか
2月16日　「嵐　山」（金剛流）豊嶋三千春ほか
2月23日　「鉄　輪」（再）（観世流）梅若六郎ほか

演能カレンダー

◈名古屋能楽堂◈

（TEL 052－231－0088）

〔平成15年1月〕
26日(日)　名古屋宝生会定式能　（有料）
〔2月〕
8日(土)　青陽会定式能　（番組②面）（有料）
9日(日)　名古屋観世会定式能　（番組②面）（有料）
11日(祝)　冨耀会　（無料）
15日(土)　名古屋能楽堂定例公演　（番組③面）（有料）
16日(日)　名古屋観世九皐会　（番組③面）（有料）
23日(日)　恵謳会　（無料）
〔3月〕
5日(水)　茂山狂言会名古屋公演　（有料）
14日(金)　名古屋能楽堂定例公演　（有料）
28日(金)　名古屋梅若六郎の会　（有料）

◈豊田市能楽堂◈

（TEL 0565－35－8200）

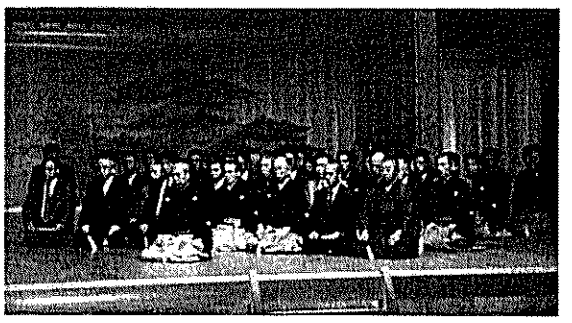
〔3月〕
21日(祝)　豊田市能楽堂定例公演　（有料）

芸術院会員に宝生閑氏

日本芸術院（犬丸直院長）は、十二月二日、新芸術会員八氏を発表、能楽界からワキ方下掛宝生流の宝生閑氏が新会員となった。

宝生閑氏は昭和九年宝生弥一氏の長男として生まれ、父および祖父（故宝生新氏）に師事、平成六年重要無形文化財「能ワキ方」各個指定保持者（人間国宝）、能ワキ方下掛宝生流十二世宗家。

平成八年紫綬褒章受章、主な受賞に、観世寿夫記念法政大学能楽賞（平成二年）日本芸術院賞（平成三年）がある。



薪能は8月9日
能楽協会名古屋支部
平成15年度演能予定

能楽協会名古屋支部（福井啓次郎支部長）主催による平成十五年度の行事予定は次のとおり。

◎熱田神宮奉納能
六月五日(木)　熱田神宮能楽殿
観世流能「花月」　外山　圭一
金剛流能「巴」　加藤かおる
宝生流能「源氏供養」　衣斐　愛
喜多流能「野守」　長田　郷
ほか狂言、仕舞

◎名古屋薪能
八月九日(土)（※第二土曜日）
観世流能「高砂」　高橋　瞭一
宝生流半能「雲林院」　玉井　博祐
観世流能「葵上」　梅田　邦久
ほか狂言、仕舞

◎初秋能
九月七日(日)名古屋能楽堂
〔第一部〕
観世流能「胡蝶」　八神　孝充
宝生流能「天鼓」　竹内　澄子
ほか狂言、仕舞
〔第二部〕
観世流能「玉葛」　加賀　敏彦
喜多流能「邯鄲」　長田　驍
ほか狂言、仕舞

◎歳末助け合い協賛能
十二月七日(日)
観世流能「簾」　松山　幸親
観世流能「三井寺」　久田　勘鶴
金春流舞囃子
宝生流能「黒塚」　衣斐　正宜
ほか狂言、仕舞

能楽協会名古屋支部 新年謡初式

能楽協会名古屋支部は、新春一月三日午前十一時から恒例の新年謡初式（写真㊤）を名古屋能楽堂で催し、平成十五年のスタートを祝った。同支部の謡初式が名古屋能楽堂で行われたのは今年が初めてである。

新作能「額田王」
3月14日　四日市市文化会館

四日市市文化会館では会館二十周年を記念して、三月十四日(金)四日市市文化会館第一ホールで新作能「額田王」（ぬかたのおおきみ）を上演する。

この能は、国立能楽堂委嘱作品として、原作・馬場あき子、構成・演出・観世栄夫、節付・梅若六郎・再演出・大槻文蔵で、今回の出演は、幻の額田王・梅若六郎、中大兄皇子・大槻文蔵、大海人皇子・梅若晋矢、額田王・山本順之、侍女・佐藤融、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・成田達志、大鼓・山本哲也、太鼓・上田悟、後見・梅田邦久ほか。地謡・阿部信之、斉藤信隆ほか。演能に先立って、馬場あき子氏による「謎の麗人・額田王」の話がある。

当日は開演午後六時三十分。入場料S席五千円、A席四千円、学生席二千円（全指定席）。

ひきつづき同能楽堂の地下舞台で新年臨時総会を開き、福井啓次郎支部長から、平成十四年の支部主催の演能の協力を感謝するとともに、「昨年十月には名古屋能楽堂開館五周年記念能楽大会が三日間にわたって行われた。世界無形遺産に指定された能楽の発展にご尽力を賜りたい」、と年頭のあいさつが述べられた。

別項のように平成十五年度の事業予定の発表。役員職務担当発表、野村又三郎氏を支部相談役に推薦することが発表された。

また愛知県の催しとして「親子ふれ合い劇場」の本年の申込みを受付け中であること、昨年度の歳末助け合い協賛能の義えん金を愛知県、名古屋市にそれぞれ二十五万円ずつ寄贈したことが報告された。

梅若六郎の会
3月28日　名古屋能楽堂

きたる三月二十八日(金)名古屋能楽堂で「名古屋梅若六郎の会」で「隅田川」が上演される。

昨年は、舞台生活五十周年記念公演－父五十五世梅若六郎を偲ぶ－催しとして行われ、能「融」の上演はじめ多彩な番組で催された。今回は、能「隅田川」、狂言「文角力」が上演される。

狂言「文角力」大名・野村又三郎、太郎冠者・佐藤融、新参者・野村小三郎

能「隅田川」シテ梅若六郎、子方・梅若美和音、ワキ宝生閑、笛・松田弘之、小鼓・曽和正博、大鼓・山本孝、地謡・観世栄夫、梅田邦久ほか

午後三時開演、梅若六郎事務所＝電話03・3363・7718

主催・四日市市文化振興財団、能と狂言に親しむ会四日市研究会。

謹賀新年

名古屋観世会

名古屋能楽堂
名古屋市中区三の丸一丁目一番一号
電話〇五二（二三一）〇〇八八番

謹賀新年

名古屋観世会

観世清和

鋏仙会
観世栄夫
観世鋏之丞

幽謳会
片山九郎右衛門
清司

梅猶会
猶諷会
梅若吉之丞

大槻清韻会
大槻文蔵
〒540－0005 大阪市中央区上町A番七号
電話（〇六）六七六四－〇八九八番

名古屋観鴎会
山本勝一
名古屋正花会
山本博通
〒540－0025 大阪市中央区徳井町一丁目三－六
電話（〇六）六九四二－四〇七〇番

鳳鳴会
武田志房
稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15－3　浅井ビル
電話〇五二（七三一）三七三六

幽花会
片山慶次郎
伸吾
〒603－8123 京都市北区小山下花ノ木町二一
TEL　四九二－五三〇二番
FAX　四九二－五三〇九番

名古屋観世九皐会
観世喜之
観世喜正
加藤保彦
高橋瞭一
外山圭一

井上嘉介
井上裕久
〒603－8175 京都市北区紫野下鳥田町六

鳳の会
林和利
井上祐一
佐藤友彦

「後の花」

能は、時間と空間の芸術として舞台上に長い歳月を費やして、磨きぬいた技と心を集中し、燃焼しながら強くも美しい世界を創りあげてゆく。

秀作の面（おもて）、名品の装束、名人上手の舞台姿、それらの綜合されたどのような素晴らしかった能も、ほんとうに惜しいことであるが、形を留めない。

文字通り、無形の文化財であるが、大切なのはそのあとである。

人々の心の中に移り住み、いつまでも美しく生き続ける「のちの花」と、いわれるものが、真の生命をもった能に外ならない。新劇一〇九号に掲載された、ホール・エミール・デベールは観能記に次のような事を書いている。

「能の祭儀的な要素というのは、もし全員が体現しているあの厳格極まりない調和、純粋なものに煮つめられた、一糸も乱れぬ芸というものがなければ、むしろ滑稽なものに終ってしまうだろう。それをあのような（至高の緊迫状態）に保ちつづける内面的な力というものは驚嘆の外はない。この点でラシーヌ劇の要求する厳密さ、緊迫感というものと、能をささえているそれとは全く同じはずと考えた。

自分が最も感動したのは、能の面だ。たとえば、後シテ「注・井筒の能、観世静夫」が井戸の底をのぞきこんで、愛する人の面影をそこに見出す瞬間、それまでは常にほほえんでいるように見えた面が、突如として激しい感情の表白そのものとなった。つまり、面がドラマチックな意味を持つものに変貌するのを見たときだ。それは実に至高の瞬間だった。」

青陽会定式能（第47期第1回）

二月八日（土）十一時開演
名古屋能楽堂

仕舞　定家　近藤幸江

能　弱法師　久田三津子　飯冨雅介　河村後藤孝一郎　大鹿取希世
間　井上靖浩

仕舞　高砂　黒田博
仕舞　實盛キリ　武田邦弘
仕舞　玉之段　祖父江修一

能　采女　梅田邦久　相元正樹　杉江元　橋本宰　河村柳原冨司忠　大藤田六郎兵衛
英奈保之伝　井上祐一

狂言　飛越　佐藤融　佐藤友彦　後見　今枝郁雄

能　葵上　高島良一　須部甫　高安勝久　杉江淳　今枝靖雄　河村総一郎　後藤嘉津幸　鬼頭好信　鹿取希世
間

附祝言

主催　青陽会

当日券三、〇〇〇円、学生券一、〇〇〇円

名古屋観世会定式能（初回）

二月九日（日）十二時半始
名古屋能楽堂

素謡　神歌　武田邦弘　祖父江修一　地謡　須部甫　久田勘鬼　藤井完治　古橋正邦

観世芳宏
観世清和

能　弱法師　福王知登　福王茂十郎　福王和幸　野村又三郎　野村小三郎　河村総一郎　大倉源次郎　藤田六郎兵衛
世阿弥本による
間

後見　小島一英　藤井徳三　地謡　松山幸親　高橋暸一　清沢一政　祖父江修一　古橋正邦　武田邦弘　梅田邦久　久田勘鬼

仕舞　難波　藤井完治
仕舞　雲林院　藤井徳三　地謡　本田勲　古橋正邦　小島一英　清沢一政

狂言　箕被　井上祐一　佐藤友彦　後見　佐藤融

能　羽衣　観世芳伸　高安勝久　杉江元　相元正樹　和合之舞　筧鉱一　福井啓次郎　助川治　大野誠

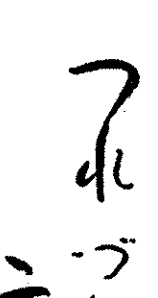
後見　武田邦弘　梅田邦久　地謡　外山圭一　高島良一　須部甫　加賀敏彦　久田勘鬼　藤井完治　小島一英

附祝言

主催　名古屋観世会

（終了四時頃）

※初回に限り当日券の発売はありません。



壺泉会　泉嘉夫
名古屋市昭和区山手通3・8・2・306
電話（〇五二）八三二―三一八五
西宮市甲陽園目神山町二三―二五
電話（〇七九八）㉓二四五八

観世芳宏門人会　観世芳宏
観芳会　観世芳伸

大垣浦声会
稽古場　大垣市伝馬町大垣別院
電話（〇五八四）七三―三三六二
浦田保利
浦田保浩
浦田保親
〒606―0011　京都市左京区下鴨芝本町五八
電話（〇七五）七八一―七〇三〇

邦謡会　梅田邦久
清沢一政
須部甫
本田勲
高島良一
今沢美和
名古屋市昭和区台町二丁目十六―五
電話（〇五二）八四一―四六三二番

大西智久
大西礼久

名古屋淡交会　橋岡慈観
〒465―0093　名古屋市名東区一社3―162
電話〇五二（七〇五）一五八五

財団法人　鎌倉能舞台
中森晶三
中森貫太

大江能楽堂
大江将董
大江信行

武田謡楽会
武田欣司
武田邦弘

名古屋修諷会　梅若修一

松音会　泉泰孝
〒168―0021　東京都杉並区宮前四―一九―四
電話（〇三）三三三一―八二八〇番

泉雅一郎
〒201―0002　東京都狛江市東野川四―六―八
電話（〇三）三四八八―二四八五番

山本章弘
〒560―0021　豊中市本町6―10―6
電話〇六（六八四六）三三六九

初陽会　武田宗和
稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15―3　浅井ビル
電話〇五二（七三二）三七三六

上田観正会能楽堂
社団法人　観正会　TEL〇七八―六九一―五四四九
上田観正会　上田貴弘
拓司
公威
大介

梅春会　井戸和男
〒545―0004　大阪市阿倍野区文の里3―16―17
電話〇六―六六二一―二二一九

下田雄三
豊中市曽根東町四―一―一二

雄諷会中部地区連合会
名古屋和諷会
一宮竹石会
岐阜花諷会
下呂雄諷会
倭文之屋社中

名古屋能楽堂定例公演

二月十五日(土)午後二時始
名古屋能楽堂

番組

（金剛流）舞囃子　右近　百々　康治　河村総一郎　後藤嘉津幸　大野　鬼頭　好信　山口　田中　竹市　岩切　敏尚　幸司　直次　誠文　地謡

（和泉流）狂言　二人大名　シテ大名　佐藤　融　アド大名　今枝　靖雄　通行人　井上　祐一　後見　今枝　郁雄

（観世流）能　弱法師　武田　邦弘　飯冨　雅介　百目之舞　佐藤　友彦　間　河村総一郎　後藤孝一郎　大野　誠　後見　今沢　美和　久田　勘隠　地謡　外山　圭一　高島　良一　松山　幸親　須部　甫　今枝　清沢　古橋　正邦　梅田　邦久　祖父江　修一（終了午後四時半頃）

主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・㈶名古屋城振興協会
㈶名古屋市文化振興事業団
協賛　能楽協会名古屋支部

〔入場料〕前売一般三千五百円、学生二千円（当日一般四千円、学生二千五百円）
取扱所＝名古屋能楽堂（052・231・0088）チケットぴあ（052・320・9999）市内プレイガイド

名古屋観世九皐会能

二月十六日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

（後ツレ）古川　充　（後ツレ）奥川　恒治　（前ツレ）小島　英明　観世　喜正　玉井　橋本　宰　飯冨　雅介　相元　正樹　井上　靖浩　間　坂　真太郎　観世　喜之　後見　地謡　小林　正樹　外山　圭一　加藤　保彦　高橋　暲一　河村眞之介　後藤嘉津幸　地謡　中所　宜夫　小林　喜久　五木田三郎　中森　貫太　鬼頭　好信　竹市　学

狂言　因幡堂　野村又三郎　野村小三郎　後見　俳野　俊彦

仕舞　老松　高橋　暲一　雲林院　観世　喜之　葵上　中所　宜夫　地謡　小林　正樹　古川　充　奥川　恒治　小島　英明

能　鉢木　坂　真太郎　駒瀬　直也　杉江　元　橋本　宰　間　松田　野村小三郎　高義　覓　鉱一　後藤孝一郎　大野　誠　後見　小林　喜久　五木田三郎　地謡　小林　正樹　外山　圭一　小島　英明　古川　充　奥川　恒治　中所　宜夫　観世　喜正　中森　貫太

附祝言

〔当日券〕自由席五千円　学生券二千円
チケット問い合わせ　名古屋能楽堂
☎052・231・8064

主催　観世九皐会
名古屋観世九皐会事務所
名古屋市南区元塩町一一一七　加藤　保彦方
TEL　052・611・3659

戦後名古屋能楽史 ㊴

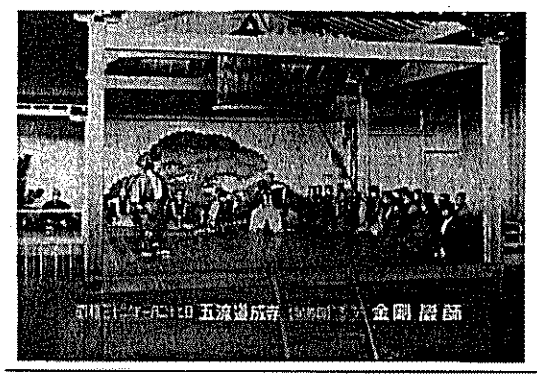
〔第十一章〕

昭和三十二年（一九五七）

竹尾　邦太郎

（承前）

まず十一月号既述の南極観測船宗谷は一月二十五日午後一時（日本時間午後七時）無事南極大陸に接岸する。一月二十七日、第二十八回名匠鑑賞能は金剛流一門総出演で、東西にも喧伝される五流道成寺の第四回。番組は「竹生島・女体」豊嶋弥左衛門・種田治郎、仕舞二番「山姥」豊嶋訓三「花筐」今井幾三郎、舞囃子「盛久」山田仁三郎、「道成寺・古式」金剛巌(33)、岡治郎右衛門、三宅藤九郎・和泉保之、囃子は杉市太郎・田鍋惣太郎・谷口勝三・小寺金七、地頭今井幾三郎(44)、後見豊嶋弥左衛門(58)、鐘後見種田治郎(52)、「木六駄」三宅藤九郎、一調「勧進帳」田鍋惣太郎・佐野安彦、「夜討曽我」大塚二二・竹市秀雄、全金剛流の中にあって独り金沢から宝生流佐野安彦が珍しい。



月が替り二月十日、名古屋能楽倶楽部第三回公演。世話人代表植村眞太郎は挨拶で次のように言う。「昨年二月能楽各流愛好者に依り本倶楽部を設立し以来諸先生方の御後援と愛好者各位の御熱意に依って今回は戦後始めての五流に依る五番能を催す事の出来ましたのは素人としてその道を楽しむ私共の欣快とする處であります次回は五月五日(こどもの日)にお子供さんを中心として仕舞、舞囃子等の催を計画中でありますから広く御同好各位御子弟の賑々しく御参会下さる事を御願申上げます」

二月十七日、観世会初回は「神歌」林愿蔵・国枝照清、「竹生島」橋岡久太郎、仕舞三番「弓八幡」山本博之「東北」大槻十三「船弁慶」武田太加志、「雲雀山」観世元正、「宝ノ槌」井上松次郎、「望月」観世喜之、祝言「高砂」柴田初太郎、観世宗家の初回来演は恒例である。

三月一日、先に芸術院会員に決ったばかりの桜間弓川が午後六時三分、東京都千代田区富士見町の自邸で急逝は如何にも惜しい。享年六十七歳。名古屋での最後の舞台は前年十月十四日の第二十七回名匠鑑賞能「放下僧」シテ、このとき五流道成寺が金春流で嬪子龍馬の主後見も勤める。田鍋惣太郎は自著『小鼓芸話』「故人の想い出」の中で「能の前日には、必ずその舞台でお稽古をされましたのには感心していました。道成寺のお申し合せを、楽屋で対座して願った時、乱拍子のコミをとるのに、あの大きな鼻をスースーいわせて真剣そのものでした」と懐しむ。

三月三日、第二十九回名匠鑑賞能はお馴染み春の宝生大会能、宗家一門名曲揃い、と謳う。舞囃子「高砂」辰巳孝、「清経・音取」宝生英雄（笛・藤田六郎兵衛）、「鵜鴒」井上義次、「隅田川」宝生九郎、「土蜘」大坪十喜雄・野口禄久、宝生流の「音取」は昭和七年以来二十五年ぶりである。十日、先号で栗林貞一が期待をもって紹介した当地女流の汎流儀の結

（④面へつづく）

謹賀新年

賀水会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
花晨の会
加賀敏彦
〒463-0035 名古屋市守山区森孝二丁目七〇九
電話（〇五二）七七一―八九四五番

中日文化センター
謡曲・仕舞教室 名古屋(栄)・岐阜・四日市
翠謡会
生駒里翠
〒465-0092 名古屋市名東区社台三丁目154-101
電話（〇五二）七七七―八七七七

名古屋橋岡会
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五
山田紀子方

笙月会中川雅章
〒526-0036 長浜市地福寺町八ノ二九
電話（〇七四九）六二〇六三〇番

洗心会奥村富久子
〒606-8433 京都市左京区永観堂西町二〇
電話〇七五（七七一）〇七六七番

観修会祖父江修一
〒507-0048 多治見市日ノ出町2の2
電話（〇五七二）二二―三六五六

猶恵会熊沢恵美子
〒465-0097 名古屋市名東区平和ヶ丘3-76
日車マンション四〇四

重陽会菊池重郷
〒484-0081 犬山市大山字相生五九―一六
電話（〇五六八）六一四五〇一番

幸謡会近藤幸江
〒444-2122 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話（〇五六四）二一二五一九

恵謡会三村恵子
〒445-0061 西尾市住吉町三―一二
電話〇五六三（五七）二五九四番

千早会八神孝充
〒464-0062 名古屋市千種区向陽町2-16
電話（〇五二）七六一―二二〇一

桜月会加藤春枝
〒509-0206 可児市皐ヶ丘3-113
電話（〇五七四）六四―三三〇六

松盛会
小松勝憲

名古屋巽会
辰巳孝
辰巳満次郎
松舞台
〒511-0861 三重県桑名市西別所一〇六一の五
TEL・FAX（〇五九四）二三―四五八二

近藤乾之助
〒170-0002 東京都豊島区巣鴨五―三三―八
電話〇三（三九一五）一三七六番

佐野由於
〒150-0011 東京都渋谷区東2-14-21
〒921-8004 金沢市泉野町4-15-18-103

倉本雅
〒658-0081 神戸市東灘区田中町1-13-22-809
電話（〇七八）四四一―五四六五番

惠美寿会
衣斐正宜
衣斐正宜後援会
〒466-0061 名古屋市昭和区御器所3-23-19
御器所パークマンション802号
電話（〇五二）八八二―五六〇〇番

宝生流
嘉宝会
鬼頭嘉男
〒466-0055 名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

司宝会
佐藤耕司
〒468-0066 名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅三二三〇電話（八〇三）七三七二

金剛永謹

廣田後援会
廣田陛一
廣田幸稔

菊扇会
後援会
廣田泰三
廣田泰能

豊嶋能の会
豊春会
豊嶋三千春

松野恭憲能の会
松野恭憲
松野洋樹
〒616-8281 京都市右京区鳴滝泉殿町一八―三
TEL〇七五（四六二）二一四八番
FAX〇七五（四六二）六〇九八番

金剛流
名古屋周星会
岐阜周星会
吉川周子
〒464-0025 名古屋市千種区西崎町三―六
電話（〇五二）七六一―二二五七

（③面よりつづき）

社謡調会主催の観世・宝生・金剛・三流婦人能楽鑑賞会が会員自演の賛助囃子会のあと、満を持して行われる。謡調会同人の意欲、抱負の程は次の挨拶からも窺えよう。「能楽は婦人から、といふとお叱りを受けませうが最近の能楽界に婦人の進出は目覚しいものがあります……が一面には女流能楽師のひたむきな精進を、見落してはなりません。今度の様にお仕手が東西と地元の婦人能楽師に依る、三流合同の催能は斯界における全く最初のもので、画期的な企てといへませう。将来婦人能を一段と飛躍させる機会ともなれば欣快と存じます。何卒皆様の御声援と御鑑賞を御願申上げます」番組は「邯鄲・盤渉・月ノ働」片岡道子、「熊野・村雨留」津村紀三子、「熊坂」倉本雅、外に舞囃子「養老」加藤良久、独吟三番、仕舞三番、中で「熊野」は地頭加藤良久以下全員女性である。なお謡調会はシテ方の結社なので「邯鄲」アイ井上公代を例外として三役は男性、そしてここに狂言は、対立する夫と父との間で苦しむ女の立場がテーマの「貰聟」なのが如何にも妙。

翌十一日、中部日本新聞は「三流で婦人能」の見出しのもと栗林貞一の次の談話を載せる。「第一級の三流婦人シテばかりを集めた婦人能ははじめてのことで、心配されたが内容はよかった。この成功で今後いよいよ婦人能はさかんになろう。まず邯鄲は声、動作ともにボリュームがあり後見のよさとともに十分力を出していた。難をいえばまだ芸が若いということだろう。熊野の津村は婦人能草分けのベテランだけにさすが幽玄味は素晴しいものであった」因に津村紀三子（一九〇二―一九七四）このとき五十五歳、昭和二十四年『道成寺』を披き、失敗と認め翌年再演している。

同日、夕刊は「純粋な夫婦愛描く・光太郎生写しの山村聡」の三段抜き見出しで映画になった『智恵子抄』を紹介。「すでに新派、テレビで取り上げられた故高村光太郎の詩集『智恵子抄』の映画が東宝で製作されている。『智恵子抄』はいままでにも松竹、日活、東宝などの企画に上ったが、その内容のむつかしさと、高村光太郎の在世中は光太郎自身の中に生きている智恵子のイメージをそこなってはという心配から実現の運びに至らなかった。しかし、高村光太郎なき今でもそのむつかしさに変りはない。映画（脚本・八住利雄、監督熊谷久虎）は戦後岩手県の山中に独り農耕自炊の生活に入った光太郎の回想のうちに、詩集『智恵子抄』にあふれる光太郎と智恵子との異常なまでに純粋な夫婦愛を描くわけだ」として撮影の状況から苦労話などを披露する。この年、『智恵子抄』が大いに持て囃され、舞台・テレビ・映画に採り上げられたのも、前年死去したばかりの高村光太郎（一八八三―一九五六年四月二日）の詩魂を追慕することの熱さだったろう。後に触れるが新作能「智恵子抄」が初演されたのもこのブームの中、一ヶ月あとのことである。

さて、三月十七日、名古屋淡交会五十周年記念能は橋岡久馬病気全快と橋岡久共当地シテ初演を寿ぐ。「神歌」鬼頭五朗に始まり、「邯鄲」観世元正、「隅田川」橋岡久馬、「葵上」橋岡久共、舞囃子三番「西行桜」橋岡久太郎「橋弁慶」高橋静雄「頼政」柴田初太郎、「棒縛」茂山喜三、独吟三番、連吟一番、仕舞十番、一調「春日龍神」鬼頭八郎・観世元昭、の大能。二十五日、「念願の能を見たい」と来日中のメトロポリタン歌劇場の著名なソプラノ歌手エリナー・スティーバーが記者会見を行う。昨年末ニューヨークを発って以来十六ヶ国を回ってきたが日本に及ぶ国は無かったようだ、と褒めちぎり、「蝶々夫人の衣装を買うのと、能を見ることが今度の旅行の主目的になっているので、スケジュールの許す限り、能楽堂に通うつもりです。能を見ることは子供のときからの夢だったのですから」と二十六日の夕刊に談話が載るが、その後、観能あとの彼女の感想が聞こえてこなかったのはマスコミの怠慢か……。

四月六日、名古屋金春会による催能が戦後二回目、六年ぶりにある。先回の会名は名古屋金春会定式能で今回は金春会演能、会名からみても未だ地盤の定まらない脆さを感じるが番組は重厚。舞囃子「高砂」金春信高、「景清」桜間道雄、仕舞二番「嵐山」金春晃実「網ノ段」金春欣三、一調「勧進帳」田鍋惣一郎・桜間龍馬、「墨塗」佐藤卯三郎、「道成寺」本田秀男（58）、高安澄郎、井上松次郎・井上礼之助、囃子方藤田六郎兵衛・幸円次郎・安福春雄・鬼頭八郎、地頭桜間道雄（60）、後見金春信高（37）、鐘後見桜間龍馬（41）と金春流一門勢揃い。

翌七日の中部日本新聞夕刊は、金春流の重鎮桜間弓川師亡きあとの第一線スタッフを集めただけに家元信高をはじめ道雄、龍馬、秀男の連携が注目され満員の盛況であった。まず能「景清」（桜間道雄）は弓川の枯淡さはないが渋さを古格な金春流の芸風を引きしめた囃子方によって表現「道成寺」（本田秀男）は囃子方と呼吸のあった緊迫さを最後まで持ちつづけて切れのよいあざやかな舞で圧巻であった。全般を通じてなじみ少なかった能ファンに金春流安泰の感を強めた興味深い能会であったといえる。と論評する。

四月十日、先に触れた「智恵子抄」が上演され、二十一日には新作能「復活のキリスト」が宝生九郎によって試演される。前者の立稽古を見た丸岡明は四月三日付の新聞に寄せた「野心的な智恵子抄――新作能二つの場合――」と題する論評を自著『能談義』（昭和三十五年七月・東西五月社刊）に再録、参考のためにその関係する一部を次に紹介する。

能には近ごろ、いろいろ変った動きがある。まず武智鉄二の「花友会」（十日・観世会館）を取り上げてみよう。武智鉄二は、武者小路実篤の「仏陀と孫悟空」を狂言で、高村光太郎の「智恵子抄」を能にして演出することになっている。

「智恵子抄」の作曲には、幸祥光、藤田大五郎、安福春雄、観世寿夫の四人が当った。笛ぬきのその立げいこを見たが、現代語を謡曲にした不自然がなかった。無理だと言えば、もともと能などにする意図なしに書いたものを、能にした根本にあるが、――そこに創作的意欲をくんで、鑑賞する方が面白いし、それが鑑賞する側の態度でもあろう。

新劇の方では、今ちょうど詩劇のことが問題になっているが、詩劇としてこの能がどれほど成功するかという点に、一番の演出者の野心があるように見た。また能の新作は、今までに幾つも書かれて来たが、現代語に節付をして上演されたものはない。この点では、必ず新しい道を開くだろう。

狂言の「仏陀と孫悟空」は、大阪ですでに一度上演されているそうだが、立げいこも見ていないし、台本も読んでいない。しかし関係者一同が、大変真面目に、この仕事に取組んでいる姿は頼もしかった。十分に期待していいだろう。

演者は、観世寿夫、静夫、片山慶次郎、野村万之亟、万作。囃子に、藤田大五郎、三須錦吾、安福春雄、田中一次、北村一郎、亀井俊雄、金春惣右衛門達が出演する。

「智恵子抄」は今までの新作能から、はみ出たものだが、能の形式や能の約束ごとは従来のままだと聞きながら、どうも異様に思えるものに、新作の「復活のキリスト」がある。

企画構成は、能面作者だという城戸久平である。歌詞は能界のベテランである吉田魯洋だが歌詞や節付や型付は、いわば技術面の話で、私に分らぬのは、なぜキリスト劇を能にしなければならなかったかという、その創作動機である。

キリストを主人公にした能をつくり、それをアメリカに持ってゆけば、能の理解者が得られるからだろうと言った人があるが、こうなると芸術運動や文化活動の話ではなくなって、みやげものや商品の取りひきのようなことになる。

私は能の人達の技術面に対する純な激しい気持を信じているので、結果が行き過ぎにならぬようにと思うのである。（三一・四・三）

――以下次号――

賀正

金剛流景雲会
能を楽しむ会
宇高通成後援会
宇高通成面乃会
（1・26・1 世界13ヶ国）国際能楽研究会
宇高通成
竜成
徳成

〒606―8105 京都市左京区高野泉町四〇 TEL・FAX（〇七五）七〇一―〇七九三 敷舞台
〒605―0047 京都市左京区上高野薩田町二 TEL（〇七五）七〇一―〇五五 敷舞台
〒791―8013 松山市山越四丁目二―三八 TEL・FAX（〇八九）九二四―八五五四 名古屋事務所 前鉏方 TEL・FAX（〇五二）八五一―三三四

金春信高
金春安明

〒167―0062 東京都杉並区南荻窪3―17―16 電話〇三（三三三一）二五七一番

金春欣三

〒630―8113 奈良市法蓮南町一四 電話（〇七四二）二二―七九二九

本田光洋

〒164―0002 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二 電話〇三（三三八六）二六四一番

春敲会
名古屋春栄会
金春穂高
廣瀬瑞弘
廣瀬雅弘

二井栄逸

〒515―0073 松阪市殿町1412の3 電話（〇五九八）二三―〇二一六

伊勢金春会
宇仁田吉邦

〒516―0056 伊勢市八日市場町5―16 電話〇五九六（23）五二九八

長田驍後援会

〒514―2221 津市高野尾町三三五一―四六 電話（〇五九二）（30）〇六九七番

喜多流
和楽会
和谷衡市

〒516―0067 伊勢市中島二丁目26―12 電話（〇五九六）（23）〇一五九番

福王茂十郎

高安勝久

植田和光会
植田隆之亮

〒673―0862 明石市松ケ丘4の3 A6―301 電話・FAX〇七八―九一一―三七四

谷田宗二朗

〒603―8372 京都市北区衣笠街道町31―7 電話〇七五（四六三）四八七五番

西村同門会
飯冨雅介
杉江元
椙元正樹
橋本宰
西村信広

清水利宣

〒569―0817 高槻市桜ヶ丘北町11―25 電話〇七二六（九四）五〇一七

藤田龍吟の会
藤田六郎兵衛

〒451―0041 名古屋市西区幅下2―10―9 TEL&FAX〇五二―五七一―六三四一（ロクサンヨイ）

大倉源次郎

〒532―0003 大阪市淀川区宮原4―4―2―705 TEL（〇六）六三九七―二三三三

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

冨耀会
柳原冨司忠

〒466―0025 名古屋市昭和区滝川町47―147 サザンヒル八事2―703 電話（八三二）一〇三一番

小鼓教室
名古屋市中区栄 朝日神社内（丸善前）

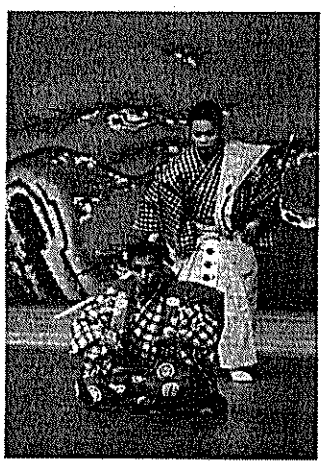
◆晩秋から初冬の舞台◆

「忠三郎狂言会」「第五回なのり座」と「梅猶会定期能」「豊田市能楽堂狂言づくしの会」

竹尾邦太郎

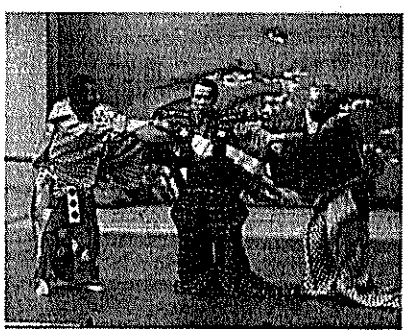
「鴈礫」　鴈に見立てた洞烏帽子は脇座。家居の憂さ晴らしは野に出て鳥を射ること。シテ大名・忠三郎、その鴈を見付けるや早速射止めんと身支度するがハテどちらの袖を脱ぐか、一刻の思案。大方の武士は右だが弓持つ者は必ず左、「いやいや、こちらではないは」と独り笑いに体裁繕う辺り、実力の程も分ろうというもの。だからこそ、礫一発の道通りノ男・千五郎の手練に異を唱え、面子にこだわり、我を押し通すが結果は歴然なだけに、見所も、恥をかいたらどうしよう、の心。面白うて戇て悲しき思いにさせられる忠三郎大名物のペーソスに妙。（17分）

「文荷」　文（ふみ）は艶書、主・千之丞、思いを見透かされまい、の懐柔の心もちらつかせ、鹿爪らしくシテ太郎冠者・忠三郎と次郎冠者・千作に文を託するところ、如何にも老獪。先刻、主の若衆道狂いを承知の両人はそれを興がり、交互に文持つより竿に文吊り下げ荷おうなど大真面目の稚気は忠三郎の真骨頂、千作との阿吽の呼吸にとぼけた味は塩梅も上々に、荷が重いと戯れふざけ合い謡い出す「恋重荷」速吟の一くさりは、深刻な内容もおどけて皮肉たっぷり、謡の巧さもさりながら、苦しや独り寝の我が手枕の肩かえて、で「エイ、ヤット」の掛声もろとも竿の肩を替え、へそも恋は何の重荷ぞ、では思わずよろける呼吸、など喝采もの。余りの重さに文を見ようとする太郎冠者に、主を慮り逡巡する次郎冠者、の演出もあるが、「それは一段とよかろう」と即賛成する千作の無邪気な、好奇心横溢の嬉々とした表情も忘れられない。このトリオ、当今最強ではなかろうか。（18分）

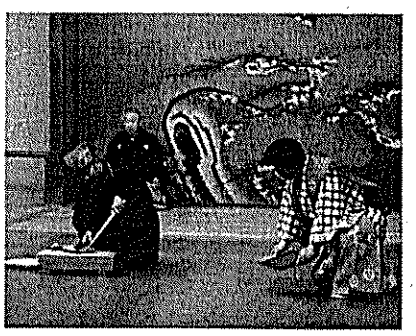

なのり座「武悪」佐藤　融・野村小三郎

「武悪」　度重なるシテ武悪・良暢の無断欠勤に業を煮やした主・正邦の癇癪は、討手に遣る太郎冠者・茂が聊か気弱で益々激怒。刀づくで脅され赴く太郎冠者だが、朋輩の誼に武悪は斬れず、来意を知った武悪また騙し討ちの非情を嘆く。「恨みは汝に留まったぞ」と双シオリは、未練を言われ「尋常に討たれう、そこを退け」と強く言い放つと肩衣の両袖を脱ぎ、太刀先へ立ち向かうや組落シに安座。「さあ、己れの斬りたい様に斬れ」の自棄っぱちは、討手の心中見透すように「未だ覚り足らいで」のつらみ、良暢披キとはいえ巡演は四回目の最後、斬られる場に至る前後の太郎冠者との対応は好くこなれた中々の舞台。幽霊となって立ち現れる武悪の後場は、ここぞとばかりに主の弱味に付け込み翻弄するところ。立場上あくまで主側に立たねばならない太郎冠者も流石にはらはら、主を牽制しつつ「もはや消えてもよかろう」と武悪の袖を引くのが悪戯っ子に手を焼くふう、茂の持ち味が出る。（1時間1分・11月22日・忠三郎狂言会・京都観世会館）

「武悪」　主・靖浩の怒声に神妙を装うが硬軟自在、強かな太郎冠者・小三郎、「太郎冠者ぢゃが武悪うちに居さしますか」と訪ねられれば武悪・融ならずとも気を許そうというもの。騙されて討たれると知って恨みは主から太郎冠者に向けられ、さあ「斬りたいところから斬れいやい」と開き直られ静かに安座、双シオリされては太郎冠者も太刀を振り下ろせない。黒面を見知られているとは言い条、あっさり観念する印象の融の持ち味は、後場の幽霊になってからは主を苛めるところでここぞとばかりの精彩。亡き大殿様を盾に狎れ狎れしい武悪に、亡夫懐しとつい怖さを忘れる主、やきもきさせられる太郎冠者は先刻の竹篦返しをされている様である。三者がよく噛み合い面白かったが「武悪」は難曲。若手トリオを二番見たが、年却を積んでこその武悪に具わる太々しさ滲む味はこれから、若手なりの旨味と言えようか。（47分）


「口真似」（左より）佐藤友彦・野村又三郎・井上祐一

「口真似」　主・祐一の客にとんだ酔狂人・又三郎を連れてきてしまったシテ太郎冠者・友彦、主は粗相なく帰そうとそそっかしい太郎冠者に言う様する様にせよ、と命ずれば、その通りを繰り返す愚直に収拾がつかない。とどのつまり主が太郎冠者を突き倒して奥へ入れば、太郎冠者も客を突き倒し、主の真似は「難かしや」とこぼしながら幕入。呆気にとられ、独りにされた不安に思わず腰を浮かせ脇正に出る又三郎、「へん、呆れもせぬ事ぢゃ」と空しく毒突くのが哀れに可笑しい。入門曲をベテランのトリオが演じて渋い。（16分）


「宗八」野村小三郎・井上靖浩（杉浦賢次　撮）

「宗八」　よその職業はとかく楽でよく見えるものか、生臭を忌むべき僧シテ宗八・靖浩が還俗し料理人に、生臭扱う料理人・小三郎が遁世して僧に転職。雇った有徳人・高義はそれぞれ魚を料らせ、経を読むよう命じ外出する。文盲の元料理人は経が読めず、精進しか知らない元僧は魚が扱えない。一方ならない両人の困惑ぶりは転職を甘くみるではないよ、の現代社会への警鐘。気配で互いの存在を知って前歴が分かると、それぞれが得意を競うかである。立板に

（⑥面へつづく）

NHK教育テレビ 能・狂言番組

◉2月2日(日)　15:00〜16:05
狂言　大蔵流「唐相撲」茂山千作

◉日本の伝統芸能
土曜日12:30〜13:00
(再)火曜日5:25〜5:55
能狂言鑑賞入門　解説：高桑いづみ
2月1日
「面白づくの狂女物『三井寺』①」
ゲスト：粟谷菊生（喜多流能楽師）
2月8日　「謡を聞く『三井寺』②」
ゲスト：粟谷菊生（喜多流能楽師）
2月15日　「栄華は一睡の夢『邯鄲』①」
ゲスト：近藤乾之助（宝生流能楽師）
2月22日　「夢中の舞『邯鄲』②」
ゲスト：近藤乾之助（宝生流能楽師）

幸友会
涛華能
福井啓次郎
福井良治
柳原冨司忠

亀井俊一
忠雄
保雄
実

谷口正喜
〒602-0915 京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

谷口有辞
〒520-0221 大津市緑町二四—二〇

飯島佐之六
大輔
〒920-0921 金沢市香林坊2—8—17 電話（〇七六）二六一—四三四〇

叶石会
河村総一郎
河村真之介
〒466-0021 名古屋市昭和区前山町一丁目二三 電話（〇五二）七六一—四八八二

河村大
〒603-8313 京都市北区紫野下柏野町五九—一 電話（〇七五）四六二—四一一五

前川光隆
前川光長
名古屋稽古場 〒616-8355 京都市右京区御室芝橋町一の六
名古屋市東区葵二—13—3 ツインクルガーデン301前野舞台 電話九三一—八八〇六番

呉竹会
筧鉱一

長生会
鬼頭好信
愛知県中島郡平和町城西 電話（〇五六七）㊊一九六〇番

助川龍夫
助川治

金春流太鼓
青耀会
上田悟
〒594-1163 和泉市青葉台2—17—25 電話〇七二五（56）八五二一
名古屋稽古場 名古屋市千種区今池4—15—3 浅井能舞台 電話〇五二（七三二）三七三六

大蔵会
大蔵狂言会
大蔵彌右衛門
大蔵彌太郎
大蔵吉次郎
〒177-0045 練馬区石神井台5—22—41—406 電話〇三—三九二〇—六七一七番

野村萬
野村万之丞
野村良介
〒171-0052 東京都豊島区南長崎六—五—三 電話〇三—三九五〇—五二八八番

茂山忠三郎
茂山良暢
〒606-8355 京都市左京区北白川東小倉町28 電話〇七五（七〇一）二〇一一番

茂山千作
千五郎
七五三
千三郎
正邦
茂
宗彦
逸平

名古屋狂言共同社
井上祐一
佐藤友彦
大野弘之
佐藤融
井上靖浩
今枝郁雄
今枝靖雄
鹿島俊裕
鷲見政行
名古屋市昭和区滝川町54 サンハウス滝川3E 井上方 電話052・834・6112

狂言やるまい会
野村又三郎
野村小三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎
〒460-0021 名古屋市中区平和一—二〇—四 野村事務所気付 電話052（350）7971

鳳の会
林和利
井上祐一
佐藤友彦

㈱大阪能楽会館
〒530-0015 大阪市北区中崎西2—3—17

（⑤面よりつづき）

水のように経を読む小三郎、僧衣の袖たくし上げ襷掛けをすれば「これは甲斐甲斐しい形ぢゃ」と小三郎も感嘆の包丁捌きも頼もしい靖浩、生気取り戻した両人の元気はこれまた、身に付いた仕事を地道に続けなさいよ、の教訓。処世の機微を伝えるには少々あっけらかんの気もするが、いつの世にも通じる普遍性は得難い一曲。（36分・11月23日・なのり座・熱田神宮能楽殿）

「盛久」 洋の東西、信仰の深さが奇蹟生むこと古にはあり得たようだが、当今は、と考えてしまうと直面のこの曲など、思い入れ過多の臭いものに成りかねないが、シテ盛久・猶義の素直はその危惧を払拭。「いかに土屋殿」と名残の清水観世音詣でを静かに願い出ると、ワキ土屋・和幸の懶隠の情は「それこそ易き御事」とさらり受けるところ、それが歩行しながらさりげなく自然なのがシテとワキの好調を先ず窺わせる。〜瀬田長橋、を正先から右に廻り、三ノ松へ流れ一ノ松まで辿り着けば、未だ小夜の中山を右に見る長い道行、シテの胸中を反映するしんみりした地（和男・光之助ら）も好調。鎌倉へ着き地前の床几に掛かり現実直視を言うサシ謡、また、床几下りてワキとの問答の調など、猶義、早春の「望月」に較べ感情表現力に遙かに厚味。処刑の場は、〜清水の方は、と幕へ見て右膝音たててつき経を披くところに覚悟の程をみせる。刀が折れる奇蹟のあと、物着に掛絡を外し梨打烏帽子・掛直垂の姿。居グセに悪夢の様を、ロンギに頼朝の異床同夢を知り、感涙のシオリから〜御前を、立ち常座、正中に戻りワキの酌を受け、〜有難し、と面上げると〜唐土が原も、と居立って露取りつつ正に直り達拝から男舞、晴れやかな袖捌きで爽やかに舞上げる。トメはユウケンではなく常座で右ウケ拍子踏む。ワキ和幸、シテとの連吟など如何にも心が通うものだった。（1時間7分）

「柑子」 「何やら貰うて汝に預けたが」と前夜大酒の主・良暢、もとより相伴に与ったであろうシテ太郎冠者・忠三郎、酔い醒ましに冷たい蜜柑はさぞ甘露「私に下されたもの」と思い珍しい三ツ成りの柑子を皆食べていては弁明も難儀。口実みつけ、好人物の若い主に二個は弁明するが残りの一個はさて……、連想は孤島に独り残された哀れな俊寛である。〜人と柑子は変れども思ひは同じ涙かな、と双シオリの愁嘆に、結果は既に承知の上の主、「さてさて哀れな物語ぢゃ」と一呼吸に、太郎冠者ほっと一息だったろうが、すかさず「残った柑子をこれへ」と押っ被されてはお手上げ、怯むと思いきや老練忠三郎「太郎冠者の六波羅へとうと（すっかり）納めました」と活然。叱り留とはいえ、瑣事にこだわり太郎冠者の機知を験そうの心がよく見え、親子共演のムードはほのぼの。（10分）

「松風・戯ノ舞」 シテ松風・善高、襟白二・露芝文白摺箔着付・赤地観世水下り藤扇面色紙文縫箔腰巻・金観世水紅葉散シ文白水衣、面は万媚か。成熟した女人の妖艶が物思いに耽れば、寂しさは殊更に弥増さり、一旦は断る宿を僧（ワキ金治郎）と知り迎え入れるのも東の間の慰め。気持ち紛らすためと思われたが僧が口ずさむ〜わくらはに、の一首に状況が変ってゆく処、素姓明かすシテとツレ村雨・善久クドキの連吟の哀傷が聞かせる。クセで形見の烏帽子・長絹を左手に持つと、〜葉末に結ぶ露の間も、と遠くを見る風情に行平への思慕の情懇々、地謡（吉之丞・晃一ら）の巧緻である。

上ゲ端あと床几を立ち、長絹を抱くと松立木前から右へ廻りながら脇正、〜後より恋の責め来れば、と松を振り返り、廻って〜伏し沈む、と安座、長絹を涙に押し戴くのも悲しい。物着すみ、〜あら嬉しや、と上気した声は、〜召され候ふぞや、と立つが、ツレは両手で遮る型をせず、〜行平は御入りも候はぬものを、と首を横に振るだけなのが大仰でなく好ましい。〜立ち別れ、とシテはシオリ二ノ松へ、ツレは地前下居する。囃子の急調で舞台へ戻ったシテは、囃子が鎮まり舞になる。二段オロシに常座で右袖きれいに被キ、三段カカリに松の前を通って舞上げると、小昔で松へ進み短冊を手に取り、ワカ〜立ち別れ、より謡い、〜磯馴松の、と両袖返シ松に寄るのも品よく、キリは暇申して帰る〜波の音、を六ツ拍子に、一ノ松では〜吹くや後の山風、を左袖返シて脇を見込む処に、〜夢も跡無く、を左袖戻ス処に、聴覚と視覚にみせ、地を残しシテとツレ幕へ退き、脇は常座へ出て下居合掌、立つと右ウケ脇留。後半のシテの優れた表現力と、前半を支えたワキ金治郎の位・存在感も忘れられない。アイ忠三郎、囃子啓三・達志・滋二、主後見修一。（1時間44分・12月1日・梅猶会定期能・大槻能楽堂）

「舟ふな」 「ふね」か「ふな」か、言い争う主・萬と太郎冠者・祐丞。小賢しくも太郎冠者が古歌の知識をひけらかすに及んで主も応戦するが、褒にも嗜にも（後にも先にも）歌一首しか知らない主、この一首を遅速抑揚変えて詠んでみたところで所詮相手にされず、ならば謡の文句で、と言ったはよいがこれが蛇。太郎冠者如きに負け切歯扼腕の主、満面朱を漲ぐ萬は真に迫り、「時々は主に負けてゐよ」には鬱憤未だ晴れやらぬ心。萬・祐丞両人の、言葉大事の狂言のエッセンス。（13分）

新作狂言「大久保彦左衛門の夢」 柳沢新治作・野村万之丞演出（台本補綴） 先ず括袴・掛直垂の旅装のアド三太夫（家令）晶人、少々ボケのきた主・彦左衛門シテ匡を案じ、主の国許の猿投神社に詣で霊夢に兜一領を授かったこと、及び主の近況を立シャベリに語る導入部がよい。アドのもたらすこの兜は、嘗て真田との戦勝記念に彦左が奉納のもの、懐旧の情は双シオリの嬉しさである。一睡、銅羅・法螺の音が夢を破れば今は戦場、「馬もて槍もて一気に攻め上がれ」の掛声も勇ましく、囃子（弘之・賀光・良勝・弘美）が雰囲気を煽ると敵味方十五人の斬組。真田方には当地大学新体操部員が交じり、空中回転（トンボ）や水車の派手な技で敗退の幕入があり、万之丞演出は以前「唐人相撲」に中国曲技団員を起用したことに同じ、面白い。残る敵方も切戸へ退くと、代って美男髪の美女十五人「おでかしなされました」を連呼、賑々しく登場し、五人ずつ三組、小舞「よしの葉」などを舞いざっと酒盛になれば、「とてものことに皆で舞ひませう」と舞の輪の中にシテも誘い込まれ〜謡ふ夜もすがら。かくて時過ぎ真は夢の中、〜皆消え消えと、能「邯鄲」の手法で美女群を幕へ、味方の兵を切戸へ、鮮やかに〜失せ果て、させた趣向は見事。夢醒めたシテは膝を打つと、今思い出したとて「三太夫筆をもて」と祖父（おおじ）の運ビでアドを従え退くが、作者はクサメ留を意図したとか。邯鄲の宿の女主人が供する枕が黄粱一炊の間に蘆生に栄華の夢を見させた故事を踏み、三太夫がもたらす兜が一睡の間に彦左衛門に戦勝祝賀の夢を見させたストーリー展開は巧かった。

狂言を見始めの人はスペクタクルな舞台を、見慣れた人は伝統の型・元ネタの曲探しが楽しめたろう。ただ曲名は「彦左の夢」でよいのでは。（33分・狂言づくしの会・豊田市能楽堂）

豊田市能楽堂狂言づくしの会
「大久保彦左衛門の夢」
小笠原匡
（杉浦賢次撮影）

「白雪姫」 継母に殺されかける白雪姫が七人の小びとに助けられ、王子と結ばれるグリム童話を万之丞が脚色・演出。

シテ女王・万之丞、面泥眼・天冠・緋長袴・紫舞衣壺折、束帯着用の例に倣い威儀整える笏を持つ。「珍しき鏡を手に入れた」と、女王はその鏡に向かい世界一の美女は誰、と問うと答える鏡ノ精（写真）。輪冠に鏡立の子方（加古晴也君）に喋らせる鏡ノ精の着想が素晴らしい。今は白雪姫・与十郎が上と知る女王、家来を遣り「姫の心臓と肝臓を取り出し妾に土産に持ってこい」とは空恐ろしい。女王以下中入すると、代って各人各様の面（賢徳・嘘吹など）と頭巾の七人の小びとが仕事から森へ戻る態に、一糸乱れず整然と右に面切りながら中腰で爪先を使う「茸」の運ビで出るのが傑作。助けを求め匿われるために来た姫を残し朝の仕事に出る七人（この度は左に面切ル）、姫存命を知って魔女と変じ毒林檎で仆す女王、「蘇生を祈らう」と仕事から戻った七人、隣国の王子・伸吾の登場に追い縋る女王の膝行から柱巻に至る狂態、折伏され呆然三ノ松へ抜け暫時佇立は執心を残し後ろ向きに幕へ消える女王、など登場人物の退出場が少々煩わしいが、そこはそれ群衆処理の旨さは万之丞の才、また随所で笛・大小太鼓の独奏や来序・ノット・早笛などの囃子が効果的に用いられて見応えのある大曲だった。（49分・12月7日・狂言づくしの会・豊田市能楽堂）

豊田市能楽堂狂言づくしの会
「白雪姫」
野村万之丞・加古晴也（子方）
（杉浦賢次撮影）

謹賀新年

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

狂言 なのり座
井上靖浩
佐藤融
野村小三郎

ウシマド写真工房
京都市西陣局区内北野上七軒
TEL（〇七五）四六二一一三四一

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五—六—四
電話（二六二）一一八三番

彰諷閣
名古屋市天白区植田西二—八〇二—二
電話（〇五二）八〇五—三三〇一
連絡先
名古屋市緑区鳴海町有松裏40—9
電話（〇五二）六二一—四二三八

楽諷庵舞台
名古屋市昭和区川名山町一〇五
電話（八三二）三四九一番

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル（旭市役所南）
電話 〇五六一五③二三四六番
能舞台 電話〇五六一五④〇六九八

豊田市能楽堂
豊田市西町一丁目二〇〇番地
TEL 〇五六五・三五・八二〇〇
FAX 〇五六五・三七・〇〇一一

能楽の友社
同人一同

〔おことわり〕 年賀広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

喪中につき
年賀欠礼いたします

宝生英照

宝生閑
欣哉
〒176—0001 東京都練馬区小竹町一—五〇—五
電話 〇三（三九七二）七二三〇
電話 〇三（三九五五）四七九五

久田勘鷗
久田三津子
〒465—0033 名古屋市名東区一社3—162
電話〇五二—七〇五—一五八五

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　1100円
郵送の場合　１年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成15年２月～３月）

◆ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前７時15分～８時）

２月23日	「鉄輪」（再）（観世流）	梅若六郎ほか
３月２日	「百万」「猩々」（観世流）	観世喜之ほか
３月９日	「雲雀山」（宝生流）	亀井保雄ほか
３月16日	「隅田川」（観世流）	河村隆司ほか
３月23日	（再放送）「賀茂」「湯谷」（喜多流）	佐々木宗生ほか
３月30日	「布施無経」（大蔵流）	山本則直ほか

愛知県芸術文化選奨文化賞
東海能楽研究会が受賞
古典芸能文化活動を顕彰

愛知県では、このほど「愛知県芸術文化選奨文化賞（団体）」に「東海能楽研究会」（代表者筧鉱一氏）を選定、きたる二月二十一日㈮授賞式が行われる。

【授賞理由】「伝統芸能を次世代につなげるために」をサブタイトルに、伝統芸能の普及のために、「伝統芸能上演会」を毎夏開催し、能「龍之口」の復曲、明治元年から昭和六十三年に至る東海地域で行われた能楽の催しに関する膨大な資料を整理した貴重な古典芸能文化の歴史労作と言える「近代名古屋の能楽を支えた人々」の編纂など多岐にわたる豊富な活動は高く評価されている。高校生向を対象とした能や小学校などでの「和楽器体験」授業の開催などにより能楽や和楽器の若年層への普及を図るなど本県芸術文化の振興と向上に貢献し、今後もその活躍が期待されている。

―○―○―○―○―

東海能楽研究会は、東海地方の能楽師と研究者が一体となって、平成六年七月に発足、名古屋市による能楽堂完成の記念出版として企画された「近代名古屋の能楽を支えた人々」の編集委員を母体として活動を行ってきている。

会員数は三十二名。主な業績として、平成六年十月「東海芸能年鑑（平成五年版）」発行▽平成九年七月「東海地域能楽番組一覧（明治元年～昭和二十六年）」発行▽平成十二年八月「第一回伝統芸能上演会」開催、於名古屋能楽堂▽平成十三年七月「近代名古屋の能楽を支えた人々」（全三冊）発行▽平成十三年七月「第二回伝統芸能上演会」開催、於名古屋能楽堂▽平成十四年八月「第三回伝統芸能上演会」開催、於名古屋能楽堂▽平成十四年九月　復曲能「龍之口」上演、於名古屋能楽堂。

事務所＝名古屋市中村区下米野町三－二九、筧鉱一方、電話〇五二・四五一・九七九七

なお同研究会では、今夏七月二十一日㈰名古屋能楽堂で「伝統芸能上演会」を開催する予定である。

芸術院会員
梅若恭行氏逝去
1月27日告別式執行

観世流シテ方、芸術院会員の梅若恭行氏は一月二十日、心不全のため逝去された。享年八十五。

葬儀は二十七日午前十時から、告別式は十二時から東中野の梅若能楽学院会館で「梅若会葬」として執り行われた。葬儀委員長・安部洋子氏、喪主・長男・梅若靖紀氏。

故人は、二代梅若実の三男として東京に生まれ、父および五十五世梅若六郎に師事。平成十一年「関寺小町」を披演。昭和四十年重要無形文化財（能楽）総合指定保持者。昭和六十三年勲五等双光旭日章受賞、日本芸術院賞受賞。平成四年に日本芸術院会員となる。能楽協会理事、梅若会副理事長を歴任。海外公演にも数多く参加し欧州での公演を行った。

―○―○―○―○―

本田光洋師「道成寺」上演
3月16日　国立能楽堂

秀麗会（金春流・本田光洋氏主宰）は、きたる三月十六日㈰、東京・国立能楽堂で「秀麗会能」を開催、本田光洋氏は「道成寺」を上演する。午後二時始。

そのほかの演目は、能「小袖曽我」（本田芳樹、本田布由樹）、狂言「千鳥」（山本則俊）、仕舞「花筐クセ」桜間金記「玉之段」（金春安明）

入場券Ａ指定席（正面）一万円、Ｂ指定席（正面・脇正）八千円、Ｃ自由席（脇・中正）六千円、学生四千円。

・問い合わせは、本田光洋後援会（東京都中野区上高田２－25－２、電話０３・３３８６・２６４１）

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆
（TEL 052―231―0088）

［２月］
23日㈰　恵　謳　会（番組①面）（無料）
［３月］
５日㈬　茂山狂言会名古屋公演　（番組①面）（有料）
８日㈯　胥陽会定式能　（番組②面）（有料）
14日㈮　名古屋能楽堂定例公演　（番組②面）（有料）
～狂言尽くし～
21日㈮　観修会春の会　（番組②面）（無料）
23日㈰　「さわってみよう能の世界」　（往復葉書で募集）
28日㈮　名古屋梅若六郎の会　（番組②面）（有料）

◆熱田神宮能楽殿◆
（TEL 052―682―1751）

［３月］
２日㈰　名古屋梅猶会定期能　（番組②面）（有料）

◆豊田市能楽堂◆
（TEL 0565―35―8200）

［３月］
21日㈷　豊田市能楽堂定例公演　（有料）

さわってみよう能の世界
小・中学生対象に体験セミナー

文化庁による芸術団体人材育成支援事業の一環として、能楽協会名古屋支部、能楽協会、日本能楽会では、ユネスコ世界遺産に指定された「能楽」体験として、小学生、中学生を対象に〝さわってみよう能の世界〟の呼びかけで、「能楽鑑賞」「囃子」「謡の実技体験」をきたる三月二十三日㈰名古屋能楽堂で開催する。

入場には整理券が必要。入場整理券は、往復ハガキで、住所、小・中学生氏名、学年、同伴者（大人）、電話を記入、（対象は小学校四・五・六年生、中学生）宛先は（〒460－0011）名古屋市中区大須三－二－四〇、福井方。社団法人能楽協会名古屋支部行。

返信のハガキが入場券となる。ハガキ締切り二月末日、（定員三百人）

問い合わせは、能楽協会名古屋支部教育特別委員会代表・柳原方。（昭和区滝川町47－147、サザンヒル八事２－703　TEL・FAX052・832・1031）

ＮＨＫ教育テレビ
能・狂言番組（予定）

◉日本の伝統芸能
土曜日12：30～13：00
（再）火曜日５：25～５：55
能狂言鑑賞入門　解説：高桑いづみ
３月１日　「囃子物にのせられて」
狂言「蝸牛」
ゲスト：野村　萬（和泉流）

テレビ放送（予定）
３月29日㈯　16：40～17：35
衛星第二（BS２）
観世流能　「湯水龍女」（かすいりゅうにょ）
出演：片山九郎右衛門ほか
（第3回世界水フォーラム公演から）

名古屋能楽堂演能案内
恵　謳　会
二月二十三日（日）午前九時始
名古屋能楽堂

連吟	網之段	横田多津子　都築　弘子　田口　芳子　椰野　晴美　岩崎喜久子
素謡	東北	花室　久子
	千手	森　葛谷　順子　信子　浅野　順子
	山姥	近藤　幸江　成田かづゑ　武田　友志
仕舞	屋島	杉本　芳子
		笠之段　石田　啓介
舞囃子	高砂	三宅　幸子
		胡蝶　横田多津子
素謡	頼政	都築　良平　石田　啓介
仕舞	小袖曽我	こうのやよしもり　こうのやまさもり
舞囃子	敦盛	田口　芳子
		野守　都築　弘子
素謡	弱法師	鳥山　迪永　武田　志房
	松風	三村　恵子　板倉　峰尾　武田　宗和
能	紅葉狩	今沢　美和　久田三津子　前野　郁子　沢田　房枝　杉江　元　飯冨　雅介　橋本　宰　筧　鉱一　福井啓次郎　観世　元伯　藤田六郎兵衛　間　佐藤　融　井上　靖浩
素謡	葵上	葛谷　信子　久納　智子　森　浅野　順子
舞囃子	龍田	岩崎喜久子
		船弁慶　椰野　晴美
素謡	忠度	村瀬　慶子　森島　幸子
	梅	杉山悠紀子　武田　志房
舞囃子	熊野	板倉　峰尾
		唐船　島山　迪永
番外仕舞	兼平	武田　文志
	柏崎	武田　志房
	鵜	武田　友志
素謡	通小町	平野　和由　黒柳　信次　都築　良平
	天鼓	佐藤　弘美　武田　文志
番外仕舞	雛	波キリ　三村　恵子

（終了予定六時三十分頃）

主催　恵謳会
補佐　三村恵子　武田志房

【来場歓迎】
【入場無料】

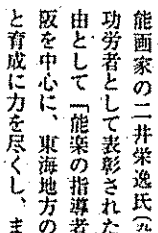
2003年茂山狂言会
三月五日（水）午後六時三十分始
名古屋能楽堂

狂言	狐塚	太郎冠者　茂山あきら　次郎冠者　茂山千三郎　主　人　茂山　正邦
狂言	惣八	僧　茂山千之丞　惣八　茂山千作　有徳人　木村　正雄
狂言	菓争	橘　茂山七五三　栗　茂山千五郎
		橙　茂山　茂　九年母　茂山　正邦　柚子　丸石やすし　蜜柑　網谷　正美　金柑　茂山千三郎
		柿　茂山　宗彦　梨　茂山　逸平　梅　善竹　隆平　石榴　佐々木千吉　なつめ　木村　正雄
		笛　杉　市和　小鼓　曽和　正博　大鼓　石井　喜彦　太鼓　前川　光長

主催　茂山狂言会

【有料】（詳細は茂山狂言会事務局へお問合わせ下さい）
【前売り】　Ｓ席八千円、Ａ席五千円
Ｂ席三千円、学生席二千円
チケット取扱
茂山狂言会事務局＝075・221・8371㈹
チケットぴあ＝0570・02・9999
06・6363・9999

松阪市政特別功労者
二井栄逸氏が受彰



松阪市では、このたび本年度市政功労者を発表、同市在住の喜多流能楽師・能画家の二井栄逸氏（九〇）が特別功労者として表彰された。表彰理由として「能楽の指導者として松阪を中心に、東海地方の能楽指導と育成に力を尽くし、また能画の第一人者として国内外で高い評価を得ており、伝統文化の継承を通して地域振興に貢献した」ことが挙げられている。

特別功労者表彰は二井氏とともに前市長・奥田清晴氏（六〇）など八人が顕彰されている。

表彰式は二月一日午後一時から松阪コミュニティ文化センターで「市制七十周年記念式典」で行われた。

なお、二井師の能画「羽衣」が平成十三年十一月、大英博物館日本館に収納されている。

二井栄逸師卒寿記念
二井会と個展

喜多流シテ方・二井栄逸師の卒寿を記念して、「新春の二井会」が二月十六日、松阪・八千代で開催。

一調「松虫」（二井栄逸、後藤孝一郎）素謡「鉢木」「桜川」「国栖」「田村」「草紙洗小町」「三井寺」「藤戸」はじめ独吟、独調、仕舞など二十数番。

また能画個展が三月二十六日から同月三十一日まで、松阪・三交百貨店で開催される。

一色神社奉納能
一色町能楽保存会

一色町能楽保存会主催による一色神社例祭奉納能は、きたる三月十六日午前十一時から一色町公民館仮設能舞台で行われる。本年は一色町能楽保存会が結成されて三十五周年に当たり、「翁」はじめ能「源氏供養」「猩々」、狂言「貰聟」「朝比奈（語）」、舞囃子「草紙洗小町」「山姥」ほか連吟、仕舞、独吟、連調など。

後援・三重県、三重県教委、伊勢市、伊勢市教委、一色町、三重県文化振興事業団など。

〔問い合せ先〕一色町能楽保存会事務局＝伊勢市一色町一六七七、電話〇五九六・二四・三六九二

熱田神宮能楽殿演能
名古屋 梅猶会定期能

三月二日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

清経
能
梅若 雅一
梅若吉之丞
替之型
高安 勝久
後見 梅若 猶義
梅若 善高
笛 鉦一
福井啓次郎 鹿取 希世
地謡 菊池 重郎 梅若 善久
立花香寿子 井戸 和男
小松 勝憲 岡田 晃一
寺岡 佑子 池内幸三郎

茶壺
狂言
野村又三郎
野村小三郎
松田 高義
後見 野村 俊彦

砧
後
舞囃子
熊澤恵美子
河村総一郎
柳原冨司忠 鹿取 希世
地謡 立花香寿子 岡田 晃一
谷口 澄夫 梅若 善高
池内光之助

松虫
仕舞
クセ 小松 勝憲

野宮
井戸 和男

梅枝
キリ 梅若 猶義

鵜飼
キリ 岡田 晃一

融
十三段之舞
能
梅若 修一
飯冨 雅介
河村総一郎
柳原冨司忠 鬼頭 好信
大野 誠
地謡 井戸 良祐
梅若 基徳
池内光之助
寺岡 佑子
問 野村小三郎
後見 池内幸三郎 井戸 良祐
井戸 和男 地謡 小松 勝憲 梅若 基徳
谷口 澄夫 梅若 猶義
熊澤恵美子 梅若 善久
（終了予定 四時四十分頃）

附祝言
主催 名古屋 梅猶会

○会員券 五、〇〇〇円（全席自由席）
○会員券申込み先 能楽殿・出演楽師・梅猶会事務所
熊澤恵美子方（〇五二―七八二―六九七三）

青陽会定式能

三月八日（土）十二時半始
名古屋能楽堂

田村
仕舞
クセ 星野 路子

笹之段
能
久田 勘鶴
前野 郁子
地謡 三村 恵子
生駒 里翠
近藤 幸江
久田三津子

西行桜
杉江 飯冨 雅介
橋本 元宰 後藤嘉津幸 鬼頭 好信
大野 誠
問 前野 郁子 黒田 幸親 博 祖父江修一
近藤 幸江 地謡 松山 武田 邦弘
高橋 暖一 梅田 邦久
清沢 一政 古橋 正邦
後見 井上 靖浩
狂言

昆布売
仕舞
屋島 佐藤 友彦 鹿島 俊裕
春日龍神 古橋 正邦 後見 井上 祐一
清沢 一政 地謡 高島 良一
武田 邦弘
梅田 邦久
須部 甫

国栖
能
子方 久田勘吉郎
姥 黒田 博
天女 今沢 美和
加賀 敏彦
高安 祖元
杉江 勝久 正樹
佐藤 元
問 河村其之介
柳原冨司忠 加藤 洋輝
竹市 学
後見 星野 路子
久田 勘鶴 地謡 高島 良一 加藤 保彦
松山 幸親 祖父江修一
須部 甫 古橋 正邦
高橋 暖一 清沢 一政
融 今枝 靖雄

附祝言
主催 青陽会

〔有料〕当日券 三千円
入場券はチケットぴあ（〇五二・三二〇・九九九九）及び出演者宅お問合せ
名古屋市名東区一社三の一六二
久田勘鶴方
電話〇五二―七〇五―一五八五

名古屋能楽堂定例公演
50回記念特別公演
狂言づくし

三月十四日（金）午後六時三十分始

（和泉流）狂言 **大般若**
僧 井上 祐一 神子 井上 靖浩
施主 佐藤 友彦
小鼓 柳原冨司忠 笛 竹市 学
後見 今枝 靖雄

（大蔵流）狂言 **右近左近**
右近 茂山忠三郎 妻 善竹忠一郎
後見 茂山 良暢

（和泉流）狂言 **金岡**
巨勢金岡 野村小三郎 妻 野口 隆行
大鼓 筧 鉦一
小鼓 柳原冨司忠 笛 竹市 学
地謡 井上 靖浩
大野 弘之
野村又三郎
松田 高義
奥津健太郎
後見
（終了予定 午後八時十分頃）

〔入場料〕前売一般 四千五百円 当日五千円
前売学生 二千五百円 当日三千円
取扱い所＝名古屋能楽堂（〇五二・二三一・〇〇八八）
チケットぴあ（〇五二・三二〇・九九九九）
市内プレイガイド

観修会春の会

三月二十一日（祝）午前十時始
名古屋能楽堂

素謡 **田村**
番組
荻巣 三郎 有賀 欣哉
弱法師
矢橋 昌 金田 和

仕舞 **笹ノ段**
班女アト 山本はつ子
三輪 柴田美智子
布施 俊子

舞囃子 **養老**
有賀 欣哉 河村総一郎 加藤 洋輝
柳原冨司忠 大野 誠
芦刈
水野 治子 河村総一郎
柳原冨司忠 大野 誠

仕舞 **老松**
竹生島 冨田 尚史
冨田 哲史
安宅 古谷 一将
鞍馬天狗 河村裕一郎
猩々 河村 万葉

素謡 **安宅**
子方 冨田 哲史
冨岡 紘宇
河村 光昭
長縄 鑑二
有賀 欣哉
安田 茂哉 飯冨 雅介

舞囃子 **菊慈童**
井上 好美 河村真之介
柳原冨司忠 加藤 洋輝
松風
小島 豊子 河村真之介
柳原冨司忠 大野 誠
須磨源氏 五段
高橋 慶子 柳原冨司忠 加藤 洋輝
藤戸
澄川 幸子 河村真之介
柳原冨司忠 鹿取 希世

「さわってみよう能の世界」

三月二十三日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

能楽鑑賞、囃子・謡の実技体験
入場整理券は往復はがきによる申込み
（小学四年～中学生とその同伴者対象）
（紹介記事①面掲載）

主催 能楽協会名古屋支部

名古屋 梅若六郎の会

三月二十八日（金）
午後二時半開演（一時半開場）
名古屋能楽堂

能
梅若美和音
梅若 六郎
宝生 閑
大日方 寛
隅田川
山本 孝
曽和 正博 松田 弘之
後見 梅若 晋矢 小杉 達也 古橋 正邦
赤瀬 雅則 地謡 井上 和幸 梅田 邦久
松山 隆之 観世 榮夫
角当 直隆 久田 勘鶴
狂言
大名 野村又三郎 太郎冠者 佐藤 融
新参者 野村小三郎
伴野 俊彦

文角力
舞囃子
梅若 六郎 山本 孝
曽和 正博 松田 弘之
鬼頭 好信
地謡 松山 隆之 角当 直隆
山中 迂晶 梅若 晋矢
赤瀬 雅則

高砂
主催 梅若六郎後援会
電話〇三・三三六三・七七一八

SS席一万三千円、S席一万円
A席七千円、学生三千五百円

素謡 **花筐**
布施 俊子
山本はつ子 柴田美智子
工藤 綾子

舞囃子 **巻絹**
関戸 紀子 河村真之介
柳原冨司忠 加藤 洋輝
大野 誠
櫻川
高木 和子 河村真之介
柳原冨司忠 大野 誠
天鼓
譜久原京子 河村真之介
柳原冨司忠 鹿取 希世

素謡 **砧**
今沢 美和
澤井 成子 飯冨 雅介

舞囃子 **実盛**
海田トシ子 河村真之介
柳原冨司忠 鹿取 希世
松虫
近藤 重治 河村真之介
柳原冨司忠 鹿取 希世

素謡 **景清**
河村 光昭
冨岡 紘宇
林 博敬 長縄 鑑二

附祝言
主催 観修会
〔来場歓迎〕
〒75〇―〇〇八八 多治見市日ノ出町二丁目二
電話 〇五七二―二二―三六五六番
（五時頃終了）

戦後名古屋能楽史 ㊵

〔第十一章〕昭和三十二年（一九五七）

竹尾　邦太郎

（承前）

四月十四日、観世会第二回は素謡「三笑」早川蟬吉、仕舞三番「嵐山」殿島修二「桜川」杉村竹翠「藤戸」岩田与司、連吟「山姥」鬼頭五朗・飯田賢、「自然居士」片山九郎右衛門、「源氏供養」杉浦義朗、狂言「入間川」河村丘造、「天鼓・弄鼓ノ舞」大槻十三、とシテは京阪からの来演、大鼓を谷口喜代三が二番勤める。

二十一日、久田秀雄の主宰する名古屋観正会が十周年記念に社中会を催し、番外の「鞍馬天狗」で牛若・舞一郎、稚児・徹二の二児と共に久田秀雄はシテを勤め、次の様に挨拶する。「当地に於る名古屋観正会は昭和五年頃神戸の上田隆一師を招聘して次第に隆盛に向いつつありましたが、其後戦争開始つづいてその激化と共にいつしか下火になっておりましたが尚絶えることなく少数乍ら上田師の指導を受けて参りました。終戦後小生帰名と共に再び立直し、幸いにも在名の各先生方の御指導と社中の方達の絶大な後援を得て大会の数も重ねここに十周年記念会を催すことになりました。未熟ではございますが斯道に熱心なることども嘉せられまして御同好の皆様の御清観を賜ります様御案内申し上げる次第でございます。

二十七日は山本博之来名二十周年記念別会の素謡会、名古屋山本博勝会主催で二部制。一部は「竹生島」林愿蔵「俊寛」大槻十三「松風」観世元正、に仕舞九番「俊成忠度クセ」太田重次郎「枕慈童」加藤総兵衛「嵐山」柴田収「花筐」山本真義「玉ノ段」山本勝一「殺生石」梅若景英「土車」観世喜之「野宮」山本博之「頼政」梅若実、舞囃子「富士太鼓」橋岡久太郎。二部は「田村」武田太加志「蝉丸」梅若実・山本博之「安宅・勧進帳」観世喜之、仕舞七番「雲雀山」波多野敞「小鍛冶」八木康夫「龍太鼓」柴田初太郎「女郎花」河村禎二「三輪」武田太加志「歌占クセ」橋岡久太郎「藤戸」大槻十三、舞囃子「高砂」、と宗家始め東西観世流の多士済々である。

翌二十八日は午前中の社中春季謡曲会のあと、午後は中部金剛会定式能。舞囃子「鶴亀」山田仁三郎、能「蝉丸」大塚一二、竹市秀雄、狂言「鬼瓦」河村丘造、仕舞四番「加茂」片岡道子「八島」伊藤鉄之進「網ノ段」豊鶴調三「玉ノ段」今井幾三郎、一調「歌占キリ」田鍋惣一郎・豊鶴弥左衛門、能「鵜飼・早装束・無間語」金剛巌。二十九日、天皇誕生日は名古屋淡交会五十周年記念祝賀の社中会。番外に珍しい祝言「弓矢立合」橋岡久太郎・久馬・柴田初太郎がある。

月が替り五月三日、第三十回名匠鑑賞能は愈々五流道成寺も最終回で喜多流。喜多流の道成寺は明治二十五年（一八九二）に伊勢一色の古能に記録があるが、当地では約百年出て居ないという珍しいもの、今回以後も三十年後に職分三十周年記念能で長田驍が勤めるまで待たねばならないという程のものである。さて番組は、舞囃子「嵐山」後藤得三、能「橋弁慶」和島富太郎・粟谷能夫（子方）、狂言「二人袴」茂山弥五郎、能「湯谷」喜多実・長田驍（ツレ）、独吟「鵜ノ段」福岡周斎、仕舞四番「天鼓」粟谷新太郎「昭君」粟谷菊生「八島」喜多節世「歌占」喜多実、能「道成寺」喜多長世（33）、野島信（61）、茂山幸四郎・吉田清三、囃子は森田光次・田鍋惣太郎・山本敬一郎・野崎太郎、地頭喜多実（57）、後見後藤得三（60）、鐘後見喜多節世（31）。

五月四日、能楽界では野球と並んで愛好者の多い相撲だが、協会理事長・出羽海親方が茶屋制度などの改革問題に悩み、切腹未遂という痛ましい事件が報じられる。五日、名古屋能楽倶楽部第四回公演は子供の日奉納能。お子供さんを中心として、と先号既述のように狂言「盆山」井上義次（12）、祐一（16）、能「田村」伊藤嘉奈子（16）、アイ佐藤友彦（15）などがある。二十六日、杏謡会という名の結社が初の公演と称し、次の挨拶をもち能楽殿でその成果を公開する。「この会は愛知県下の謡曲愛好の医師及び其の家族をもって組織して居ります。昭和二十八年四月に発足いたしました。日頃の生活に潤ひをつける趣味の会として、またお互の親睦を図る良き交遊の会として皆様に愛せられ現在会員数は百名に垂んとして居ります。この会のモットーは〈技の巧拙を問わぬ〉事になって居りますので、大天狗小天狗どもが意を強うして活躍するのを常として毎年春秋に大会を催して参りましたが今回は初の公演であります。またこの会の出演は会員のみに限られ所謂玄人の参加がありませんので、私共の素人芸はさぞかし御観賞の各位に御退屈のことと存じますが、何卒この会の事情を御賢察の上御赦しを御願ひ申上げる次第でございます」　後援は愛知県医師会、医に携わる者は須くこの様な余裕が大切である。会名の杏は杏林とつくり医者の美称。三国時代（二二〇―二八〇）の呉の名医董奉は治療代を取らず、治った病人に杏を植えさせたところ、数年で杏の林が出来たという故事があるが、そこからの命名であろう。平成の現在、この結社の存在はどうなのか、寡聞にして分らないが、この中から玄人に転じた戸田和子の名がみえる。

素謡九、独吟五、連吟四、仕舞十九、独調二、舞囃子二、の計四十一番、素謡は一番三十分以内のこと、の注意も微笑ましく、挨拶に言う通り囃子も社中同人が勤める熱の入れようは大したものである。

六月一日、五流道成寺完演の壮挙を成し遂げた田鍋惣太郎がこれを記念、自祝して第三十一回名匠鑑賞能で乱能を催す。番組は、「翁」田鍋惣太郎・藤田六郎兵衛（三番叟）、田鍋洋一（千歳）、後藤孝一郎（面箱）、観世武雄（笛）、観世喜之・高安滋郎・柴田収（小鼓）、本田秀男（大鼓）、河村鉦二（太鼓）、地謡田鍋惣一郎外四名、後見永田虎之助・小島鉄次郎、留は「船弁慶・前後ノ替」山本敬一郎（前）、田鍋惣一郎（後）、外に舞囃子三番「高砂」鬼頭八郎「小袖曽我」河村丘造・井上松次郎「西王母」野崎太郎、仕舞二番「笠ノ段」山本孝「善界」大倉長十郎、小舞「宇治の晒」加藤良久、狂言四番「末広」林愿蔵「太刀奪」本田秀男・観世喜之「文荷」高安滋郎・西村欽也「引括」内藤泰二・鬼頭喜太郎、就中、田鍋一門三代で勤めた「翁」、惣太郎翁至福の舞台であったろう。

翌二日は昭和三十二年度の能楽協会名古屋支部定式能。舞囃子「加茂」前田昌広、「花月」竹市秀雄、「俊成忠度」塚本秀雄、「雲雀山」内藤泰二、「殺生石」河村鉦二、「雷」井上礼之助、仕舞五番「巻絹」鈴木右門「鵜ノ段」畑富次「実盛」岩田由之助「笹ノ段」加藤総兵衛「天鼓」杉村竹翠、五流のうち喜多流の出勤がないのは残念であるが、能四番の盛況。

五日、熱田神宮大祭奉納能は二部制で一部はいわゆる紳士能、当時の名古屋実業界の高尚な趣味人を番組から見てみよう。番囃子「翁」伊藤次郎左衛門・岡谷正男（千歳）、狂言「歌争」松尾重康・若松英治、独吟「砧」井上五郎、連吟「富士山」伏原順四郎・小沢利一郎・中北鐵次郎、舞囃子「熊野」植村真太郎、一調「花形見クルイ」片岡信一（謡）、舞囃子「猩々」松尾宗俊、流儀も観世・宝生・金剛・金春・和泉に亘る。ゴルフごときの球戯に現をぬかす（?）現在の実業界とは隔世の感である。二部は舞囃子「絃上」山田仁三郎、狂言「鐘の音」井上松次郎、能は「小鍛冶・黒頭」山本博之、随分重いものが出たものである。

九日は観世会第三回。素謡「富士太鼓」六車真三、仕舞三番「加茂」河村鉦二「杜若キリ」石谷初蔵「野守」佐藤岩雄、「通小町・雨夜ノ伝」島沢啓次・柴田収、「遊行柳」柴田初太郎、狂言「腰折」河村丘造、「殺生石・白頭」山階信弘。

十五日、非公開で研鑽を積んできた青陽会研究会が第一回研究発表会を催す。「鶴亀」柴田初太郎・天野智雄（鶴）、大橋米三（亀）、「小袖曽我」河村鉦二・佐藤岩雄、師匠筋から「乱・双ノ舞」橋岡久馬・久共、と能三番。外に一調「難波」田鍋惣太郎・橋岡久馬、狂言「重喜」石田喜樹・佐藤卯三郎、独吟「花筐」林愿蔵、主催は掬水青陽会。これが掬水青陽会第一期第一回に直り、各期三回の公演を行うが、第七期第三回（昭和三十九年三月八日）から会名を青陽会に改め、主催も青陽会になって今日に至る。

六月十六日、宝生九郎宗家の命名による名古屋宝生会が辰巳孝・内藤泰二・高橋鋳三郎ら流儀職分・流友らの尽力と地元三役の支援により愈々発足する。事業は定式能年三回、研究会その他は必要に応じて随時行う、とあり、会員はA会員（定式能の際指定席・会費年額一五〇〇円）、B会員（一階自由席・一〇〇〇円）、学生会員（二階席・四〇〇円）と定められる。

当日の番組は、素謡「邯鄲」辰巳孝、仕舞三番「八島」辰巳清「半蔀」倉本雅「大江山」鈴木右門、能「胡蝶」畑富次、狂言「咲嘩」佐藤秀雄、能「藤戸」宝生英雄、発足第一回の定式能としては聊か祝言色の薄い渋い番組と言えようか。

――以下次号――

◇……◇

◇……◇

◆新春の舞台から◆

「名古屋能楽堂正月特別公演」「第三十二回鳳の会」「名匠能」「第五回万作を観る会」

竹尾邦太郎

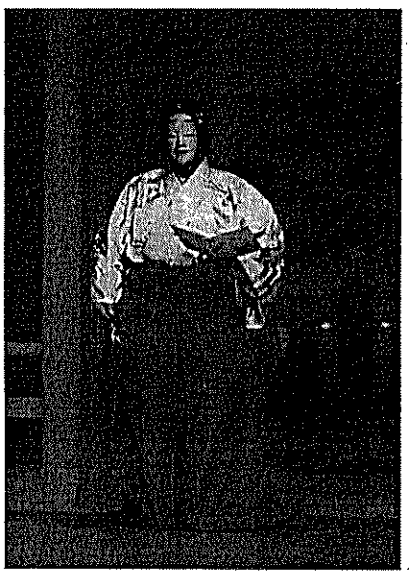
名古屋能楽堂正月特別公演
「翁」千歳・観世淳夫
（杉浦賢次氏撮影）

『翁』　シテ銕之丞。「翁」の荘重厳粛の一は、正先に下居して左右袖捌きあとの一礼の深浅に関わり、翁烏帽子の先端が床に触れんばかりのところにあろう。銕之丞深々とした一礼である。千歳は息・淳夫君、小結烏帽子の紅白打交ぜた飾紐がいかにも初々しく、眉宇に漲る気魄の鋭気颯爽は子方の可愛らしさを払拭して見所を圧倒、へありうとうとうとう、と両袖巻き上げ拍子力強く踏むのが見事なら、声調に妥協のない力一杯の謡も立派。

翁の舞は天地人の拍子、就中、脇座前に下を見る心で地ノ拍子踏むところ、其処に吾子の千歳が控えるのを見、先の熱演をねぎらい称える師父の三ツ拍子を聴く。

三番叟は靖浩、揉ノ段は力感溢れる烏飛に生彩。笛前から横ざまに三ツ高く跳んだが成程烏の生態模写、イメージは鈴ノ段のいわゆる種蒔きに繋がるが、「権兵衛が種まきや烏がほじくる」の俚諺も思われる。俚諺は無駄骨の謂だが、ここは五穀豊穣を願う農耕儀礼とみえる三番叟、烏飛と種蒔きの堂々巡りは農の鋭意の営みの象徴だろう。（1時間5分）

「素袍落」　伯父御・祐一を伊勢参りに誘う使いにシテ太郎冠者・友彦を遣る主・弘之。急で得参られぬ伯父は太郎冠者の門出を祝う酒を勤め、餞別に素袍を与え、それを着け名代として代参を、と、どこまでも世慣れた配慮。祐一の人当たりの柔らかさと、酒が入って上機嫌は友彦の饒舌の喧しさ、両者の持ち味が出る。（32分）



名古屋能楽堂正月特別公演
「草子洗小町・替装束」梅田邦久
（杉浦賢次氏撮影）

「草子洗小町・替装束」　シテ小町・邦久。前はワキ黒主・勝久の姑息な手段に下人といえど小恥ずかしい風のアイ融がよい。

後は小書でシテは着付も改め緋長袴に唐織壺折の艶やか。ワキの讒言で恥辱を受け、入筆の証の草子つき付けられるや、穢らわしいとばかり同席の官女二人連れ立ち地前へ座を移るところ印象的。作意と看破はしても独断で草子洗うことならずへ遣る方もなき悲しさに、シオルと逃げるように一ノ松、貫之・一政の「小町暫く」の呼び掛けにへなへなとなる心の下居の妙。貫之の執り成しは草子を洗う許しの勅諚と知って立ち、喜びはへ既に草子を洗はんと、と勇躍運び出す。常座で唐織脱ぐと今は入筆確信の胸中を楽しみ、へ秋の七日の衣なり、からのイロエと地（銕之丞・勘鶴ら）との掛合の洗いもの尽しの余裕。へ久しき松を、と脇正框に右膝つき、框外から水を汲み草子に注ぐところ美しい。

（④面へつづく）

（③面よりつづき）

物着に金風折・白地長絹、舞は二段オロシ常座で右袖被くのが実にきれいだったが惜しむらくは貫之・官女を除き他は半眼。この曲、すわ小町は盗作かの緊迫、草子洗いの緊張、勅諚による舞、全て気合いを入れて見守るところであろう。舞台は全員の役に対する集中力が不可欠、連面の官女の様に中将など面をつけたがよいかもしれない。帝になる子方は勘吉郎君、垂櫻ノ初冠・赤指貫・白単狩衣も凛々しく、はきはきした貫之との問答など大人に伍して立派だった。（1時間28分・1月3日・名古屋能楽堂正月特別公演）

「三本柱」三本の柱を太郎・次郎・三郎冠者（靖浩・靖雄・俊裕）三人して二本宛持ち帰れというのが果報者シテ祐一の考え。智恵者の太郎冠者が謎を解き、棟上げの目出度さは大果報者に仕える幸わせ、どうせ持ち帰るなら賑やかに囃子物で喜んで貰おうの優しい心延えは主従の親密度の深さがいかにも祝言曲。囃子物を聞きつけ、三人の好意に応え三本柱枠の中に入り込み舞う果報者の、でかしたの満悦。（24分）

「樋の酒」「外へ出ると曲事ぢゃぞよ」と主・祐一に釘をさされてはプレッシャーが掛かり蔵を出られない太郎冠者・融の傭人根性も、酒蔵任された次郎冠者・靖浩の才覚で樋の酒にありつけば、酒の勢いで蔵を離れ二人してざっと酒盛り。興至りへよも尽きじ（まさか酒は尽きることもなかろう）、と今や気宇広大の太郎冠者、次郎冠者との連吟連舞は「邯鄲」のひとくさり。一所懸命酔うということもあるまいが、へ薬の水も泉なれば、と騒々しい。ヤングのコンパ思わせるか。（28分）

「酢薑」蕈売・弘之と酢売・友彦とが商人司を巡り互いの出自・系図の正統性をカラク天皇とスイコ天皇に遡って争い、更に道々商売物に寄える秀句を競うが結局埒があかず目出度く和解の笑と留。出会い頭こそ一喝をくらわされて蕈売を目代と早合点、牛に喰らわれ騙された酢売も抜け目のなさは一枚上、秀句の応酬は野球同様後攻優利の立場を取るが、相手の言うが侭に先攻不利を物ともしない蕈売、白熱の好勝負である。言葉の同音を活かす秀句は文字通り秀でた言葉遊びである。（17分）

「煎物」稀曲。昭和四十二年、第九回朝日狂言会以来三十六年ぶりの上演である。

祇園会の囃子物の稽古に神事宿を勤めるアド当屋・融、小アド太郎冠者・郁雄に呼びに遣った靖浩以下講中の面々と稽古中、嘉例の荷茶屋を担ったシテ煎物売・友彦が商い始める。しかし、稽古中とて邪慳にされ、ならばと一同の囃子に合わせるように売り口上を唱え、たどたどしく舞い出すところ、強かな根性をみせる。煎物は薬湯、へ痰の薬とて、と喉によいことを吹聴、茶筅ついで柄杓を持って舞い、当屋が物着に長裃脱ぎ大臣烏帽子頂頭掛・白小袖・下袴の姿に羯鼓著け一管（誠）で舞い出すと、その姿に魅了されて羯鼓代りの焙烙を著け見様見真似に連舞、撥代りの杉葉束を打って舞うのは「鍋八撥」に同じ。商いも儘ならず、えらいことになった、の思い頻りの友彦に趣。水車で幕に入る融を横目に転びを打てば、遣い蹲った腹に応える感触、「数が多ふ成て目出度い」の負け惜しみは疎外された者の哀しみ。友彦・融の親子コンビの好舞台。（45分・1月11日・第32回鳳の会）

「羽衣・替ノ型」ワキ欣哉、ワキツレ寛・誠吾、大口を穿く漁夫。一セイあと、ワキに後見座へ。釣竿置くと一ノ松後勾欄へ行き名宣、へ万里の、からへ小舟哉、迄を省き直ぐ四辺の瑞気に目の前の美衣に気付き持ち帰るところ、幕内からシテ光洋に呼掛けられる。天冠に紅い牡丹を翳シ面小面・白摺箔・赤地縫箔腰巻の灘酒な姿のシテのしおらしさは、薄く右上方を沁々眺め、雲の流れへ羨ましき気色かな、とシオルところ、大の男も憐憫の情自ずから催そうというもの。へ声今更に僅かなる、と舞台に入ればへ千鳥鴎の沖つ波、と右から左へ、へ行くか帰るか春風の、と左から右へ、サシ廻シへ空に吹くまで懐かしや、としんみりした初同（汎・安明ら）のトメにシオレば、いかに意地悪なワキも居た堪れない。物着に紫（白か赤がいいと思うのだが）長絹を着けると、クセはへ（月清見潟）富士の雪、の月ノ扇、へ蘇命路の山を映して、と左袖披キ目付柱へ見るところ、など一種の呪縛から解放された幸せを静かに味得するか。その心は舞の浮き浮きした気分に高まり、破ノ舞を省きキリはへさる程に時移って、と廻りながら扇を右手に替え一ノ松へ。へ浦風に、とハネ扇から左袖披キ右から左へ眼下の景を眺め、微かになってゆく心を小廻りに見せて袖被いたまま幕に消え、残り留。光洋の巧さ故に、見終れば果気なく天上に帰った印象で、舞も五段たっぷり舞って欲しい気分だった。（59分）

「悪太郎」酔って上がりこみ伯父アド則俊の意見に、明日から断酒すると云う舌の根の乾かぬうちに、酒を強請する悪太郎シテ東次郎。暫いは明日からで、今生の暇乞に「一つ振舞うて下されい」と理詰めにこられては伯父も首肯せざるを得ない。一つが、大盃で五つになるのも酒の勢い、五つ目は流石に飲みっぷりは悪いが、卑しくならないのは喉をぐいぐい鳴らして一気に飲む小気味好さ。泥酔を気遣う伯父と、その伯父を酔の饒舌で一寸からかってみたい甥悪太郎、当代にあっては何か懐かしい光景で心が通い合う。

後場は、酔臥の夢の告げも、一旦は戻って飲み直す気持ちが、南無阿弥陀仏と我が名を呼ぶかとみた僧・則秀に出会い翻意、仏門に入るというのも小気味が好いが稚気も横溢。「南無阿弥陀仏」と「ヤア（ヤア）」の悪太郎と僧の掛合が次第にエスカレートしてゆくところ、見所も童心に返る。謡留。なお和泉流はシテの燕尾頭巾を剃髪の態に白無地能力頭巾に替える。（33分）

「鉢木」シテ祥六。鏡板が若松の平成九年度観世会納会に役がつくが事情で代勤になったことがあった。それから五年二ヶ月、待望の、と言ってよい登場である。節を曲げない硬骨の鎌倉武士がそこに居た。

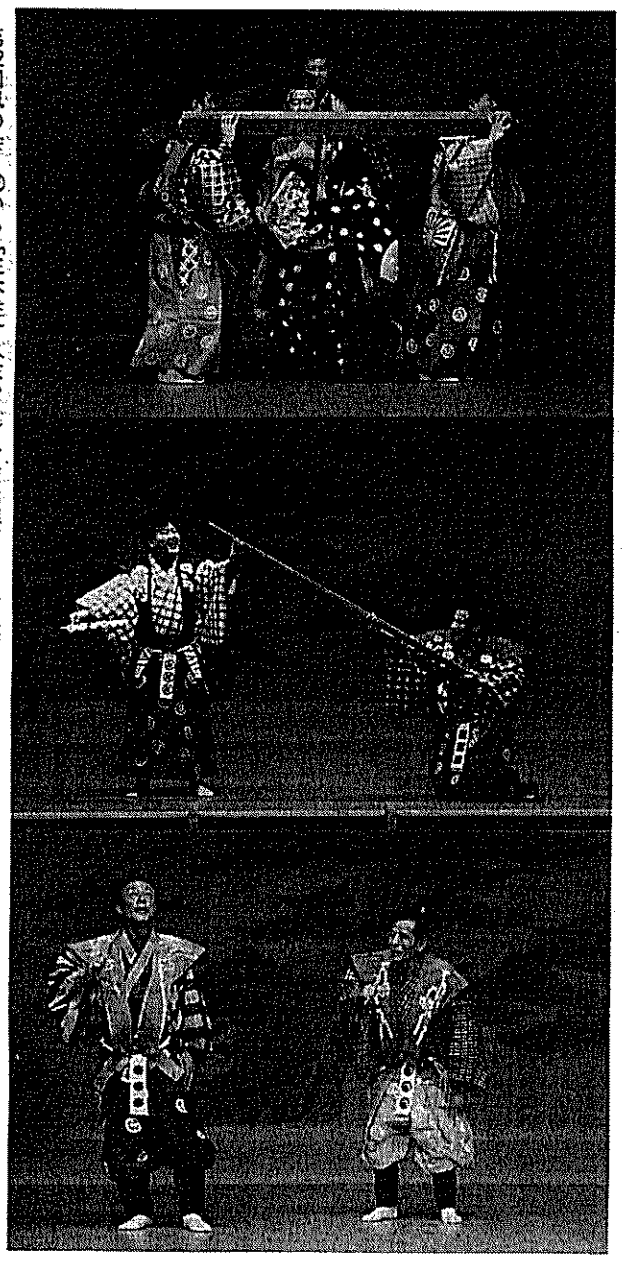
「ああ降ったる雪かな」に不遇を嘯つ口吻もあろうが、へ今日の寒さを如何にせんあら面白からずの雪の日やな、と自然界の事象素直に受け入れ恬淡。一旦は旅僧ワキ間の宿を断わるのも己れの貧を知る朴直な人柄がなせること、妻ツレ祥人に過去現在未来を思えば今こそ善行をと勧められ、ならばなぜ以前に、と少々癇に障っても直ぐ相手の身を案じ跡を追い、追いつけばワキの袖を引くのも真率。へ（仙人に仕へし）雪山の薪、と右袖脱いで伐った鉢木を焚き、へより寄りて当たり給へや、と左手指シ促すところも真情溢れ、へさて合戦始まらば、は大いに気概をみせる。ロンギの中、別れの場はワキとシテ・ツレ連吟の掛合が名調を沁々と聞かせて心を打ち、味わい深かった。

後場は、沙門帽子・白綾着付・白大口・紫水衣・掛絡のワキ最明寺の威風、御前に出るシテは雪の旅僧が最明寺と判り恐懼、ワキの語は流石を思わせ、へ常世はこれを賜はりて、と安堵状を手にしたシテは声涙俱に下る感じ。トメはへ本領に安堵して、と三ノ松、長刀担げ右ウケ拍子は踏まなかった。ワキツレ欣哉、アイ則秀・則俊（従者）、囃子庸二・新一郎・達雄、地謡清和・志房ら、主後見邦久。（1時間34分・1月13日・名匠能）

「鬼瓦」訴訟叶い国許へ帰る大名シテ又三郎、満願成就のお礼に太郎冠者・小三郎を伴い因幡薬師に参詣、ジャワジャワと鰐口を鳴らす。御利益を国許へも、と勧請を思い立ち、堂宇見回るうち鬼瓦を見つけ、「誰やらにやう似たな」と言うや泣き出す。妻の顔の造作、よそから見れば際立って醜に近い一いちをあからさまに指摘してゆくところ、太郎冠者までが「首筋元に苦の生へた処はやう似た事でござる」と謂子に乗る追従。他人事だから可笑しいが、女は顔だけではない、の強いアピールでは。キリは直ぐ会えると太郎冠者に窘められ、「由無い事に落涙した」と笑ヒ留にするところ、己れの立場に気付き照れと郷愁一気に誤魔化すとみた。又三郎老巧。（12分）

「鎌腹」強妻和憲に山仕事へ追いやられるシテ太郎・万作、仲裁人・万之介が出て双方の言い分を質すが、凄まじい妻の見幕に、腹を切るという太郎を独り残し、仲裁人も妻に引っ立てられて帰ってしまう。男の面目、生き恥さらすよりはと決心した腹切りも、いざとなれば臆するばかり。「手が筋張って鎌が腹の方に寄らぬ」となれば、鎌を立木に括り付けて抱きつく、とか目を瞑り飛び掛かる、など様々なこと喧しく言い立てて実行に及ばんとするところ、科白あとの荒い息遣いに役への集中力ひしひしと感じる。「観念をして山へ行かう」の空しさに底流するものは、命拾いの先に在る男はつらいよの感慨、万作計算され尽したような繊細な巧技。（25分）

「二人袴」シテ舞・萬斎、親・万之介、舞・幸雄、太郎冠者・博治。舞と親、二人して座に通り盃事になるところ、酒が辛いと率直な舞。甘いを勧められれば、いや辛いが好き、と舞を立て、「たぶればたぶる程よい酒でござる」と追従も言う。輿入れの折は初々しかったおごう（新妻）が今は叱ると舞。慌てて親が執り成し、夫婦円満を言えば、近頃は酸っぱい青梅を好くと純真そのもの。酒を勧められた親が無調法と言えば、悪戯っ子の様に目を笑わせて飲めることを暴露、親を恥入らせるなど、老練万之介・幸雄に囲まれ萬斎の活きのよさ。博治は科白の無いときが生硬、顔に朗色がほしい。（42分・1月18日・第五回万作を観る会）



第32回鳳の会（㊤から「三本柱」（左から）今枝靖雄、シテ井上祐一、鹿島俊裕、井上靖浩　㊥「樋の酒」左・井上靖浩、右・佐藤融　㊦「酢薑」左・大野弘之、右・佐藤友彦）（杉浦賢次氏撮影）

名古屋能楽堂公演

第25回 邦謡会能

四月六日(日)十二時三十分開演
名古屋能楽堂

連吟
竹生島　高島良一　本田勲

仕舞
松風　今沢美和
蝉丸　須部甫
歌占キリ　清沢一政

地謡
高島良一　分林道治　片山伸吾　本田勲

敦盛
青木智彦　橋本忠樹　武田大志　上野嘉宏　能

高安勝久　河村真之介　柳原冨司忠　竹市学

後見　味方玄　片山清司
地謡　高島良一　本田武田　須部邦弘　甫梅田　清沢一政　古橋正邦　邦久　青木道喜

不見不聞　狂言
野村又三郎　野村小三郎　井上祐一
後見　松田高義

仕舞
頼政　片山九郎右衛門
熊坂　片山清司

地謡
上野嘉宏　古橋正邦　武田欣司　味方玄

求塚
片山伸吾　能　分林道治　梅田邦久
広谷和夫　植田隆之亮　森本幸治
河村稔一郎　曽和博朗
前川光長　藤田六郎兵衛
間　野村小三郎
後見　青木道喜　武田欣司
地謡　青木智彦　武田大志　上野嘉宏　橋本忠樹
味方玄　片山清司　片山九郎右衛門　武田邦弘

附祝言

主催　邦謡会

入場料　全館自由席　五千円（当日先着順座席指定）
前売券取扱所　邦謡会（052・841・4632　梅田方）
チケットぴあ（052・320・9999）
市内プレイガイド

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　　100円

ＮＨＫ放送予定（平成15年3月～4月）

◆ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

3月23日	「綾鼓」「自然居士」（宝生流）	松本恵雄氏追悼
3月30日	「布施無経」（大蔵流）	山本則直ほか
4月6日	「俊寛」（観世流）	坂井音重ほか
4月13日	「西行桜」（宝生流）	近藤乾之助ほか
4月20日	「楊貴妃」（金春流）	桜間真理ほか
4月27日	（再放送）「羽衣」（観世流）	山本順之ほか

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［3月］
21日㈮　観修会春の会　（無料）
23日㈰　「さわってみよう能の世界」
28日㈮　名古屋梅若六郎の会　（有料）

［4月］
6日㈰　第25回邦謡会能　（番組①面）（有料）
13日㈰　名古屋観世会定式能　（番組①面）（有料）
20日㈰　春の素謡と仕舞の会　（無料）
29日㈫　中日能　（番組②面）（有料）

◆熱田神宮能楽殿◆

（TEL 052－682－1751）

［4月］
20日㈰　幸謡会　（番組②面）（無料）

愛知県芸術文化選奨

2月21日　受賞式挙行

東海能楽研究会が受賞

愛知県では、このほど平成十四年度「愛知県芸術文化選奨文化賞」の個人、団体を選定、団体として「東海能楽研究会」（筧鉱一代表）が選ばれた。（本紙一月号既報）

この授賞式が去る二月二十一日午前十時から、名古屋市東区の愛知芸術文化センター十二階・アートスペースＡで行われた。

当日は午前十時開式、神田愛知県知事から文化賞・個人五人、団体二団体、文化奨励賞、学校二校にそれぞれ表彰式が渡され、東海能楽研究会では筧鉱一代表が出席、表彰状が授与された。式は知事のあいさつ、選考委員を代表して選考委員長の講評、愛知県議会議長の祝辞がのべられ、記念撮影が行われた。

受賞した研究会・筧鉱一代表は「平成六年に発足してから会員のみなさんはじめ、能楽界および各方面のご指導、ごべんたつを頂き心から感謝しております。名古屋を中心とした能・狂言の歴史、資料の収集を大きな眼目として、また多面的な研究、発表、出版を行うことができました。本当に皆さまのおかげであり、今後ともなお一層芸術文化の振興、伝統芸能の発展に微力をつくしていきたい」と語っている。

神田知事から筧鉱一代表㊧に愛知県芸術選奨の授賞

蝋燭能で上演

中日能「殺生石」

中日新聞社、中部日本放送主催の「中日能」は四月二十九日（火・祝）名古屋能楽堂で開催される。

今回は、能「杜若」（シテ観世清和）、狂言「清水」（野村又三郎）、能「殺生石」（シテ観世芳伸）の演能。

とくに「殺生石」は、〝蝋燭能〟とし、電気による照明を消して、ろうそくの炎の明るさだけで上演されるもので、妖しく美しい世界、炎の向こうに蘇る幽玄の世界に誘う演出である。

午後一時開演、連携協力／財団法人2005年日本国際博覧会協会（番組②面掲載）

大槻能楽堂　春の公演

大阪

大槻能楽堂改築第二十周年記念、2003年大槻能楽堂自主公演能の春公演は「日本史の謎・謎」平安朝の光と闇――「万葉集の成立」のテーマで、四月十六日、四月二十六日に行われる。

四月十六日（水）午後六時開演能「求塚」（シテ片山九郎右衛門、ツレ片山伸吾、分林道治、ワキ福王茂十郎、ワキツレ福王和幸、福王知登、アイ茂山千三郎、笛・杉市和、小鼓・荒木賀光、大鼓・山本孝、太鼓・上田悟、地謡・片山慶次郎、梅田邦久ほか

狂言「鎌腹」シテ茂山七五三、アド茂山逸平、木村正雄

四月二十六日（土）午後二時開演。

能「松浦佐用姫」（シテ斎藤信隆、ワキ植田隆之亮、アイ茂山茂、笛・赤井啓三、小鼓・曽和正博、大鼓・辻芳昭、地謡・大槻文蔵、上野朝義ほか。

狂言「鎌牛」（シテ善竹忠一郎、アド善竹隆司、善竹隆平）

両日ともお話（大森亮尚氏）が予定されている。

一般当日四千三百円（前売三千八百円）、学生当日二千八百円（前売二千三百円）

チケット発売所　大槻能楽堂（電話06・6761・8055）、阪急プレイガイド、チケットぴあ、ローソンチケット。

名古屋能楽堂公演

第25回　邦謡会能

四月六日（日）十二時三十分開演
名古屋能楽堂

竹生島
運吟　高島良一　本田勲

松風
能　青木智彦　橋本忠樹　武田上野大志　嘉宏
仕舞　今沢美和　須部甫
地謡　高島良一　分林道治　片山伸吾　本田勲

蝉丸
仕舞　今沢美和　須部甫
地謡　高島良一　分林道治　片山伸吾　本田勲

歌占キリ
仕舞　今沢美和　須部甫　清沢一政
地謡　高島良一　分林道治　片山伸吾　本田勲

敦盛
能　青木智彦　橋本忠樹　武田上野大志　嘉宏　高安勝久　河村真之介　柳原冨司忠　竹市学
間　井上靖浩
後見　味方玄　片山清司
地謡　高島良一　本田勲　須部甫　清沢一政　古橋正邦　武田邦弘　梅田邦久　青木道喜

不見不聞
狂言　野村又三郎　野村小三郎　井上祐一
後見　松田高義
仕舞　頼政　片山九郎右衛門　熊坂　片山清司
地謡　上野嘉宏　古橋正邦　武田欣司　味方玄

求塚
能　片山伸吾　分林道治　梅田邦久　広谷和夫　植田隆之亮　森本幸治　河村総一郎　曽和博朗　前川光長　藤田六郎兵衛
間　野村小三郎
後見　青木道喜　武田欣司
地謡　青木智彦　武田大志　嘉宏　上野　橋本忠樹　味方清司　片山九郎右衛門　武田邦弘

附祝言
主催　邦謡会

入場料　全館自由席　五千円（当日先着順座席指定）
前売券取扱所　邦謡会（052・841・4632　梅田方）
チケットぴあ（052・320・9999）
市内プレイガイド

名古屋観世会定式能

四月十三日（日）十一時半開場
十二時半開演
名古屋能楽堂

巴
能　片山慶次郎　高安勝久　河村総一郎　後藤孝一郎　竹市学
間　松田高義
後見　片山伸吾　小島一英
地謡　外山圭一　松山幸親　須部甫　清沢一政　古橋正邦　武田邦弘　梅田邦久　勘鹿

屋島
仕舞　片山伸吾

遊行柳
地謡　祖父江修一　武田邦弘　梅田邦久　古橋正邦

名取川
狂言　野村又三郎　野村小三郎
後見　松田高義

天鼓
能　梅若六郎　弄鼓　飯冨雅介　河村真之介　柳原冨司忠　前川光範　藤田六郎兵衛
間　野村小三郎
後見　久田勘鹿　片山慶次郎
地謡　高島良一　本田勲　加賀敏彦　高橋暁一　片山伸吾　梅田邦久　片山九郎右衛門　武田邦弘

（終了四時半頃）

附祝言
主催　名古屋観世会

［有料］当日券八千円（自由席）
（枚数制限があり、売切れになることがあります。）

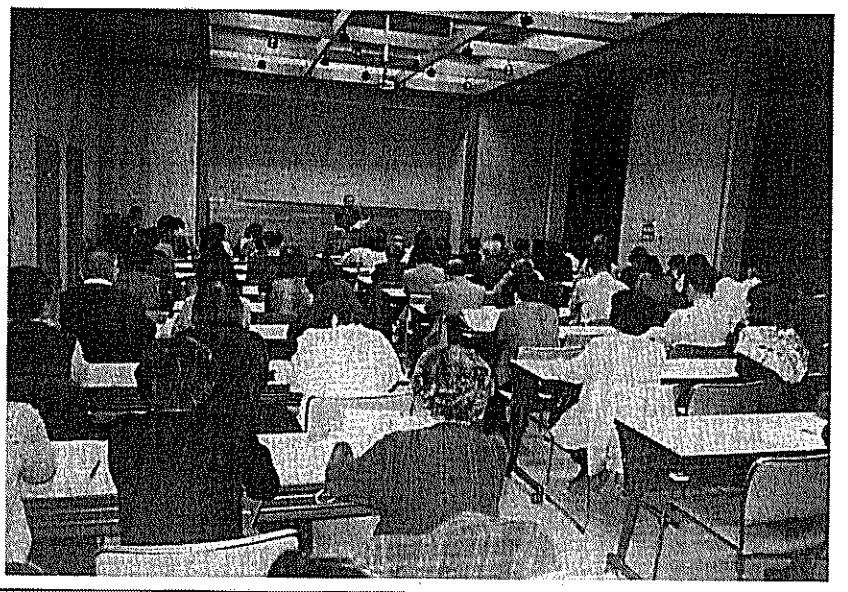
狂言「千鳥」と津島祭り
狂言「鳳の会」特別セミナー

狂言「鳳の会」は、一九九二年（平成四年）に発足してことし十二年目を迎え、狂言の公演、狂言講座の開講など積極的な活動をくりひろげているが、さる三月一日、始めての企画として、狂言「鳳の会」特別セミナーを名古屋能楽堂会議室で開催、鳳の会会員など八十人を越える愛好者が熱心に受講した。

当日は、〈狂言「千鳥」と津島祭り〉のテーマで、林和利氏の講義、井上祐一、佐藤友彦両氏による実演などが行われた。

林和利講師は、津島祭りについて、「津島祭り」「尾張津島天王祭り」「天王祭り」「津島神祭り」「提灯祭り」「津島川祭り」などの呼称があり、大阪天満天津祭、厳島神社管弦祭、京都八坂神社祇園祭と並ぶ夏祭りの代表であったことなど、その起源、変遷を解説、さらに狂言「千鳥」との関係、津島祭を狂言「千鳥」の題材にした経緯などを解説。さらに井上祐一氏、佐藤友彦氏によって演技が行われ、受講者の関心と興味を高め、また地域の歴史、文化、祭事などいろいろな面で質疑も活発に行われた。

㊤林和利氏の講義、㊦井上祐一、佐藤友彦両氏による実演



狂言「鳳の会」特別セミナー会場＝名古屋能楽堂

伊勢神宮神楽祭
奉納金春流能

伊勢神宮神楽祭にあたり金春流能楽として、四月五日(土)伊勢神宮内宮参集殿舞台で奉納能を上演する。

能「室君」（本田光洋師）はじめ、名古屋、伊勢、東京の流友による仕舞、連吟、素謡など。

名古屋観世会
15年度予定番組

名古屋観世会では、平成十五年度は年六回の定式能を企画しているが、第三回以降の演目、出演は次のとおりである。（第二回は①面掲載）

◉三回　六月八日(日)　十二半始
ツレ　梅若　猶義
天女　観世　喜正
賀茂　梅若吉之丞
善知鳥　ツレ　高橋　聯一
観世　喜之
◉普及公演
七月二十日(日)十二時半始
自然居士　子　久田勘吉郎
安達原　久田　勘鶴
古橋　正邦
◉四回　九月十五日(祝)十二時半始
通盛　片山　清司
葛城　野村　四郎
大和舞　片山九郎右衛門
◉納会　十一月九日(日)十二時半始
小督　ツレ　祖父江修一
恐之舞　トモ　清沢　一政
海士　梅田　邦久
懐中之舞　子　観世　淳夫
観世銕之丞
※当日券は八千円（自由席）。予約は一カ月前。枚数に制限があり、売り切れになることがある。普及公演の当日券は五千円。

能楽鑑賞入門
椙山オープンカレッジ講座、4月から開講

椙山女学園では、四月二十二日から、「椙山オープンカレッジ」として、〈能楽鑑賞入門講座〉を開講、受講生を募集している。

オープンカレッジ講座の開講について、能狂言の愛好者の期待と要望にこたえて、能・狂言の人気曲をビデオで鑑賞しながら、面、装束、所作などの約束ごとや、能の本文の意味・見どころについて解説、五回にわたる講座のなかで、能楽師による実演と初歩の稽古も体験する。

開講日は火曜日、時間は十時五十分～十二時二十分(九十分)

定員二十人、受講料八千九百円

講師　大倉流大鼓方・筧鉱一氏、喜多流シテ方・長田驍氏、椙山女学園大学文化情報学部・飯塚恵理人氏

開講計画（全五回）

第一回（四月二十二日）「能〈隅田川〉を観る」（飯塚恵理人氏）

第二回（五月十三日）「謡曲・仕舞入門」（長田驍氏）

第三回（五月二十七日）「狂言を観る」（飯塚恵理人氏）

第四回（六月十日）「能を観る」（飯塚恵理人氏）

第五回（六月二十四日）「能の囃子」（筧鉱一氏）

会場：椙山女学園大学・星が丘キャンパス

問い合わせ　学校法人椙山女学園・オープンカレッジセンター事務局（電話052・781・1239）

後援　名古屋市、名古屋市教委、日進市、日進市教委

春の素謡と仕舞の会

四月二十日(日)午前九時三十分始
名古屋能楽堂

素謡「桧垣」「鸚鵡小町」ほか仕舞
主催　邦謡会
梅田邦久

［来場歓迎］

中日能

四月二十九日(火・祝)午後一時開演
名古屋能楽堂

能
杜若　観世　清和
恋之舞　宝生　欣哉　河村総一郎　助川　治
福井啓次郎　藤田六郎兵衛
後見　久田　勘鶴　外山　圭一
武田　宗和　高島　良一　清沢　一政
地謡　松山　幸親　藤井　完治
高橋　聯一　武田　志房
観世　芳宏
狂言
清水　野村又三郎　野村小三郎
仕舞
巻絹　田村　沖野　多哥
放下僧　小政　近藤　允子
柿木　園子
龍田　キリ　石河フサ子
三輪　増田　保雄
連吟
鶴亀　石川　晴子
石川　誠司
舞囃子
高砂　五段　鈴木寿太郎　河村真之介
福井啓次郎　鬼頭　好信
鹿取　希世
清経　田代　妙子　河村真之介
福井啓次郎　鹿取　希世
海士　高取　良昌　河村真之介
福井啓次郎　鬼頭　好信
鹿取　希世

熱田神宮能楽殿演能
幸謡会

四月二十日(日)午前十時始
（午前九時半開場）
熱田神宮能楽殿

能組
素謡
竹生島　吉田　雅子
山下須美子　田代　妙子
三輪　阪野　蓉子　酒井　照子
葵上　宇野　順子
湯朝美智子　近藤　幸子
阪野　蓉子

殺生石　観世　芳伸
白頭　高安　勝久　河村真之介　助川　治
後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛
野村小三郎
後見　上田　公威　本田　須部　熱　古橋　正邦
観世　芳宏　地謡　加賀　啟彦　甫　小島　一英　梅田　邦久　久田　勘鶴
祖父江修一
仕舞
兼平　梅田　邦久
網之段　武田　志房
善知鳥　藤井　完治
――火入れ――
地謡　清沢　一政
古橋　正邦
武田　宗和
上田　公威
蝋燭能
藤　戸　素謡　青木　朋子　田中　栄子
求　塚　近藤　幸江
磯貝　勝子　森　蓉子
舞囃子
定　家　村井　邦子
素謡　三浦美由紀
芝崎　恭子　川潤　泰子
百　萬　桜川　舞　山下須美子
網之段　吉田　雅子
蝉丸　阪野　蓉子
邯鄲　芝崎　恭子
隅田川　小野内喜春子
屋島　三浦美由紀
能
吉野天人　天人物　宇野　順子
近藤　幸子
百瀬　永三子
酒井　照子
石川　晴子
飯富　雅介
橋本　宰　筧　鉱一
後藤孝一郎　鬼頭　好信
藤田六郎兵衛
間　松田　高義
後見　武富　康之
大槻　文蔵　地謡　磯貝　勝子　村井　邦子
星野　路子　森　幸子　上田　智子
三村　恵子　近藤　幸江
前野　郁子
番外仕舞
雲林院　大槻　文蔵
嵐山　近藤　幸江
（終了四時半頃）
幸謡会
近藤幸江
岡崎市鴨田本町十一―三
TEL（〇五六四）二一―二五二九

［来場歓迎］

［有料］
S席前売一万五千円（当日一万六千円）
A席前売一万三千円（当日一万四千円）
B席前売一万一千円（当日一万二千円）
前売り券取り扱い所
◇プレイガイド【名駅】名鉄観光サービス【栄】中日サービスセンター（中日ビル一階）、三越プレイガイド【矢場町】日本プレイガイド（松坂屋北館一階）◇チケットぴあ、ファミリーマート（Pコード731―821）◇中日新聞社事業局庶務部

主催　中日新聞社
中部日本放送

戦後名古屋能楽史 ㊶

〔第十一章〕昭和三十二年（一九五七）

竹尾　邦太郎

（承前）

前後したが六月十三日、名古屋城再建の起工式が小林橘川市長の鍬入れ式、神野金之助名古屋商工会議所会頭らの玉串奉奠などにより、大天守閣跡東側で盛大に行われる。二十一日、狂言の夕、戦後初の狂言尽しの会で、狂言共同社の総力を挙げて行われ、番組の挨拶にその抱負が次のように語られる。

「狂言」は能より一ト足先きに生れたもので、意気と熱情に燃えた、民衆の芸術でありました、其の取材たるや、各階層から自由に選び、辛辣な皮肉や諷刺、洒脱な諧謔や笑で演出された、往時の現代劇であり、喜劇でもあります。名古屋は狂言、和泉流の発祥の地とも言うべく、慶長の昔山脇和泉守元宜、尾州家の御抱えとして来住せしより代々三百五十年、明治の時代まで続きました。我々はこの由緒深き、古く伝はる「狂言」を、現代の民衆芸術として観直し、その普及を図ることの有意義なるを思い、敢て心ある皆様に呼びかける次第であります。

番組は「蝸牛」井上松次郎、「蚊相撲」佐藤卯三郎、「武悪」河村丘造（主）、井上礼之助（武悪）、井上松次郎（太郎冠者）、「引くくり」歌村彦四郎。金曜午後六時の開演で帰途は暗い神宮の森、家路も思いやられるが盛会とのこと。

後日「狂言」紙第八号（九月号）に次の記事がある。「狂言の夕」は戦後初めての試みでありましたが、幸ひに皆様の御理解を得まして、予想外の御来場を賜り、厚く御礼申上げます。折あしく小生病気再発いたしまして、絶対安静中にて、出演出来なかったこと、謹んで御詫び申し上げます。然し来春第二回、狂言の夕を開く予定であります。何卒御期待下さいまして、より以上の御後援を今から御願ひいたします。（歌村生）」「御礼のことば　去る六月二十一日狂言の夕は各位の絶大なる御援助により盛況裡に終りました事を同人一同心から御礼申上げます。今後もより一層の御後援をお願いします。（共同社編輯部）」

前者の記事から「引くくり」のシテの代勤は、と不審しても番組はその侭残って伝えられ、記録保存に正確を欠くことになるが、すべからく催会主催者は当日の連絡だけではなく、次回番組に代勤者を明記すべきであろう。因に狂言の夕は翌年も行われ翌々年からは朝日狂言会へと発展的に移行することになる。

六月二十五日、京都観世会館の起工式があり、同日パリのサラ・ベルナール劇場では四日間に亘り喜多実を団長とする第二回渡欧能楽団の公演がある。これに先立つ六月六日付中部日本新聞夕刊は、「パリへ行く能楽」「狂言を特に用意・充実した陣容に期待」の見出しで同行する三宅襄の談話を掲載する。

さる二十九年夏、イタリアのベネチアでひらかれたヴェンナーレに出かけた能楽は、一行十五名かの少人数で、しかも観世と喜多の二流混成だったしワキも手不足、狂言もいない始末だったのでいきおい演出形態等に無理もあったらしい。今度のフランス行はやはり喜多実、観世喜之の両氏を中心とする二流であるが、シテ方だけで十五名の人数がそろい狂言方も三名加わっているから「紅葉狩」や「土蜘蛛」の人数物も上演出来るわけだ。ただいささかの不安は、囃子方と脇方の手薄である。囃子は幸祥光、吉見嘉樹、藤田大五郎、金春惣右衛門の四氏一組で、ワキは宝生弥一氏一人が行く。芸術の都といわれるパリの国立劇場サラベルナール座における文化祭は、すでに四月から開催されており、欧州各国の芸能団体がそれぞれ腕をふるっているそうだ。そこへ乗込んでいく能楽である。かりそめのことではすまされない。しっかりやってもらいたい。

六月二十五日から四日間の公演に備えて、この渡仏能楽団はつぎのような曲目を予定している。能二番に狂言一番ずつである。「葵上」「棒縛り」「石橋」、「鷺」「伯母ヶ酒」「船弁慶」、「羽衣」「巣山伏」「土蜘蛛」、「隅田川」「蚊相撲」「紅葉狩」に「猩々乱」と「成上り」とがストックされている。

舞台は、先年ベネチアに持っていった組立式のが、あちらに残してあるので、それをパリに運んで使用する手筈が出来ている由だ。フランス人は、狂言をよろこぶというので、今度は正式に狂言を加えた。役者は野村万之丞、同万作の兄弟に野村又三郎と三人の若手が行く。どんな曲がわかるかと色々考えた結果、前記の五番に決ったらしい。いつぞや来日したマルソオの、パントマイムなども参考にしたということだ。「成上り」は曲名の説明に困りはせぬかと心配したが、動作が多いからよかろうというので、取り上げられた。ところが先ず翻訳（仏英二ヵ国語）者の方で弱ったそうである。この文字に限らず、能や狂言の解説の翻訳は骨が折れるだろう。それにしても上演に先立っての解説こそ一層困難と思われる。短かい文章では到底意を尽さないから、それを補う話は大切である。

九番の能と五番の狂言を並べてみると、出演者の苦心も察しられるが、さてどれが受けるか、どの曲がよく解るかは問題だ。「葵上」は先年、トーキーに撮って外国に輸出されているから理解は早いだろう。それに不思議とあちらの人は般若の面に魅力を感ずるらしいから「紅葉狩」の鬼女や「葵上」の鬼女が、般若面でキッと面を切っての見得は印象に残るだろう。「石橋」の獅子は文句なしに解るが、一畳台を二つと牡丹の作り物まで持っていくだけでも大変だ。獅子舞のダイナミックな動き、獅子の味わいは腕揃いの演者によって効果は上るだろう。「鷺」の乱と「猩々」の乱とは、共にバレエ的要素が含まれているから、あちら向きと言える。獅子の力強さと乱の優美さが対照されてブラボウと叫ばれるに違いない。「隅田川」の哀傷の情趣が、能の演技で、一般人にどこまで理解されるかは、いささか心配でもある。これは要領のよい解説者の巧みな話振りが必要だ。ポキャブラリーの豊富さを伴う講演でありたい。「羽衣」と「船弁慶」は、テーマの点からは前者が理解されると思うが、義経と静との哀別離苦の感情が、能の中之舞やクセ舞やによって、どの程度彼の地の人の感情に訴えるか。いわゆる幽玄の情緒を幾らかでも酌みとって貰えたら、それで満足すべきかも知れない。

とにかく要は、「受ける、受けない」ではなく、正しい演技をもって強く立派に舞うことに、渡欧団の目的があると思う。

因にこの談話を寄せた三宅襄（能楽協会理事）は健康上の理由で渡航を断念せざるを得なかったが、現地巴里での取材記事は丸岡明著『能　談義』東西五月社・昭和三十五年七月刊に詳しい。

――以下次号――

◆早春の舞台から◆

「梅猶会定期能」「宝生会」と「青陽会」「観世会」

竹尾邦太郎

「田村・替装束」 シテ善高、小書で前は喝食姿。サシ・下歌・上歌省き直ぐワキ旅僧・利宣と問答。清水寺縁起を語る詩らしい気分は、初同（修一・猶義ら）へ大悲の影ぞ有難き、の片手合掌にも。初同のトメに萩箒を後見より扇に替え、名所教えは音羽山に上る月の地主の桜に映る景に、へ春宵一刻値千金、と異口同音、シテ・ワキ連吟が良く、共感は、へ今この時かや、と互いに歩み寄るところに趣。クセ前、落花を追って扇に受け、へ散るや心なるらん、とこぼすのが児戯めいて微笑ましい。

クセは、へ（花の都の）春の空、と踏む拍子一ツが、へ天も花に酔へりや、と踏む五ツ拍子に呼応、春酣の浮き立つシテの心、天地の生動も思われる。ワキに素姓匂わせ消える中入は、へ（我が行く方を見よや）とて、と立ち、橋懸は一ノ松先、扇開き、へ月のむら戸を、横に押し開く型、へ内陣に入らせ給ひけり、を残し幕に入る。アイ門前ノ者は隆司、明晰な居語が爽快である。

後シテは面三日月（か）・金鍬型黒垂・梨子打・白鉢巻・紅白段厚板着付・紺地鱗ニ龍ノ丸文半切・白地立湧ニ宝輪文袷狩衣（袖折込）・剣・唐団扇の英姿。ワキとの掛合に素姓明かし、へ（都鄙安全に）なすべし、と正中床几に掛かる。キリ中へ一度放せば、で立つまで床几の侭は小書「替装束」に併用される「長胡床」。クセの床几の型は、へ勢多の長橋、を三ツ拍子に踏み鳴らし、へ駒も足並や（勇むらん）、と体をやや右に開き腰を浮かせ馬首を立て直すかの心、へ既に伊勢路の（山近く）、と上ゲ端に再び床几に掛かるところ、鬱勃たる闘志を秘め意気盛んを強く印象づける。キリは矢先雨霰とへ鬼神の上に、乱れ落ちるを頭上唐団扇で庇い飛返ルのも鮮やかに、へ有難し有難しや、と下居両手をつき拝、立つとスミから左へ廻り込み常座に帰りトメ、善高力強く骨のある舞台。（1時間13分）

「采女・美奈保ノ松」 シテ吉之丞、面若女・白摺箔（唐花七宝文）着付・赤地唐織（菊几帳文）。小書で春日へ社参のワキ旅僧・金治郎に呼掛、いきなり猿沢池へ誘い一方的に回向を願うと、帝の龍を失ない絶望入水した采女の故事を語り、その幽霊と明かし水中に消える前場。しっとりしたシテの語りはワキとの掛合、へ池の藻屑に乱れ浮くを、の連吟となるところ真切ひとかたならず、これを受ける初同（猶義・基徳ら）もこの情緒によく応える。へ柔やなや下として、と面ややに伏せ一足退くシテの風情、へ水の月取る、と薄く右下眺め、へ生ける身と思すかや、とくるり向き変えて脇正からワキへ数歩出る退る様な心の微妙は、へ池水に入りにけり、と小さく廻り沈むと返シ句に立ち、送り笛に退いてゆくところ、寂寥の感も一入。

後シテは紺無地熨斗目披き一ノ松に下居、へ騒がしくとも、と被衣脱ぎ捨て、へ池の蓮、と立つ姿は水中から浮かび出る心。分ケ髪を付け、着付を観世水文の白摺箔に替え、浅黄大口・浅黄長絹の水色尽しも淋しい。ワキとの掛合から地へ変成男子なり、と左右の袖をあしらい、へ采女とな思い給いそ、とワキを見込むと、へ補陀落の南の岸に、到るを小廻りに象徴し、へこれぞ、と運び地一杯に常座、下居ワキに合掌する。

小書でクリ・サシとクセの大方を省き、へさるにても忘れめや、と曲水の宴で交わされる盃の、酌に立つ姿を扇面捧げる型に、へ有明の月、を月ノ扇に、へ山郭公、を面伏せ聞くと、へ月に啼け、と序ノ舞。初段過ぎ二ノ松へ、佇立して水面眺め渡し、更に、内に寄せる扇に左袖を載せ下居に沈むと、左腕勾欄につき下を見続けるのは、曾ての采女の姿を求める思いか、心に残る。舞は拍子踏む代りに小腰を屈め沈むようで、淋しさの中の優しい美しさを見せる。キリは猿沢の池の描写から窓打つ雨音々立てず踏むと地の裡に二ノ松へ。へ讃仏乗の、とワキを見込み、へ因縁なるものをよく弔はせ給へや、と念を押すかに二・三足出て左手ワキに指シへまた波に、と小廻リに三ノ松、へ入りにけり、と扇で面を隠し沈むと返シ句に立ちトメ。巧緻な技に采女の心情の洞察の深さ、冷たく引き緊った舞台である。（1時間16分・1月19日・梅猶会定期能・大阪能楽会館）

「巴」 シテ愛、面節木増・襟白赤・露芝文白摺箔着付・赤地唐織の里女、木曽から都に上るワキ旅僧・雅介との出遇いは木曽義仲を祀る社。奇縁を喜び、へ神前に向ひ、と常座佇立のシテ、へ手を合はせ、に脇座下居のワキが和し連吟となって共に正へ受け合掌のところ、舞台面も映える。黄昏は逢魔が時、湖畔の雰囲気は、へ暮れて行く日、を笛柱へ眺め、へ入相の鐘の音、を正ニ直り面伏せ聞くのも物寂しい中入が佳。

後シテ巴は面女増髪・黒垂・梨打・白大口・亀甲文唐織壷折（着付・襟同断）、面の替えは極りで、義仲と最期を共に出来なかった苦衷煩悶の表情を籍りることかもしれないが、同断もある由、表現力で見せて欲しい。クセで床几に掛かるが、小柄なシテに鬘桶が高すぎ、どうしても前屈みになりがちで女若武者に遠く、ロンギの義仲最期の馬上の型も迫力を欠く。へかかりし処に、と立ってからは正先、きつく殉死を諫められシオルと一転、長刀きれいに扱い敵を追い散らし二ノ松へ突き進む辺りは上々。キリは、へ後めたさの、気持ちで笠と小太刀を捨てるところ、たてる音も大きいが型も投げ捨てるようで面白くなかった。（1時間11分）

「羽衣・盤渉」 松立木正先、赤地長絹を掛ける。襟紺・段熨斗目着付・萌黄水衣（肩上ゲ）・腰蓑のワキ白龍・勝久、名乗ると直ぐ衣に気付き持ち帰るところ、シテ雅（面泣増・天冠・襟白二・小葵文

（④面へつづく）

第46回 やるまい会 名古屋公演

五月十八日（日）午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

見物左衛門　深草祭
番組
見物左衛門　野村　万作

箕被　男　野村又三郎　妻　野村小三郎　後見　高野　和憲

呼声　太郎冠者　善竹忠一郎　次郎冠者　主　善竹　隆司　善竹　隆平　後見　上吉川　徹

仁王　替之型　博奕打　野村小三郎　博奕打　松田　高義　在所ノ者　奥津健太郎　在所ノ者　野口　隆行　在所ノ者　井上　靖浩　在所ノ者　佐藤　融　在所ノ者　高野　和憲　在所ノ者　野村又三郎　後見　藤波　徹　後見　伴野　俊彦

入場料　A席　前売六五〇〇円（正面指定席）
（当日七五〇〇円）
B席　前売五〇〇〇円
（正面上手・中正面・脇正面後方指定席）
（当日六〇〇〇円）

申込み　野村事務所　☎052・350・7971
FAX052・350・7972
チケットぴあ　☎052・320・9999

（③面よりつづき）

白摺箔着付・流水ニ水草文浅黄縫箔腰巻）の呼掛。「元の如くに」と三ノ松からワキに扇で指シ促すが応えぬワキに、悲しやと懇願しつつ一ノ松へ。ここから初同（富四夫・克栄ら）まで、シテ・ワキ掛合は詞章の文意踏み観世より切実。即ち、今は天人も〽羽無き鳥の如くにて、とシテが嘆けば、〽上らんとすれば衣無し、とワキの冷やか。〽地に又住めば下界なり、と地上は天上に非ずのシテの嘆息に、〽とやあらんかくやあらんと悲しめど、とワキは玩弄。〽白龍衣を返さねば、とシテの恨み言も、〽力及ばず、だろうと飽くまでも意地悪なワキ。〽詮方も、無いとシテの悲嘆憔悴は、〽千鳥鴎の、と空の彼方を指シ廻シ、哀しみ一杯にため〽行くか帰るか、と運ビ出し、地一杯に舞台へ入りシオリすれば、いかに非情なワキも軟化する。シテ・ワキ掛合が対面ではなく、シテの悲哀を増幅させる空間があることの効果、雅・勝久、力量発揮する。物着に赤地桐鳳凰文長絹の美麗、舞の巧みは芸劫重ねる雅の優美、小書でワカ以下破ノ舞が抜け〽さる程に時移って、と一ノ松へ。〽愛鷹山や、と小廻り、左袖返し三鼓の流シに遠ざかり〽霞に紛れて、舞込に入り残り留は余情も一入。（1時間）

「柑子」　主・友彦から預かる珍しい三ツ成りの柑子食べてしまったシテ太郎冠者・弘之。朴直なシテが弁解のため俄に多弁となる印象は、一所懸命に言い逃れの俊寛鬼界島の講釈だが、最後は「余り旨うござったによって私が食べました」と白状。他派他流のように「六波羅へ」納まらなかったところは如何にも正直、弘之役に嵌る。（12分）

「夜討曽我」　仇敵祐経を討つ決意の五郎正宜と十郎輝和、慕う郎党鬼王荘太郎と団三郎優が同行を許されぬため刺し違えんとするところ、〽これを聞かずは生々世々永き世までの勘当と、と連吟で言い渡す緊張の前後が光り、悲愴感漂う。アイは珍しい替「大藤内」、祐一、赤上頭掛も乱れる小立烏帽子は左に傾き、白小袖着付の黄地蝶文縫箔は右肩脱げて女帝もしどけなく、太刀のつもりの尺八の袋を抱え「助けて下され」を連呼、一ノ松勾欄にしがみ付く。来かかる狩場ノ者・靖浩、祐経惨死の場を逃れ来た者と知ってなぶれば、転けつまろびつの大藤内、親子共演に力が入る。

後場はシテ五郎の目覚ましい奮戦、敵方の古屋五郎飛能を斬れば組落シに仆れて切戸へ消える古屋、物着に唐織を脱ぎ裳着胴になるが、なぜ掛直垂の侭でなくそれも「巴」と同じ唐織にしてきたのか不審。キリは、鮮やかな宙返りをみせる被衣を脱いだ五郎丸淳司との組み討ちから、押し返され引っ立てられてゆくまで、きびきびした展開。若手とベテラン、世代間の調和もよくとれた緊張の舞台。（1時間・1月26日・宝生会）

「弱法師」　シテ三津子、黒頭・檜浅黄・焦茶地流水ニ貝文縫箔着付・濃萌黄水衣。〽九曜の、と三ノ松から運ビ、〽石の鳥居、は舞台に入り杖を右に柱探り当て、左手で触る。シテ・ワキ問答から花の香を笛柱の方に聞き、施行は慎ましやかに受ける。四天王寺の縁起をいうクリ・サシ・クセは下居も神妙に、上ゲ端あと〽五濁の、と杖探り立つと幕の方に面伏せ鐘の音を聞き常座へ行くところ、吾子と気付き立って日想観を勧めるワキ通俊・雅介。問答・掛合は利発なシテに合わせる趣のワキの洒味である。盲目前は見馴れた景、〽永夜の清宵、と昂ぶる気持ち謡に現われ拍子一ツ〽何のなす所ぞや、とイロエは遥遥の心。〽見るぞとよ、の返シ句に拍子強く踏みユウケンに晴れやかな心を見せるが〽盲目の悲しさ、目付柱へ進み〽貴賤の人に、突き当たる心は拍子一ツたらたらと退り膝つくと直ぐ立つのは羞恥心。〽げにも真の弱法師、の数拍子は己れを責める地団太か、〽恥かしやな、と袖で面を隠すも盲目には益の無いところ、心根が哀れ。三津子心象を入念にみせる。（55分）

「采女・美奈保ノ松」　シテ邦久、面若女・檜白二・金観世水文白摺箔着付・白地桧扇文唐織、幽かに左に傾げて見える面に憂愁の翳がみえ装束も淋しい。ワキ旅僧・元を猿沢池に誘わんとするところ、〽女人ゆかりの、と一ノ松勾欄下、古を回想する様に眺め、跡を「御覧ぜらるれば」とワキを見込むのは是が非でも其処へ、の強い意志。采女入水に至る故事をしんみりと、中入は〽池水に入りにけり、の返シ句に常座で沈み下居、面伏せたまま地一杯を聞いて送り笛に立ち幕へ行く。

後シテは白地被衣で一ノ松、下居に〽騒がしくとも、で被衣脱ぎ〽池の蓮、と立つ。着付を銀観世水文の白摺箔に替え、浅黄大口・浅黄長絹は水霊の面影。舞台に入り、変成男子と成仏したのも心強いこと、とワキに下居合掌感謝し、小書で〽さるにても忘れめや、となる。〽山郭公、は鳴く音の方へ右に薄く視線を遣り、〽月に嗜け、と序ノ舞になる。舞の中、二ノ松勾欄に寄り右袖抱き締めるように胸に当て、深々下を見続けるところ（写真）愁思も一入。舞上げては猿沢の池の情景、〽雨は窓ようを打つなり、と頭上扇翳シ唯一拍子踏む。トメは一ノ松、〽（采女の）戯れと思すなよ、とワキを見込み〽讃仏乗、と指シ〽因縁、と詰メ、〽よく弔はせ給へやとて、と小廻り、〽また波に、と数足退り扇で面を隠し膝つき沈み、〽入りにけり、の返シ句に立つ。先の吉之丞演出とは微妙な相異も面白く、邦久も亦繊細。（1時間33分）

「飛越」　茶の湯不案内の何某・友彦に頼まれ同道するシテ新発意・融運動神経鈍く途中の小川を飛越えられない。挙句、何某の「運れ飛び」の言葉に乗るが（写真）、落ちて嘲笑されれば腹癒せに何某の過去の醜態蒸し返し、取っ組み合いとなり突き倒される。見るからに敏捷そうな融に無細工な様をさせるのがミソだが、茶の要諦は湯の湧く過程、「きうきうと申して蚯蚓の鳴く様に湯が滾ります」などのところが余程面白い。（23分・2月8日・青陽会）

「弱法師・世阿弥本による」　本曲は当地五年前、シテ文蔵の上演がある。今回はシテ俊徳丸・清和、ツレ妻・芳宏、ワキ四天王寺住僧・茂十郎、ワキツレ従僧・和幸・知登、アイ能力・小三郎、アイ通俊・又三郎。

住僧、名宣から彼岸の施行を言い、能力に触レさせるが、しんがりに出た通俊はこれ以前に一ノ松で何やら様子窺い後座を通り一旦切戸へ。ついでシテ俊徳丸（苦渋の面弱法師・細かく縒った分ヶ髪・檜浅黄・黒地小格子蒲公英文縫箔着付・黄樓水衣・杖）がツレ妻（面万媚？檜赤浅黄・白摺箔着付・無紅敷石文縫箔腰巻・濃緑樓水衣・左手羯鼓）と現われ、憂き世の闇に迷い光明を仏法始元の四天王寺に求めるところ、常はシテの独吟が哀しみ共有するツレとの連吟に夫婦愛の美しさ。〽石の鳥居、は後ろ手に杖を柱に当て、向き直り杖を握る袖の手で撫でさするよう沁々触る。弱法師に拘（かか）わる住僧との問答から、花の香にシテ・ツレ連吟で強調するのは難波の春の花の風情。初同（邦久・邦弘ら）〽受くる施行の色々、とシテとツレは能力からも施しを受け（写真）、〽花の春の長閑けさ、をシテは常座床几に掛かり満喫、釈迦入滅あと太子の偉業を言うクリ・サシから四天王寺縁起を言うクセ冒頭〽金堂の御本尊は、と杖一ツ突き左手指スところ、心眼に見る力強さ。〽（末世相応の）御誓ひ、〽然れば当寺の仏閣の、〽御遺りの品々も、とそれぞれに羯鼓を囃すツレの心は、伽藍の成り立ちの立派を賛美する。上ゲ端あと地の裡にアイ通俊再び幕で出ると一ノ松。〽（五濁の人間を）導きて、と床几立つシテは杖を棹に持ち、〽済度の船をも寄するなる、と二・三歩出、〽寺の鐘の声、を右ウケ面伏せ聞けば、同様に一ノ松の通俊も聞き、そこで俊徳丸に気付きハッと退り動揺をみせる。クセ留、シテは杖を置き下居、ツレが後座にクツログと能力は日想観の時節「御拝み候へ」と触レて切戸に退き、ツレは立ってシテに日想観を勧める。杖拾って立つシテは大小前でシテ柱に向き下居、西門を巡るシテ・ツレの問答になる。

文蔵演出はクセのあとシテに気付く通俊とワキの問答があり、施行の功徳は後刻に、今は日想観を拝むのを勧めるワキに、能力も触レではなくワキに重ねて慫慂する、という風で話の流れが一寸淀むと思うが、清和演出は円滑。

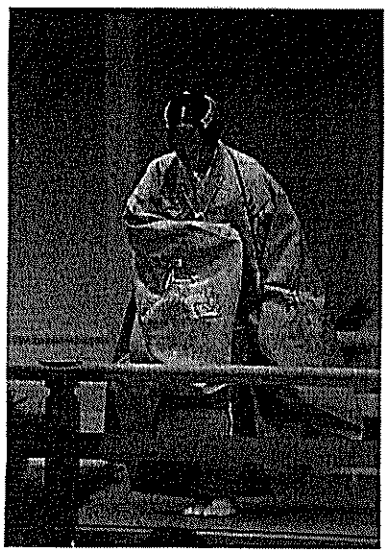
すでに一ノ松から後座に来て居た通俊は、シテの〽西門に出づる、に掛け笛横から出て地前に下居する。〽入日の影も舞ふとかや、の連吟にシテとツレは行き違い、常座へ来たシテは杖で舞う所謂盲目ノ舞か。舞上げた晴れやかな心には盲目になる以前の展望、〽満目青山は心にあり、と扇胸に当て、〽見るぞとよ、と杖捨てユウケン扇に踏む拍子は闇からの解放感に溢れる。杖を拾うツレ、シテは南に夕月を見て月ノ扇、東はツマミ扇翳シ脇柱へ草香山を眺め、〽北は何処、と笛柱の方へ小廻リに低く指シ廻スが盲目の悲しさ、つんのめり人に突き当る心に拍子踏み退ると安座。ツレから杖を渡されてこれが〽弱法師、と立つと自虐の心か、激しく杖突いて出、〽思へば恥かし、と退ってもう狂いますまいと正座、杖音させて置くと双シオリも切ない。ここでワキ前に出る通俊、シテに向き〽今は早、とシテに名を尋ねるが、常は地の受持ちが全てアイ通俊に替る。キリは、〽こは夢、と思わず腰浮かす心に居立って驚きを打合にみせるシテ、恥かしと袖で面を隠し逃げるところ、通俊が追って止めるなどあってシテはツレの肩に手を掛け幕へ、通俊が右ウケでユウケン扇に留拍子踏む。

アイ通俊のうろちょろする様な気配が何となく気になり、シテとの掛合からアイのトメも異色、珍奇に思うが、住僧をワキツレ、通俊をワキとし、幕を出るワキが狂ヒでシテと突き当り、親子対面からワキのトメ、もあるのでは。（1時間14分）

「羽衣」　夫祐一の連歌狂いに生計も侭ならず離縁申し出る妻友彦。貧を憎み別れた妻に構わず学に精励し官を得た唐の朱買臣の故事を語って引き留める夫の弁舌が、面子に関わるとあって力が入る。拒む妻は暇のしるしを要求するが家財何も無く、箕一つを被き家を出る。その後ろ姿にさえ興を催す夫は正に連歌狂いの業、「みかづきの出づるも惜しき名残哉」と詠めば、脇句を付けるがこの道の習いと知る妻が「秋の形見に暮れてゆく空」と付ければ、夫は狂喜、目出度く元の鞘に収まる愛の在り様。脂の乗った両者、俳味の趣。（26分）

「羽衣・和合ノ舞」　シテ芳伸。一ノ松勾欄に白地長絹を掛ける。ワキ白龍・勝久のみ腰裳を着けワキツレ元・正樹は着流シの侭。宝生の「盤渉」と同じ省略があり、呼掛で出たシテは〽今はさながら天人も羽無き鳥の如くにて、の嘆き。面増・鳳凰立天冠・檜白二下リ藤文白摺箔着付・赤地縫箔腰巻の姿、〽千鳥鴎の、と運び、〽空に吹くまで、と常座。〽懐かしや、とシオル。物着に白地長絹は下リ藤ニ蝶文。序ノ舞の終段で正中先、拍子二ツ踏み大きく扇ハネて右手に替え破ノ舞の位になるところ、いかにも暢達、扇翳シ二度大きく廻り左袖返シ解くと〽東遊。扇左に取り〽国土にこれを（写真）、と宝を施し、時移って三鼓の流シで二ノ松へ。〽浦風に、ハネ扇の晴れやかは更に一ノ松へ浮遊の心。〽三保の松原、を翳シて右前方へ眺め、〽幽かになりて、と左袖被キ地を残し幕へ入りワキの留。芳伸の清純な印象は、先の宝生の雅の可憐と好対照。（1時間3分・2月9日・観世会）

「弱法師」瀬戸三津子
（杉浦賢次氏撮影）



「采　女」梅田邦久
（杉浦賢次氏撮影）

「飛越」佐藤融・佐藤友彦
（杉浦賢次氏撮影）

名古屋観世会「弱法師」
（左から）観世清和・観世芳宏・野村小三郎　（杉浦賢次氏撮影）

「羽　衣」観世芳伸
（杉浦賢次氏撮影）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　1100円
郵送の場合　１年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成15年４月～５月）

◆ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前７時15分～８時）

４月20日	「楊貴妃」（金春流）	桜間真理ほか
４月27日	（再放送）「羽衣」（観世流）	山本順之ほか
５月４日	「田村」（観世流）	角寛次郎ほか
５月11日	「東北」（宝生流）	髙橋　章ほか
５月18日	「小袖曽我」（観世流）	大西智久ほか
５月25日	「山姥」（再）（喜多流）	髙林白牛口二ほか

名古屋能楽堂定例公演
平成15年度演能日程

名古屋能楽堂定例公演は、市民にひろく能楽鑑賞の機会をもってもらおうと能楽協会名古屋支部の積極的な協力により、平成九年十月から定例化して開催されており、ことし七年目を迎える。

ことし平成十五年度の公演日程、演能は次のとおり。

〔五月公演〕五月十六日(金)　午後六時三十分始
能「隅田川」長田驍（喜多流）
狂言「膏薬煉」佐藤融（和泉流）
一般三五〇〇円、学生二〇〇〇円（当日各五〇〇円高）※以下、六・九・十一・二・三月公演の料金は同じ

〔六月公演〕六月二十日(金)　午後六時三十分始
能「松風・見留」梅若六郎（観世流）
狂言「瓜盜人」野村小三郎（和泉流）

〔七月公演〕市民能楽セミナー　七月十八日(金)　午後六時三十分始
能「鉄輪」衣斐正宜（宝生流）
狂言「雷」井上靖浩（和泉流）
一般二五〇〇円、学生一五〇〇円（当日各五〇〇円高）

〔九月公演〕九月十九日(金)　午後六時三十分始
能「花筐・筐之伝」武田邦弘（観世流）
狂言「蚊相撲」大野弘之（和泉流）

〔十一月公演〕十一月二十九日(土)　午後二時始
能「三輪・白式神神楽」梅田邦久（観世流）
狂言「千鳥」佐藤友彦（和泉流）

〔平成十六年一月・正月特別公演〕
一月三日(土)　午後二時始
能「翁」泉嘉夫（観世流）
能「養老・水波之伝」久田勘鬼（観世流）
狂言「三人長者」野村又三郎（和泉流）
一般四五〇〇円、学生二五〇〇円（当日各五〇〇円高）

〔二月公演〕二月十四日(土)　午後二時始
能「鞍馬天狗」古橋正邦（観世流）
狂言「鶯」井上祐一（和泉流）

〔三月公演〕狂言づくし
三月十九日(金)午後六時三十分始
狂言「悪太郎」松田高義（和泉流）
狂言「節分」善竹十郎（大蔵流）
狂言「弓矢太郎」佐藤友彦（和泉流）

※市民能楽セミナーは、解説と実演により、わかりやすく能・狂言を紹介する。

問い合わせは、名古屋能楽堂（電話052・231・0088、FAX052・231・8756）

友枝昭世氏が芸術院賞受賞

日本芸術院（犬丸直院長）はこのたび芸術活動で顕著な業績があった人に贈る日本芸術院賞の今年度の受賞者を発表、能楽界では、喜多流、友枝昭世氏(㊐)が能楽界の発展に尽くした業績が顕彰された。授賞式は六月二日に東京・上野の芸術院会館で行われる。

新金剛能楽堂が落成
6月21・22日　記念祝賀能

京都　財団法人金剛能楽堂財団では、新しい能楽堂を京都御所の西向い建設中であるが、いよいよきたる六月に開館の運びになった。

新金剛能楽堂の落成にあたり、金剛能楽堂財団の主催により六月二十一日(土)、二十二日(日)の二日間「落成記念祝賀能」が催される。

初日は、能「鶴亀」（広田陸一）、半能「石橋」（金剛永謹）、二日目は能「泰山府君（前シテ今井清隆、後シテ松野恭慈）半能「石橋」（豊嶋三千春）ほか舞囃子、狂言など。（詳細次号）

祝賀能は全席指定、問い合わせは金剛宗家事務所（TEL075・712・7190）。

久田三津子師
能「道成寺」上演
6月22日　淡交会別会

名古屋淡交会（橋岡慈観師主宰）では、来る六月二十二日(日)名古屋能楽堂で三交会と共催の別会能で、久田三津子師による能「道成寺」を上演する。（番組②面）

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆
（TEL 052－231－0088）

［４月］
29日(火)　中日能　（有料）

［５月］
３日(土)　豊水会春季大会　（無料）
４日(日)　久田観正会春の大会　（番組①面）（無料）
５日(祝)　翠謡会　（番組①面）（無料）
16日(金)　名古屋能楽堂定例公演　（番組①面）（有料）
17日(土)　名古屋観世九皐会　（番組②面）（有料）
18日(日)　第46回やるまい会　（番組②面）（有料）
24日(土)　たまも会　（無料）
25日(日)　名古屋観御会大会　（番組②面）（無料）

◆熱田神宮能楽殿◆
（TEL 052－682－1751）

［４月］
20日(日)　幸謡会　（無料）
26日(土)　幸友会　（無料）
29日(祝)　鳳の会第33回公演　（有料）

［５月］
11日(日)　下田雄諷会中部地区連合大会　（無料）

◆豊田市能楽堂◆
（TEL 0565－35－8200）

［５月］
31日(土)　豊田市能楽堂５月定例公演　（有料）

熱田神宮能楽殿演能
幸友会

四月二十六日(土)十時始
熱田神宮能楽殿

一調一声　小督　藤井完治　松久素子
一調　笠之段　藤井徳三　上野智永
舞囃子、囃子二十数番、連調など

［御来場歓迎］　主宰　幸友会　福井社中
問い合わせ　名古屋市中区大須三－二－四〇　電話052・241・3146

第33回　鳳の会公演

四月二十九日(火・祝)一時半開演
熱田神宮能楽殿

狂言「引敷聟」（聟・佐藤融、舅・佐藤友彦、教え手・鷲見政行、太郎冠者・鹿島俊裕）
狂言「腹不立」（僧・井上祐一、施主・井上靖浩、施主・今枝靖雄）
狂言「千鳥」（太郎冠者・佐藤友彦、酒屋・井上裕一、主人・大野弘之）

終演後、お客の狂言に関する疑問・質問に演者が答える〝演者と語ろうQ&A〟の催しが企画されている。

入場料（全席指定）A席五千円、B席三千五百円、学生二千円、会員A席四千円、会員B席二千五百円。チケット取り扱い＝チケットぴあ（TEL052・320・9999）

名古屋能楽堂演能
久田観正会春の大会

五月四日(日)午前十時半開演
名古屋能楽堂

番組

連吟　雨之段
素謡　定家
仕舞　経正　鞍馬天狗　船弁慶
仕舞　松風　羽衣　鼓之段　山姥
素謡　遊行柳
舞囃子　松風
素謡　善知鳥
素謡　鉢木
舞囃子　熊野

連吟　雨之段　井沢雅夫　肥田精一　山田和子
素謡　家　前川千鶴子　前川幸子
仕舞　経正　鞍馬天狗　船弁慶　伊藤晏義　仲山晶子　金井美晴
仕舞　松風　羽衣　鼓之段　山姥　近藤登古代　須賀玲子　村井すみ子　斎藤利子　平田三雄　田中雅子　坪井美記江
素謡　遊行柳　加藤久枝　丸山敏子
舞囃子　松風　橋本桂　河村眞之介　久田舜一郎　鹿取希世
素謡　善知鳥　大久保由実　河村眞之介　久田舜一郎　鹿取希世
素謡　鉢木　仲村渡辺スミ　清彦　水藤喜二郎
舞囃子　熊野　神谷功　河村眞之介　久田舜一郎　鹿取希世

翠謡会大会

五月五日(祝)午後一時始
名古屋能楽堂

［入場無料］

番外仕舞　熊坂　久田勘鬼
附祝言　砧　後　石黒直子　河村眞之介　久田舜一郎　鬼頭好信　鹿取希世
（終了予定四時頃）

名古屋市名東区一社三－一六二
主催　久田観正会
TEL　〇五二－七〇五－一五八五

番組

素謡　社若　東北筒井猩々　木村秀子　鈴村満枝　松井澄子　吉田勤也　澤田美智子
素謡　忠度　道明寺遊行柳藤戸　中者輝治　神戸秀　日野大願　松井澄子　澤田美智子
素謡　弱法師　笹之段　屋島　邯鄲　田中幸　渡辺錠一　栗田あき子　中者輝治　神戸秀
素謡　藤戸　草子洗小町　敦盛　羽衣　砂　渡辺錠一　日野大願　中者輝治　木村秀子　笠後藤嘉津幸　鉱一　大野誠　太田一栄　服部裕子　後藤嘉津幸　鉱一　大野誠　後藤嘉津幸　鉱一　鬼頭好信　後藤嘉津幸　大野誠
舞囃子　草子洗小町　連吟　高砂　キリ　全員

主催　翠謡会
名古屋市名東区社台三丁目
電話（〇五二）七七七－八七七七

［御来場歓迎］　生駒里翠
後援　中日文化センター
教室　名古屋（栄）・岐阜・四日市

名古屋能楽堂定例公演

五月十六日(金)午後六時三十分始
名古屋能楽堂

番組

狂言（和泉流）　膏薬煉　都方　佐藤融　鷲倉方　佐藤友彦　梅若丸　園田安耶弥　長田驍　飯富雅介　橋本宰　後見　今枝靖雄
能（喜多流）　隅田川　後見　金子匡一　長田郁　地謡　笠後藤孝一郎　鉱一　鹿取希世　伊藤英毅　内田成信　和谷衛市　梅津忠弘　森田克彦　狩野琇鵬　松井俊介　松井彬

［入場料］前売一般三千五百円、学生二千円（当日一般四千円、学生二千五百円）
取扱所　名古屋能楽堂（052・231・0088）
チケットぴあ（052・320・9999）
市内プレイガイド

（午後八時三十分終了予定）
主催　能楽普及事業実行委員会
（名古屋市・(財)名古屋城振興協会・名古屋市文化振興事業団）
協賛　能楽協会名古屋支部

名古屋観世九皐会能

五月十七日(土)午後一時始
名古屋能楽堂

番組

能　大原御幸
法皇　観世喜正
阿波内侍　中所宜夫
大納言局　佐久間二郎
高橋廉一
高安勝久　飯冨雅介
杉江元　橋本宰
祖元正樹
間　今枝靖雄
後見　小林喜久　河村総一郎
観世喜之　地謡　鞆原冨司忠　鹿取希世
外山圭一　坂真太郎　小島英明　奥川恒治　加藤保彦　駒瀬直也　五木田三郎　中森貫太

狂言　子盗人
井上祐一　井上靖浩　佐藤友彦　後見　鹿島俊祐

仕舞　玄象　加藤保彦
通盛　中森貫太
玉之段　駒瀬直也　地謡　坂真太郎　佐久間二郎　奥川恒治　小島英明

能　土蜘蛛
頼光　五木田三郎
トモ　外山圭一
胡蝶　小林喜久
観世喜之　飯冨雅介
橋本宰　祖元正樹
間　佐藤融
観世九皐会
名古屋市南区元塩町一一一一七
加藤保彦方
☎052・611・3659

附祝言

〔当日券〕自由席五千円
学生券二千円
チケット問い合わせ
名古屋能楽堂
☎052・231・8064

岡崎城二の丸清謡会薪能（第18回）
舞と能の夕べ

日時　平成十五年五月二十四日(土)
会員発表会…午後二時半始
薪能…午後六時頃始
会場　岡崎城二の丸能楽堂
電話家康館　〇五六四・二四・二二〇四

番組

〔会員発表〕

連吟　國栖　織田敏男　福島武憲　金原孝典　山口耕造　鷲見幸一　伊藤孝治
仕舞　楊貴妃　林佳頌子
采女　岩田加代子
笹之段　今川米子
阿漕　小林美和子

連吟　東北　岡田弘子　鈴木明雄
仕舞　邯鄲　山口耕造
江口　磯部三枝子
須磨源氏　織田敏男
鵜之段　金井邦夫

（三時頃）

舞囃子　菊慈童　鬼頭みゆき
二人静　河村総一郎　手嶋なみ江　後藤孝一郎　鬼頭好信
半部　河村総一郎　不破峰子　後藤孝一郎　大野誠
善知鳥　河村総一郎　金原孝典　後藤孝一郎　大野誠
素謡　藤戸　後藤孝一郎　榊山きよ子　後藤孝一郎　大野誠　金井邦夫　鬼頭みゆき

〔薪能〕

火入れ　（六時頃）
舞囃子　養老　河村総一郎　梅田邦久　水波之伝　後藤孝一郎　鬼頭好信　大野誠
仕舞　西行桜　泉嘉夫

（六時半頃）

能　熊野　ツレ　八神孝充　シテ　清沢一政　飯冨雅介　橋本宰
後見　今沢美和　泉嘉夫　地謡　河村総一郎　後藤孝一郎　大野誠　山口耕造　鷲見幸一　高橋廉一　古橋正邦　梅田邦久　本田勲　須部甫　祖父江修一

附祝言

※入場無料。ご来場歓迎
※雨天にても実施します
※会員の部も薪能も自由にごらん下さい。

主催　清沢一政会
（観世流謡曲・仕舞教室）
清沢謡会
☎〇五六四・五二・六九〇九
補佐　梅田邦久

第46回　やるまい会　名古屋公演

五月十八日(日)午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

番組

見物左衛門　深草祭
見物左衛門　野村万作　後見　高野和憲

箕被　男　野村又三郎　妻　野村小三郎　後見　松田高義

呼声　太郎冠者　善竹忠一郎　主　善竹隆司　次郎冠者　善竹隆平　後見　上吉川徹

仁王　替之型　博奕打　野村小三郎　博奕打　松田高義　在所ノ者　奥津健太郎　在所ノ者　野口隆行　在所ノ者　井上靖浩　在所ノ者　佐藤融　在所ノ者　高野和憲　在所ノ者　野村又三郎　後見　藤波徹　後見　伴野俊彦

入場料　A席　前売六五〇〇円（正面指定席）
（当日七五〇〇円）
B席　前売五〇〇〇円
（当日六〇〇〇円）
（正面上手・中正面・脇正面後方指定席）
申込み　野村事務所　☎052・350・7971
FAX052・350・7972
チケットぴあ　☎052・320・9999

下田雄諷会　中部地区連合大会

5月11日　熱田能楽殿

下田雄諷会(下田雄三師主宰)では五月十一日(日)熱田神宮能楽殿で中部地区連合大会を開催する。名古屋和諷会、一宮・竹石会、岐阜・花諷会、下呂・雄諷会、倭文之屋社中の出演で、素謡「班女」「葵上」舞囃子「胡蝶」「雲雀山」「葛城」「梅枝」「唐船」「蝉丸」「采女」「巻絹」「柏崎」「小塩」ほか連吟、仕舞など、来場歓迎。

能「安宅」上演
片山清司後援会能

京都　第六回片山清司後援会能は五月十七日(土)京都観世会館で催される。午後一時開演、能組は次のとり。

能「百萬・法楽之舞」シテ片山九郎右衛門、子方青木沙菜子、ワキ宝生閑、間・野村万斎

狂言「文蔵」シテ野村万斎、アド野村万之介

能「安宅・勧進帳・瀧流」シテ片山清司、子方観世淳夫、ワキ宝生欣哉

なお片山清司後援会では、正会員、特別会員、法人会員の申込みを受付けている。

後援会年会費は、特別会員二万五千円、正会員一万二千円、法人会員五万円。

特別会員①片山清司後援会能に招待（正面指定席）②秋の催し招待（過去五回、醍醐寺の国宝三宝院、金堂、泉涌寺の舎利殿での演能）③会報の送付、年四回発行④各種公演（片山定期能、京都観世会例会など）入場券を割引価格で求められる。

正会員　①片山清司後援会能に招待②秋の催しの優待③会報送付④各種公演の入場券の割引

法人会員①後援会能に三名招待（指定席）②秋の催し優待③会報の送付④各種公演の招待、入場券の割引。

後援会事務局＝京都市東山区新門前通大和大路東入、電話075・532・2840

午前九時半始、午後五時頃終演予定。

名古屋観衛会大会

五月二十五日(日)午前十一時始
名古屋能楽堂

番外仕舞　白楽天　山本博通　鵜　山本章弘
仕舞　桜川　桑原紀子
仕舞　雲雀山　榊原和美　玉鬘　富永芳栄　春日竜神　秦野淳代

舞囃子　冨士太鼓　杉野伸江　後藤孝一郎　鉱一　鹿取希世
井筒　稲葉正信　後藤孝一郎　鉱一　鹿取希世
仕舞　六浦　可児島敬子
草子洗小町　湯浅知子
花月　竹内美紀子

素謡　定家　神野勝之助　河村信重

舞囃子　西王母　駒形賀津子　後藤孝一郎　鉱一　中田弘美　藤田六郎兵衛（一時頃）
小塩　青柳イツエ　福井啓次郎　鉱一　中田弘美　鹿取希世
善知鳥　脇田喜美子　福井啓次郎　鉱一　中田弘美　鹿取希世
通小町　翁人　豊住雅子　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世
仕舞　山姥　奥村泰広

舞囃子　芭蕉　中川芳子　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
葛城　山中節子　鉱一　中田弘美　鹿取希世（三時頃）
大和舞
三輪　川久保彰礼　彩色　河村総一郎　福井啓次郎　中田弘美　藤田六郎兵衛
砧　足立奈々子　河村総一郎　福井啓次郎　中田弘美　藤田六郎兵衛
番外仕舞　雲林院　山本勝一　順之
阿漕　山本勝一

能　坂　伊藤健一郎　替之型　飯冨雅助　河村総一郎　榊原冨司忠　中田弘美　藤田六郎兵衛
問　野村小三郎

（終了予定五時過）

主催　名古屋観衛会
指導　山本勝一
共催　名古屋正花会
指導　山本博通

〔御来場歓迎〕

名古屋淡交会別会

六月二十二日(日)十二時半始
名古屋能楽堂

番組

一部　能　清経
上田公威　瀬戸勝治　恋之音取　後見　野口敦弘　山田義高　橋岡慈観　観世芳伸　地謡　河村総一郎　福井啓次郎　黒田孝博　松山幸親　加賀敏彦　藤田次郎　藤谷朝義　上野四郎　貴弘

二部　仕舞　菊慈童　久田勘吉郎
当麻　橋岡慈観　地謡　黒田義高　山田博　藤井完治　藤谷音彌

舞囃子　砧　後　久田勘鬼　河村真之介　久田舜一郎　地謡　黒田博　高橋廉一　上田貴弘　笠田昭雄　観世元伯　竹市学

仕舞　島女　観世芳伸　野村四郎　藤井完治
采女　地謡　高橋廉一　笠田昭雄　上田朝義　大介
善知鳥

（二時半頃）

能　道成寺　久田三津子　井藤鉄男　野口敦弘　吉田祐一　井上佐藤友彦　河村真之介　久田舜一郎　金春園和　藤田次郎
間　赤頭
後見　上田公威　橋岡慈観　久田勘鬼　地謡　八神孝充　松山幸親　加賀敏彦　高橋廉一　山田義高　芳伸　藤井完治　上田貴弘
鐘後見　野村四郎　上野朝義　上田大介　藤谷音彌　笠田昭雄

（終了予定四時頃）

※二部入場料（全自由席）一〇、〇〇〇円
当日券　一二、〇〇〇円
学生券　五、〇〇〇円
※入場券のお申し込み及びお問い合わせは
久田事務所TEL&FAX　〇五二―七〇五―一五八五

主催　名古屋淡交会
橋岡慈観
三交会
久田三津子

戦後名古屋能楽史 ㊷

〔第十一章〕

昭和三十二年（一九五七）

竹尾　邦太郎

（承前）

さて渡欧能楽団はパリのサラベルナール劇場での四日間の公演を終えると、フランス東部、ブルゴーニュ地方の中心都市ディジョンで行われている「ブルゴーニュの夜」という演劇祭に出演を依頼され、急遽七月一日の夜、「葵上」喜多実、「棒しばり」野村万之丞、「石橋」山本博之・観世喜之、の番組で参加したという。その後、団員はローマ、ロンドン、ロスなど各地へ散り、七月十日前後には全員が帰国する。この時期は恰も装束納から装束始までの端境期、故国を後に涼しい欧州へ出掛ける好機でもあろう。冷房設備も未だ普及途上のこの時代、七・八月の盛夏は歌仙会やゆかた会などと称する社中会や非公開の練成会で囃子や素謡、仕舞の稽古が専らであった。七月二十日、九皐会が夏季別会に素謡と袴能の会を催すが、八日夜半に欧州から帰国したばかりの催主観世喜之が名古屋に元気な姿をみせる。番組は素謡三番「清経」増田一雄「通小町」梅若万三郎「砧」梅若六郎、能「斑女・笹ノ伝」観世喜之、狂言「伯養」井上松次郎、仕舞二番「忠度」梅若万三郎「玉ノ段」梅若六郎、能「鵜飼」観世銕之丞、の豪華版である。月末三十一日、東西から来演する能役者が利用する名鉄電車のターミナル名鉄ビルが全館完成（施工・竹中工務店）。

盛夏はまた甲子園を例にとるまでもなく野球の季節、装束始までには間もあろうか、八月八日付中部日本新聞のコラム「その人」に次の記事がある。

若い能楽師のつどい青陽会の田鍋惣一郎氏は、こんど同会のメンバーで野球チームを編成した。ヒノキ舞台を炎天下のグラウンドにかえて目下熱田神宮で猛訓練を続けている。コーチは田鍋惣太郎、藤田六郎兵衛、高安滋郎氏らで、球さばきよりもっぱら手さばき足さばきに重点を置いてコーチしている。ピッチャーは観世流シテの加賀敏彦、狂言の市橋良治氏ら。監督格の惣一郎氏は「シテ、ワキ、ハヤシ方など各ポジションのチームワークで舞台によし悪しの出る能楽は、野球と相通ずる点がありますよ」と大はりきりだが、早くも日本舞踊の西川鯉三郎チームに挑戦、近く森林公園で第一回戦を行う。

八月十一日、オリエンタル中村百貨店（現名古屋三越）主催で西陣の作家若松華瑤の一九五七年度新作品完成記念能楽会が招待制で行われる。番組は舞囃子「山姥」若松華瑤、能「三井寺」梅若六郎、狂言「鏡男」井上松次郎、能「融・窕」観世喜之。十五日の終戦記念日には先の渡欧能楽団の帰朝報告公演が十三日・東京観世会館、十四日・大阪朝日会館に次いで熱田神宮能楽殿である。「隅田川」喜多実、「棒しばり」野村万之丞、「船弁慶」マエ山本博之・アト観世喜之、とパリで上演したままを見せ、翌十六日付中部日本新聞市民版は「時間の切りつめ成功」の見出しで同行した丸岡明の評を載せる。

パリの劇場ではお客さんがどんな反応を見せるか、舞台より客席の方ばかり心配して演技まで思い及ばなかったが、今こうしてゆっくりと見ると好い点、悪い点が少なくない。「隅田川」は十五分、「船弁慶」は四十分短縮してあるが、日本国内でも将来の演能は観客本位に考えてこれくらい略してもよいと思う。「隅田川」では喜多実の謡は明快でよかったが、狂いのところは喜多流本来の筋通り亡霊の子役が出た方が外人には解り易かったと思われる。渡欧人数の節約から省いたそうだが研究すべきであろう。またシテが隅田川へ着いた後のふりわけの型も面を使った表現の方法がよくはないか。「船弁慶」はこれも変則で子方に山本勝一が出たが、この方が外人には解りよかったと思う。静御前（山本博之）より義経が飛びぬけて小さくては説明がつけにくい。日本で演能するときも能を発展させるために将来の研究課題とすべき事である。全体に時間の切りつめは成功しているが「船弁慶」の間狂言は中途半端の感が強く、無しにするか演出の仕方に一考あるべきだ。

また、『狂言』紙第八号では編集同人・歌村彦四郎が「ひとりごと」と題して次のように言う。「本年のパリ能に、狂言が参加したことは、誠にさうあるべきことであります。だいたい、能の番組に、狂言がないのは、刺身につまを忘れたようなものであります。その上、上演された結果は、狂言が一番人気があって、アンコールも一番長かったと云ふことです。初めて観た、外人達でさへこの有様であります、日本人も、もっと祖先の、このよい芸術を篤と見直してほしいものであります」と。

十八日、名古屋宝生会定式能の第二回は素謡「杜若」宝生公恵、仕舞三番「氷室」畑富次「雲林院」辰巳孝「天鼓」内藤泰二、能「枕慈童」鈴木右門、仕舞二番「生田敦盛」倉本雅「三山」宝生公恵、狂言「薩摩」佐藤卯三郎、能「通小町」宝生九郎。因に昭和五十年までの名古屋宝生会定式能は年三回（但し素謡会のある年にそれを回数に含め年四回とした年が四、含めず三回のままの年が二度ある）、基本的な番組立は素謡一・狂言一・能二（婦人能・記念能・別会は能三で定期の定式能の回数外）で、今回の番組には次年度、第一回宗家九郎・第二回宝生英雄・第三回野口禄久への希望曲目及び各回あと一人のシテとその希望曲目を公募、「できる限り御意に副いたいと存じます」と投票用紙を添付するサービスである。

さて八月二十三日、既述した田鍋惣一郎率いる青陽チームは西川鯉三郎チームと対戦、「真夏の太陽のもと中区エンゼル球場（現松坂屋本店東、エンゼルパーク）で田鍋惣太郎師の始球式で午後三時プレーボール、日ごろの手さばき足さばきを球さばきにかえて両軍妙プレー、珍プレーの熱戦を展開、結局鯉三郎家元、司津師をはじめお囃子界の長老住田長三郎師を中心に小光、いと子さんほか綺麗所を集めた西川チームの鉦や太鼓の応援も空しく若手の青陽チームに六対二と凱歌が上がり午後四時半終了した」と報じられる。名古屋に限らず当時は東京や京阪神も能楽人の野球熱は大変なもので、踊る阿呆に見る阿呆おなじ阿呆なら、とばかりプレーしなければ損々、プロ顔負けにユニホームまで新調して世間を驚かせ（?）流誌を賑わせたものである。

月が改まり九月一日、名古屋能楽会が主催する招待能は二部制。第一部は舞囃子「高砂」桜間龍馬、狂言「磁石」井上松次郎、能「班女」大槻秀夫。二部は舞囃子「鶴亀」本田秀男、狂言「雁大名」井上礼之助、能「弱法師」橋岡久太郎、である。四日は嬬子田鍋惣一郎に続きコラム「その人」に田鍋惣太郎が登場。

◆名古屋能楽界の元老で、幸清流小鼓方の田鍋惣太郎氏は昨年から今春にかけて舞台生活六十年を記念してお祝能・五流道成寺を催したが、こんど東京へ進出、十月五日本社と共催で水道橋能楽堂で舞台六十年記念能を開くことになった。そればかりでなく、わんや書店の勧めで『芸談　小鼓生活六十年』の題で氏の能楽生活を書いて出版もする。「私は舞台に立つ間は、いつも青年だよ」と語る七十三歳の田鍋氏は「これまでシテ方の書いた芸談はあったが、囃子方では初めてだ。能楽といえば舞台で舞うシテ方のみを考える者が多いので、シテ・ワキ・囃子・狂言・地謡の総合芸術であることを知らせるためにも是非ともよい資料を集めて出版したい」と張り切っている。

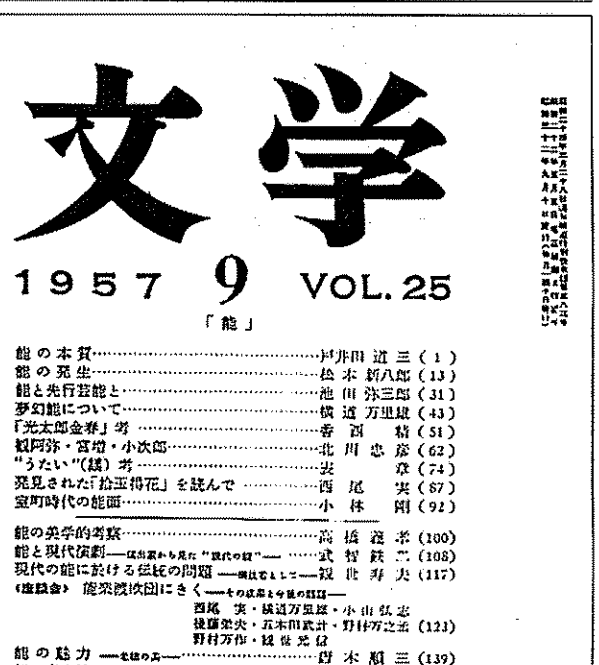
右に関連するが、更に『狂言』紙第八号では歌村彦四郎が田鍋氏の東京記念能につき以下のように書いている。「田鍋惣太郎氏は、実に偉い人であります。偉いと云ふ言葉は、つよい、すぐれてゐる、偉大である、と云ふことださうであります、能楽堂の建設に当っては、一部の不協力者の誹りをうけながし、兎に角、先頭に立って完成に導かれた事は、感激の外ありません。又昨春より今春に渉って、五流道成寺を演了せられ、いきもつがずに、今秋の東京に於ける、舞台六十年記念能の催しであります。老令、なほかくしゃくと云ふことは、この田鍋惣太郎師に、最も適切に当てはまることと思ひます。東京記念能の盛大に終了いたしますことを祈っております。

九月八日、観世会第四回は素謡会。連吟「半部」芥川秀子・飯田新子、仕舞三番「籠」久田秀雄「班女」加藤総兵衛「松虫」太田重次郎、素謡三番「雨月」林愿蔵「三井寺」林喜右衛門「安宅・勧進帳」藤井久雄、仕舞四番「巻絹」柴田初太郎「野宮」林喜右衛門「善知鳥」藤井久雄「鵜」武田小兵衛。

九月十日、岩波書店の月刊誌『文学』が前年の「狂言」に続き「能」の特集号（写真）を出す。『文学』には戦前戦中に「世阿弥研究」「世阿弥五百回忌記念」、戦後に「中世の芸能について」「伝統芸術」などの特集があり、また、昭和十一年から二十一年に亘って断続的に三十二回連載された「世阿弥能楽論研究」もあるが、能が総合的に取り上げられたのは初めてである。

九月十八日、喜多流の粟谷益二郎（一八九〇―一九五七）が染井能楽堂で「島頭」の演能中に急逝、地謡の後藤栄夫があとを舞い継いだという。名古屋での舞台は明治三十八年（十五歳）に「小袖曽我」のシテで初来演、大正年間に四度の来演があり、昭和二十六年の第十四回名匠鑑賞能で「松風・見留」のシテを勤めたのが最後になった。

――以下次号――



岩波書店の「文学」誌の〈能〉の特集号表紙

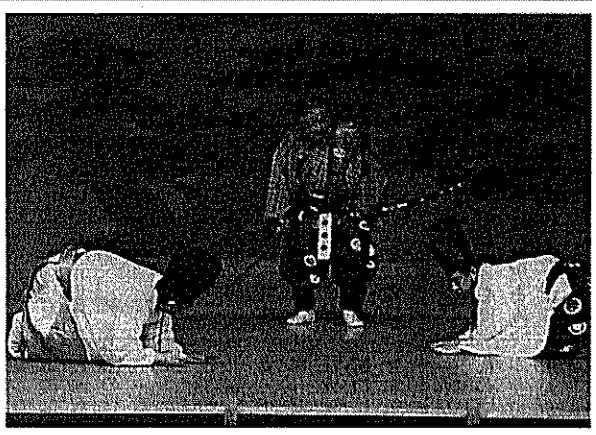
◆初春から仲春の舞台◆

「名古屋能楽堂定例公演」「九皐会」と「名古屋梅猶会定期能」「茂山狂言会名古屋公演」

竹尾邦太郎

「二人大名」大名シテ甲・融、大名アド乙・靖雄を語らい都へ上る途次、出遇う通行人・祐一を強引に同道させ、あまつさえ勝手な頼み事は承諾も得ぬ先に一礼。断られるや太刀に物を言わせる無体は、その太刀持たせた通行人が唯々諾々と従えば嘲笑するかの高笑い。ここに我慢も限界の通行人は掌中の太刀で逆襲、先ず脇差取り上げ（両人素直に柄の方を差し出す）、小袖袴を脱がせ、鶏の蹴合・起上り小法師の真似・犬の噛合をさせて翻弄する。好い恰好しいの大名甲と、「兎角そなたが要らぬ事を」と愚痴る大名乙の性格がよく出る。一矢報いる年長の常識人が痛快だが、老大名と若い通行人だと余程様子も変ってこよう。配役の大事。（27分）

「弱法師・盲目ノ舞」二月上・中旬八日のうちに観世流「弱法師」三番も珍しいが梅の香に誘われる旬の能、演出の相異がそれぞれに趣。シテ邦弘、黒頭・襟浅黄・紺黄段水草苦舟文縫箔・萌黄水衣、三ノ松に出、盲目の憂き身を静かに思い遣る述懐は、光を求めへ赫奕として、と運び出すと、石の鳥居、は舞台に入ってシテ柱に向き、杖を差し延ばして柱の根方に当てると左手で柱に触れる（写真）。シテとワキ通俊・雅介との問答に、へげにもこの身は盲目の、と突っ掛かる風を面白しとみるワキの悠揚は、施行受けるようシテに勧めれば、礼を述べる端から梅の香に気を取られるシテに、迎合するかに同調する辺りもシテの無邪気にワキの優しさ。左袖右手で拡げ、ワキとアイ友彦から施行を受けるシテは満ち足りた心、へ見る心地する梅が枝の香を笛柱の方に聞く春の長閑けさである。小書でクリ・サシ・クセを省き、日想観を右膝つきシテ柱へ合掌、西門のことでワキと掛合になり、地へ入日の影も、と一ノ松へ。へ永夜の清宵何のなす所ぞや、と拍子一ツ踏むと杖を突き静

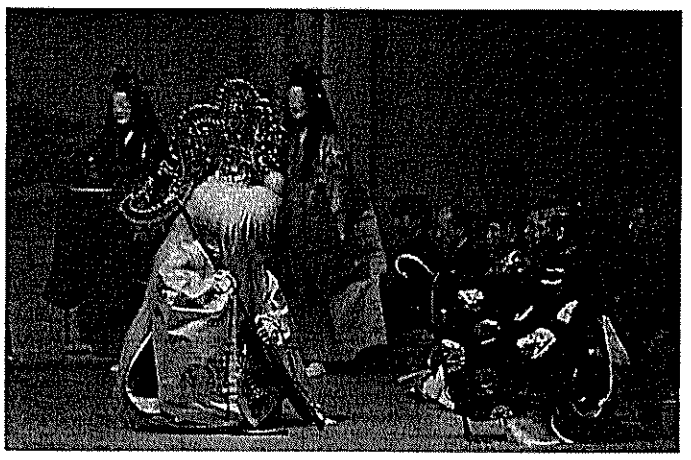

「二人大名」佐藤融・今枝靖雄
名古屋能楽堂定例公演　（杉浦賢次氏撮影）

（④面へつづく）

㊤「弱法師」武田邦弘、㊦「弱法師」武田邦弘、佐藤友彦
（杉浦賢次氏撮影）

（③面よりつづき）

かに舞台へ戻る。杖で舞ういわゆる盲目ノ舞は忘我浮遊の趣にみえ、盲（めしい）から解き放たれる錯覚の狂ヒに揺曳。小書でヘ難波なる、と一ノ松へ行き、ヘ長柄の橋の、と左手杖に添え勾欄をこすり、小廻りからヘ盲目の悲しさは、と杖忙しなく突き舞台へ戻り、ワキの前に立つアイに激しく突き当り（写真）退って安座。身の程を知らぬ軽挙は、ヘ思へば恥かしや、と左袖で面隠し、小さく廻りヘ（更に）狂はじ、と正中で膝をつくのも痛恨の思い。キリは、シテとワキ二人してヘ鐘の声、しんみり聞き、ヘ明けぬ先にと、左手指シて促すワキに、今は素直に橋懸を往くシテ、ワキはユウケンに拍子一ツ留めるところ、好い景だった。（1時間・2月15日・名古屋能楽堂定例公演）



名古屋観世九皐会「玉井」観世喜正・奥川恒治・古川充
（杉浦賢次氏撮影）

「玉井」 戦前に幼・少年期を送った誰もが衆知の神話の一「海幸山幸」の、当世風にいえば能バージョンである。

兄の釣針を尋ね海中に赴く弟ワキ雅介（彦火々出見尊、唐冠・白大口・袷狩衣）、シテ喜正（海神ノ息女豊玉姫、面増・襟白赤・唐織着流・側次）とツレ英明（同玉依姫、連面・襟赤・唐織着流・側次）に出遇い海宮に参向すれば、釣針探索を請け合う上に兄の怒りを解く干満二珠の提供をいう海神の言、更には豊玉姫と契り三年を過ごすことをクセに述べ、帰国の準備整う時日待つまでが前場。

肅とした音取置鼓（学・嘉津幸）の囃子に合わせ正中に出たワキの半開口は名宣の重々しさ、首途の決意は伴うワキツレ正樹・宰（従者）との道行の連吟も慎重。着詞から「これに」と門を見上げ、「門前に」と玉井を下に見るが、それが少々忙しくなくあからさまにみえるのも珍しさの発露、「事の由をも窺はばや」と思わせるに足り、導入部からワキが大いに活躍する。ワキとシテ・ツレ出遇いの問答・掛合はすらすら進み、井筒と桂立木をひいた後の海宮の場は居グセ。地謡後列（三郎・喜久ら）も今やすっかり世代交替となり頼もしい限り。クセ中、ヘまづ釣針を、とワキにアシラヒのまま上ゲ端となり、ヘなほ兄の怒りあらば、とゆっくり直ルところ、心に期する確信にシテ喜正の充実をみる。中入はヘ御心安く、とワキにアシラヒ、ヘ海中の乗物、と居立ち、ヘ大鰐に乗じ、と直りながら立つと常座へ行き、ヘその程は待たせ、とワキへ指シ込ヒラキ、背を向け地一杯へおはしませ、と橋懸へ、ツレも地前より立ち来序で入る。

アイ靖浩（イタラ貝ノ精）は末社頭巾・面賢徳・括袴・茶練水衣、彦火々出見尊と豊玉姫のこれまでの成行き立シャベリ、ヘ目出度かりける時とかや、と三段ノ舞はしゃぐ様に舞い上げるのも一興。

後場はそれぞれに干満二珠を捧げるツレ天女（緋大口・紫長絹・青珠の充、黄大口・赤長絹・白珠の恒治）、出端の出は連吟から地で舞台へ入り、次いで後シテ喜正（海神、面大悪尉・白頭・大輪冠・大龍戴・白地波涛文半切・白地火焔太鼓ニ飛雲文袷狩衣エモン・鹿背杖）威風に釣針を持って出ると舞台に入り、ヘ（天孫の御前に）奉る、と右膝つきワキに釣針を与える（写真）。一旦シテが一ノ松に退き床几に掛かると、祝賀は天女の相舞、よく揃って美しく、文字通りヘ何れも妙なる舞の袖。ヘ花の姿、と綺麗に袖被き、舞上げ地前に退くとシテは床几のままヘ海神の宮主、と数拍子強く踏み、徐に立つと杖突き舞台へ入り重々しい舞働。キリのヘ老龍の雲に蟠り、と正先へ合膝や、ヘ波を払ひ潮を蹴立て、と正先の乱足も面白く、両袖巻いて常座へ行き、ワキと珠盤を持つツレ二人を見送る悠然の態度も大きい。トメは右ウケ左袖返シ拍子二ツ、シテ、ワキツレ二人の順に幕へ入った。賑やかな舞台面も楽しいメルヘンチックな神話の世界、好舞台である。囃子は学・嘉津幸・眞之介・好信が力演、後見は喜之・真太郎。（1時間38分）

「鉢木」駒瀬直也
（杉浦賢次氏撮影）

「因幡堂」 無精の上に酒好きの妻・小三郎と縁を切り因幡薬師に申し妻をする男・又三郎、絵馬ニ注連縄文様の肩衣も心の現われ。鰐口は鳴らさず「南無薬師如来」と合掌祈願、御霊夢で西門に「つっくりと立たせられて御座る」新妻であったが、固めの杯になっても被衣は脱がず、杯を離さぬ飲みっぷり。いかにもすばしこい男の有頂天が、被衣引き剥すや呆然自失、仰天に変化する表情だが、そこにはや後の対応秘める色を窺わせ又三郎老練。

この狂言と後の仕舞のときだけ珍しく見所の照度を落とさなかった。本来こうあるべきだが没分暁漢が多過ぎる。（16分）

「鉢木」 シテ常世・直也、ワキ旅僧（後二最明寺）元、両者気品があり端正、はきはきした印象の爽やかな舞台。旅僧に暖とらせるため秘蔵の鉢木を伐るところ、片肌脱ぐ気負いをみせず、ヘ雪うち払ひ、と強く焙ぐのが秘める胸中の痛み吹っ切るように思われ、先ず梅はヘ今更新に、の感傷が切なく、クセヘ桜を見れば、と丹誠籠めた思いを辿り、つくづく眺めるとヤッと突くように伐るのも断腸の思いであろう。「よく寄りて当たり給へや」と指シて促し、ワキと問答に身上淡々と語るうち、昂る気持ちはヘさて合戦始まらば、と雄心勃々と起るところは、決意の程鮮やかにみせる。中入はヘ共に名残や、とワキとツレ妻・真太郎はシオルがシテは面伏せるだけなのもよい。

後シテは橋懸、ヘ先へは進まぬ、と馬を追い立てるところ、徒らに後退することなく舞台へ入り、ヘ乗り力なければ、と鞭を捨てる。ワキ最明寺に拝謁、「見忘れてあるか」にハッと面を上げ、威に打たれ退って平伏するのも極く自然。御教書を受け、ヘこれ見給へや人々、と左から右へ見せる（写真）喜びの、謹直な態度も爽やかだった。（1時間39分・2月16日・九皐会）

「清経・替ノ型」 夫の遺髪持参のワキ淡津三郎・勝久に対面、死は入水と知り恨み嘆くツレ妻・雅一、その泣き寝入りの夢枕に立つシテ清経ノ亡霊・吉之丞。遺髪を巡るシテとツレの怨みつらみの問答・掛合は、ツレの感情表現が平板なように思われる。敗色濃い戦に最期を遂げる迄をいうクセは、ヘまた船に取り乗りて、と乗込拍子から小書で橋懸へ抜け、型どころきびき美しく極め、ヘさるにても、と舞台へ戻って入水の心境、今生の名残をみせ、ヘこの世とても旅ぞかし、とツレを見込むところ、思いも募る。ヘ西に傾く月を、幕へ雲ノ扇で見ると、ヘいざや我も連れんと、と正中右膝つき合掌するところも切ない。ヘ（弥陀如）来、と立ち、入水の態は拍子二ツ強く踏み、扇翳しきりと廻って退り安座シオルが、海中に没する速さをみる。一転、キリは修羅の闘争。ヘ四海（の因果を）と太刀を手放し、左袖返シ膝つきツレを見込むと、ヘこれまでなりや、と立ち、常座に行き、きりきりと廻って右ウケ左袖返シ留。面今若・黒垂・梨子打・襟白浅黄・唐花七宝繋文厚板着付・白地流水二貝文大口・萌黄単法被右肩脱・太刀の公達の遺酒は匂うような吉之丞の気品に哀愁。（1時間4分）

「茶壺」 アド田舎者・小三郎、主命の茶を仕入れた安堵は「邯鄲」の謡のひとくさりへ飲めば甘露も斯くやらんと心も晴れやかに、大盃三ツの上機嫌、酔態少々オーバー・アクション気味もさもありなんか。酔臥を見てシテすっぱ又三郎は早速「あれ（茶壺）をこの方へ才覚致さうと存ずる」と狡く立ち回り執拗に所有権を争うが、ねちねちした嫌らしい人物の造形は又三郎抜群。（22分）

「融・十三段ノ舞」 ワキ雅介は「思立ノ出」、一ノ松で名宣、ヘ夕べを重ね朝毎の、と舞台へ入って来るところ、如何にも漂泊する旅僧の趣。月の出、満ちてくる汐、ヘうら寂わたる気色かな、と一ノ松に出るシテ老翁・修一、サシ・下歌・上歌を省き、肩から田子を外すその姿を不審するワキに呼び掛けられて問答になる。ここ河原ノ院は即ち塩釜ノ浦、ヘ名に流れたる河原ノ院の、と運び出すシテに、塩釜の模擬と知り納得のワキは、その謂れ問うまでもなく（ワキ詞・シテ語・地下歌・上歌を省き）直ぐ四辺に目を移し、いわゆる名所教は再度のシテとの問答、両者テンポも快調。長物語に用を忘れ、ハッと気付き打合、一ノ松に田子を取りに戻り正中で汐を汲むところは、ヘ汲めば月をも、と田子を振り、がらりと前へ投げ出すが、それ程大きな音はさせず上々。海水を濾から汲むわけではないので、框の外から汲む派手な型は見られなかったが、これが写実の理屈であろう。

後シテは面中将・小立烏帽子・襟白赤・卍繋文白摺箔着付・緋大口・白単狩衣・飾紐付太刀を佩く英姿。ヘ白河の波の、と扇を投げ、ヘあら面白や、とスミで拾うとヘ受けたり受けたり遊舞の袖、と両手に捧げ、扇畳むと早舞、五段・五段・三段。中の五段に常座で右膝つき達拝から立つと、指シて三ノ松へ抜け左右へきりきりと鋭く廻り、クツロギから流シで戻り、後の三段のカカリに沈ミ、舞は急ノ舞の位となり一ノ松で舞上げる。鍛えられた強靱な腰で舞い来り舞い去る流麗な舞の爽快は、キリの型もてきぱきと鮮やかに極め、地（猶義・基徳ら）を残して幕に入りワキ留。囃子は誠・富司忠・総一郎・好信、後見に和男・幸三郎、見所から嘆声も洩れる熱の入った舞台、面白かった。（1時間23分・3月2日・名古屋梅猶会定期能・熱田神宮能楽殿）

「狐塚」 群鳥が田に下りて荒らす夕べ、主・正邦の言い付けでも後込みしたい狐塚の田へ、鳥威しに遣らされる太郎冠者あきら、次郎冠者千三郎、鳴子を交替に持ち合うのが煩わしくなり二人して持つのは「文荷」に同じ。悪巫山戯の気分は、暮れ残る空に群鳥を見付け、狐の怖さも忘れて威勢よく「ホーイ、ホーイ」と激しく鳴子を鳴らすまで。日が落ちれば疑心暗鬼、酒持参で陣中見舞の主を怪しみ、尻尾があるかと袴の後ろ捲ってみたり、勧められる杯は気を外らせて飲まずに捨て、挙句は松葉で燻すなど、達者な二人がやりたい放題ともみえる活き活きした舞台。（27分）

「惣八」 他人の職業がよくみえるのは古今同じ。俄に料理人から転身して僧となった千之丞、僧から料理人惣八を名乗ることになった千作、共に有徳人・正雄に抱えられ、早速別々に言い付かった用は読経と魚の調理。困惑する両人だが同じ屋根の下、互いに身上明かせば、それぞれの用は互いに転身前に執った杵柄の生業、一気に生気を取り戻す嬉しさは見所にも。七十有余年に亘る兄弟コンビは、鯛と鯉を捌く包丁作法の一々に口を挟む千作と、説明する千之丞との阿吽の呼吸の問答など、文字通り融通無碍の芸境。（30分）

「菓争」 茂山狂言会が東西稀曲名作選と銘打ち、シテ栗ノ精・千五郎（当代千作）アド橘ノ精・正義（当代千五郎）で上演以来、二十一年ぶりの舞台はシテ千五郎・アド七五三。橘方の柑橘類一門は橙・九年母・柚子・蜜柑・金柑、花見に出掛け酒宴も酣、一興に花を詠むことになって作歌にいそしむところ、山住みの栗が来訪。大伴黒主の一首を巡る論争に橘の無知を嘲笑した栗は、橘方一門の怒りを買い叩き出される。仕返しに来る栗方は柿・梨・石榴・棗の山の果実一族、てんでに木鋏・鋸・受籠・鎌を持ち橋懸に勢揃いすれば、橘方は揃いの長杖で気勢を揚げる。双方互いに兵を出し斬組の賑やかは、最後に床几を立つ両将の対決。栗冠・黒頭・面武悪・厚板着付・括袴・袷法被（袖折込）に鉞を持つ猛々しい威風は栗ノ精・千五郎、橘冠・白垂・面嘘吹・厚板着付・下袴・白練水衣（肩取ル）に棒を持ち峻厳な長老然は橘ノ精・七五三、組み合うところへ俄の山嵐の寒風に互いに退散、シテ栗ノ精がトメる。

印象に残るのは前半では、酒宴の場で全員に酌をし終え一斉に「さらば飲まう」と飲み干す和気が小舞の賑やかに反映、単身推参する栗に団結力で手向う勢いをみせるところ。また、栗と橘の両将の歌問答にがさつとみえる栗が慎重とみえる橘の虚を衝くような展開となるところ。後半では、謡掛かりになり囃子が囃す合戦の場、両将共に古今変らぬ布陣は後方の床几に陣取り戦況眺め居るところ。

立衆の兵は橘方が面嘘吹・無地熨斗目着付・色練水衣、栗方が面賢徳・厚板着付・側次、装束付に橘と栗の主張が明白で、同種の面も種々相、それぞれに役の個性が現われて面白い。なお千三郎は二十一年前と同役の金柑、当時立衆の最年少、感慨一入であったろう。千五郎家の隆盛、充実ぶりである。主後見千作、地頭千之丞、囃子方は市和・正博・喜彦・光長。（50分・3月5日・茂山狂言会名古屋公演）

◇……◇
◇……◇

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成15年5月～6月）

◈ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

5月25日	「山姥」（再）（喜多流）	高林白牛口二ほか
6月1日	「恋重荷」（観世流）	木原康夫ほか
6月8日	「絃上」（宝生流）	小林与志郎ほか
6月15日	「養老」（観世流）	遠藤六郎ほか
6月22日	（再）「柏崎」（金春流）	高橋　汎ほか
6月29日	「鐘の音」ほか（和泉流）	野村　萬

演能カレンダー

◈名古屋能楽堂◈

（TEL 052－231－0088）

［5月］

24日(土)	たまも会	（無料）
25日(日)	名古屋観衛会大会	（無料）

［6月］

8日(日)	名古屋観世会定式能	（有料）（番組①面）
15日(日)	名古屋宝生会定式能	（有料）（番組②面）
20日(金)	名古屋能楽堂定例公演	（有料）（番組②面）
22日(日)	名古屋淡交会別会	（有料）（番組②面）
29日(日)	也留舞会・信謡会合同発表会	（無料）（番組②面）

◈熱田神宮能楽殿◈

（TEL 052－671－0852　文化殿）

［6月］

5日(木)	熱田祭協賛奉納能	（無料）（番組①面）

◈豊田市能楽堂◈

（TEL 0565－35－8200）

［5月］

31日(土)	豊田市能楽堂5月定例公演	（有料）

熱田祭奉納能

能4番　狂言1番

6月5日　熱田能楽殿

能楽協会名古屋支部主催による熱田神宮大祭協賛の「熱田祭奉納能」は六月五日(木)午前十時から熱田神宮能楽殿で開催される。

演能は、観世、金剛、宝生、喜多各流による能四番、金春流仕舞、和泉流狂言一番。入場無料（番組①面）

観世流能「花月」（シテ外山圭一）
金剛流能「巴」（シテ加藤かおる）
和泉流狂言「文山賊」（シテ大野弘之）
宝生流能「源氏供養」（シテ衣斐愛）
金春流仕舞「杜若」（前田茂穂）
喜多流能「野守」居留（シテ長田郷）
後援熱田神宮奉賛会

8月10日天王薪能

20回記念「道成寺」上演

尾張津島天王祭で名高い津島で毎年、天王薪能鑑友会の主管により、津島市観光協会主催、海部津島青年会議所、名古屋金春会などの協賛で「天王薪能」が開催されているが、とくに本年は二十回を迎え、きたる八月十日津島市文化会館大ホールで「第二十回記念の天王薪能」として、能「道成寺」が上演される。

シテは金春流の若手ホープ、本田芳樹師が所演する。狂言は野村万作師の「棒縛」。鑑賞前売り券（全自由席）一般四千円、（当日五千円）学生二千五百円、中学生以下千五百円。

問い合わせは、津島市観光協会（津島市立込町四－一四四、津島商工会議所内、電話0567・28・2800）

番組は次のとおり

〔第一部〕（正午始）金春流学生交歓会発表会（愛知大学、国学院大学、志学館大学、中京大学、帝塚山大学、奈良大学、早稲田大学）

〔第二部〕（午後四時始）

解説　林和利氏（名古屋女子大学教授）

仕舞「八島」（鬼頭尚久）
舞囃子「松風」（金春安明）
狂言「棒縛」（野村万作、石田幸雄、深田博治）
能「道成寺」（本田芳樹、ワキ飯富雅介、間・佐藤友彦、井上祐一、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・篤鉱一、太鼓・金春国和）

小鼓方幸流

幸正悟氏が宗家を継承

小鼓方幸流宗家預りをつとめる幸正悟氏は、十八世宗家継承について昨年八月幸流職分会での同意をうけ、このほど各流宗家の承認が得られ、ことし四月正式に幸流宗家を継承した。

ナディア狂言

6月13日　名古屋青少年文化センター

名古屋市の中心・栄にある名古屋市青少年文化センター「ナディアパーク」のアートピアホールできたる六月十三日(金)、「ナディア狂言」が催される。

この狂言会は、名古屋を中心に活躍している若手の狂言師自身が若者の集まるナディアパークへ出向き、狂言を演じるというイベントで、青少年に狂言を見る機会と関心を高めようと企画され、毎年開催、今回で第五回目になる。

演目は、「雷」（かみなり）雷・今枝郁雄、薬師・井上靖浩

「文荷」（ふみにない）太郎冠者・佐藤融、次郎冠者・今枝靖雄、主人・鹿島俊裕

解説　林和利氏（名古屋女子大学教授）

開場／午後六時三十分、開演／午後七時、終演予定／午後八時三十分。

入場料（全自由席）一般二千円、学生千五百円、親子ペア三千円（子が高校生以下に限る）＝当日売りは五百円増。

チケット取扱い＝チケットぴあ（TEL052・320・9999）、問い合わせ先＝ナディア狂言運営委員会（TEL080・3610・5898）

第4回　伝統芸能上演会

7月21日　名古屋能楽堂

東海能楽研究会（代表筧鉱一氏）は、ことし二月に伝統芸能の普及の諸事業、高校、小学校での能楽や和楽器の若年層への普及などの活動が顕彰されて愛知県芸術文化選奨文化賞を受賞したが、これを記念して、きたる七月二十一日「第四回伝統芸能上演会」－伝統芸能を次世代につなげるために－を名古屋能楽堂で開催する。

午後二時半開演、なお一時から二時まで舞台体験として、橋がかり、舞台を歩く、また和楽器（笛・小鼓・大鼓・太鼓・尺八・胡弓）などに触れるイベントが催される。（白足袋持参のこと）

入場無料・来場歓迎（先着六百三十人）＝③面番組掲載

熱田神宮能楽殿演能

熱田祭協賛　奉納能

六月五日(木)午前十時始
熱田神宮能楽殿

番組

能（観世流）花月　外山圭一　囃元　正樹　後藤孝一郎　竹市　学　河村真之介　野村又三郎　間　後見　三村恵子　久田勘鶴　地謡　松山幸親　須部甫　高橋暁一　八神孝充　加藤保彦　清沢一政　祖父江修一　上野嘉宏

能（金剛流）巴　豊嶋幸洋　豊嶋三千春　豊嶋晃嗣　後見　地謡　加藤かおる　高安勝久　間　野村小三郎　河村真之介　柳原富司　忠鹿取希世　由根泰子　四ツ井つや子　伊藤雅子　熊谷眞知子　牧野元子　鈴村昌美　西脇和子　波多野良子

狂言（和泉流）文山賊　大野弘之　佐藤友彦　後見　佐藤融

能（宝生流）源氏供養　衣斐愛　飯富雅介　橋本宰　囃元　正樹　後見　竹内澄子　玉井博祐　地謡　河村総一郎　福井啓次郎　大野誠　青木亮　竹内良伯　竹内淳一　久野幸三　稲川尋一　水上輝和　衣斐正宜　佐藤耕司　箕浦逸雅　広瀬弘寿　鈴木

仕舞（金春流）杜若キリ　長田郷　前田茂穂　地謡

能（喜多流）野守　長田郷　橋本宰　後藤嘉津幸　佐藤融　後見　加藤誠子　平塚昭子　地謡　福田寛治　吉川正健　中村森　高林呼二　筧鉱一　加藤洋輝　鹿取希世　栗谷充雄　長田駿　衡市和谷

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部
後援　熱田神宮奉賛会

（午後三時終了予定）

名古屋能楽堂演能案内

名古屋観世会定式能（三回）

六月八日(日)十二時半開演
名古屋能楽堂

能　賀茂　フレ　梅若猶義　天女　観世喜正　梅若古之丞　間　高安勝久　杉江元　根本正樹　井上靖浩　後見　筧鉱一　後藤孝一郎　加藤洋輝　竹市学　久田勘鶴　小島一英　地謡　高島良一　本田熱　須部甫　高橋暁一　祖父江修一　武田邦弘　梅田邦久　古橋正邦

仕舞　難波　小島一英　三井寺　井上嘉介　地謡　上野嘉宏　祖父江修一　久田勘鶴　清沢一政

狂言　地蔵舞　佐藤友彦　大野弘之　後見　今枝靖雄

能　善知鳥　子方ツレ　久田勘吉郎　高橋暁一　観世喜之　間　飯富雅介　井上祐一　後見　梅若猶義　観世喜正　地謡　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世　外山圭一　松山幸親　加賀敏彦　清沢一政　古橋正邦　梅田邦久　井上嘉介　武田邦弘

附祝言

（終了四時半頃）

（休憩以後、空席のままの指定席は自由席券でもお座りいただけますからご利用下さい）

主催　名古屋観世会

［有料］当日券八千円（自由席）

ＮＨＫ教育テレビ放送予定

◈ＮＨＫ教育テレビ

5月25日(日)　15時～16時10分

能「鉄輪」（観世流）　橋岡久馬、宝生閑

（弘之、新一郎、正之助、惣右衛門）

◈日本の伝統芸能　ＮＨＫ教育テレビ・能狂言鑑賞入門

土曜日　12:30～13:00　（再）火曜日　5:30～6:00

講師：高桑いずみ

6月7日　第一回『屋島』(1)
6月14日　第二回『屋島』(2)　ゲスト：野村万作
6月21日　第三回『屋島』(3)　ゲスト：観世栄夫
6月28日　第四回『宗論』剛と柔　ゲスト：野村万作

金剛能楽堂が落成

6月21・22日 記念祝賀能

本紙前号既報のように、新金剛能楽堂が京都御所の西、烏丸通一条下るの立地にこのほど落成、六月十八日舞台披き記念式典 二十一日、二十二日の両日、記念祝賀能が開催される。

記念式典には、金剛流宗家金剛永謹氏の「翁」、仕舞「高砂」（金春安明）、「羽衣」（宝生英照）、「岩船」（喜多六平太）、小舞「海道下り」（茂山千作）、仕舞「笠之段」（梅若六郎）、「東北」（片山九郎右衛門）、「猩々」（金剛龍謹）、舞囃子「嵐山」（観世清和）、式典は関係者のみ。

落成記念祝賀能は別表のとおり。入場料A席二万円、B席一万三千円。C席一万円。

チケット取り扱い

金剛家事務所（電話&FAX）電話〇七五（七一二）七一九〇

能楽堂祝賀能

第一日
平成十五年六月二十一日（土）午後二時始

神歌　豊鶴 幸洋　豊鶴 晃嗣　廣田 隆一　種田 道雄　廣田 幸稔

能　鶴亀
問　井林 清一　竹村 英雄　前川 雪　帆足 正規　福王茂十郎　茂山七五三

観世流　弓八幡　田村 林喜右衛門　浦田 保利
仕舞　放下僧　片山慶次郎
国栖　杉浦元三郎

狂言三本柱　茂山あきら　茂山千之丞　茂山千三郎　茂山 童司
観世流　賀茂　大江 將董
仕舞　蝉丸　井上 嘉介
鞍馬天狗　大槻 文蔵

金剛 龍謹　金剛 永謹
半能　石橋　高安 勝久
和合連獅子　河村稔一郎　幸 清次郎　前川 光長　藤田六郎兵衛

第二日
平成十五年六月二十二日（日）午後二時始

神歌　廣田 泰三　豊鶴 調三

能　泰山府君
問　宇高 通成　松野 恭憲　今井 清隆　森本 幸治　植田隆之亮　中村 宜成　善竹 忠重　石井 保彦　林 光寿　井上 敬介　森田 光廣

連吟　老松・蟻老

狂言　福の神　茂山忠三郎　茂山 良暁　善竹 忠亮
舞囃子　岩船　金剛 永謹　谷口 有詩　伊吹 吉博　井上 敬介　森田 順人

廣田 種田 道一　豊鶴三千春　泰能
半能　石橋　高安 勝久
獅子之式　河村 大　吉阪 一郎　前川 光範　森田 保美　清水 利宜

紅韻会25周年記念大会

能「猩々」上演

5月31日 尾西市民会館

観世流名誉師範・渡辺節子師が主宰する紅韻会はことし結成以来四半世紀を関し、これを記念してきたる五月三十一日(土)尾西市民会館で午前十時から「紅韻会二十五周年記念大会」を開催する。

渡辺節子師は名古屋清韻会（大槻文蔵師主宰）会員として多年にわたり研鑽、自らも紅韻会を主宰して後進の指導に当たり、地域文化の向上にも貢献している。

この記念大会に当たり、尾西市の林英夫教育長は「観阿弥、世阿弥により確立され、七百年の歴史と伝統をもつ能楽を、地域活動として皆様の研鑽により今日を築かれましたことは私ども郷土の誇りと存じます。こうした会員の皆様方のご協力が、当市の芸能文化の発展と、市民に心の豊かさや潤いを与えて頂きますことに深く敬意を表わすとともに、今後ますますのご精進とご発展を祈念申しあげます」と祝辞を寄せている。

後援・尾西市、尾西市教育委員会、名古屋清韻会

来場歓迎、終了五時頃

番組の概要次のとおり

［能］「猩々」（シテ渡辺節子、ワキ福王知登、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・山本孝、太鼓・上田悟　後見大槻文蔵、武富康之、地謡・斉藤信隆ほか）

［素謡］「竹生島」（伊藤春彦、足立ツネ子、加藤金一）、「遊行柳」（川崎信義、斉藤信隆）、「砧」（吉川喜美子、福王知登、赤松禎英）

［舞囃子］「胡蝶」（浅井一芳）、「熊野」（西岡隆子）、「花月」（名倉菊子）、「三輪」（山本淳子）、「通小町」（川崎あきゑ）、「誓願寺」乏佐之翔（鬼頭貴代子）、「弱法師」（馬場英子）、「高砂」五段（加藤美智子）

ほか独吟、連吟、仕舞など二十数番

［番外仕舞］祝言「白楽天」（大槻文蔵）

映画「能楽師」

今池シネマテーク

能ファンで映画評論家でもある田中千代子監督の映画「能楽師」が五月二十四日から三十日までモーニングロードショーとして、今池の「名古屋シネマテーク」で上映。同時に「藤田六郎兵衛・笛の世界」の二本立てで行われている。

能楽師の稽古風景を描くこの映画には、観世流シテ方・関根祥六師、関根祥人師が出演。16ミリ、60分。「笛の世界」は36分。

当日券一般・大学生千五百円、シニア千円、上映時間は「笛の世界」10時30分、12時20分「能楽師」11時15分、13時10分。

名古屋シネマテークは、名古屋市千種区今池1－6－13、今池スタービル2F、TEL052・733・3959（地下鉄今池・UFJ銀行西百八十メ）

「蟻通」を上演

豊春会春の能

金剛流豊春会（豊鶴三千春師主宰）は、五月十七日大槻能楽堂で「豊春会春の能」を開催、今回は稀曲ともいえる「蟻通」を豊鶴三千春師が上演、ワキは福王茂十郎師がつとめた。

豊鶴三千春能の会は、今年七月五日(土)午後二時から東京・国立能楽堂で能「砧」十三段（豊鶴三千春）が上演される。

豊春会秋の能は、今秋十月十九日(日)金剛能楽堂で能「仏原」の上演が予定されている。

名古屋宝生会定式能（第247期第2回）

六月十五日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

番組

能　若
後見　杉江 元　河村真之介　後藤孝一郎　鬼頭 好信　大野 誠
地謡　玉井 博祐　辰巳満次郎　和久荘太郎　松浦 祥子　阪口 泰子　芳賀カズ子　澤栗 幸子　衣斐 倉本 雅愛　竹内 澄子　足立 知子

狂言　磁石
井上 靖浩　井上 祐一　大野 弘之　後見 今枝 靖雄

仕舞　経政
稲川 寿一
雲雀山　佐藤 耕司
地謡　内藤 飛能　馬樣 富四夫　衣斐 正宜　久野 幸三

能　善知鳥
和久荘太郎　佐野 田口 萌　将成
問　高安 勝久　佐藤 友彦　河村総一郎　後藤嘉津幸　鹿取 希世
後見　竹内 澄子　衣斐 愛
地謡　石原 勝成　玉井 道夫　大森 尚人　久野 幸三　稲川 寿一　衣斐 正宜　辰巳満次郎　佐藤 耕司

主催　名古屋宝生会
名古屋市天白区島田二－三〇－一
島田橋住宅二－一三一〇
佐藤 耕司 方
電話 FAX　〇五二－八〇三－七三七二

名古屋能楽堂定例公演

六月二十日（金）
午後六時三十分始
名古屋能楽堂

（和泉流）狂言　瓜盗人
男　野村小三郎　畑主　松田 高義　笛　竹市 学　後見　伴野 俊彦

（観世流）能　松風
村雨　梅若 晋矢　松風　梅若 六郎
後見　前野 郁子　泉 嘉夫　久田 勘鬼
間　高安 勝久　野村又三郎
地謡　高島 良一　本田 鮎　須部 甫　清沢 一政　武田 邦弘　梅田 邦久　古橋 正邦
後見　河村真之介　後藤嘉津幸　竹市 学

（午後八時五十分頃終了予定）

［入場料］前売一般三千五百円、学生二千円（当日一般四千円、学生二千五百円）

取扱所　名古屋能楽堂（052・231・0088）
チケットぴあ（052・320・9999）
市内プレイガイド

主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・㈶名古屋城振興事業団
㈶名古屋市文化振興事業団
協賛　能楽協会名古屋支部

［有料］
当日券一万円（二枚綴・年内通用）

名古屋淡交会別会

六月二十二日(日)十二時半始
名古屋能楽堂

一部

能　清経
上田 公威　瀬戸 勝治　野口 敦弘　河村総一郎　福井啓次郎　黒田 八神　孝充　藤田 次郎
後見　恋之音取　山田 義高　橋岡 慈観　観世 芳伸　松山 幸親　加賀 敏彦
地謡　藤谷 上野　朝義　上田 四郎　貴弘

仕舞　菊慈童
当麻キリ　久田勘吉郎　橋岡 慈観
地謡　黒田 山田　藤井 完治　藤谷 音彌　義高 博

二部

砧
後　久田 勘鬼　河村真之介　久田舜一郎　観世 竹市　元伯 学
舞囃子　屋島女キリ　観世 芳伸　野村 四郎　藤井 完治
善知鳥　地謡　高橋 暁一　笠田 昭雄　上田 朝義　上田 大介

（二時半頃）

能　道成寺
久田三津子　赤頭　井藤 鉄男　野口 敦弘　吉田 祐一　井上 祐一　佐藤 友彦　河村真之介　久田舜一郎　金春 國和　藤田 次郎
後見　鐘後見　上田 公威　橋岡 慈観　久田 勘鬼　野村 四郎　上野 朝義
地謡　八神 孝充　松山 幸親　加賀 敏彦　高橋 暁一　山田 義高　観世 芳伸　藤井 完治　上田 貴弘　藤谷 音彌　笠田 昭雄　上田 大介

（終了予定　四時頃）

主催　名古屋淡交会
橋岡慈観
三交会
久田三津子

※二部入場料（全自由席）一〇、〇〇〇円
当日券　一二、〇〇〇円
学生券　五、〇〇〇円
※入場券のお申し込み及びお問い合わせは
久田事務所TEL&FAX　〇五二－七〇五－一五八五

名古屋能楽堂定例公演

狂言 也留舞会
謡曲 信謡会 合同発表会

六月二十九日(日)十時三十分始
名古屋能楽堂

狂言「雁大名」（加藤志津子、野口隆行、伴野俊彦）、「痺」（畑中春華、三浦思季）、「いろは」（伊達義也、伊達義子）、「膏薬煉」（曽我太郎、松田高義）、「名取川」（吉村由紀子、藤波徹）、「大般若」（伴野俊彦、伊藤悦子、伊藤康）

仕舞「熊野」（東松由美子）

狂言「雷」（大矢梨紗子、安保育子）、「法師ヶ母」（平山みよ子、野村又三郎）、「太刀寝」（磯村美和、奥津健太郎、伴野俊彦）、「清水」（松本千賀子、野村又三郎）、「朝比奈」（東松舞、野村又三郎）、「魚説法」（田端泰衛、吉村由紀子）、「不須」（伊達義子、柴田聖子、前田祐子）、「縄綯」（庄司武、松田高義、野村又三郎）、「禰宜山伏」（杉澤麻里子、天野朋子、野村小三郎、三浦思季）

主催　和泉流　也留舞会
観世流　信謡会
問合せ先　野村事務所
名古屋市中区平和一丁目二〇－四
電話（〇五二）三五〇－七九七一番

［御来場歓迎］

戦後名古屋能楽史 ㊸

竹尾　邦太郎

〔第十一章〕昭和三十二年（一九五七）

（承前）

九月二十一日、先の四日付中部日本新聞のコラム「その人」に続き、「お能六十年の田鍋惣太郎、芸人に年はない・五日（十月）に東京で記念能」の見出しで夕刊に次の談話が掲載される。

◆不思議なものでね、若いうちは華やかなものをやると嫌味になるが、年を取るに従って芸に艶と色気が出て、どんな華やかなものをやってもちっともおかしく無くなる。それだけに自分が七十三だなんて年を意識したらもう駄目ですね、芸人に年はないですよ。

◆私の好きな演目はやはり「道成寺」「安宅」「卒都婆小町」など。中でも「道成寺」が一番好きですね。最初これを打ったのは大正四年（一九一五）三十一歳の時です。シテが観世左近、ワキが宝生新といった一流メンバーへ仲間入りさせて貰いましたが、この時以来数えて四十三回も打ってます。私はどうしても死ぬまでに五十回勤めたいと悲願にしてます。

◆もう一つ私が是非やってみたいと思っていた五流「道成寺」も今年の五月やっと完演しました。第一回が昨年の三月で宝生九郎、ついで五月に観世喜之、十月に桜間龍馬、今年の一月に金剛巌、五月に喜多長世と五流の「道成寺」を約一年の間に打ったわけです。いままで誰も手掛けたことのない試みだけに、私の生涯で最も記念すべきものとなるでしょう。

田鍋惣太郎の舞台六十年記念能は当地名古屋で既に昭和三十年五月、五日間の日加寿能を賑々しく盛大に行っているが、江島伊兵衛（わんや）、檜常太郎（檜書店）、丸岡明（能楽書林）の諸氏から東京でも、という話になり、東京中日新聞社の後援をも得て実現の運びになったという。田鍋惣太郎の声望満天下に轟くと言えよう。

九月二十九日、第三回中日五流能が昼夜二回の公演を行う。昼の部は「頼政」近藤乾三、「鳴子」井上松次郎、一調「龍田」鬼頭八郎・林愿蔵、「雪・雷踏ノ拍子」金剛巌、仕舞三番「清経」桜間龍馬「高砂」喜多節世「船弁慶」和島富太郎、「望月」梅若万三郎。夜の部は「島頭」喜多実、「栗焼」大蔵弥太郎、「二人静」桜間道雄・本田秀男、仕舞三番「八島」辰巳孝、「花筐」橋岡久太郎「玉ノ段」豊嶋弥左衛門、「正尊・起請文・翔入」観世喜之、昼夜とも留に直面の劇能をもってきたところに観客層の裾野を拡げたいという啓蒙の意図が窺える。この月、金春流誌『金春』が復刊。春秋二回刊で編集は赤堀弥作、創刊号（復刊第一号）の特集は「桜間弓川師を悼む」、第五号からは高橋汎の編集。

月が替り十月、一日には五千円札が発行され、国鉄ダイヤが改正される。名古屋・東京、名古屋・大阪間に準急が各二往復増発されて計各三往復となり、最新鋭の湘南型電車（お馴染のオレンジとグリーンのツートンカラーの）十両編成で運転され、東京まで約五時間四十五分とこれまでより四十五分、大阪まで二時間四十五分で三十分、スピードアップされ、東西からの能役者の来演も便利になる。十月四日、東海道本線のスピードアップを遙かに超越する技術革新は初の人工衛星スプートニク一号の打ち上げがソ連で成功。

五日、東京水道橋能楽堂は田鍋惣太郎舞台六十年記念能で昼夜二部制の大能。昼の部は番囃子「翁」藤波順三郎、「養老」観世元正、「二人袴」和泉保之・三宅藤九郎、舞囃子「小袖曽我」宝生英雄・野口禄久、一調二番「花筐」鵜沢寿・高橋進「松虫」森重朗・坂井音次郎、仕舞二番「笠ノ段」浅見真健「殺生石」武田太加志、一調一声「玉葛」幸祥光・粟谷益二郎、舞囃子「二人静」木原康次・島沢啓次、仕舞「頼政」喜多六平太、「葵上・梓ノ出」宝生九郎。夜の部は番囃子「翁」武田光雲、舞囃子「高砂」橋岡久太郎、「景清」桜間龍馬、「素袍落」大蔵弥太郎、舞囃子「胡蝶」奥野達也、一調「勧進帳」田鍋惣一郎・梅若泰之、仕舞四番「東方朔」橋岡久馬・久共「玉ノ段」観世喜之「善知鳥」永島誠二「野守」高橋静夫、舞囃子「弱法師」梅若実、仕舞四番「八島」高瀬寿美之「三輪」桜間道雄「松風」本田秀男「松虫キリ」金春信高、一調一声「小督」田鍋惣太郎・宝生九郎、「船弁慶・真ノ伝」喜多実、小鼓方の能能らしく昼夜合わせて小鼓一調三番、一調一声二番面目躍如。田鍋惣太郎は後に自著『小鼓芸話』の中で次のように述べている。

「菊慈童」松野奏風画

一調というのは小鼓が大鼓の手をも打って謡と小鼓とがつかず離れず一体となり面白くきかせるもので、鼓では重い習物となっております。大鼓の手が入らず小鼓の手だけを打って謡をはやす場合は独調又は独鼓といって一調とは全く異なるものであります。一調では謡と鼓がつかず離れず渾然一体となるもので、鼓が謡を囃すのではなく謡が鼓の手を引立て、又鼓が謡を引立ててお互に技を競うものであります。／正式の演奏の場合には一調は能一番以上にも匹敵する程非常に大切に扱われます。／公開の演奏では一調は特に練達の人が演ずる事になっております。小鼓の外に大鼓と太鼓にも一調があります。大鼓の一調には小鼓の手が入りますが、太鼓の一調には大小の手は入らず、太鼓のみの替手を打ちます。／「一調一声」というのは、一声を一調で打つもので、幸清流では「小督」一曲のみで、へせめてや暫し慰むと、から謡い出し、後シテの一声を打って駒ノ段の終りまでです。幸流には一調一声として「玉葛」「浮草」の二番がありますが、これは幸清流が幸流の二代目から分家する時に本家に三番あったものを一番貰って出たものということです。

そして、当日の演奏を倫快に勤めた思い出の能として「私は宝生九郎氏にお相手を願って気持よく勤めさせていただきました」と回顧する。同日、名古屋では日本醤油協会創立十周年記念・醤油会館新築落成記念・第四回醤油謡曲全国大会がある。官公庁や大企業のレクリエーションや文化教養講座の活動は聞くが、同業者の横のつながり・連帯を強めるための活動は、医師会などもそうであったが極く珍しい。流儀は観世と喜多、脇方福王流の独吟「松風ロンギ」「弱法師」が異色である。素謡七・連吟一・独吟五・仕舞五・舞囃子六・能一、狂言一番だけが玄人で「杭か人か」佐藤卯三郎・河村丘造、で全二十六番の盛況。

翌六日、大槻清韻会。素謡二番「竹生島」宇治正夫「通小町」里井順次郎、連吟二番「笹ノ段」芥川秀子・飯田新子「安達原」太田重次郎・加藤総兵衛、独吟「定家一字題」林愿蔵、仕舞二番「雨月」柴田初太郎「鞍馬天狗」大槻文蔵、舞囃子三番「野守」杉村竹翠「松風」山本勝一「砧」加藤良久、「子盗人」井上松次郎、「屋島・大事」観世喜之、「求塚」大槻十三、「石橋・大獅子」大槻秀夫・殿島修二。「求塚」は観世流では長らく退転していたが、早逝した二十四世左近の意を酌み華雪が復曲、初演は昭和二十六年十二月二十三日。『観世華雪芸談』（昭和三十五年三月一日・檜書店刊）に「型」附は家元に一部、大阪の大槻十三さん、京都の片山九郎右衛門さんに一部ずつ謡本に朱で自分が書き入れて差し上げました」とあり、今公演、大槻十三は番組に「重き習物ですが御当地に於て観世流では殆ど演能されてをりませんようですから此度上演することに致しました」というが、当地初演。明治維新以来この日まで、現行曲とする宝生流の五度の上演があるだけである。さて、前日の田鍋惣太郎舞台六十年記念能で上京した田鍋惣太郎以下当地の三役、藤田六郎兵衛・金森準三・筧三男、田鍋惣一郎・青木恒治・後藤孝一郎・福井啓次郎、西尾孫太郎・河村総一郎、鬼頭八郎、高安滋郎、井上松次郎・井上礼之助ら全員が清韻会に出勤、終演が昨夜九時頃というから大方は夜行列車での帰名、「のぞみ」の走る現在とは隔世の感、苦労が偲ばれる。

十月十三日、汎流儀の能楽愛好者の結社・名古屋能楽倶楽部第五回公演は素謡一、連吟一、独吟二、仕舞十二、舞囃子十、能三、狂言一、の盛会。十四日、大槻十三に師事し、戦前「隅田川」「望月」なども勤め、平野清諷会を主宰した平野清の旧友、能画家松野奏風が追善能画会打合せのため来名、翌日の紙上に次の談話を寄せる。

◆平野氏は昭和十五年、四十歳で亡くなったが、私と彼とは、彼がまだ早稲田の学生の頃からの親友である。名古屋に帰り、彼が『能楽公論』を編集していたのでよく能舞台のスケッチを頼まれたものだが、彼は中京能界の発展に人一倍力を注いでいた。

◆能画を描き始めたのは大正十三年ごろ、二十二・三歳の時だが、同じ一つの能面でいろんな感情を表現し、また六百年の伝統を経て見事に完成された動きなど、能の舞台を描くことは、能面のことも、何もかも知って掛からねばならない。能楽師のポーズなど、絵として先ず立派でなければならないが、それ以上に能の舞台姿として正しく描き切れていなければ能画としては通用しない。

因に松の奏風（一八九九－一九六三）は現名古屋能楽堂の舞台鏡板に老松を揮毫した松野秀世（一九三五－二〇〇二）の父である。

十月二十七日、第三十二回名匠鑑賞能は舞囃子「天鼓」大槻秀夫、「実盛」観世喜之、「栗焼」佐藤卯三郎、「松風・見留」観世銕之丞、「安達原・黒頭・急進ノ出」梅若六郎、ワキ宝生弥一・閑、大鼓に斎田喜兵衛の来演もある。

――以下次号――

◆仲春の舞台から◆

「青陽会」「名古屋能楽堂定例公演五十回記念特別公演・狂言尽くし」「豊田市能楽堂三月定例公演」「第廿五回邦謡会能」

竹尾邦太郎

「西行桜」清閑を乱す花見客の訪れを拒むわけにもゆかず、桜の咎、と一首に口遊み、樹下に臥せる西行ワキ元。深更、夢枕に現れた老桜ノ精シテ勘鶴は咎の実否を質し、全ては人の心次第と説き、改めて成仏を願うと舞グセに花の名所尽しの興は名残惜しの夜遊。値千金の春宵しっくり味わうかの序ノ舞は返ス袖もゆったり重々しい。舞上げれば薄明に紛う白い花の影も、夢醒め散り敷く落花、春寒寂寥は〈翁さびて跡もなし、のトメ。

ワキが着流僧でなく大口僧なのは役柄の位にも因ろうが、前身の北面の武士・佐藤義清を引き摺るようで閑居幽棲の西行法師らしくはない。萌黄引廻シを取ると、シテは面皺尉・白垂・風折・小格子着付・萌黄色大口・茶単狩衣。桜の咎の実否質すワキとの問答は、いちいちワキにアシラフ強さだが、素姓を知られ老いの含羞、〈恥かしや、と面伏せ気味に直り〈（花も少く枝）朽ちて、と作物を出る。舞グセは〈（春の錦）燦爛たり、と拍子一ツ軽ろやかに踏む華やぎ、〈漲つ波までも花は、と扇翳シて廻り、〈大堰川、と左袖返スのは降り懸る落花のイメージ、序ノ舞の荘重からキリは〈待て暫し、と招いて出、〈花の枕の、と

（④面へつづく）

「西行桜」梅田邦久
青陽会定式能　（杉浦賢次氏撮影）

愛知県芸術文化選奨文化賞受賞記念
第四回　伝統芸能上演会
七月二十一日（祭日）二時半始
名古屋能楽堂

狂言　附子番組
太郎冠者　井上靖浩　主人　佐藤融
次郎冠者　佐藤友彦　後見　鹿島俊裕

能　小鍛冶
長田驍　飯富雅介　筧鉱一　鬼頭好信
梨元正樹　後藤嘉津幸　大野誠
佐藤融
後見　加藤誠子　伊藤英毅　長田郁
平塚昭子　地謡　神戸勝二　和谷衛市
吉川寛治　中村正
今井勉

平曲　宇治川
地唄舞　くろかみ　立方　西川眞乃女　唄・三絃　久米雅子
箏曲　千鳥の曲　胡弓　箏　澤田孝子　今井勉　花木美弥　久米雅子
三曲　八重衣　箏　三絃　尺八　岩田律園

入場無料
御来場歓迎
主催　東海能楽研究会（終了五時頃）
名古屋市教育委員会
後援　愛知県教育委員会

「国栖」加賀敏彦
青陽会定式能　（杉浦賢次氏撮影）

（③面よりつづき）

扇左手に抱え脇正に下居、〽夢は覚めにけり、と扇右手に替え立つと、〽嵐も雪も、とサシ廻シ、〽花を踏んでは、と橋懸へ入り一ノ松、〽同じく惜しむ、と二ツ拍子から二ノ松へ、左袖返シ目付柱の方へ指シ〽翁さびて、と幕へ直ルと地一杯に幕入。勘鹿骨格の大きさが如何にも老桜ノ精。（1時間28分）

「昆布売」大名・友彦、通りすがりの昆布売・祐一に刀尽くで太刀を持たせたまではよいが、玩弄が過ぎて持たせた太刀で逆に脅されるところ、周章狼狽の姿に亡父秀雄の滑稽味が見えて懐かしい。尚、本曲にみるいつもの不審は、昆布担う肩を替えるため手が空かない、の昆布売の言い分が、買い上げると聞かされれば「それならば捨てませう」と大事の商売物、しかも高貴な方の召し上がる昆布を、いとも無雑作に放り出すこと。何故手渡さないのだろうか。型付の墨守としか思えない。（25分）

「国栖」吉野山中へ逃避行の王・子方勘吉郎を侍臣ワキ勝久の依頼で匿う吉野川の漁翁シテ敏彦、供御に供した焼鮎を下げ渡されて急湍に放つ鮎ノ段は、面遣ヒ・運ビに生き返る奇瑞のスピードと力強さ更に欲しいところだが無難。討つ手アイ融・靖雄を追い返すところは、勝手つんぼの恍けに相手を煙に巻き、船が疑われて強制捜索となれば、その無謀に毅然と立ち向かう態度、威あって猛からずの風がよい。後場、天女・美和の舞の嫋やかは袖捌きの美しさ、〽子守の御前、と幕を見込む雲ノ扇に、嵯斗目を被く後シテ蔵王権現は一ノ松、〽即ち姿を、と被衣を脱ぎ捨て面泥飛出・赤頭・輪冠・赤地半切・袷狩衣の威容舞台に現わす。大柄な姿は神威豪快にみせる役柄に活きる筈も、〽大勢力の、と両袖巻き上げるところ（写真）など、内なる力の勢いに欠ける憾み。しかし、一体は爽やかな印象で人柄が出る。子方は王の片鱗窺え、行儀よく結構。（1時間9分・3月8日・青陽会）

「大般若」施主・友彦方で鉢合わせになった僧・祐一と神子・靖浩、大般若経を諷誦する僧は神子の上げる神楽に気が散ってお勤めも保ならない。一方、我関せずの神子の祈祷三昧は一種陶酔境の無表情、足拍子踏めば床を揺るがせ僧が飛び上がる程。ちょこまか動く落ち着かない僧、悠々と振舞う大女の神子、対照の妙が面白い。いつしか神楽の調子に釣り込まれ、見目好しの神子に惹かれて煩く後を慕い出す僧の好色ぶりも炙り出され、「エーイ、かしましい、なんぢゃいぞ」と声を荒げる神子が「腹立ちや」と幕へ入るのは、当世ならストーカー振り切る態か。「許せ許せ」と追う僧、経緯がいきさつだけに少々憐れ。（22分）

「右近左近」左近の牛が田を荒した、と訴訟考える右近・忠三郎、密かに左近と通じる妻・忠一郎は口下手が口達者に勝てる訳がない、とさりげなく思い止まらせようとするが、左近の非は明白、とこだわる右近に腹に一物の妻は事前演習に模擬白洲を提案。まんまと策に嵌る右近は大乗り気だが、現実味を出すため妻に地頭らしく誂わせたのが威圧感になろうとは思いもよらず、妻の嵩に掛かった尋問にしどろもどろである。

白洲に至る経路の細密描写に自ずから緊張状態になってゆき、畏縮して虚実の見境を忘れるところなど、忠三郎迫真。我に返り「縛れ括れ」が妻の言と知る右近の憤懣、薬が利き過ぎ蛾蛇に不義を言い立てられ逆上の妻、挙句は打ちかかる右近の棒を発止と受け止める妻（写真）の逆襲である。我慢を重ねた上の苦い本音の吐露、「おのれと左近奴は夫婦ぢゃ、皆笑へ笑へ」の泣き笑いは哀れに切ない。忠一郎の、地頭に装い夫・右近を痛め付ける嗜虐性、キリのヒステリカルな感情表現も旨い。因に、物笑いになる様な愚考を俗に「烏滸の沙汰」というが、右近は正に烏滸に通じよう。（28分）

「金岡」確かな作は伝存しないというが、当時、風景・風俗画に新風を吹き込み、屏障画に声名のあった平安初期の宮廷絵師巨勢金岡に取材。

心配をよそに外出十日も戻らぬ金岡・小三郎、放銀してさ迷うところを見つけ理由問い質す妻・隆行。片思いに悶え、「恋重荷」の一くさりを吟じ、身も世も無くへたり込み双シオリの金岡、いざ現実に引き戻されれば居直って狂気を否定し、腹立ち無用の言質を取ってしゃあしゃあと弁明する変

「右近左近」
茂山忠三郎、善竹忠一郎
名古屋能楽堂定例公演
（杉浦賢次氏撮影）

「巴」喜多六平太
豊田市能楽堂定例公演
（杉浦賢次氏撮影）

「仁王」逐電まで追い詰められた博奕打靖浩、懇意な何某・祐一に暇乞いをすれば、不憫がる何某は博奕打を仁王に仕立てて参詣人から金品を詐取する奇策を授け、自らはサクラになり知人を先導する。まんまと図に当たり、獲物を前に二人して笑い合うところ、罪が無いと言える筋合いのものではないが、罪が無いのは親子共演の和み。一同が退いた後、独りで参詣の跋・融に寄進の大草鞋を首に掛けられ、ぐらつくやら（写真）、体を撫でさすられ揉ったがるやらで悪事露見、「この様なもの要らぬ」と大草鞋投げつけて逃げるあたふたぶり、偉丈夫の仁王役者靖浩は再演を楽しむ。因に十六羅漢の一・賓頭盧（俗にオビンズルサマ）の像の患部相当部分を撫でれば平癒するという俗信があるが、仁王を撫でるのもそれに拠ろう。（29分）

「巴」シテ六平太、前後とも面は万媚の艶。粟津ヶ原の神事に参る態に正中下居、〽げに神感も頼もしや、と自然に手を合わせるのも社頭の恐懼、「あら有難や候、昔のこと思ひ出られ候」とシオルのは畏敬のうちにも込みあげる懐旧の念、ワキ旅僧・隆之充に「不思議やな」と訝らせる雰囲気である。そして、この場を巡るワキとの問答の、凛とした態度が後場を暗示する。僧が義仲と同郷と知って誦経を慫慂し、この出遭いに感涙のシオリから立つと、山の端を脇柱に見、右ウケへ入相の鐘の音、を聞く辺り蕭条たる景をみる。

後は梨子打・襟白赤・白地摺箔着付は同断、緋大口・敷石文唐織壷折。義仲の最期をみせる床几の型は、深田に踏み込む馬のもがくところ、拍子二ツ左を音たてず右を強く踏むのは、ぐっと嵌り慌てる姿、腰を浮かせ〽手綱に縋って、と手綱引き絞る（写真）のも力が入る。〽かかりし処に、と立つと此の度は巴の立場、義仲へ膝詰めの心に右膝つき死地への同道を迫り峻拒されるところ、地（敦允・靖嗣ら）の好調に哀感一入である。〽かくて、と立ち上がると、敵を追い散らす薙刀扱いも鮮やかに一ノ松へ、〽後も遥かに、と畦を見込む。戻ると〽はや御自害、とシテ柱際に下居、〽御小袖、で立つと後見が正中に出した義仲形見の小袖を左腕に掛け〽巴泣く泣く、と下居にシオルのも哀傷。物着は後見座、梨子打烏帽子と唐織を脱ぎ、白練を壷折に着て左手に太刀、右手に男笠を持ち常座へ出る。落ち行く先は木曽、〽衣に引隠し、と太刀を抱き締める様に右腋に掻い込むところ、恋しさ愛しさの心も切なく情緒纏綿。〽後めたさの、と笠捨て下居、僧に回向を願い立つとシテ柱に向きトメ。久しぶりの喜多宗家、健在ぶりをみせた。囃子は学・啓次郎・総一郎、主後見を驍。（1時間23分・3月21日・豊田市能楽堂三月定例公演）

「仁王」井上靖浩、佐藤　融
豊田市能楽堂定例公演
（杉浦賢次氏撮影）

「不見不聞」野村又三郎、井上祐一
邦謡会能　（杉浦賢次氏撮影）

口跡爽やか。ひ弱く寂しげな風情は後シテの笛を愛する薄幸の貴公子に適う。面は髯のある十六・黒垂・梨子打・襟浅黄赤・紅白段厚板着付・白大口・萌黄長絹の濡酒可憐の敦盛、旧敵熊谷次郎直実も今は互いに求法の友、と懺悔に須磨の月日を語るクセから中ノ舞、手綺麗で美しいが床を削る程の運歩の粘り強さ足りぬ憾みも。キリは〽馬引き返し、と正中からシテ柱へ扇投げ捨て太刀抜くところ、気迫充分をみせる。（1時間21分）

「不見不聞」主・小三郎、聾の太郎冠者・又三郎独りの留守居は心許ないと耳敏い盲の菊市・祐一を宛てがう。退屈紛れは互いの弱点を衝く悪戯、盲は悪口雑言織り込む小謡で揶揄し、聾は舞に託つけ足裏で相手の顔を撫でるなど、仕掛け仕掛けられてとどの詰まりは喧嘩。〽この川波にパッと放せば、の又三郎の「鵜飼」の一くさり、月の扇に脇柱へ月を見上げる辺り巧いもの。（22分）

「求塚」梅田邦久
邦謡会能　（杉浦賢次氏撮影）

「求塚」若菜摘む里女シテ邦久とツレ道治・伸吾は赤地縫箔腰巻・白水衣、左手に籠の同装。早春の野辺、シテが音頭とるかに謡い、労働歌とも聞くシテ・ツレ連吟はよく揃い美しい。菜摘女シテ独り残り、ワキ僧・隆之充と問答になるのは、草刈男一人が残る先の「敦盛」と同工。意図した番組だろうか、イメージが重なる。求塚の謂れを語るシテ語は、ふーっと深呼吸してから慎重に、の趣にみてとれる。己れのため、番（つがい）の鴛鴦の一羽を死なせた罪悪感に入水のところ、詞が謡へ転化の昂ぶる感情表現の巧みは受ける中入地（九郎右衛門・清司ら）も哀切。

後は、塚の中からへおう嚇野人稀なり、と謡い出し、〽火宅の住処、と引廻シ取ると、面霊女・観世水文白摺箔着付・浅黄大口・白練壷折の菟名日少女ノ霊が凝然と居る。八大地獄に墜ちる苦しみは、化鳥に襲われ両手で頭上庇うところ、亦、水火の責に詰められ〽火宅の柱に、と右ウケ立つや柱に取り付き、火焔立ち昇るさま下に眺め、熱さに耐えかね手を放し安座胸掻き抱くところ（写真）写実の型の見事。キリは獄卒に追い立てられ〽漂ひ出でて、と塚を出ると、懺悔の有様は〽炎熱極熱、の無間地獄。六ツ拍子から〽足上頭下、と膝つき扇逆手に下を指シ〽三年三月、の苦しみの果ての姿を合膝返シ安座の鮮やかな型にみせる。トメは、暗闇を手探りの心に扇翳シ塚へ、入ると面隠す様に扇を翳シ静かに安座、〽（亡者の影は）失せにけり、の返シ句に塚を出た。可憐な乙女の残酷な運命しみじみ思われ哀れ深い。（1時間47分・4月6日・第25回邦謡会能）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成15年6月～7月）

◆ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

6月22日（再）「柏崎」（金春流）　高橋　汎ほか
6月29日　「鐘の音」ほか（和泉流）　野村　萬
7月6日　「歌占」（観世流）　泉　泰孝ほか
7月13日　「松風」（喜多流）　粟谷菊生ほか
7月20日　「千手」（観世流）
梅田邦久、片山九郎右衛門ほか
7月27日（再）「花筐」（金剛流）　宇高通成、松野恭悳ほか

◆ＮＨＫ教育テレビ

7月20日(日)　15：00～16：30
狂言「末広がり」　野村万作、野村萬斎
狂言「蜘蛛人」　野村万作、野村万之介

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［6月］
22日(日)　名古屋淡交会別会　（有料）
29日(日)　也留舞会・信誤会合同発表会　（無料）

［7月］
4日(金)　能楽同好会ゆかた会　（無料）
6日(日)　狂言三の会定期公演　（有料）
13日(日)　名匠狂言会　（番組①面）（有料）
18日(金)　市民能楽セミナー名古屋能楽堂定例公演　（番組①面）（有料）
19日(土)　七彩会　（無料）
20日(日)　名古屋観世会定式能　（番組②面）（有料）
21日(月)　第4回伝統芸能上演会　（番組②面）（無料）
27日(日)　第7回鏡座公演　（番組②面）（有料）

第4回御酒落 名匠狂言会
7月13日　名古屋能楽堂

狂言大蔵流・和泉流の人間国宝の競演として、「第四回御酒落（おしゃらく）名匠狂言会」が7月13日(日)名古屋能楽堂で催される。午後1時30分開演。

「御酒落」は、狂言共同社創立の中心となった初代井上菊次郎、伊勢門水らが当時流行の「倶楽部」（くらぶ）をもじり参加した「愛知酒落部」（あいちしゃらくぶ）、通称「御酒落会」（おしゃらくかい）に因っている。自ら狂言を楽しみ、狂言に遊び、軽妙・洒脱と評された先人の心をしのびつつ、現代の名匠、名人の芸、達人の技を鑑賞する狂言会。（番組①面）

廣田後援会能
第100回記念公演
能「道成寺」上演
7月13日　金剛能楽堂

京都　金剛流・廣田後援会では、同後援会演能が百回を数え、これを記念してきたる7月13日(日)京都の新金剛能楽堂で「道成寺」（シテ廣田泰能）を上演する。（番組①面）

12時30分開場、午後1時30分開演。

指導・宗家金剛永謹、後援・京都市・金剛会、協賛・顕本法華宗総本山妙満寺、紀州道成寺観光レストラン雲水

入場料　A席（指定席）1万円、B席（自由席）7千円、（学生席）5千円

問い合わせ・お申込み
後援会事務局＝京都市左京区下鴨東高木町16・廣田陸一方、TEL・FAX075・722・9123▽廣田泰三方・TEL075・781・3421▽廣田幸稔方・TEL075・722・9123▽廣田泰能方・TEL075・213・1727、またはローソンチケット（Lコード51345）▽京都会館プレイガイド・TEL075・771・6056

新金剛能楽堂は京都市上京区烏丸通一条下ル、TEL・FAX075・441・7222（烏丸今出川交差点南西角、南へ徒歩5分）

能・狂言の世界 4回シリーズ
豊田市能楽堂で能楽講座

豊田市能楽堂では、七月、八月、十月、十二月の四回にわたって、「能・狂言の世界」講座を開催する。

このシリーズは、豊田市・豊田市教育委員会主催、豊田市文化振興事業団の共催で、昨年第一回を開講したにのつづき、本年も開催するもので、毎回異なる魅力的な講師を迎えて、様々な角度から能・狂言の楽しみ方を講演する。

シリーズの講座内容は次のとおり。

▽7月19日(土)2時開講
「秘曲〝釣狐〟の秘密」～和泉流と大蔵流の演者に聞く～
講師・野村小三郎氏（和泉流狂言方）茂山千五郎（大蔵流狂言方）

▽8月30日(土)午後2時始
「能で見る源氏物語」～葵上・野宮・半部・住吉詣～
講師・高橋　亨氏（名古屋大学大学院教授）

▽10月29日(水)午後6時半始
「能を活かす漢詩の魅力」～道成寺・楊貴妃・砧・弱法師～
講師・石川忠久氏（二松学舎大学学長）

▽12月11日(木)午後6時半始
「謎の吉野・熊野」～能に見る歴史の裏面～
講師・阿部　泰郎氏（名古屋大学大学院教授）

司会は柳沢新治氏（豊田市能楽堂企画運営委員）

会場　豊田市能楽堂
参加費　一回券千円（各講座）と）通し券二千五百円（友の会会員は一割引、学生は半額）
問い合わせ　豊田市能楽堂（TEL0565・35・8200）

京都・金剛能楽堂演能
廣田後援会能

七月十三日(日)午後一時三十分開演
京都・新金剛能楽堂

番組

御挨拶　廣田泰三　廣田幸稔

舞囃子　熊野　廣田陸一　石井嘉彦　林光寿　光田洋一　地謡　豊嶋晃嗣　幸洋　今井清隆　種田道雄　松野恭悳

仕舞　箙　廣田幸稔
遊行柳　廣田泰三

別習一調　勧進帳　金剛永謹　曽和博朗　地謡　塚本嘉樹　種田道一　宇高通成　松野洋樹

――休憩――

能楽　廣田泰能　道成寺　殿田謹吉　河村総一郎　大倉源次郎　前川光長　杉市和　間　開久英志　坂苗融　茂山千五郎　茂山千三郎　鐘後見　松野恭悳　金剛永謹　松野洋樹　今井克紀　鳴崎暢久　狂言鐘後見　茂山宗彦　茂山逸平　松本薫　茂山正邦　茂山宗彦　松本　後見　廣田幸稔　廣田泰三　豊嶋幸洋　地謡　宇高竜成　山田安広　塚本嘉樹　豊嶋晃嗣　掛川昭二　宇高通成　今井清隆　種田道一

附祝言

指導　宗家金剛永謹
主催　廣田後援会
後援　京都市・金剛会
協賛　顕本法華宗総本山妙満寺　紀州道成寺観光レストラン雲水

入場料　A席（指定席）一万円　B席（自由席）七千円
問い合わせ　後援会事務局　☎075・722・9123　☎075・781・3421

名古屋能楽堂演能案内
能楽同好会ゆかた会

七月四日(金)午前十時開演
名古屋能楽堂

素謡「源氏供養」仕舞「経正」ほか
［入場無料］
問い合わせ先　梅田方（841・4632）

第4回御酒落　名匠狂言会

七月十三日(日)午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

狂言組

鬼瓦　太郎冠者　茂山千作　主人　茂山茂
子盗人　盗人　大野弘之　何某　井上靖浩　女　佐藤融
奈須与市語　鹿島俊裕
寝音曲　太郎冠者　野村萬　主人　野村祐丞
牛盗人　兵庫三郎　井上祐一　牛盗行　佐藤友彦　太郎冠者　佐藤融　次郎冠者　今枝靖雄　長兵衛の子　米倉宏貴

前売券（全席指定）S席7500円　A席5500円　B席3500円
※当日券は全席500円増
取り扱い＝チケットぴあ、出演者および狂言共同社（052・834・6112）

名古屋能楽堂定例公演
――市民能楽セミナー――

七月十八日(金)午後六時三十分開演
名古屋能楽堂

狂言のお話……佐藤友彦
能のお話・実演……東川光夫・衣斐愛

（和泉流）狂言　雷　雷　井上靖浩　薬師　井上祐一　地謡　佐藤融　大野弘之　今枝靖雄　小鼓　柳原冨司忠　後見　今枝郁雄

（宝生流）能　鉄輪　女　衣斐正宜　安倍晴明　杉江元　夫　杉江浮　大鼓　筧鉱一　太鼓　鬼頭好信　小鼓　柳原冨司忠　笛　鹿取希世　問　壮人　佐藤友彦　後見　竹内澄子　玉井博祐　衣斐愛　地謡　竹内良伯　竹内浮一　稲川寿一　水上輝和　平田正文　東川光夫　久野幸三　佐藤耕司

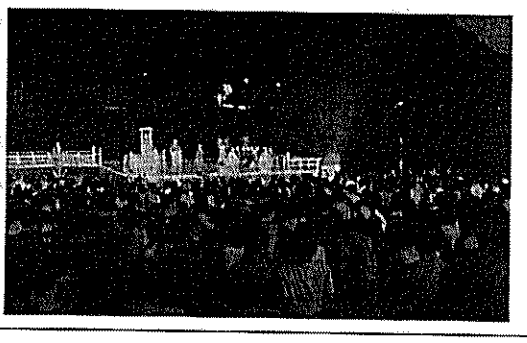
（午後八時五十分頃終了予定）

主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・㈶名古屋城振興協会
㈶名古屋市文化振興事業団
協賛　能楽協会名古屋支部

［入場料］
前売一般二千五百円、学生千五百円
（当日一般三千円、学生二千円）
取扱所　名古屋能楽堂（052・231・0088）
チケットぴあ（052・320・9999）
市内プレイガイド

第17回 長良川薪能
能「養老」8月1日開催

岐阜市主催の「長良川薪能」は漆黒の金華山と清流長良川を背景に幽玄の世界を創り出す東海地方最大の観客数の能イベントとして知られているが、ことし第17回目を迎え、九世観世銕之丞師を迎え能「養老」が上演される。



清流長良川畔で行われる「長良川薪能」＝平成14年薪能より

とき　8月1日㈮
開場17時30分、開演18時
ところ　岐阜グランドホテル前、長良川河原・特設舞台（雨天増水等は中止）
主催　岐阜市
主管　㈳岐阜青年会議所
演目
能「養老」観世銕之丞
狂言「鈍太郎」井上祐一
舞囃子「班女」観世栄夫

なお初めて能を鑑賞される方にも分かり易く楽しんで頂けるように従来の大型マルチビジョンによる映像で、後方に着席された方にも演者の表情（能面）や動きなどが分かり易く鑑賞できるとともに、演目中に無料の「FMラジオ解説サービス」を行う。FM受信が可能なイヤホーン付きラジを持参することで利用が可能。

問い合わせ先
㈳岐阜青年会議所（岐阜市神田町2－2、岐阜商工会議所ビル内、電話058・264・8090）長良川薪能委員会（委員長・広瀬寧氏）

能「羽衣」「安宅」
7月29日 大阪城薪能

大阪

第23回大阪城薪能は7月29日、大阪城西の丸庭園で行われる。開演午後6時。

演目は、金剛流能「羽衣・替之型」（金春安明）
大蔵流狂言「千鳥」茂山千作、茂山忠三郎
観世流能「安宅・勧進帳・滝流之伝」（梅若六郎）

入場料　前売＝一般3300円、高校・大学生2000円、当日一般4000円、高校・大学生2500円
前売場所　関西主要プレイガイド、チケットぴあ（0570・02・9988
主催　読売新聞大阪本社、読売テレビ
後援　大阪府、大阪市、同各教育委員会、大阪21世紀協会など

問い合わせは、読売新聞大阪支社・事業開発部大阪城薪能係（TEL06・6366・1848）

能の魅力を探るシリーズ
大槻能楽堂自主公演能

大槻能楽堂自主公演能では、5月から「能の魅力を探るシリーズ」として、《平安時代を牛耳った藤原一族の謎》をテーマに、5月10日「海士」（浅見真州）、6月7日「雲林院」（野村四郎）を上演、さらに6月28日㈯復曲「菅丞相」（シテ梅若六郎、ツレ山本博通）、ワキ中村弥三郎）で上演。

7月13日㈰は能「玄象」（シテ観世栄夫、ツレ上田拓司、西村高夫、武富康之、ワキ江崎金治郎）で上演。

各回とも井沢元彦氏の「お話」が行われる。いずれも午後2時開演。

入場料　当日四千三百円、学生二千八百円。発売所　チケットぴあ、ローソンチケット、阪急プレイガイド、大槻能楽堂（TEL06・6761・8055）

大学公開講座　能楽セミナー
能に注がれた外国人の眼
法政大学セミナー

法政大学大学院、野上記念法政大学能楽研究所、エクステンション・カレッジ公開講座、「第8回法政大学能楽セミナー」は「能に注がれた外国人のまなざし」をテーマとして、7月1日から16日まで5回にわたって開講される。

今回の能楽セミナーは、同時開催の能楽資料展「世界の中の能～外国人の能楽研究～」と響き合うテーマで取り上げられ、外国人による能・狂言の翻訳、研究、エッセイや創作、海外での公演の軌跡をたどりながら洞察に迫るものと注目される。

セミナー日程、テーマは次のとおり。時間はすべて午後6時半～8時。

▽7月1日㈫「先駆者たちが見た能楽」～チェンバレン、ウェーリーほか、講師川村ハツエ氏（歌人）
▽7月2日㈬「ペルチンスキーの能面研究」～甦る《日本の仮面・能と狂言》講師西野春雄氏（法政大学能楽研究所所長）
▽7月8日㈫「総合的な能楽研究をめざして」～翻訳、演技、演出～、講師モニカ・ベーテ氏（大谷大学教授）
▽7月9日㈬「海外公演で感じたこと」～ヴェネチア演劇祭ほか～　講師観世栄夫氏（能楽者・シテ方観世流）
▽7月16日㈬「クローデルと能」～あるいはクローデルによる能～　講師渡辺守章氏（放送大学副学長、東京大学名誉教授）

会場　法政大学（市ヶ谷キャンパス）ボアソナード・タワー26階スカイホール
募集人員　各回百五十名（定員に達し次第締め切り）
受講料　全講座＝一般一万一千円、大学院生・学生七千円
一講座＝一般三千円、大学院生・学生二千円
申込み先＝東京都新宿区市谷田町2－15－2　法政大学大学院事務部、TEL03・5228・0550～2、FAX03・5228・0555

能と民俗芸能
武蔵野大学

武蔵野大学（旧武蔵野女子大学）能楽資料センターでは、平成15年度の公開講座として、「能と民俗芸能」をテーマに4回にわたり開講する。

▽6月19日㈭「祭りと芸能」
並木宏衛氏（武蔵野大学教授・能楽資料センター研究員）
▽7月17日㈭「沖縄の組踊り」
當間一郎氏（沖縄県立芸術大学講師・沖縄芸能史研究会会長）
▽10月30日㈭「壬生狂言－聖と俗の万華鏡」
八木喜久男氏（壬生大念仏講中世話役）
▽11月20日㈭「黒川能－もう一つの猿楽能」
大谷　淮氏（能楽研究家）

聴講無料・予約不要
時間　午後2時40分～4時10分
会場　武蔵野大学グリーンホール（住所＝東京都西東京市新町1－1－20）
能楽資料センター電話0424・68・3147（火～木曜日）

七彩会

七月十九日(土)午前十時始
名古屋能楽堂

能、舞囃子、仕舞ほか
［無料］

主催　七彩会
竹内澄子

名古屋観世会定式能（普及公演）

七月二十日(日)十二時三十分開演
名古屋能楽堂

能
久田勘吉郎
久田勘鶴
自然居士　飯富雅介　橋本宰　笈鉱一　柳原富司忠　大野誠
間　佐藤友彦
後見　祖父江修一　小島一英
地謡　外山圭一　松山幸親　本田勲　加賀敏彦　上野嘉宏　梅田邦久　上田貴弘　清沢一政
仕舞
邯鄲　武田邦弘
鉄輪　上田貴弘
地謡　高島良一　高橋瞭一　小島一英　須部甫

狂言
八幡前　井上靖浩　井上祐一　大野弘之　今枝靖雄
後見　鹿島俊裕

能
安達原　古橋正邦　高安勝久　相元正樹　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤洋輝　竹市学
間　佐藤融
後見　上野嘉宏　梅田邦久
地謡　高島良一　松山幸親　本田勲　須部甫　高橋瞭一　祖父江修一　武田邦弘　清沢一政
（終了四時半頃）

附祝言
［有料］
当日券五千円（自由席）
主催　名古屋観世会

愛知県芸術文化選奨文化賞受賞記念
第四回 伝統芸能上演会

七月二十一日(祭日)二時半始
名古屋能楽堂

狂言　附子番組
太郎冠者　井上靖浩　主人　佐藤融
次郎冠者　佐藤友彦
後見　鹿島俊裕

能
小鍛冶　長田鞆　飯富雅介　相元正樹　佐藤融　笈鉱一　後藤嘉津幸　鬼頭好信　大野誠
間　加藤誠子　平塚昭子
後見　伊藤英毅　神戸勝二　吉川寛治
地謡　長田郷　和谷衡市　中村正

平曲　宇治川　今井勉
地唄舞　くろかみ　立方　西川眞乃女　唄・三絃　久米雅子
箏曲　千鳥の曲　胡弓　澤田孝子　箏　今井勉
三曲　八重衣　箏　花木美弥　三絃　久米雅子　尺八　岩田律園
（終了五時頃）
主催　東海能楽研究会
後援　名古屋市教育委員会　愛知県教育委員会

入場無料
御来場歓迎

第7回 鏡座公演

七月二十七日(日)午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

安宅
舞囃子
延年之舞　大槻文蔵　谷口有辞　後藤嘉津幸　大野誠
地謡　今村一夫　上田大介　泉嘉夫　河村和重　武富康之

狂言
三人片輪　シテ　野村小三郎　アド　奥津健太郎　小アド　野村又三郎　小アド　松田高義

江口
一調一管
謡　林喜右衛門
笛　大鼓　河村総一郎　藤田六郎兵衛

天
味方能
鼓　飯富雅介
間　野村小三郎　河村眞之介　成田達志　上田慎也　大野誠
後見　林喜右衛門　武富康之
地謡　河村晴道　河村和晃　松野浩行　田茂井廣道　今村一夫　上田大介　松浦信一郎　大槻文蔵　河村和重
（終了　午後4時頃）

主催　能楽「鏡座」
味方　団・大野誠
後藤嘉津幸・河村眞之介
野村小三郎
名古屋市中区平和1－20－4
野村事務所気付

入場料
指定席（正面・脇正）四千五百円
自由席　三千五百円
学生券　千五百円
（学生券は直接鏡座へ申込む）
（当日は各五百円増）
取り扱い　鏡座（TEL090・7671・8945）
チケットぴあ（052・320・9999）
お近くのチケットぴあスポット、ファミリーマート、サンクス、セブンイレブンでも取り扱い

戦後名古屋能楽史 ㊹

〔第十一章〕

昭和三十二年（一九五七）

竹尾　邦太郎

（承前）

十一月三日、文化の日、能楽協会名古屋支部長・田鍋惣太郎が愛知県文化功労者として県教育委員会から表彰を受ける。十日、観世会第五回（納会）は素謡「放下僧」竹内六郎、「松虫」武田太加志、「井筒」梅若六郎、「千鳥」野村又三郎、「大江山」山本博之、大鼓の三王礼夫の来演が珍しい。十五日、東京・大阪に次ぎ全国三番目、市民待望の地下鉄が名古屋駅と都心の栄町間に営業運転を開始する。駅名は名古屋と栄、これで都心がぐっと便利になるが、このためもあろうか同日久しぶりの松坂屋ホール能舞台では九皐会秋季大会が開かれ、伊藤次郎左衛門が素謡「木曽・願書」のシテを勤め、番外に観世喜之の「井筒・物着」がある。

この月、下旬には東西で新作狂言が初演され、二十三日、服部如見作「呑んだの聖天」茂山七五三、千之丞は京都・離見会、二十九日、三宅藤九郎作「十字架」三宅藤九郎・松本幸四郎は十字架発表会、二十五・六の両日には能・狂言様式による矢代静一作・武智鉄二演出の「絵姿女房」桜間道雄・茂山千之丞ほかが東京赤坂砂防会館で行われ、十二月三・四日には冠者会で深沢七郎原作・岡本勝巳脚色・岡倉士朗・横道万里雄演出の狂言形式による「楢山節考」が野村万之丞・万作・茂山千之丞で初演される。

前後するが十一月二十五日、第二回掬水青陽会研究発表会は「清経」加藤丈太郎、仕舞「野宮」柴田初太郎、「蝉丸」観世武雄、「紅葉狩」「清水」井上礼之助、「紅葉狩」河村鉦二。月が替り十二月二日、戦後日本の一大灌漑事業・愛知用水の工事が着工、狂言「水掛聟」にみる水争いも解消されることになる。四日、能楽が国の第五次重要無形文化財に指定され、重要無形文化財保持者四十名が綜合認定される。法による文化財保護の概略の推移は明治三十年「古社寺保存法」、昭和四年「国宝保存法」、昭和八年「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」、昭和二十五年「文化財保護法」、ここに来て初めて国家による無形文化財の保護が明記され、昭和二十九年にこの「文化財保護法」が改正されて現行の指定制度が設けられ今日に至る。

因みに認定された四十名は次の通りである。梅若万三郎・梅若実・梅若六郎・観世華雪・観世銕之丞・橋岡久太郎・観世喜之・島沢啓次・藤波順三郎・大槻十三・宝生九郎・近藤乾三・武田光雲・高橋進・田中幾之助・喜多六平太・喜多実・後藤得三・佐藤章・豊嶋弥左衛門・桜間道雄・本田秀男、松本謙三・宝生弥一、藤田大五郎・寺井政数・杉市太郎・大倉六蔵・北村一郎・幸祥光・小早川靖二・幸円次郎・亀井俊雄・吉見嘉樹・安福春雄・柿本豊次、野村万蔵・三宅藤九郎・茂山弥五郎・山本東次郎。このメンバーにより喜多六平太を会長とする日本能楽会が設立されるが、人選をめぐり東京偏重地方軽視を理由に京都支部（支部長・片山九郎右衛門）は能楽協会理事長・宝生九郎の不信任を声明する（翌二月収束）など紛糾する。また当時、朝日新聞社々友で金剛流の流友でもあった栗林貞一（『能謡新風』『能謡名所旧跡』『能楽の話』などの著作がある）は流誌『金剛』第13巻第1号に次のように書く。「四十人のうち東京在住者が三十五人、京都が二人、京阪神が三人という分布で、しかも関西在住のシテ方としては豊嶋師と大阪の大槻十三氏の二人だけなのである。芸本来からいえば、その所在が関東であろうと関西であろうとその他の土地であろうと選考には無関係のはずのものであるが、実際にはそうでなくて、東京在住者に重点が置かれているのは、争えない事実である。／今度の文化財選定についても、地理的分布において絶対に公平とは言えないと思う。私の狭い視野から考えても、あの東京の顔ぶれなら、京阪神でも二、三は同格の人がある。また中京でも田鍋惣太郎氏の如きは加えられて然るべき人である。氏は小鼓幸清流の長老であるばかりでなく、中京能楽界にはなくてはならぬ存在で、大正以後の名古屋能楽界は、氏を中心として動いていると言って決して過言でない。（抜粋）名古屋では『狂言』紙第11号の編集後記で「十一月二十三日能楽を重要無形文化財として四十余名が指定されましたが誠に東京本意で申請されている。当地としても適格者として推薦すべき人が一人や二人はあるはづであるのに名古屋はどこまでも田舎者として取扱はれていると思はれるのはひがめだらうか？」と編集子は嘆き、また同紙第12号では、頓狂子なる人物が「群盲探象的な能楽無形文化財の指定」の見出しで次のように論評する。「－前略－、先般文部省で無形文化財能楽関係の保持者の認定が行われた。其顔触れを見ると実に驚くばかりへんてこな事に気がつく。勿論其半分以上には全国中の何人と雖も異論のない立派な方々もあるが、中にはどうしてこんな人間が入れられたか、全く不可解な人も交って居る。今回の其人選の経過など、詳しい事は知らないが、色々の人々から、色々の事情を聞いて綜合的に考えられるのは、前記の群盲探象的な感じである。

聞く処によれば文部省側と能楽協会側とから各十人の詮衡委員を出して詮衡された由であるが、これ等の詮衡委員の中には、全国の能楽人に関する智識、即ち力量、技能の詳細に渉って知悉して居る人が如何程あるかが第一の疑問である。なる程学識に於いて、又社会的地位に於いては申分のない御立派な方々でも、東京の能楽界の事情には明るくても地方の能楽人の実態は殆ど知られて居ない事と思われるが、斯様の人々によって撰ばれたとすれば、あの様な変なものが出来上るのが当り前で、群盲探象的な詮衡と言う外はあるまい。斯様の半ば片輪的な詮衡者を認定した文部当局の方々は何と御考えになって居る事だろう。

猶一部の声として詮衡委員の中に、或る一、二流の為に特に引寄せ、支持せんとした傾向が強く出て居るとの事を耳にしては、甚だ以て奇怪至極と言うべく誠に不純な気分を起させられるのみで何としても遺憾極まりない事ではないか」と辛辣である。更に前記『金剛』誌では村松繁夫（大阪・NKB）が「重要無形文化財をめぐって」と題して次のように言う（一部抜粋）。「由来芸界に於ける斯かる人選はとかく物議を醸す種となるものである。相撲界などのように、力が明確に計られ、地位が判然としている所なら問題ともならないのだが、芸界、殊に能楽界は各流各派が入り乱れ、我れか、おれか、の自尊心のお高い面々の集りであるから、これは甚だ以て難しいことである。／保持者選定に当って、二十名から成る審議会が設けられ、そこで詮衡が行われた由である。その二十名は、学識者、評論家等第三者側から半数の十名、残る半数は協会側から選定されのだが、この審議会を構成する協会側即ち楽師の殆んどが指定されているのだから、お手盛りといわれても仕方がない。丁度横綱審議会に、若乃花や朝汐が出席しているような不可解なことが、当然行われるという、能楽界は不思議な世界なのである。どうも一般社会では通用しない、我々の考え及ばない、紫の雲の彼方の出来事である。／本来他の社会でなら、選定されるべき人が、審議に加わることは許されないのが常識である。たとえ委嘱を受けても、それは筋が違います、と辞退するのが世間一般である。にも拘わらず、いわゆる第三者の諸先生方だけには任してはおけない、素人に何が解るか、的な考えが、今日といえども能楽界の根強い地脈をなしていて、こういう構成による審議会を作らねばならなかった、そうしないと事がスムースに運ばなかった、というのは、能楽界にとって、悲しむべきことではないだろうか。とにかく、この審議会で、最初十六名から順次増加して行って、終に四十名選定となった。高度の技術を保持し、これを正しく伝えて行く役目を持つ人は、能界人多しといえどもそう多くはある筈がない。当初の十六人で事が決っていたなら、今度のような騒ぎが起らずに済んだかも知れない。十六名から追々水増しが行われて行った事実は、何としてもマズイやり方だった。しかも、かく増員したことが、審議会のお手柄のように伝えられているのは、愈々以てズレている感が深い。

能楽にはシテ方、ワキ方、狂言方、囃子方等に沢山な流派が存している。それらの流派は各に異った主張を持っているので、能楽を伝えて行く上で、これらの流派を尊重して行かねばならないのは当然である。個人の資格を検討するよりも、その流派の持つ伝統を正しく保持する人を選出する方が筋が通っているのではないか。それなら各流派に一人ずつ出て貰えば、それで立派に能は無形文化財として後世に伝わって行くものと思う。こういう考え方からすれば、今度の指定は、明らかに、大流といえども中には異った数分派が裏面に対立していることを、世間に暴露したようなものではないか」と。

十二月八日、宝生会定式能第三回、素謡「松虫」辰巳清、独吟「駒ノ段」錦見恩津代、仕舞三番「網ノ段」西村若子、「越」倉本雅、「花筐」畑富次、「班女」辰巳孝、「薩摩守」佐藤友彦、「小鍛冶」内藤泰二、これが実質的に昭和三十二年度の納めの催会となる。

十一日、表が板垣退助の肖像、裏は国会議事堂全景を写す百円紙幣に替り百円硬貨が発行され、二十八日にはNHKと日本テレビがカラーテレビ実験局（VHF）を開局する。

◆晩春から初夏の舞台◆

「椿宮神事能」「観世会」「第三十三回鳳の会」と「名古屋能楽堂定例公演」「九皐会」

竹尾邦太郎

椿宮神事能「鈿女」金剛永謹
（原田七寛氏撮影）

「鈿女」伊勢一宮、椿大神社の春季例大祭に奉納される神事能。初演以来本年は三十年、例外一度を除き金剛宗家の出仕。

神職ワキ大、祝詞を上げる折柄、現われる里女シテ永謹（面増女・襟白赤・露芝文白摺箔着付・紅地流水花筏文唐織）を咎めれば社の縁起に詳しく、御神楽しばし待たれれば再び姿見せようと小宮に消える前場、是閑作の面の品位は前年の新面より当然ながら遙かに優れる。後場、〈神体新たに見え給ふ、と引廻シ取ると床几に後シテ天鈿女尊（あめのうづめのみこと）、面・襟・着付は同断で葛ノ天冠に前年は付けなかった黒垂、緋大口・白地雪輪文舞衣壺折の姿も神々しい。四手麻緒付榊で舞う永謹の神楽は伸びやかに大きく神遊びの悠揚。故事の現地に見る古能のよさは、現実を離れ、いっとき極しを与えてくれる思い、これぞ神慮であろう。（1時間8分・4月11日・椿宮神事能・於神楽殿）

「巴」シテ慶次郎、神前に涙したことワキ勝久に不審され「愚かと不審し給ふや」と問答に意中を説くところ、里女の勝気な性格を気合の籠もる詞にみせ、後シテ巴御前の気魄さこそを思わせる。中入前、入相の鐘の音の浜へ伝播するを面伏せて聴き、〈（波に）響き、とスッと立つや〈（いづれも）物凄き折節に我も亡者の、とワキへ左袖アシラヒ詰メルところ、後に現れる決意仄めかす。

半袴出立のアイ黒人は高義、木曽殿と巴との顚末を居語十一分の長広舌にじっくり聞かせ精彩。ワキの「慮ろに承り候ものかな」が実感である。

観世会「巴」片山慶次郎
（杉浦賢次氏撮影）

後シテ面増は同断、髪帯・着付を替え、濃緑大口・紅地亀甲地紋団扇文唐織壺折・小太刀・梨子打。長刀を後見に懐中の扇取り床几に掛かるクセは、義仲の草の露と消えた〈所は此處ぞお僧達、とワキにアシラヒ面伏せ〈弔はせ給へや、の痛恨。義仲最期を語るロンギは、〈かかりし處に、と立ち、駈け寄る心に膝をつき〈見奉れば、と重傷の義仲見守る態は沈痛。また、〈巴はともかくも、と左手微かに霞えるかに涙に咽ぶシオリの愁嘆、など慶次郎表現力の繊細。〈かくて、と立ち〈（あれは巴か）女武者、と後見から再び長刀取ると戦闘場面は橋懸へ、繰り出す長刀捌きは柔らかく鮮やか。〈立ち帰り、で長刀を後見がひき、脇正で膝つくと扇開き左手に義仲の遺品受ける型も美しい。キリは、〈物具、で烏帽子を、〈梨打、で唐織を脱ぐが〈御小袖、は先に白練を着込んで居り、太刀を〈衣に引き隠し（写真）、て立つと発って行くところ、横板で後見は太刀をひき、笠を手渡す。それを翳し橋懸を〈一人落ち行きし、後めたさは、笠を脱ぐと振り返り

（④面へつづく）

〔訂正〕

5月号3頁、青陽会能「西行桜」梅田邦久とあるのは、久田勘鶴の誤りでした。

また、次の個所に間違いがありました。訂正します。

3頁5段目「浮草」とあるのは「浮舟」、同8段目「松の奏風」とあるのは「松野奏風」、4頁2段目後ろから7行目「するが」は「する、が、」、同3段目後ろから8行目「放銀」とあるのは「放吟」、同3段目後ろから「愚考」とあるのは「愚行」

以上お詫びして訂正します。

（③面よりつづき）

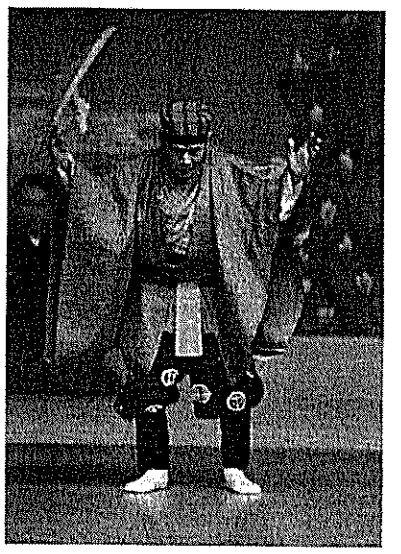
ワキを見込む寂しみ。沁々した情感は、太刀と笠を捨てないので無粋な音は立たず、勇婦の中の女心スマートにみせた。（1時間26分）

「名取川」　シテ僧・又三郎、付けて貰ったばかりの僧名を失念するを恐れ、節を付け反復するうち面白くなって拍子に掛り舞節・踊り節・勤行節と調子に乗ってくるところ、川を渡るに深みへ嵌り気も動転の度忘れ。衣に控えた備忘の墨痕も流れ、さらば掬おうと（写真）川尽しの小舞謡、鼻歌交じり様の呑気に謡いながら川底を浚う。又三郎の巧さ溌剌と若々しい。僧が楽しげに魚を追うと見て咎めるアド名取ノ何某・小三郎、頓珍漢な問答となって当惑の場面がまた達者。（24分）

「天鼓・弄鼓」　シテ王伯・六郎。小書で子を喪い老残の身を託つことを云う一セイから上歌までを省き、直ぐワキ勅使・雅介の呼出。唐帽子で面小牛尉・白垂（褐色の）のシテが連座覚悟をへあら嘆くまじや、とワキへアシラへば、へいやいや、と遮るワキ、両者の思い直裁に出て面白い。このシテの覚悟も常座に出れば萎え、容赦を願う下居合掌が「叶ふまじ」と分れば〳〵玉殿に初めて臨む老いの身、立つとサシ込ヒラキの型に再び気力をみせる。しかし、いざ玉殿は大小前に下居すれば、思いは断ち切られた親子の絆、居グセの傷心は惻々と胸に迫る地（九郎右衛門・邦久ら）の好調。時移り、へ急いで鼓打たうよ、のロンギで立つと、へ老の歩み、は扇腰に差し作物へ。心許無げに撥取り〳〵打てば、と一打。面伏せ聴き入る風情に孤愁があり、一つ亦一つ撥取り落とし退り安座双シオリの胸のうち、六郎心境描写の繊細。中入はアイ小三郎の送込である。

後シテ天鼓ノ亡霊は可憐な童子、弔いを喜び、ワキとの掛合から〳〵（菩薩も）此処に、と唐団扇を後見に渡すと楽（ガク）は撥で舞う。撥を左手に替え、二ノ松に抜けて袖被キ作物見込み、舞台に戻り打つと（写真）抜き足の様に大小前に退り頭を左右に振る喜悦の心、スミから左へ作物の後ろを廻るのは文字通り嬉しく鼓を弄ぶ心。キリは、へ風冷やかに夜も更けて、で左右鋭く面使うのが風の冷たさ、時の経つ速さに驚くかに思え象徴的。型所流れる様に決め、へ現か夢か、と撥捨て袖被キ膝をつくと、直ぐ袖を払って立ち、袖返スと拍子踏まずトメ、後シテは若々しく爽やかな舞ぶりだった。（1時間21分・4月13日・観世会）

観世会「天鼓・弄鼓」梅若六郎
（杉浦賢次氏撮影）



観世会「名取川」野村又三郎
（杉浦賢次氏撮影）

「引敷聖」　「二人袴」と同工、稀曲だが前年やるまい会で上演。聖入支度に袴の借用を何某・政行に申入れるシテ融、偶々手許に持ち合わせない何某は一つある素袍の上衣を穿かせ、後ろが心許無いと引敷（山仕事や騎馬の者が尻に敷く皮）を当てさせる。政行の親身の世話がほのぼのと、流石年功。しかし、体裁は繕えど祝儀の盃事で引敷を男・友彦に気付かれ、「鹿野から直ぐに野駈けでござる」の弁明も空しく、更に所の習いの一言で舞を迫られる。二度までは後ろ気取られず舞い、就中、二度目は〳〵月をも共に眺めばやの、と小舞謡「花の袖」は月ノ扇、舞上げては「ははははは」と軽い乾いた笑い声、にしてやったりの心をみせて融に進境。キリは舅との相舞、尻を見られるのは「二人袴」同断。（36分）

「腹不立」　堂の施主（建築主）靖浩・靖雄、堂に似合わしい僧を探して出遇ったシテ祐一を打診。

「もし経はお読みなされるか」の失礼な問いに、僧になりたての見栄は大般若経六百巻云々と経典しゃあしゃあと並べたて、「モシ経と申す経は覚えませぬ」と恬然。口中ぶつぶつ誦経の癖もハッタリで、温和な表情変えない祐一、持ち味が出る。更に名を問われ、これが思いつき、「腹不立の正直坊」が悪かった。ならば怒らせてみようとばかりに施主二人して僧を挑発、少々えげつない施主の言葉の暴力、苛め行為は当世の一部世相にも通じよう。その方が騒るので「業が燃ゆるわいやい」のシテの悲鳴も、腹を立てれば名に背くこと、「面目もおりない」と泣つ面が身から出た錆とはいえ哀れ。（26分）

鳳の会「千鳥」佐藤友彦・井上祐一
（杉浦賢次氏撮影）

「千鳥」　神事に付きものの酒、滞る払いに無頓着な主・弘之は先刻承知の上で太郎冠者・友彦のオ覚を恃み、酒屋・祐一へ遣る。冒頭、主と太郎冠者との問答は両者気合充分、有無言わせぬ主は、有ろう事か大樽を持たせ「いつもの倉の奥の良い酒を取ってこい」と言い捨て入ってしまう。むっとする太郎冠者だが「また何なりとも嘘を言ふて取ってこ」と諦めは立ち直りも亦早い。「先づこれは見せてはなるまい」と大樽を後ろに置くと、よそよそしい酒屋との応対は懸命に話の糸口を探るのもいじましい。甘言追従にもうかうかとは乗ってこない酒屋、「この分ではこの後が難しい」と嘆息交りの太郎冠者、両者の駈け引きも熱が入る。来る筈も無い米を待つ間の暇潰しは津島祭の様子、酒屋を引き込み身振りを交え語るところ、まんまと引っかけられて酒をせしめられる酒屋の人の好さとゲームに勝った感覚で悪怯れることもない太郎冠者、悪いのは主で、後味は悪くない。ただ山脇派には由鉾巡行の場が無いのが淋しい。（38分・4月29日・第33回鳳の会・熱田神宮能楽殿）

九皐会「大原御幸」
左より、中所宜夫・高橋瞭一・佐久間二郎
（杉浦賢次氏撮影）

「大原御幸」　寡大藁屋の歪み少々気になる中に、面若女・白花帽子・萌黄地九曜ト葵巴文唐織のシテ女院・瞭一、萌黄貶斗目のツレ局・二郎を左、焦茶貶斗目の内侍・宜夫を右に侍らせた姿は上品で美しく（写真）三人共に白花帽子なのが話題に事欠かないのはどうしたころだろうか。囃子は希世・孝一郎・鉱一、主後見匡一。1時間31分・5月16日・名古屋能楽堂定例公演）

「隅田川」　シテ驍、面曲見・襟浅黄・露芝文白摺箔着付・納戸地流水苦舟水草文縫箔腰巻・浅黄水衣・男笠。子を尋ねさ迷う焦燥の心のカケリ、手にする狂ヒ笹に小さな幣三ツが珍しく、神頼みの切実。ワキ船頭・雅介との問答に切羽詰まった人のもつ強さがあり、見馴れぬ鳥に、船頭の「あれこそ沖の鴎候よ」には笹持つ右手に何？と反発の心、ぐっと力が入る。我が子への思い都鳥に掻き立てられ、へ遠くも来ぬるものかな、の感慨は脇正から幕へ笹で指スところ哀れを誘い、一転、眼前の現実に戻ると、へ乗せさせ給へ、と膝つき笹強く一つ打ち〳〵さりとては、と合掌すれば、船頭もほだされる。船上は、笹を置き笠脱ぐとその上に乗せ、右手は膝を抱え、左手は膝の上、硬直した様に身じろぎもせずワキ語を聞く。「さりともさりとも、と思ひしかども」で左手静かにシオルが、船が着いてもそのまま。気持整える心に「なうなう船頭殿、今の物語は」と問いながらシオリ解くと、ワキとの問答に不安が現実となるところ、「さてその後は」と少しずつワキへ向き直りつつ「なうまして母とても」とワキを見上げる悲痛な思い、驍心象描写の巧さ。肺腑振り絞るかのクドキを受ける地（琇鵬・忠弘ら）へさりとては人々、でワキに面切り、へこの土を返して、と塚掘り起こす態から膝行してワキに迫るところ、「藤戸」の老母の様な激しさである。退って凝然と下居に老少不定の無常我が身に痛感すれば〳〵げに目の前の（浮世かな）、と膝音たて安座叔シオリの落胆も表現繊細。念仏の場は、ワキと塚への合掌から〳〵南無や西方、の連吟に哀感も一入。地と子方（園田安耶弥君）連吟の〳〵南無阿弥陀仏、に〳〵今一声こそ、を悲鳴に聞き、幻を見て撞木を取り落とし、その姿を追う辺り焦燥をみる。塚に消えた幻、シテは茫然と幕へ眺めるだけ。キリは、へ草茫々、と塚を右手で撫でる様にし、直ルと両シオリのトメ、母の悲しみは深く、当世もこの種の悲劇、誘拐・拉致・遺棄の

九皐会「土蜘蛛」観世喜之、
頼光・五木田三郎（右端）　（杉浦賢次氏撮影）

九皐会「子盗人」井上祐一
（杉浦賢次氏撮影）

如何にも仏門に仕える尼。淋しくも平穏だが訪客は稀、行く末を案じ袖を濡らすシテとツレ連吟はしっとりと心境を表わす。法皇は喜正、白花帽子・灰白色八ツ藤文指貫・緋水衣・掛絡、実年齢の若さを品位で補い謡も上々。ワキ中納言・勝久は恭謙の態度も謡も爽やかに法皇を支える。

後シテは唐織を白綾に替え紫水衣、内侍から行幸を知り羞恥と懐旧の念のシオリ、へげにや、と床几立ち一ノ松へ。型所へ臘の清水月ならで、と右袖で胸を抱く様にして下を見、また〳〵遠山にかかる白雲、を遠く脇柱へ見上げ、へ池の藤波、を右ウケ下を眺めるなど、風情をみせる。法皇との対面は終始謹直、居グセから床几の語も心持ち充分。へ自らも、と床几立ち、下居に沈み、へ不覚の涙、は両掌を合わせ面伏せるだけ。キリは柱を掴み、へ暫しが程は、と二三歩出て法皇一行を見送り、へ御庵室に、と局・内侍も立ち、シテは中正の方を向き地一杯にトメ。一時間五十分の長尺、瞭一の力演。ワキツレ雅介・元・宰・正樹、アイ靖雄、囃子希世・冨司忠・総一郎、地頭三郎、主後見喜之。

「子盗人」　「博奕の果ては盗みになる」は当世も変らないが庶民の人間味は昔の方が上。忍び入った座敷に寝ている乳児の可愛さにほだされ、仕事そっち退けであやすシテ盗人・祐一（写真）のほのぼのとした温もりが実によい。死語だろうがあやすのに「かいぐりかいぐりとっとのめ」もあったこと思い出す。乳母・靖浩が座敷の様子に気付き、押っ取り刀の主・友彦、児を案じ太刀振り回し威嚇するうち、目釘が抜けたか刀身が飛び、鐔も飛んでしまう。柄だけ振り回す姿は頂けないが、ここぞと児を置き逃げる盗人には好タイミングか。二日続きの御難、万一に備える楽屋内を含めた後見心得も問われよう。（18分）

「土蜘蛛」　「今は期を待つばかり」の頼光・三郎を見舞う胡蝶・喜久、励ましはするが不安隠せぬ心に去ると、知らぬ間に忍び寄る僧形のシテ喜之の無気味は、蜘蛛の糸さっと投げ掛けてくる（写真）手際の鮮やか。後場は、化生の者追討の頼光の命に、武装整えたワキ独武者・雅介と橋懸で対決する後シテ土蜘蛛ノ精の働が壮絶。シテが搦め捕らんと次々繰り出す糸にまみれ、それを斬り払わんとするワキの奮闘も目覚しい。キリはワキとワキツレ二人に斬りかかられ、躱す様に廻ると、最後は両手からパッと糸を投げつけると同時に安座は首打たれる態。流石に仏倒れはなかったが喜之元気なところをみせて意気軒昂、流石を思わせた。（49分・5月17日・九皐会）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　１１００円
郵送の場合　１年　１８００円
一　部　　１００円

ＮＨＫ放送予定（平成15年７月～８月）

◉ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前７時15分～８時）
７月27日（再）「花筐」（金剛）　宇高通成、松野恭憲ほか
故人を偲んで（８月３・10・17・24日）
８月３日　「錦鼓」「蝉丸」ほか（宝生）　松本恵雄ほか
８月10日　「熊野」（宝生）　金井　章ほか
８月17日　「頼政」（観世）　梅若恭行ほか
８月24日　「国栖」（喜多）　喜多節世ほか
８月31日（再）「小袖曽我」「百萬」（観世）　大西智久ほか

第38回　名古屋薪能
8月9日　熱田神宮で

第38回「名古屋薪能」は、きたる８月９日(土)午後５時半から熱田神宮神楽殿前の特設会場で催される。

観世流能「高砂」（シテ高橋瞭一）、宝生流半能「雲林院」（シテ玉井博祐）、和泉流狂言「清水」（野村小三郎）、観世流能「葵上」（梅田邦久）、金春、観世、喜多、金剛各流による仕舞五番の上演、火入式は熱田神宮・宮田理博禰宜により行われる。（番組②面）

前売二千五百円（当日三千円）学生千五百円、取扱い＝チケットぴあ（TEL052・320・9999）、市内プレイガイド、各出演者。

※九日雨天のときは十日、十日雨天のときは十一日に順延。十一日雨天のときは熱田能楽殿。

第２回　名駅・薪能
7月27日　観世宗家来演

名古屋の玄関口、ＪＲ名古屋駅タワーズガーデンで、観世流宗家、観世清和師らが来演して七月二十七日(日)「第二回名古屋名駅薪能」が開催される。

この名駅・薪能は、昨夏始めて名古屋名駅薪能実行委員会（名古屋市中村区名楽町４－16、大黒寺内）主催で行われ、千名を越える観客が鑑賞した。今年はとくにユネスコ第一回世界無形遺産認定「能楽」の〝真夏の夜の祭典〟として開催される。

演能は、観世流能「羽衣」和合之舞（シテ久田三津子）、和泉流狂言「梟山伏」（山伏・井上祐一）観世流舞囃子「高砂」（久田勘鶴）観世流能「船弁慶」重前後之替（シテ観世清和）

観能は、整理券申込みが７月16日まで（抽選）行われているが、当日先着順で立見を含む自由席六百人が用意されている。

開場午後５時30分、開演６時30分。９時終演予定。雨天の場合は名古屋能楽堂（会場変更の場合、ＮＨＫラジオ第一の午後３時55分～４時のニュースの時間に告知。雨天時は名古屋能楽堂。

後援・愛知県、名古屋市、愛知県教委、名古屋市教委、愛知芸術文化協会、ＮＨＫ名古屋、中日新聞社（番組①面）

名古屋城夏まつり薪能
8月1日から12日間

〝真夏の夜のファンタジー〟「名古屋城夏まつり」はきたる八月一日から開催されるが、恒例のイベント「薪能」は初日から十二日まで連続上演される。

開門午後５時、薪能は午後７時より。土、日は午後７時半より。

企画／能と狂言に親しむ会（梅田邦久、藤田六郎兵衛）、協力／能楽協会名古屋支部。

上演曲目、演者は次のとおり。

八月一日(金)能「羽衣」和合之舞（今沢美和ほか）▽二日(土)能「鉄輪」（高橋瞭一ほか）▽三日(日)能「橋弁慶」（久田勘鶴ほか）▽四日(月)狂言「水掛聟」（佐藤友彦ほか）「棒縛」（野村小三郎ほか）▽五日(火)能「千手」（松山幸親ほか）▽六日(水)能「三輪」（前野郁子ほか）▽七日(木)能「葛城」（近藤幸江ほか）▽八日(金)能「班女」（須部甫ほか）▽九日(土)学生能（名古屋大学ほか）▽十日(日)能「小督」（祖父江修一ほか）▽十一日(月)能「葵上」（清沢一政ほか）▽十二日(火)能「小鍛冶」（上野嘉宏ほか）

入場料＝当日九百円（前売八百円）小・中学生／当日三百円（前売二百円）福祉券三百円。

チケット＝チケットぴあ、ファミリーマート、サンクス、ローソン、サークルＫなど。

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

［７月］
21日（月・祝）　第４回伝統芸能上演会　（無料）
27日(日)　第７回鏡座公演　（有料）
［８月］
３日(日)　青陽会定式能（番組①面）（有料）
23日(土)　第19回衣斐正宜後援会能　（有料）
24日(日)　第20回野村四郎名古屋公演　（有料）
30日(土)　鳳の会第34回公演　（有料）
31日(日)　恵美寿会　（無料）

◆熱田神宮◆

８月９日(土)　能楽後継者育成研修発表会　（無料）
８月９日(土)　第38回名古屋薪能（神楽殿前）　（有料）

名古屋名駅薪能

七月二十七日(日)午後六時半開演
ＪＲ名駅・タワーズガーデン

能　**羽衣**　久田三津子　高安勝久　和合之舞　祖元正樹　河村眞之介　久田舜一郎　加藤洋輝　大野誠　地謡　笠田稔ほか

狂言　**梟山伏**　井上祐一　佐藤靖浩　舞囃子　**高砂**　久田勘鶴　井上祐一　佐藤融

能　**船弁慶**　観世清和　福王茂十郎　福王知登　重前後之替　山本順三　佐藤友彦　地謡　久田勘鶴ほか　河村総一郎　柳原冨司忠　観世元伯　鹿取希世　間

主催　財団法人観世文庫
名古屋名駅薪能実行委員会

［入場無料］
整理券六百席抽選、自由席（立見含）六百名

青陽会定式能

八月三日(日)十一時開演
名古屋能楽堂

仕舞　賀茂　三村恵子　蝉丸　今沢美和　地謡　星野路子　生駒里翠　前野郁子　久田三津子

能　**忠度**　近藤幸江　祖元正樹　橋本宰　佐藤友彦　後藤嘉津幸　竹市学　河村真之介　間　後見　三村恵子　久田勘鶴　地謡　星野路子　前野郁子　黒田博　須部甫　加賀敏彦　清沢一政　高橋正邦　高橋瞭一

仕舞　班女　クセ　加賀敏彦　融　梅田邦久　大江山　須部甫　地謡　黒田博　松山幸親　久田勘鶴　高島良一

能　**富士太鼓**　富田哲史　祖父江修一　高安勝久　河村総一郎　柳原冨司忠　大野誠　今枝靖雄　間　後見　前野郁子　武田邦弘　地謡　三村恵子　今沢美和　松山幸親　高橋瞭一　加賀敏彦　久田勘鶴　梅田邦久　加藤保彦

狂言　**痩松**　佐藤融　鹿島俊裕　後見　井上靖浩

能　**鵜飼**　清沢一政　杉江元　杉江淳　井上祐一　福井啓次郎　鹿取希世　間　後見　近藤幸江　梅田邦久　地謡　久田三津子　今沢美和　高島良一　須部甫　加藤洋輝　古橋正邦　武田邦弘　祖父江修一　加藤保彦

附祝言

主催　青陽会
お問合せ　名古屋市名東区一社三の一六二　久田勘鶴方　電話〇五二－七〇五－一五八五

【有料】当日券三千円

暑中御見舞申し上げます

観世清和

幽謳会　片山九郎右衛門　清司

梅猶会　猶諷会　梅若吉之丞

大槻清韻会　大槻文蔵
〒540－0005　大阪市中央区上町Ａ番七号　電話〇六六七六四－〇八九八番

名古屋観衛会　山本勝一
名古屋正花会　山本博通
〒540－0025　大阪市中央区徳井町一丁目三－六　電話〇六六九四二－四〇七〇番

鳳鳴会　武田志房
稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15－3　浅井ビル　電話〇五二（七三二）三七三六

幽花会　片山慶次郎　伸吾
〒603－8123　京都市北区小山下花ノ木町二二　TEL四九二－五三〇二番　FAX四九二－五三〇九番

名古屋観世九皐会　観世喜之　観世喜正　加藤保彦　高橋瞭一　外山圭一

井上嘉介　井上裕久
〒603－8175　京都市北区紫野下鳥田町六

大西智久　大西礼久

財団法人鎌倉能舞台　中森晶三　中森貫太

名古屋演劇ペンクラブ賞
狂言 和泉流 野村又三郎氏受賞

名古屋演劇ペンクラブは、昭和二十六年にペン活動を通じて、演劇をはじめ広く芸能文化の発展に寄与することを目的として設立され、毎年その年の優れた演劇や舞台活動に対して「名古屋演劇ペンクラブ賞」を選定、授賞を行ってきているが、平成十四年度は、狂言和泉流・野村又三郎氏の「寝音曲」の演技に対しペンクラブ賞が授与され、さる七月六日狂言三の会の定期公演会で授与式が行われた。同賞はこれまで能楽界では平成五年に「狂言共同社の百年」の出版で井上松次郎氏が受賞している。

八ヶ岳新能
小淵沢の身曽岐神社

山梨県小淵沢町にある古神道本宮・身曽岐神社能舞台で行われる「八ヶ岳新能」は毎年八月三日行われ、昨年はNHKハイビジョンTVで放映、大きな反響をよんだ。

本年は金春流宗家一門による能二番と大蔵流狂言で幽玄の世界を演出する。

演能は午後五時始、主催国際伝統文化協会。番組は次のとおり。

神事　舞台清め祓い式　宮司　坂田安儀

能「杜若」シテ金春安明　ワキ鏑木岑男

狂言「呼声」シテ大蔵彌太郎

神事　篝火点火の儀

能「国栖」シテ本田光洋、子方花岡哲海、ツレ（姥）本田布由樹、ツレ（天女）井上貫覚、ワキ鏑木岑男、アイ大蔵千太郎、大蔵基誠

笛中谷明、小鼓宮増純三、大鼓国川純、太鼓三島卓

申し込み・問合わせ　山梨県北巨摩郡小淵沢町高天原身曽岐神社、TEL0551・36・3000

蝋燭能
9月7日 豊田市能楽堂

豊田市能楽堂では、九月七日(日)午後五時から「蝋燭能」として金春流能と和泉流狂言「釣狐」を上演する。

能「葵上」（シテ桜間真理）

狂言「釣狐」（シテ野村小三郎）

正面席六千円、脇正面席五千円、中正面席三千円（正面席以外学生半額）

問い合わせは豊田市能楽堂（電話0565・35・8200）

また豊田市能楽堂では、八月イベントとして、八月十九日、二十四日「夏休み狂言教室」（名古屋狂言共同社主催、一人五百円）が催される。

戦後名古屋能楽史 ㊺
〔第十二章〕昭和三十二年（一九五七）

竹尾　邦太郎

能始は一月十二日、前年発足した名古屋学生能楽連盟主催による第二回能と狂言の会は午前の自演の部に続き午後は鑑賞能。「羽衣」内藤泰二、一調「笠ノ段」田鍋惣一郎・前田昌広、狂言「因幡堂」井上礼之助、舞囃子「巴」大塚一二、「土蜘蛛」河村鉦二、で喜多流を除くシテ方四流が出演。十九日、これも前年発足した名古屋宝生会定式能の第二期・第一回。この年以後、宝生会は「何年度」を「第何期」と呼称する。

さて前年、第二回の番組に投票用紙を添付し、次年度の第二期三回の公演曲目各二番とシテ各一人につき見所の希望を求め、出来る限り御意に副う、とのことであったが、その第一回の番組は、素謡「弱法師」辰巳孝、仕舞三番「田村」辰巳清「巻絹」畑富次「春日龍神」内藤泰二、能「鶴亀」鈴木右門、狂言「餅酒」佐藤卯三郎、能「葵上」宝生九郎。見所の思いが反映しているのかどうか、見所側からは得票が明示されていないので不明であるが、珍しい試みである。

二十一日、当地金剛流の有力な後援者で「石橋」「安宅」「望月」も勤めたことのある流友・片岡信一が脳出血で急逝する。戦中、ローマに出陣された金剛家の能面・装束などが戦後返還されるについて、多大な尽力を惜しまれなかったこと（本紙第八章）記憶に新しい。二十六日、土岐善麿作「四面楚歌」を喜多例会で喜多実が初演。現行曲「項羽」よりも虞美人をもっと重要に扱い、垓下の情勢を四面楚歌の中に出すこととした、とは作者の言である。当地での演能はない。三十一日、昭和三十二年度の芸術院賞の受賞を決める選考委員会で第一部美術工芸十名、第二部文学二名、第三部芸能五名の候補者が決まり、第三部に橋岡久太郎の名が挙がる。

（3面へつづく）

ユネスコ第一回世界無形遺産認定「能楽」
能楽後継者育成研修発表会（第11回）

八月九日(土)九時十五分始　熱田神宮能楽殿

舞囃子（観世）須磨源氏　○吉沢　旭　河村眞之介　○船戸　昭弘　○加藤　洋輝　藤田六郎兵衛

居囃子（観世）紅葉狩　筧　鉱一　○福井　悠介　藤田六郎兵衛

居囃子（観世）羽衣　○河村裕一郎　後藤嘉津幸　大野　誠

居囃子（観世）葛城　河村総一郎　○福井　悠介　○加藤　洋輝　藤田六郎兵衛

舞囃子（観世）菊慈童　○久田勘吉郎　筧　鉱一　柳原冨司忠　加藤　洋輝　大野　誠

舞囃子（金剛）花月　○加藤かおる　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市　学

居囃子（観世）吉野天人　河村総一郎　後藤嘉津幸　○鬼頭　伸幸　竹市　学

舞囃子（金春）融　○鬼頭　尚久　筧　鉱一　後藤嘉津幸　○加藤　洋輝　大野　誠

長田 田村　拵　能（喜多）　駿　○杉江　浄　河村眞之介　○船戸　昭弘　竹市　学　間　○鹿島　俊裕　後見　平塚　昭子　谷野允千帆　地謡　○長田　伊藤　和谷　毅　中村　衡市　正

附祝言

（終了十二時半頃予定）

主催　能楽協会名古屋支部　○印　育成会会員

［御来場歓迎］「愛知県文化振興基金事業」

第38回 名古屋 薪能

八月九日(土)午後五時三十分始　熱田神宮神楽殿前

金春流仕舞　経正　鈴木　善　地謡　小島　芳樹　加藤　正嗣　広瀬　雅弘　鬼頭　尚久

観世流仕舞　笠之段　三村　恵子　地謡　星野　路子　今沢　美和子　近藤　幸江　久田三津子

喜多流仕舞　富士太鼓　長田　郷　地謡　中村　和谷　衡市　正　長田　小出　甚吉　駿

全剛流仕舞　大江山　鈴木　昌美　地謡　牧野　元子　加藤かおる　西脇　和子　伊藤　雅子

観世流仕舞　歌占（キリ）　武田　邦弘　地謡　黒田　清沢　古橋　一政　八神　博　正　邦　孝　充

能（観世）高砂　松山　高橋　幸親　瞭一　杉江　相本　大野　元　弘之　間　河村眞之介　福井　良治　鬼頭　竹市　好信　学　外山　黒田　八神　圭一　博　古橋　武田　加賀　敏彦　正邦　邦弘　今沢　久田　須部　美和　勘鵬　孝充　甫　地謡　後見　祖父江　修一

火入式　熱田神宮禰宜　宮田　理博

半能（宝生）雲林院　玉井　博祐　飯富　雅介　筧　後藤孝一郎　鎮一　加藤　大野　洋輝　誠　地謡　後見　竹内　澄子　衣斐　愛　村上　青木　柴田　久野　茂　斎一　賢治　水上　衣斐　輝和　正宜　佐藤　幸三　耕司

狂言（和泉）清水　野村小三郎　松田　高義　後見　佐藤　融

能（観世）葵上　須部　梅田　甫　邦久　空之祈　梓之出　高安　橋本　勝久　宰　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭　大野　好信　誠　間　井上　靖浩　後見　近藤　武田　幸江　邦弘　地謡　高島　松山　本田　高橋　良一　幸親　熱　瞭一　加藤　清沢　久田　祖父江　一政　勘鵬　修一　保彦

附祝言

（終了予定　午後八時四十分頃）

当日券＝三千円（前売券二千五百円）学生千五百円

取扱い＝チケットぴあ、市内各プレイガイド、熱田神宮能楽殿、各出演者宅

※先着千名に団扇進呈

主催　能楽協会名古屋支部

後援　名古屋市・熱田神宮

暑中御見舞申し上げます

宝生英照

近藤乾之助　〒170-0002 東京都豊島区巣鴨五―一三―八　電話〇三(三九一五)一三七六番

佐野由於　〒150-0011 東京都渋谷区東2―14―21　〒921-8004 金沢市泉野町4―15―18―103

金剛永謹

廣田鑑賞会　廣田陛一　廣田幸稔

菊之会　菊扇会　廣田泰三　廣田泰能

豊嶋能の会　豊春会　豊嶋三千春

金春信高　金春安明　〒167-0002 東京都杉並区南荻窪3―17―16　電話〇三(三三三一)二五七一番

本田光洋　〒164-0002 東京都中野区上高田二―二五―二　電話〇三(三三八六)二六四一番

春敲会　名古屋春栄会　金春穂高　廣瀬瑞弘　廣瀬雅弘

福王茂十郎

高安勝久

宝生閑　欣哉　〒176-0004 東京都練馬区小竹町一―五〇―五　電話〇三(三九七二)七二三〇　電話〇三(三九五五)四七九五

植田和光会　植田隆之亮　〒673-0002 明石市松ケ丘4の3　A6―301　電話・FAX〇七八―九一一―三七四

（2面よりつづき）

二月一日、戦後、昭和二十四年十一月一日、逸早く汎流儀の能謡雑誌として登場し、四号までは表裏表紙共十二頁の小冊子ながら能楽界に裨益した『花』が第九十九号をもって終刊。十六日は観世会初回、素謡「神歌」国枝照清・増田一雄、舞囃子「高砂」大槻十三、「小袖曽我」観世元正・元昭、「節分」野村又三郎、「草子洗小町」観世喜之、一調「岩船」鬼頭八郎・林愿蔵、仕舞二番「八島」山本博之「土車」橋岡久太郎、「船弁慶」武田太加志。二十一日、先に芸術院賞の候補に上った十八名の中から七名が受賞と決定したが、第三部芸能からの該当者はなかった。二十六日、横山大観が享年八十九歳で没する。

三月一日、午前十時より熱田神宮能楽殿に於て能楽協会名古屋支部の総会が開かれ、昭和三十二年度の事業報告・会計報告・収支決算を承認の後、役員改選があり、田鍋惣太郎支部長再任、以下次のように役員を選出する。

副支部長高安滋郎・林愿蔵、監事藤田六郎兵衛・歌村彦四郎、会計鬼頭八郎、常議員田鍋惣一郎・増田一雄・高野瀬透・鬼頭五朗・太田重次郎・真柄米次・内藤泰二・大塚一二・前田昌広・西尾孫太郎・河村丘造。

同日同所では午前十一時より更に議事が進められ、かねてよりの能楽師諸氏の希望とのことで、楽師の技芸練磨・後進楽師の養成・楽師相互の親睦、を計るための中部能楽師会が結成され、第一期の役員が次のように選出される。理事長西村弘敬、副理事長柴田初太郎・田鍋惣一郎、理事田鍋惣太郎・藤田六郎兵衛・林愿蔵・山田仁三郎・高安滋郎・鬼頭八郎・井上松次郎・永田虎之助・西尾孫太郎、評議員増田一雄・鬼頭五朗・前田昌広・国枝照清・真柄米次・杉村竹翠・太田重次郎・久田秀雄・鈴木右門・竹内秀雄・歌村彦四郎・金森準三・野崎太郎。

なお同年五月号の『観世』誌の新聞展望欄には中部日本新聞三月六日三河版の記事から、として次の様に紹介している。「名古屋能楽界では、能楽協会支部とは別に楽師会をつくり、各種の事業、定式能、研究会を協会から切り離して独自の立場で行うこととし、去る三月一日、中部能楽師会を結成した。役員として理事長西村弘敬、副理事長柴田初太郎・田鍋惣一郎の各師が選出された。なお能楽協会名古屋支部は、名目だけは存続し、中央との連絡をはかることになり、支部長田鍋惣太郎、副支部長林愿蔵・高安滋郎の諸師を選出した」（傍点筆者）

三月五日、前年の師走に重要無形文化財保持者に綜合認定された四十名により結成された日本能楽会の創立記念能が水道橋能楽堂で催され、会長喜多六平太の「翁」ほかが演じられる。同日、能楽協会内に異例の能への出演の可否を決める（能楽審議会）が誕生。構成は五流宗家・各地支部長・金春惣右衛門・松本謙三・吉見嘉樹・野村万蔵・三宅襄。第三者側から土岐善麿・斉藤太郎・福原鱗太郎・宮沢俊義・笠信太郎・古川久（『能楽思潮』40・41号に拠る）。

異例とは異流共演や、他分野の役者と共演する新（創）作能などを指すのであろう。九日、柴田初太郎の主催で嫡子・収（後に収武）が「道成寺」を披く。戦後、名古屋の「道成寺」は今度で十回、地元の観世流能楽師としては初めてである。番組は舞囃子「養老」武田太加志、連吟三番、仕舞八番、「小鍛冶・黒頭」観世元正、「業平餅」井上松次郎、「杜若・恋ノ舞」橋岡久太郎、仕舞五番、連吟三番、「道成寺」柴田収・高安滋郎（岡次郎右衛門・和泉太郎）・河村丘造・佐藤卯三郎、囃子は藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・安福春雄・鬼頭喜太郎、地頭岡久雄、後見観世元正、鐘後見武田太加志、一調「景清」永田虎之助・林愿蔵、舞囃子「屋島」観世武雄、仕舞五番、半能「嵐山・白頭」柴田初太郎、の大能である。

三月十六日、名匠鑑賞能は第三十三回、春恒例の宝生流大会は舞囃子「高砂」宝生九郎、「小袖曽我」宝生英雄・辰巳孝、「鐘の音」三宅藤九郎、「景清」宝生九郎、「殺生石・白頭」野口禄久、宗家九郎は舞囃子と能のほか、他二番の能の地頭を勤め大車輪の活躍。三月二十日、京都の『花』と入れ替わるように東京で『能楽思潮』が発刊される。A5判・表裏表紙除き三十二頁、巻頭で同人・大河内俊輝は『能楽思潮』発刊の意義を次のように結論づける。

「長い夜も、やがては迎える夜明けをさけることは出来ないのだ。能の世界も、伝統的陋習を固執することが決して美徳につながるものばかりではないことを、能楽関係者は、この際はっきりと認識すべきである。次の言葉でこの文を結ぶゆえんもここにある。自分の意見を公表し、どんな問題をも議論する自由はよいものであって、悪いものではないということを、最も進歩した人達に納得させるのにすら、数世紀を必要とした。――J・Bビュアリー」また、あとがきで同人・佐々木直は実技者に対し「能楽師の方々には、自由な立場での公正な論評という本誌の根本原則を守ってゆくために、同人にはご参加願はないことにしましたが。御寄稿は大歓迎です。能評に対する反ばくでも、研究論文でも誌上に発表していただいて、お互に理解を深めたいものです」と言う。同人三十八名、誌代は一年分（六冊）送料とも三百五十円。

二十五日、京都観世会館が竣工、舞台披キに観世宗家元正の「翁」、観世銕之丞の舞囃子「羽衣」などがある。二十九日、昭和三十二年度（第八回）芸術選奨文部大臣賞（賞金五万円）に受賞者七人が決定、古典芸術の部門で野村万蔵が『木六駄』ほかの演技で、映画部門では重厚な能の様式美が遺憾なく発揮された「蜘蛛巣城」で新しい演技領域を開いた功績に対し山田五十鈴が受賞する。三十日、東の横山大観の後を追うように京都在の文化勲章受章の日本画家・西山翠嶂が七十八歳で没。絶筆は竣工したばかりの京都観世会館蔵「東山春月」という。ついでながらエイプリル・フールの四月一日、能の世界の遊君は美化、純化されて昇華する趣があるが、買収防止法が施行され、全国約三万九千軒、従業婦十二万余人が消えると報じられ、三日には第五回スイス・ルガノ国際版画展に恩地孝四郎に師事したことのある山口源の（能役者）などが入賞する。

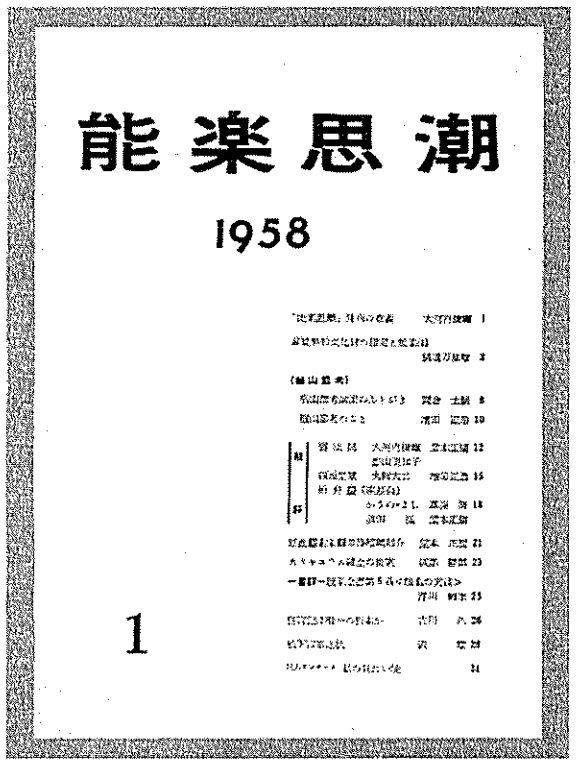
四月九日、三宅藤九郎が「復活」をジャパンタイムズ・イースター観能会で初演、藤九郎十六作目の新作狂言である。後半、一本に纏めた『藤九郎新作狂言集』昭和五十年六月五日・能楽書林刊の自序で、「蚕武者」「十字架」「ぼうふり」を除けば、「その他は大抵一回限りで終っている」と述べるが、昭和二十年・三十年代の活気ある創作活動・新作上演運動の側面に、脚光を浴びることなく置き去られた作品の無念を思わざるを得ない。十三日、観世会は第二回、素謡「補露」尾関健太郎、「蕈刈」岡久雄、「隅田川」木原康次、「吃り」佐藤卯三郎、「玄象」坂井音次郎、中でも「補露」は忠君愛国を唱えた戦前・戦中は、人口に膾炙した楠木正成・正行父子の桜井の別れを脚色した明治期の新作。現在も観世流に残るようだが、戦後もこれまでに昭和二十七年に能一番の上演があるだけ、極く珍しい。四月十六日、中部日本新聞夕刊は『新声会　能楽師も招いて』の大見出しでボーカル・グループのナゴヤ新声会が新作もの二本を上演するに当り、次の記事を紹介する。

まず横井園生・小津恒子・岩佐伝氏ら第一線の人々を集めたナゴヤ新声会は、前回の新形式オペラ「お蝶夫人」につづき、創作オペラ二本を取上げ、三月はじめから練習に入った。石桁真礼生の「卒都婆小町」と清水脩の「炭焼姫」がそれ。「卒都婆小町」は三島由紀夫の作で、例の能楽の老女もの、老いた小野小町を描いた作品。配役は小町の老年をメゾ・ソプラノ高階由美、娘時代をソプラノ加藤恵美子、それに詩人を伊沢宏氏ら。「炭焼姫」は狂言オペレッタで、前記加藤、高階さんらのほか、岩佐伝、水谷昌平氏ら、さらに新結成の新声会合唱団、名古屋放送管弦楽団が出演する。指揮は横井園生、演出はCKのテレビ・プロデューサーである谷口忠雄氏だが、なにしろ両作品とも洋楽とはいっても、ものが能・狂言に近いだけに、歌うほうも苦労つづきで、なかなかの勉強ぶり。まず地元の能楽師柴田収師の協力を得て、練習をつづけているが、東京から作曲者自身、また森正、柴田睦陸氏らが来演して指導にあたるという。

同会は最初、愛知県文化会館講堂の落成式を記念して、六月二十二日に公演計画を立てていたが、オーケストラの都合で十月ごろに延期した。これと前後して新声会合唱団の発足記念演奏会も開くことになっている。

他分野に及ぼす能・狂言の包容力、懐の深さ、それにアプローチして取り込む努力を惜しまない東西の活発な舞台活動、名古屋もそれに呼応するような意欲が窺えようか。

――以下次号――



藤田龍吟の会
藤田六郎兵衛
〒451-0041 名古屋市西区幅下2-10-9 ロクサンヨイ
TEL&FAX ○五二-五七一-六三四一

大倉源次郎
〒532-0003 大阪市淀川区宮原4-4-2-705
TEL（○六）六三九七-一三二三

幸友会
清華能
福井啓次郎
福井良治
柳原冨司忠

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

亀井俊一
忠雄
保雄
実

谷口正喜
〒602-0915 京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

谷口有辞
〒520-0221 大津市緑町二四-二〇

飯島佐之六
大輔
〒920-0601 金沢市香林坊2-8-17
電話（○七六）二六一-四三四〇

金春流太鼓
青耀会
上田悟
〒594-0133 和泉市青葉台2-17-25
電話○七二五（56）八五二一
名古屋稽古場 名古屋市千種区今池4-15-3 浅井能舞台
電話○五二（七三二）三七三六

茂山千作
千五郎
七三郎
千三郎
正邦
茂
宗逸
平彦

茂山忠三郎
茂山良暢
〒606-8355 京都市左京区北白川東小倉町28
電話○七五（七〇一）二〇一一番

名古屋狂言共同社
井上祐一
佐藤友彦
大野弘之
佐藤融
井上靖浩
今枝靖雄
今枝郁雄
鹿島俊裕
鷲見政行
名古屋市昭和区滝川町54 サンハウス滝川3E 井上方
電話052・834・6112

〔おことわり〕　暑中広告の掲載にあたり、まことに勝手ながら七月号、八月号と分載させて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い致します。

◆初夏から仲夏の舞台◆

「第四六回やるまい会」と「観世会」「宝生会」

竹尾邦太郎

「見物左衛門」　深草祭りは五月五日、伏見・藤森神社の祭礼。シテ見物左衛門・万作、薄暮の折に人込みを行くとて菅笠に括袴の出立。生憎友と同道ならず拍子抜けも、賑わいに身を任せれば興奮気味の独り喋りは意気軒昂である。子供が立ち騒ぐを見、人だかり掻き分け土俵の前に出れば、あれこれ行司に注文をつけ、四十八手の講釈も喧しく、観客の反感を買い礫を打たれ（写真）などするところ、痛くもあるが祭は十二分に楽しむ印象。キリは、差し出口の災いで相撲を取る破目。一勝一敗でもう一番、に相手が逃げるのはそのしつこさ、「やるまいぞ」と追込む万作の独演は、一曲を通じ祭の情況描写の素晴らしさ、芸へのしつこさである。（18分）

「箕被」　生計も侭ならぬに明日の当の用意をせよ、と連歌に現を抜かす夫シテ又三郎の無体。ほとほと愛想尽かしの妻・小三郎に別れると抵抗されれば、おずおず事を計る風をみせながらも、岳父が連歌師ならもっと理解を示せ、と言わんばかりか、貧窮の朱買臣が学を求め辛苦する故事など喋々する。挙句、妻に与える形見は箕一つ。いかにも侘びしいが、夫にはそれすら詩材、「三日月（箕被）の出づるも惜しき名残かな」と詠めば、脇句を付けぬと「口無い虫に生まれる」と聞かされてきた流石連歌師の娘、「秋（飽）の形見に暮（呉）れてゆく空」と詠む。妻のこの才に驚喜の夫、離別の感傷は皆無で価値判断は連歌一本槍、出てゆく妻を煽て丸め込み（写真）、「仮初ながら目出度い事ぢゃ、祝言の盃をしやう」と元の鞘に納める。肴に箕で舞う夫の胸中は那辺に在ろうか、を思わせ、男のエゴを又三郎は狡猾強烈に主張する。（23分）

「呼声」　抜け遊びから狡休みの引き籠りにクラスメイトが先生と家庭訪問して様々な手で呼び出しを掛ける現代の構図に通じる。

シテ太郎冠者・忠一郎を呼び出す主・隆司と次郎冠者・隆平、先の構図なら忠一郎が主であろうが其処は役の軽重、忠一郎家トリオ当地初出演なら師父である当主を立てることになろう。面白可笑しく次々と節を付けて囃す声に、うかうか乗せられて踊りに加わる太郎冠者（写真）、キリは正先で膝をつき、扇で面を隠し「太郎冠者は留守でござる」と悪びもせず追込まれるのに厭味は感じられず、三者の爽やかな口跡も清々しい舞台だった。（18分）

「仁王・替ノ型」　出奔覚悟の博奕打シテ小三郎、何某に非ず同類のアド高義から仁王に扮して金品の喜捨に与る悪知恵授けられ、「一段の分別」と俄に元気になるところ、臆面もない。物着に脱ぐ花札ニ骰子文様の肩衣が実に象徴的で、シテは早速、仁王頭巾・白小袖・下袴の姿で赤い女帯を光背様に頭頂から左右に垂らし、脇座一畳台に上がり、左手に金剛杵を持ちポーズをとる。魂の救済を唱え、神仏をだしに金品を奪う当世の悪徳宗教の詐欺商法に似るが、陰湿な印象は皆無、あっけらかんと騙し騙される双方、共に単純な人の好さが横溢して愉快。それにしても此の手の詐欺行為が無くならないのは人間の業か。

小書で、常は二人の参詣人・立衆は六人、一般には全員長袴出立だが、健太郎・隆行だけで、あとは半袴・靖浩、モギドウ括袴・融、美なん縫箔ノ女・和憲、角頭巾ニ小格子ト羽織ノ祖父・又三郎、と多彩。連れ立って参詣する各人の願い事も外見に相応しく、離婚を願う女など現代にも通じ面白い。独り後からやって来た一癖ありげな祖父、「とてものことに御利益を身に移さう」と仁王の膝をさすり上げれば（写真）堪えるのに懸命なシテ。祖父が立ち去るのをみて寛げば、先の長袴二人が再び来る気配に慌て、阿形は吽形に、金剛杵は右手に、と印相も変って悪事は露見の仕儀。又三郎派「替ノ型」は手の混んだ大作、又三郎・小三郎父子の痒い所（いや、撲ったい所か）に手の届いた入念な演出に、大勢物の息の合った舞台を堪能した。（34分・5月18日・第46回やるまい会）

「賀茂」　シテ吉之丞、前は水汲む里女の挙措の端正。白羽の矢のいわれ語るところ、地（邦弘・勘鵜ら）との掛合に賀茂川の源から流域の模様を描写するところ、など、その口吻のなめらかな美しさは佇まいにも自ずから気品。中入地、へ恥かしや我が姿の、と左袖アシラフ羞恥の風情が得も言われない。アイ末社ノ神・靖浩、ワキ室明神ノ神職・勝久へ独り喋りし、舞を仕るか仕るまいか、返事も聞かずに独り合点し、「日本一の御機嫌」と三段ノ舞を舞い出すのは他の脇能にもみられるところだが、いつも可笑しい。

後は、ツレ喜正、天女ノ舞きれいに舞上げ脇正で膝をつきへ裳裾を潤す、で水を汲み注ぐ型から立つと、地鳴りのどよむさまを大きく舞台一巡に象徴し、右袖返シ幕へ招くと、後シテ別雷神の出現は泥飛出・赤頭・唐冠・赤地半切・紺袷狩衣の姿。舞働に正中で合膝のところ、へとどろとどろ、の数拍子、神威発揚が目覚ましかった。（1時間28分）

「地蔵舞」　「往来の人に宿貸すべからず」で泊りを断られたシテ旅僧・友彦、笠だけ預って貰い、夜陰に乗じ上りこむ。主・弘之に咎められれば、笠の下は既得権の空間で地上権がある、の屁理屈。それなら、と笠からはみ出る肩を右左と打擲するうち（写真）面白くなって大法を破り、寝酒の相伴までさせる弘之の好人物ぶりがよい。当初は飲酒戒を楯に酒を拒む僧も三度勧められては固より好物、吸う分には大事あるまいと酒盛りは、遂には酒興に小舞「瓢箪」から地蔵舞の舞発ちに及ぶ。友彦、姦しいまでの応接に持ち味発揮、謡留。（32分）

「善知鳥」　シテ喜之、自身の証に麻衣の片袖ちぎり両手に捧げ持つところ、へ涙を添へて旅衣、の打切に近寄るワキ僧・雅介を暫し凝視、佇む姿には妻子に思いを馳せる深い悲しみ。返シ句でワキに片袖を妻に託すと、込み上げる嗚咽のシオリはワキにへ立ち別れ、て二ノ松。遠ざかるへ客僧、を振り返りへ亡者は、とシオリ返す憂愁の思いも一入。

後場、亡者の妻子にまみえ回向のワキ、後シテは面痩男・羽箕を着けて現われる。千代童（勘吉郎君）の髪を撫でる所は空を撫でさする型からへあら懐しや、と突進の勢いも、子方が退って下居すれば虚しさはへ悲しやな、のシオリも切ない。貧しい境涯をいうクリ・サシ・クセ、クセ中へ報いをも、と居立ち、打合からシオルのは殺生にのめり込み報いを忘れた悔しさ。へ抑々、で立ち、愚かにも捕られ易いは自らの貫、と言わんばかりの歯痒さはへやすかた、で強く一ツ踏むと、へうとう、と悲痛な叫びからカケリ。脇座前、杖ビュッと一振り左手添え左へ見上げ、一ノ松先へ抜け小廻り、勾欄に寄り下を見、杖振り下ろし勾欄を押えつけ右へ見上げるなどあり、舞台へ戻り正先の笠を見下ろし三打三拍子から膝つき（写真）、上に面使ヒ、地になる。

へ親は空にて血の涙を、の返シ句に杖を後見に渡し、笠を両手に持つと、血の雨に逃げ惑うのは、へたよりを求めて、とスミで膝をつき笠を頭上に翳すところ、亦、へ紅葉の橋の、とスミへ笠投げ捨てるところ、狂奔の疲れから絶望を象徴するかである。更に、化鳥に責められる凄惨な場面は、へ鉄の嘴を鳴らし羽を搏き、と扇開き打合のところ、へ逃げんとすれど、と大小前からスミへつつつと出るが、へ羽抜鳥の、とたじたじと退り安座のところ、具象の型も素晴しかった。（1時間7分・6月8日・観世会）

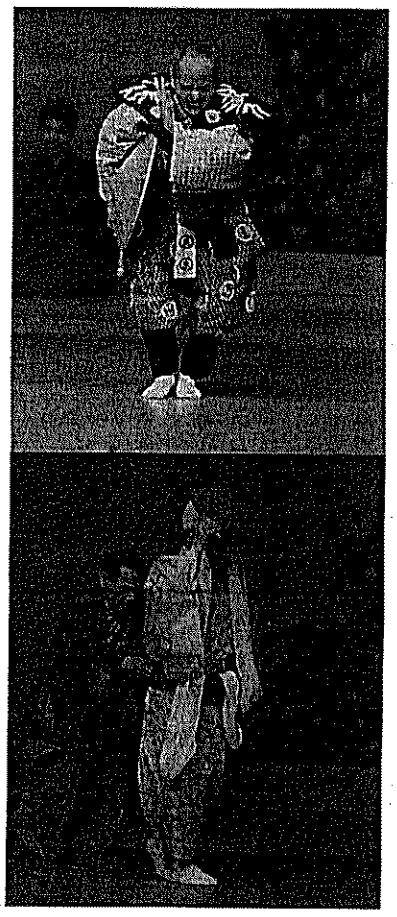
「杜若」　シテ博祐、小面・襟白二・白地楽器尽文摺箔着付・赤地唐織。旅僧ワキ元に呼掛て問答・掛合になるところ、しっとりと上々なら、地頭・雅以下全女性陣の地謡は優に美しく興趣を添える。物着に唐織を脱ぐが、着膨れていた様子はなく、赤字縫箔腰巻姿に金色まばゆい菜平菱文長絹と初冠を着れば、杜若ノ精は着付の楽器尽文様に象徴される歌舞の菩薩の化現としての業平に同化し、嫋やかな序ノ舞は優雅。キリの型所、へ蝉の唐衣の、と正中で左袖抱えて下居すると、右袖も重ねて抱えるところ、文字通り婀娜。（1時間12分）

「砧石」　都見物途上の田舎人アド靖浩に接触、人質に取って裏稼業は人買いの宿ノ亭主・弘之から身代金をせしめよう魂胆のシテすっぱ祐一、商談盗聴され、まんまと田舎人に裏をかかれ身代金を盗られる失態。すわ一大事と亭主から太刀を借用、田舎人を追うすっぱだが、抜き身に恐れげもなく立ちはだかる田舎人に遅疑逡巡、「呑まう」と雄叫び上げられては逆に身の竦む思い。初手から田舎人を搦め捕らんの意志は肩衣の蜘蛛ノ巣ニ大蜘蛛文様にありありだが、相手の気魄に呑み込まれ散々虚仮にされる。双手を挙げ肉薄する大兵の靖浩には圧倒されるも当然か。（28分）

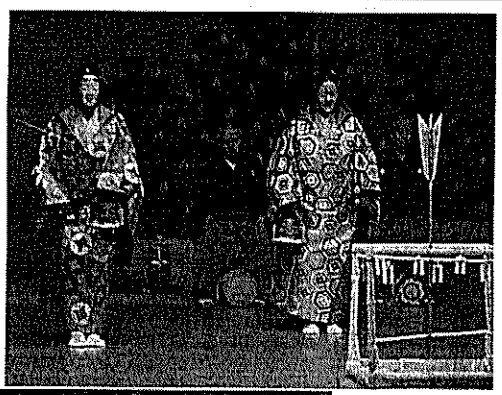
「善知鳥」　シテ萌、一ノ松で旅僧ワキ勝久に片袖託し、二ノ松でワキへ振り返り、へ亡者は泣く泣く、とシオリのまま幕へ。後シテは面痩男・腰蓑（羽箕に非ず）の猟師ノ亡霊、殺生戒を犯した罪の消滅を願いワキに合掌すると、思いは懐しの故郷の佇まい。へ離が島の苫屋形、とスミで面使ヒ、へ心ありげな住居、を胸杖に沁々眺めるところ、感傷的な気分が胸を衝く。へ千代童が髪を、は撫でさする型に子方が退り下居すれば、のめる様に子方へ進み、へ儚や何処に、の面使ヒには虚しさが胸に迫る。往時の貧窮を惜み、殺生を悔やむクリ・サシ・クセ。クセ中はへ報いをも忘れける、と居立って打合せ、へ事業をなしし悔しさよ、の安座双シオリに慟哭の悔いの深さ。

へ（抑々）善知鳥、と杖取り立ち、へ木々の梢、を面使ヒに眺め、へ平沙に、では下を眺め廻わす。へ（さてぞ捕られ）やすかた、と拍子二ツは歯痒さの地団駄か。へうとう、の哀調に拍子二ツからカケリは笠の上、虚空を一打、二ノ松へ鳥を追う心に抜けて幕へ暫時佇立は羽音を聞き澄ますか。一ノ松へ来て正先の笠を見込み、勾欄へ寄り頭取って更に見込むのは所在の確認。静かに舞台へ戻り、大きく廻って笠の上、虚空二ツ打ち拍子三ツ、へ親は空にて、の地となった。キリの型はへ逃げんとすれば、と抜き足風をみせ、へ羽抜鳥の報いか、と合膝から安座のところ、鷹に腰を抜かし飛び立てない雉の生態をみせて面白かった。子方の田口将成君、終始行儀よく、視線が極まって居り立派。（1時間5分・6月15日・宝生会）

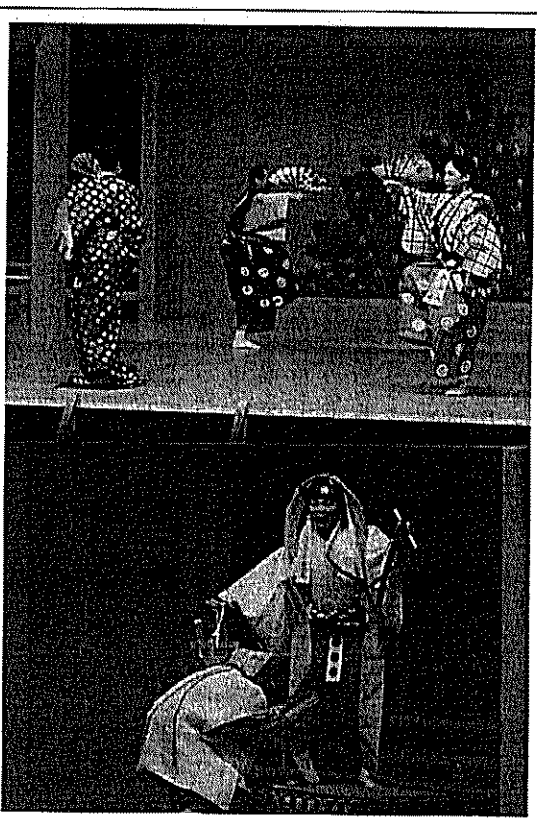
◇……◇
◇……◇



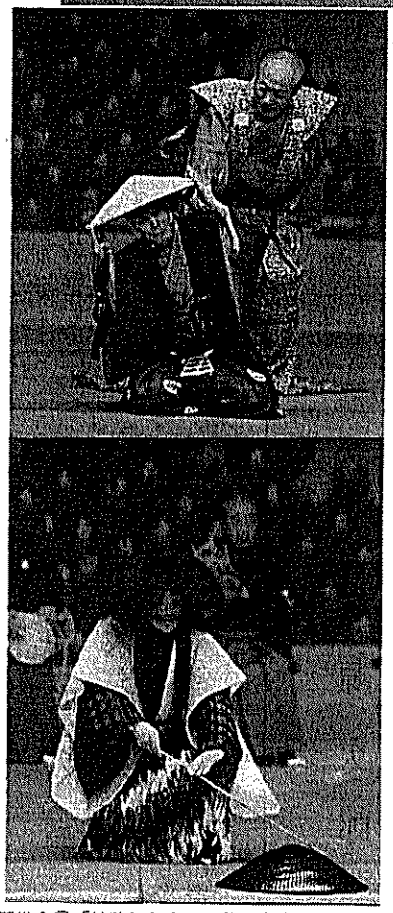
やるまい会㊤「見物左衛門」野村万作
㊦「箕被」左より野村又三郎・小三郎
（杉浦賢次氏撮影）



観世会「賀茂」左より梅若猶義・梅若吉之丞　（杉浦賢次氏撮影）



やるまい会㊤「呼声」左より善竹隆司・忠一郎・隆平
㊦「仁王・替ノ型」左より野村又三郎・小三郎
（杉浦賢次氏撮影）



観世会㊤「地蔵舞」左より佐藤友彦、大野弘之
㊦「善知鳥」観世喜之　（杉浦賢次氏撮影）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成15年8月～9月）

◉ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

8月24日	「国栖」（喜多）	喜多節世ほか
8月31日（再）	「小袖曽我」「百萬」（観世）	大西智久ほか
9月7日	「小督」（観世）	梅若六郎ほか
9月14日	「女郎花」（金春）	金春安明ほか
9月21日	謡曲「神歌」「鶴亀」（金剛）	種田道雄、廣田陛一ほか
9月28日（再）	「船弁慶」（宝生）	本間英孝ほか

初秋能　9月7日、名古屋能楽堂で開催

2部制

能楽協会名古屋支部（福井啓次郎支部長）主催による「初秋能」は、きたる九月七日(日)名古屋能楽堂で、第一部、第二部の二部制で開催される。

伝統芸能の「能楽」が二〇〇一年にユネスコにより世界無形遺産に認定され、初秋能のタイトルに冠せられて二回目の公演である。

演能は、第一部（午前十時半始）観世流能「胡蝶」、和泉流狂言「舟船」、観世流能「天鼓」ほか観世流、金剛流仕舞。

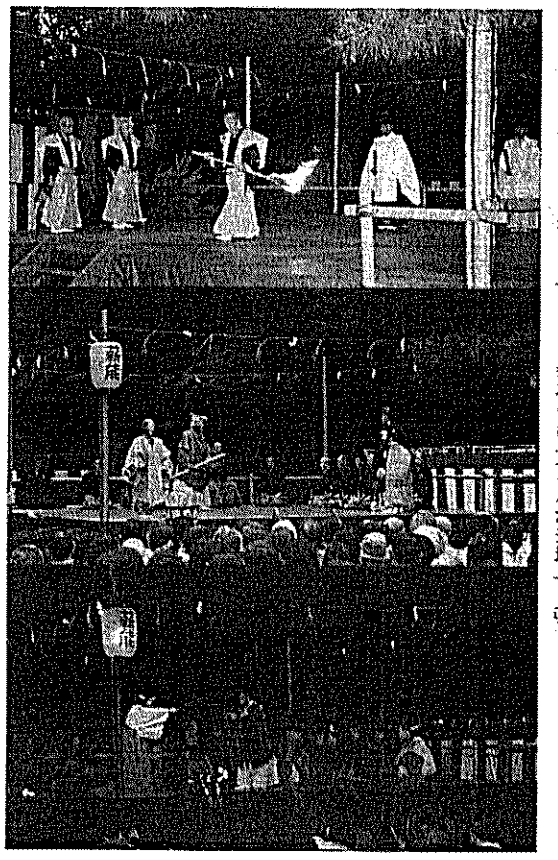
第二部（午後二時始）は、観世流能「玉鬘」、和泉流狂言「萩大名」、喜多流能「邯鄲・傘之出」ほか金剛流　観世流仕舞。

前売二千五百円（当日三千円）学生千五百円。前売券はチケットぴあ、市内プレイガイド、各出演者で取扱い。

後援・愛知県、名古屋市（番組②面）

第38回名古屋薪能

第38回名古屋薪能は、八月九日午後五時半から熱田神宮神楽殿前の特設舞台で催された。当日は、前日まで連日の降雨で当日も朝から不安定な天気であったが、午後から雨も止み、青空ものぞく天候になり、会場には七百人が来場して演能も予定どおり行われ、熱心な鑑賞がつづけられ午後九時終演した。



【写真】㊤から熱田神宮・宮田理博彌宜による薪能の火入れ式、㊥能「高砂」㊦能「葵上」

狂言三代　万作・萬斎狂言会

野村裕基初舞台

和泉流狂言、野村萬斎氏の長男裕基君が初舞台を踏むことになり、きたる九月二十七日(土)東京・国立能楽堂で「狂言三代　万作・萬斎狂言会～野村裕基初舞台～」として公演が行われる。開演午後二時三十分。

番組は「靭猿」野村万作、野村万之介、野村萬斎、野村裕基。

「業平餅」野村萬斎、石田幸雄ほか。

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［8月］
23日(土)　第19回衣斐正宜後援会能　（番組②面）（有料）
24日(日)　第20回野村四郎名古屋公演　（有料）
30日(土)　鳳の会第34回公演　（番組②面）（有料）
31日(日)　恵美寿会　（無料）

［9月］
7日(日)　初秋能（2部制）（番組②面）（有料）
13日(土)　秋の清謡会　（番組③面）（無料）
15日(月)　名古屋観世会定式能　（番組③面）（有料）
19日(金)　名古屋能楽堂定例公演　（番組③面）（有料）
20日(土)　名古屋観世九皐会　（番組③面）（有料）
21日(日)　名古屋宝生会定式能　（番組③面）（有料）
23日(火)　第16回「能」久田勘鶴の会　（番組④面）（有料）
28日(日)　和泉流狂言大会　（無料）

◆豊田市能楽堂◆

（TEL 0565－35－8200）

［8月］
24日(日)　夏休み狂言教室
30日(土)　能で見る源氏物語・講演　（有料）

［9月］
7日(日)　蝋燭能　（有料）

NHK教育テレビ「能狂言」

9月28日(日)　午後3時～4時20分（予定）
観世流能「潟水龍女」
出演：片山九郎右衛門ほか

京都　「木賊を観る会」

片山九郎右衛門師上演

観世流シテ方・片山九郎右衛門の会（片山九郎右衛門後援会）は、九月十四日(日)京都観世会館で「木賊を観る会」を開催する。

能組は次のとおり。

舞囃子「養老」水波之伝・シテ片山清司、笛・竹内学、小鼓・曽和尚靖、大鼓・亀井広忠、太鼓・前川光範、地謡・武田邦弘、古橋正邦、河村博重、味方玄、上野嘉宏

狂言「萩大名」シテ茂山千作、アド茂山千三郎、茂山千五郎

仕舞「井筒」シテ片山慶次郎

能「木賊」シテ片山九郎右衛門、ツレ浦田保親、片山伸吾、分林道治、子方・観世淳夫、ワキ宝生閑、ワキツレ宝生欣哉、大日方寛、御厨誠吾、笛・杉市和、小鼓・曽和博朗、大鼓・亀井忠雄、後見・片山慶次郎、武田欣司、青木道喜、地謡・片山清司、梅田邦久、武田邦弘、橋本磯道、古橋正邦、河村博重、味方玄、橋本忠樹

S席（正面指定席）一万円、A席（脇・中正面指定席）八千円、B席（2階自由席）五千円、学生席三千円

申し込み、問い合わせ＝片山家能楽・京舞保存財団（TEL075・551・6535、FAX075・532・2841）

能「天鼓」上演

片山清司能の会

片山清司能の会では、十月十七日（金）京都観世会館で〝絵本語りと能「天鼓」〟を上演する。

出演・観世栄夫、藤田六郎兵衛、片山清司ほか。午後六時開演。

暑中御伺
名古屋能楽堂
名古屋市中区三の丸一－一－一
電話　〇五二（二三二）〇〇八八

暑中御見舞申し上げます

名古屋観世会

銕仙会
観世栄夫
観世銕之丞

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山手通3・8・2・306
電話（〇五二）八三二－三一八五
西宮市甲陽園目神山町二三－二五
電話（〇七九八）73二四五八

観世芳宏門人会
観世芳宏
観芳会
観世芳伸

大江能楽堂
大江将董
大江信行
能「三井寺」梅若善高
能「国栖」梅若基徳
ほか仕舞
▽十二月七日（第四回）
千五百円
申し込み、問
梅猶会定
市新千里南町

邦謡会
梅田邦久
清沢政一
須部甫
本田勲
高島良一
今沢美和
名古屋市昭和区吉町二丁目十六－五
電話（〇五二）八四一－四六三一番

大垣浦声会
稽古場　大垣市伝馬町大垣別院
電話（〇五八四）七二－三三六二
浦田保利
浦田保浩
浦田保親
〒606－0814　京都市左京区下鴨芝本町五八
電話（〇七五）七八一－七〇三〇

久田観正会
久田勘鶴
星野路子
大倉流小鼓松月会　久田舜一郎
郁諷会　前野郁子
松謡会　松山幸親
〒465－0093　名古屋市名東区一社3－162
電話（〇五二）七〇五－一五八五

名古屋修諷会
梅若修一

松音会
泉泰孝
〒168－0081　東京都杉並区宮前四－一九－四
電話（〇三）三三二－八二八〇番
泉雅一郎
〒201－0002　東京都狛江市東野川四－六－八
電話（〇三）三四八八－二四八五番

第19回 衣斐正宜後援会能

八月二十三日(土)午後一時開演
名古屋能楽堂

講演
お能のたのしみ方
「袴能と本日の曲目に寄せて」　能楽研究家　藤城継夫

番組

袴能 **雲雀山**　宝生欣哉　河村紋一郎　福井啓次郎　竹市学　近藤諷一郎　近藤乾之助　則久英志　御厨誠吾　野口能弘　井上祐一　今枝靖雄　鹿島俊裕　村上茂　青木亮　柴田賢治　平田正文　地謡　武田孝史　東川光夫　寺井雅之　水上良雄　佐野輝和　登　間

後見　宝生英照　寺井良雄　水上輝和

狂言 **瓜盗人**　佐藤友彦　佐藤融　後見　井上祐一

能 **俊寛**　内藤飛能　水上優　衣斐正宜　飯冨雅介　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取希世　間　井上靖浩　竹内孝成　竹内良伯　東川光夫　竹内淳一　亀井保雄　久野幸三　武田孝史　和久荘太郎　地謡

後見　宝生英照　寺井良雄　水上輝和

附祝言　（終了午後五時）

主催　衣斐正宜後援会

●会員制
●一般入場料五千円（限定）
学生入場料二千円（限定）
申込み・問合わせ
後援会事務所
名古屋市昭和区御器所3－23－19－802
TEL・FAX　052・882・5600

第20回 野村四郎名古屋公演

八月二十四日(日)午後二時始
名古屋能楽堂

能 **隅田川**　野村四郎　ほか舞囃子

入場料　S席一万円　A席八千円　B席六千円　C席三千円
問合わせ　CBC事業部　TEL　052・241・8118

鳳の会第三十四回公演

八月三十日(土)午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

オープニングトーク
名古屋女子大学教授　林和利

鼻取相撲（はなとりずもう）　大名　佐藤友彦　通行人　井上靖浩　太郎冠者　今枝靖雄　後見　鷲見政行

奈須与市語（なすのよいちのかたり）　今枝郁雄　後見　佐藤友彦

酒講式（さけこうのしき）　僧　井上祐一　親　大野弘之　後見　井上靖浩

蝸牛（かぎゅう）　山伏　佐藤友彦　主人　井上祐一　太郎冠者　佐藤融　後見　鹿島俊裕

★演者と語ろう〝Q&A〟
終演後会場で、井上祐一・佐藤友彦を囲んで歓談します。
狂言に関する疑問・質問に演者が直接お答えします。
（終了予定　午後四時半頃）

入場料（全席指定）
A席五千円、B席三千五百円、学生二千円
会員A席四千円、B席二千五百円
チケット取扱い
チケットぴあTEL052・320・9999

ユネスコ第一回世界無形遺産認定「能楽」初秋能

九月七日(日)
第一部午前十時三十分開演
第二部午後二時開演

第一部番組

観世流能 **胡蝶**　八神孝充　飯冨雅介　河村紋一郎　柳原冨司忠　鬼頭好信　鹿取希世　間　佐藤融　後見　近藤幸江　武田邦弘　地謡　三村恵子　今沢美和　黒田博泉　松山幸親　上野嘉宏　祖父江修一　清沢嘉夫　一政

和泉流狂言 **舟船**　野村又三郎　松田高義　後見　井上靖浩

観世流仕舞 **屋島**　清沢一政　地謡　外山圭一　高橋暁一　久田勘鬼　本田勲

金春流仕舞 **山姥**（キリ）　小島芳樹　地謡　伊藤雄二　前田茂穂　加藤正嗣　鬼頭尚久

宝生流能 **天鼓**　竹内滋子　高安勝久　河村真之介　福井良治　大野誠　呼出　間　井上靖浩　後見　玉井博祐　衣斐愛　地謡　石森智幸　外山通夫　加賀山憲治　久野幸三　稲川壽一　衣斐正宜　石黒孝　佐藤耕司

附祝言

第二部番組

観世流能 **玉鬘**　加賀敏彦　杉江元　河村真之介　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛　今枝靖雄　間　後見　前野郁子　久田勘鬼　地謡　星野路子　外山圭一　高島良一　須部甫　加藤保彦　清沢一致　祖父江修一　上野嘉宏

金剛流仕舞 **加茂**　竹市孝司　地謡　谷口雅彦　岩切尚志　百々康治　山口尚志

観世流仕舞 **井筒**　近藤幸江　地謡　星野路子　久田三津子　前野郁子　三村恵子

和泉流狂言 **萩大名**　佐藤友彦　井上靖浩　大野弘之　後見　鹿島俊裕

喜多流能 **邯鄲**　橋本朋子　長田暁　飯冨雅介　橋本宰　拿之出　祖元正樹　杉江淳　後藤嘉津幸　笈嶺一　大野洋輝　間　佐藤融　後見　長田郷　中村正　地謡　森伊藤英健　森田克彦　吉川寛治　粟谷充雄　谷大作　高林呻二　和谷衡市　加藤誠

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部
後援　愛知県・名古屋市

〔有料〕
前売二千五百円（当日三千円）
学生千五百円
前売券取扱所＝チケットぴあ、市内プレイガイド、各出演者

春鶯会　梅若善高　〒560－0034　豊中市新千里南町三丁目18－12　電話〈〇六〉六八三一－七八五四　〒166－0003　東京都杉並区高円寺南4・27・7・903　電話〈〇三〉三三一二－〇五七〇

山本章弘　〒560－0021　豊中市本町6－10－6　電話〇六（六八四六）三三六九

名古屋淡交会　橋岡慈観
三交会　久田三津子　〒465－0093　名古屋市名東区一社3－162　電話〈〇五二〉七〇五－一五八五

初陽会　武田宗和　稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15－3　浅井ビル　電話〇五二（七三二）三七三六

上田観正会能楽堂
社団法人　観正会　TEL〇七八－六九一－五四四九
上田観正会　上田貴弘　拓司　公威　大介

武田謡楽会　武田欣司　武田邦弘

下田雄三　豊中市曽根東町四－一－一二

雄諷会中部地区連合会
名古屋和諷会
一宮竹石会
岐阜花諷会
下呂雄諷会
倭文之屋社中

梅春会　井戸和男　〒545－0004　大阪市阿倍野区文の里3－16－17　電話〇六－六六二一－二二一九

賀水会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
花晨の会
加賀敏彦　〒463－0035　名古屋市守山区森孝二丁目七〇九　電話〈〇五二〉七七一－八九四五番

松盛会　小松勝憲　松舞台　〒511－0831　三重県桑名市西別所一〇六一の五　TEL・FAX〈〇五九四〉二三－四五八二

名古屋橋岡会　名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五　山田紀子方

洗心会　奥村富久子　〒606－8303　京都市左京区水観堂西町二〇　電話〇七五（七七一）〇七六七番

観修会　祖父江修一　〒507－0043　多治見市日ノ出町2の2　電話〈〇五七二〉二二－三六五六

猶恵会　熊沢恵美子　〒465－0097　名古屋市名東区平和ケ丘3－76　日車マンション四〇四

秋の清謡会（第二十六回）

九月十三日（土）午前九時半始
名古屋能楽堂

番組

番外仕舞　葛城　清沢一政
素謡　西王母　片野光子　伊佐次修治　西野志保
雨月　久松直代　高島順子　高見かね子　地謡　後藤鬼頭和子　秦道　小栗知津子　奥村小浪志げ　山内
連吟　実盛　伊藤孝治　金原孝典　織田敏男　福嶋武憲　鷲見幸一　山口耕造
素謡　巴　伊藤礼子　金井邦夫
連吟　班女　矢根敬子　洞澤博雄　東條佳子　小林知子　古澤ひさ子　小島恵子
葵上　宮地澄子　安藤房子　石川華子　堀尾智子　冨田芳子　丹羽佳世子
紅葉狩　岡田弘子　鈴木明雄　福嶋武憲　鷲見幸一　伊藤孝治
仕舞　田村　小島恵子
巻絹　小林知子
猩々　洞澤博雄
舞囃子　吉野夫人　伊藤泉　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠　鬼頭好信
三輪　奥村小浪　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠　鬼頭好信
須磨源氏　織田敏男　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠　鬼頭好信
仕舞　経正　堀尾智子
胡蝶　宮地澄子
班女　石川華子
松風　冨田芳子
舞囃子　邯鄲　山口耕造　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠　鬼頭好信
雲林院　手嶋なみ江　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠　鬼頭好信
當麻　磯部三枝子　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠　鬼頭好信
能　不破　半蔀　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　竹市学　松田高義　高島良一　本田勲　須部甫　高橋瞭一　後見　上野嘉宏　武田邦弘　地謡　祖父江修一　古橋正邦　梅田邦久　中川雅章
素謡　砧　鬼頭みゆき　榊山きよ子　手嶋なみ江
舞囃子　野宮　林和子　河村総一郎　福井啓次郎　竹市学　合掌留
梅ヶ枝　小林美和子　河村総一郎　福井啓次郎　竹市学
天鼓　鬼頭みゆき　河村総一郎　福井啓次郎　竹市学　バンシキ
仕舞　田村キリ　古澤ひさ子　金原孝典　金井邦夫
笛之段　鬼頭みゆき　榊山きよ子　手嶋なみ江
素謡　俊寛　西野志保　今川米子　平松宗顕　近藤守昌　成康

名古屋観世会定式能（四回）

九月十五日（祝）十二時半開演
名古屋能楽堂

番外仕舞　花筐　梅田邦久　（終了六時半頃）
主催　清謡会　清沢一政
（電）〇五六四・五二・六九〇九
附祝言
【御来場歓迎】（入場無料）

能　通盛　片山清司　野村四郎　高安勝久　杉江元　河村真之介　福井啓次郎　助川治　鹿取希世　綱谷正美　間
女郎花　武田邦弘　梅田邦久　地謡　松山幸親　須部甫　高橋瞭一　加賀敏彦　祖父江修一　小島一英　武田志房　久田勘鬼　外山圭一　古橋正邦　久田勘鬼　祖父江修一　仕舞
萩大名　武田志房　地謡
狂言　茂山千作　茂山千三郎　茂山千五郎　後見　島田洋海
能　葛城　片山九郎右衛門　中村宜成　植田隆之亮　是川正彦　河村総一郎　助川治　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　大和舞　茂山千三郎　間　高島良一　本田勲　上野嘉宏　清沢一政　古橋正邦　梅田邦久　片山清司　武田邦弘　後見　小島一英　武田志房　地謡
附祝言
【有料】当日券（自由席）八千円（枚数に制限あり）
主催　名古屋観世会（終了四時半頃）

名古屋能楽堂定例公演

九月十九日（金）午後六時三十分始
名古屋能楽堂

（和泉流）狂言　蚊相撲　大名　大野弘之　蚊の精　井上祐一　太郎冠者　佐藤融　後見　佐藤友彦
（観世流）能　花筐　天皇　久田勘吉郎　侍女　清沢一政　照日の前　武田邦弘　使者　杉江元　官人　高安勝久　與舁　相元正樹　與舁　杉江淳　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世　後見　近藤幸江　梅田邦久　地謡　外山圭一　黒田博　松山幸親　加賀敏彦　上野嘉宏　古橋正邦　久田勘鬼　祖父江修一　（午後八時三十分頃終了予定）
主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・㈶名古屋城振興協会
㈶名古屋市文化振興事業団
協賛　能楽協会名古屋支部
〔入場料〕前売一般三千五百円、学生二千円（当日一般四千円、学生二千五百円）
取扱所＝名古屋能楽堂（〇五二・二三一・〇〇八八）チケットぴあ（〇五二・三二〇・九九九九）市内プレイガイド

名古屋観世九皐会定例会

九月二十日（土）午後一時始
名古屋能楽堂

番組

仕舞　高砂　外山圭一
鞍馬天狗　高橋瞭一　地謡　坂森真太郎　中森貫太　中所宜夫　小島英明
能　砧　駒瀬観世道也　喜之　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　助川治　鹿取希世　間　野村又三郎
後見　観世喜正　小林喜久　地謡　外山圭一　加藤保彦　坂口英明　小島真太郎　高橋瞭一　中森貫太　五木田三郎　中所宜夫　野村又三郎　野村小三郎　後見　判野俊彦
狂言　千鳥　松田高義
仕舞　清経　小林喜久
仏原　五木田三郎　地謡　坂森真太郎　中森貫太　駒瀬直也　小島英明
守　観世喜正
能　融　中所宜夫　飯冨雅介　河村総一郎　柳原冨司忠　助川治　大野誠　間　野口隆行　外山圭一　坂口真太郎　小島英明　高橋瞭一　中森貫太　駒瀬直也　小林喜久　観世喜正　後見　五木田三郎　観世喜之　地謡
附祝言
【有料】当日券（自由席）五千円　学生券　二千円
問い合わせ　観世九皐会〇一二〇・一五〇・九五〇（フリーダイヤル）
主催　名古屋観世九皐会
名古屋市南区元塩町一―一―一七　加藤保彦方
電話〇五二・六一一・三六五九

名古屋宝生会定式能（第47期第3回）

九月二十一日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

番組

辰巳孝弥
能　八島　辰巳満次郎　飯冨雅介　橋本宰　相元正樹　佐藤融　間　河村総一郎　柳原冨司忠　竹市学
狂言　因幡堂　大野弘之　後見　竹内澄子　衣斐愛　地謡　加賀山憲治　織田哲也　玉井道夫　柴田賢治　稲川寿一　衣斐正宜　石黒孝　和久荘太郎　今枝靖雄
仕舞　氷室　竹内澄子
三井寺　倉本雅　地謡　佐藤耕司　馬緤冨四夫　石黒孝　飛能　内藤飛能
三笑　衣斐正宜
井筒　寺井良雄　地謡　稲川寿一　馬緤冨四夫　辰巳満次郎　内藤飛能
能　竹雪　和久荘太郎　辰巳和磨　佐野萌　間　高安勝久　佐藤友彦　佐藤融　後見　石黒孝　佐藤耕司　地謡　石森智幸　外山通夫　大森尚人　久野幸三　辰巳孝弥　寺井良雄　衣斐正宜　辰巳満次郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
〔要会員券〕当日券会員券一万円（2枚綴）　学生券（一回券）二千円
主催　名古屋宝生会
名古屋市天白区島田二―三〇―一　島田橋住宅二―三一〇　佐藤耕司方
電話FAX〇五二―八〇三―七三七二　携帯TEL〇九〇―一七四一―六二三四

暑中御見舞申し上げます

千早会　八神孝充　〒464―0062　名古屋市千種区向陽町2―16　電話（〇五二）七六二―二二〇一
重陽会　菊池重郷　〒484―0081　犬山市犬山字相生五九―一六　電話（〇五六八）㊅四五〇一番
幸謡会　近藤幸江　〒444―2122　岡崎市鴨田本町十一番地ノ三　電話（〇五六四）㉑二五二九
恵謡会　三村恵子　〒445―0051　西尾市住吉町三―一一二　電話〇五六三（五七）二五九四番
桜月会　加藤春枝　〒509―0236　可児市皐ケ丘3―113　電話（〇五七四）六四―二三〇六
名古屋巽会　辰巳孝　辰巳満次郎
惠美寿会　衣斐正宜　衣斐正宜後援会
倉本雅　〒658―0081　神戸市東灘区田中町1―13―22―809　電話（〇七八）四四一―五四六五番
〒466―0051　名古屋市昭和区御器所3―23―19　御器所パークマンション802号　電話（〇五二）八八二―五六〇〇番

宝生流
嘉宝会　鬼頭嘉男　〒466―0055　名古屋市昭和区川名本町二ノ五一
司宝会　佐藤耕司　〒468―0056　名古屋市天白区島田二丁目三〇一　島田橋住宅一―三一〇　電話（〇五二）七三七二
金剛流景雲会
能を楽しむ会
宇高通成後援会
宇高通成面乃会
（INNI・NI世界13ヶ国）国際能楽研究会
宇高通成
竜成
徳成
〒606―8105　京都市左京区高野泉町四〇　TEL・FAX（〇七五）七〇一―〇七九三
〒606―8007　敷舞台　京都市左京区上高野薩田町二　TEL（〇七五）七〇一―一〇五五
松野恭憲能の会
松野恭憲
松野洋樹
〒616―8241　京都市右京区鳴滝泉殿町一八―三　TEL〇七五（四六一）二一四八番　FAX〇七五（四六一）六〇九八番
金剛流
名古屋周星会
岐阜周星会
吉川周子
〒464―0025　名古屋市千種区西崎町三―六　電話（〇五二）七六一―二二五七
金春欣三　〒630―8113　奈良市法蓮南町一四　電話（〇七四二）二二―七九二九
伊勢金春会
宇仁田吉邦　〒516―0006　伊勢市八日市場町5―16　電話〇五九六㉕五二九八
二井栄逸　〒515―0073　松阪市殿町1412の3　電話（〇五九八）二三―〇二六

第16回 能 久田勘鷗の会

九月二十三日（秋分の日・火）
正午開場、午後一時開演
名古屋能楽堂

番組

能
上田　拓司
久田　勘鷗　高安　勝久　河村総一郎　福井啓次郎　大野　誠
間　野村又三郎
後見　祖父江修一　松山　幸親　山田　義高
下川　宜長　地謡　笠田　昭雄　上田　貴弘
清沢　一政　浦田　保利
上田　公威　笠田　稔

砧
——休憩十分——
狂言
佐渡狐　佐渡の百姓　野村小三郎　越後の百姓　松田　高義　後見　伴野　俊彦　奏者　野村又三郎

能
久田勘吉郎
菊慈童　高安　勝久　担元　正樹　筧　鉱一　加藤　洋輝　柳原冨司忠　鹿取　希世
後見　久田三津子　松山　幸親　上田　公威
上田　貴弘　地謡　藤谷　音彌　下川　宜長
笠田　昭雄　久田　勘鷗
祖父江修一　山田　義高

【入場料】
一般（自由席）前売五千円　当日六千円
学生（自由席）三千五百円（前売・当日とも）
前売券取扱い＝チケットぴあ、市内プレイガイド、久田勘鷗事務所
問合わせ＝久田勘鷗事務所
電話（052）705－1584
FAX（052）705－1585

犬山城 能の夕べ

9月13日 能「花月」

「犬山城（能の夕べ）」として、きたる九月十三日(土)金剛流能「花月」が上演される。

主催は犬山城敬道能楽会（代表加藤かおる氏）後援・犬山市、犬山市教委、扶桑町、扶桑町教委、犬山商工会議所、犬山市観光協会、犬山祭保存会、中日新聞社。

演能は、金剛流能「花月」（シテ加藤かおる、ワキ高安勝久、アイ松田高義、笛・鹿取希世、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・河村眞之介、後見・豊嶋晃嗣、西脇和子、鈴村昌美、地謡・田中敏文、山口尚志、中嶋謙昌、竹市幸司）ほか仕舞「加茂」「松風」「野守」

開場午後六時、開演午後六時三十分。会場・犬山城天守閣前広場・特設能舞台（雨天の場合は犬山体育館）

入場料＝前売り一般二千円、学生千円（当日券一般二千五百円、学生千五百円）犬山城天守閣登城券を含む（一ヵ月間有効）

チケット販売所＝犬山城、キャスタ、清水屋犬山店、犬山文化会館など。問い合わせ先＝0568・62・8318、加藤方。

戦後名古屋能楽史 ㊽

〔第十二章〕　竹尾　邦太郎

昭和三十三年（一九五八）

（承前）

四月二十日、天杭平野清追善会は二十三回忌、催主・水藤又吉（のちに元三）は番組冒頭で次のように挨拶する。

「この度私の手ほどきをして頂きました先生故平野清師の追善能を催すに当りまして大槻先生を始めその御一門名古屋清韻会及び名古屋能楽倶楽部の皆様の御賛助御出演を得まして左の如く立派な会となりました事は定めし地下の平野師に於かれましても御満悦下さる事と心から有り難く存ずる次第です　この上は何卒して当日追善能らしく盛大に然も静粛裡に終了致し度くとこれのみ念ずるばかりです大方同好各位の御好意ある御観能を御待ち申し上げます

昭和三十三年三月　水藤又吉　敬白」

水藤は当時、大槻門の流友で、機械・工具などを手広く商う実業家。好きが昂じ、のち斯道の師範に成る。番組に特に註記はないが、番外に舞囃子「海士」加藤良久、仕舞四番「梅ヶ枝」岡田光紘「巻絹」殿島修二「大江山」大槻文蔵「善界」山本真義、独吟「琴ノ段」林喜右衛門、能「善知鳥・外ノ浜風」大槻十三、狂言「呂蓮」河村丘造、があり、自身は重習「道成寺」の披キである。ワキ高安湛郎・西村欽也・和泉太郎、アイ井上松次郎・礼之助、囃子は藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・山本敬一郎・鬼頭喜太郎、地謡は林喜右衛門・山本真義ら、後見を大槻秀夫・田村勇・吉村真之、鐘後見は大槻十三ら、錚々たる顔触れである。同年『観世』六月号は「素人ながら見事な舞台を見せた」と「展望」欄に写真入りで報じる。入場はこの番組で無料、但し招待券御持参の方ニ限ル、とあり、招待券ハ出演者ノ中ノどなたカニ御申込ミ下サレバ差シ上ゲマス、と如何にも祭儀。賛助出演は他流の流友も含め舞囃子五番、仕舞十七番、独吟八番、中に日本画家で鏡板の揮毫も数多く手掛けた松野奏風が独吟「松浦物狂」を旧友平野清に手向けている。

二十六日は前年六月に発会した掬水青陽会の第一期・第三回。舞囃子「西王母」丹下三義、能「籠」久田秀雄、狂言「伯母が酒」山本光次郎、能「熊野」上田照也、仕舞「網ノ段」柴田初太郎、能「小鍛冶」佐藤太俊、である。因に以後、各期が年を越して二年に跨る催会は第二十六期まで、第二十七期（昭和五十八年）に至り年内に納まることになる。なお、第二十二期以降は催会回数が一回増え四回となり、番組立は当初から変らず基本は能三番、狂言一番である。翌二十七日、中部金剛会は第一部の春季謡曲会のあと第二部で定式能、舞囃子「邯鄲」豊嶋弥左衛門、「桜川」大塚一二、「寝音曲」野村又三郎、仕舞四番「鞍馬天狗」伊藤鉄之進「放

（⑤面へつづく）

能「卒都婆小町」

9月6日 大槻能楽堂

大槻能楽堂では、自主公演能として、能の魅力を探るシリーズ「小町シンポジウム」を企画。中西進氏、馬場あき子氏の対談「謎の麗人＝小野小町に迫る」のテーマで行うとともに、8月には、喜多流・粟谷菊生師による「通小町」を上演、きたる9月6日(土)には「卒都婆小町」を上演（2回シリーズ）する。

出演は次のとおり。

能「卒都婆小町」一度之次第
シテ大槻文蔵、ワキ中村彌三郎、ワキツレ森本幸治
笛・藤田六郎兵衛、小鼓・荒木賀光、大鼓・白坂信行、後見・泉嘉夫、泉泰孝、赤松禎英、地謡・山本順之、松浦信一郎、多久島利之、斉藤信隆、山本博通、山本正人、生一知哉、竹富康之

午後2時開演。入場料＝全自由席一般当日四千五百円、学生二千八百円。大槻能楽堂テレフォンサービス＝06・6761・5101

金剛定期能

8月から5回公演

金剛能楽会主催の平成十五年度金剛定期能は、新金剛能楽堂が六月に開館し、八月～十二月の五回公演で上演。

能組は次のとおり。

▽八月二十四日(日)
午後一時始
能「高砂」金剛永謹
ツレ塚本嘉樹
能「小鍛冶」種田道一
ほか狂言

▽九月二十八日(日)
午後一時半始
能「枕慈童」金剛龍謹
能「井筒」松野恭憲
ほか狂言

▽十月二十六日(日)
午後一時半始
能「龍田」宇高通成
能「善知鳥」今井清隆
ツレ松野洋樹

▽十一月二十三日(日)
午後一時半始
能「三井寺」豊嶋三千春
能「舎利」広田泰能
ツレ豊嶋幸洋

▽十二月二十一日(日)
午後一時半始
能「籠」広田幸稔
能「巻絹」金剛永謹
ツレ今井克紀
一般券＝前売五千五百円（当日六千円）
問い合わせ・申込み先＝（〒602－0912）京都市上京区烏丸通一条下ル　金剛能楽堂内・金剛能楽会
電話&FAX（075）441・7222

京都

大阪

【訂正】本紙前号（七月十日号）「戦後名古屋能楽史」のなかで③面5段目右から19行目「買収防止法」とあるのは「買春防止法」の誤りでした。お詫びして訂正します。

【おことわり】暑中広告の掲載にあたり、まことに勝手ながら七月号、八月号と分載させて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い致します。

暑中御見舞申し上げます

長田驍後援会
〒514－2221 津市高野尾町三三五一－四六
電話〈〇五九二〉㊱〇六九七番

喜多流 和楽会 和谷衡市
〒516－0067 伊勢市中島二丁目26－12
電話〈〇九六〇〉㉕〇一五九番

谷田宗二朗
〒603－8322 京都市北区衣笠街道町31－7
電話〇七五（四六三）四八七五番

西村同門会
飯冨雅介
杉江元
椙元正樹
橋本宰
西村信広

清水利宣
〒569－0817 高槻市桜ヶ丘北町11－25
電話〇七二（六九四）五〇一七

楽諷庵舞台
名古屋市昭和区川名山町一〇五
電話（八三二）三四九一番

冨耀会
柳原冨司忠
〒466－0026 名古屋市昭和区滝川町47－147
サザンヒル八事2－703番
電話（八三二）一〇三一番

小鼓教室
名古屋市中区栄　朝日神社内（九達前）

叶石会
河村総一郎
河村真之介
〒466－0021 名古屋市昭和区前山町一丁目一三
電話〈〇五二〉七六一－四八八二

河村大
〒603－8313 京都市北区紫野下柏野町五九－一
電話〈〇七五〉四六二－四一一五

前川光隆
前川光長
〒616－8005 京都市右京区御室芝福町一の六
名古屋稽古場 名古屋市東区葵二－13－3 ツインクルガーデン801前野舞台
電話九三二－八八〇六番

呉竹会
筧鉱一

長生会
鬼頭好信
愛知県中島郡平和町城西
電話〈〇五六七〉㊻一九六〇番

大蔵狂言会
大蔵彌右衛門
大蔵彌太郎
大蔵吉次郎
〒177－0045 練馬区石神井台5－22－41－406
電話〇三－三九二〇－六七一七番

野村萬

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル（旭市役所南）
電話 〇五六一五㊸二三四六番
能舞台 電話〇五六一五㊹〇六九八

（④面よりつづく）

下僧」竹市秀雄「杜若キリ」山田仁三郎「角田川」今井幾三郎、「山姥・白頭」金剛嵯。

五月三日、喜多流観賞会が宗家喜多実を迎えて発足する。主催は催会名と同じ喜多流観賞会、事務所を東区撞木町一ノ三の寺西旅館内に置く。年一回の催会で毎回宗家の来演を仰ぐ。初回の番組は、仕舞三番「葛城」中尾栄一「天鼓」岡村保道「松風」東海古竹、独吟「松蟲」二井栄逸、舞囃子「安宅」和谷亀二郎、能「鉢木」後藤得三、狂言「芥川」河村丘遺、能「羽衣・舞込」喜多実、仕舞五番「殺生石」内田安信「是界」長田驍「網ノ段」栗谷新太郎「田村クセ」喜多節世「巴」喜多長世、能「小鍛冶・白頭」和島富太郎。珍しいのは「鉢木」の替間、常は早打と二階堂ノ従者の二人だが、従者が三人となり従者同士が最明寺殿の噂話一頻りのあと各地へ触レに散ってゆく。この日のアイは井上松次郎、佐藤秀雄・井上義次・石田喜樹。

五日、汎流儀の能楽愛好者の結社・名古屋能楽倶楽部が順調に歩みを進め第七回公演、素謡三・仕舞二十・舞囃子十五・能一・狂言一と盛会である。十一日は名古屋淡交会、「先に能楽の無形文化財の制定あり此の機に際し其の至芸に接し得ますは意義ある事と存じ御愛好各位の御鑑賞を仰ぎ斯界の隆盛の一助にもと左記之通り能楽会を開催いたし度何卒御後援の御思召を以て御清覧給はりますよう御挨拶申上ます」の口上があり、重要無形文化財保持者に認定された観世銕之丞・橋岡久太郎が一番ずつ能を勤める。番組は素謡二番「神歌」「鶴亀」鬼頭五朗、仕舞四番「道明寺」加藤良久「杜若キリ」飯田新子「田村クセ」松田十草「芦刈キリ」中野寛兵衛、舞囃子「小袖曽我」谷村一太郎・飯山嘉俊、独吟二番「井筒」飯田賢「女郎花・前」尾関健太郎、仕舞二番「藍染川」河村鉦二「善界」柴田収、「大原御幸」観世銕之丞、一調「鵜飼」鬼頭八郎・橋岡久馬、舞囃子二番「経正」片山博太郎、「山姥」高橋静夫、「富士太鼓」橋岡久太郎、「舟渡聟」河村丘遺、独吟「琴ノ段」林愿蔵、「石橋」橋岡久馬（間）久共（後）。

十五日は岡本多喜・田鍋里やう（惣太郎夫人一周忌）田鍋守正（惣太郎四男・日華事変で戦死・二十三回忌）追善邦楽大会。催主の田鍋惣太郎は中部日本雅楽連盟代表で、この道では宋和を名乗り、舞楽「陵王」の舞人、雅楽「陪臚」の太鼓を手向けたほか、趣味の長唄では惣一郎・豊二郎（六郎兵衛）・多喜三（保三）の子息三人と「吾妻八景」を唄う多芸ぶりである。

能楽関係は、舞囃子「安宅」山田仁三郎、仕舞「網ノ段」加藤良久、狂言「重喜」石田喜樹、珍しい脇仕舞「羅生門」高安滋郎、舞囃子「融」辰巳孝がある。

二十五日、加藤正楽会は催主・加藤丈太郎の先代常太郎義治の三十三回忌追善、武田太加志・岡久雄・武田四郎・中川清らの来演があり、『観世』八月号は盛会を伝える。

月が替り六月一日、先に（三月一日）結成されたばかりの中部能楽師会が第一回の定式能を催ず。素謡「神歌」前田昌広、能「竹生島」太田重次郎、舞囃子「八島」鈴木右門、能「羽衣」大塚一二、狂言「鐘屑」佐藤卯三郎、仕舞三番「加茂」佐藤太俊「巴」加藤丈太郎「天鼓」塚本秀雄、能「菊慈童」殿島修二、舞囃子「船弁慶」柴田初太郎。この年、昭和二十五年から三十二年まで十二回行われてきた能楽協会名古屋支部能は行われず、これが中部能楽師会定式能に移行してきたのであろうか。五日は名古屋能楽会主催で前年度から始まった熱田祭協賛奉納能であるが、今年度の主催はその他に能楽協会名古屋支部と中部能楽師会が加わって三者、この三者の構成メンバーは大半が、と言うより殆んど同一人が三つの会に所属しているだろうことを思えば、三者の実体はどうなっているのか、内部事情に疎い外部には全く不可解としか言いようがない。ともあれ番組は、狂言「雷」井上礼之助、独吟「網ノ段」前田昌広、希少と言ってよいワキ方の連吟「小鍛冶」高安滋郎・西村弘敬・欽也、の三番を挿み以下の舞囃子十番というユニークなものである。「高砂」杉村竹翠、「八島」鈴木右門、「小袖曽我」加藤丈太郎・久田秀雄、「羽衣」加藤良久、「三輪」竹市秀雄、「放下僧」内藤泰二、「雲雀山」河村鉦二、「邯鄲」佐藤太俊、「船弁慶」柴田収、「猩々」山田仁三郎。

八日は観世会第三回、素謡「養老」高野瀬透、仕舞四番「加茂」殿島修二、「草子洗小町」石谷初蔵、「蟬丸」杉村竹翠、「鞍馬天狗」丹下三義、「蟻通」杉浦義朗、「夕顔」片山博通、「右近左近」茂山千五郎、仕舞「屋島」杉浦元三郎、「阿漕」柴田初太郎、京都勢の来演で大鼓に谷口喜代三も。十四日、和泉流狂言共同社主催の狂言の夕は前年に続く第二回、狂言尽し六番は「骨皮」石田喜樹「寝音曲」鈴木倘伴「鞍猿」井上礼之助「棒縛」野村又三郎「鬼の継子」井上松次郎「釣針」野村又三郎。『狂言』紙第十八号はその成果を「非常な人気を呼び見所はサービスの団扇の波で満員の盛況でありました。出演者も精一パイに懸命に演じ、名古屋の狂言和泉流ここに在りとの気魄を見せました」と報じる。

六月十七日、愛知県文化会館の開館式。名古屋市公会堂が昭和三十一年二月十五日、駐留米軍から返還されたとは言え大ホール不足は深刻なまま、金山体育館が音楽会の会場に使用される時代の一大朗報である。「わが国有数のホール・愛知文化講堂17日に〝こけら落し〟」の四段抜き見出しで十三日付中部日本新聞は次の紹介記事を掲載する。

県文化会館の講堂が完成、十七日午後一時から開館式がおこなわれる。こけら落しの出しものは狂言三番叟、仕舞舟弁慶、日本舞踊賀祝梅松桜ときまった。講堂は愛知文化講堂と呼ばれ、講和記念事業の一環として、美術館につづく第二期工事として昨年五月着工された。三千坪の敷地の上に鉄骨、鉄筋コンクリート造二階建（一部三階）で延べ二千坪が建っており、舞台、設備などわが国有数のホールである。とくに音響効果、照明装置に力が注がれ、音楽、舞踊、演劇、能、映画、講演その他各種の大会に利用できるところが特徴である。

舞台は間口二三・二メートル、奥行十二メートル、天井高さ二十一メートル。大・中・小三種のせりが四台あり、せりが下ったあとを埋めるスライディング・ステージが三カ所。危害防止のため、せりのシャフトはおおわれており幕類はすべて防燃加工されている。両わきの花道はとりはずしでき、舞台の前のオーケストラ・ボックスは上下に動いて、エプロンステージにもなり、また客席にもなる。客席はワンスロープ式で千四百三十八席、補助席が二百五十二席あるので収容人員は千六百九十人。イスは背側がうしろに傾くうえ、幅があるのでゆったりしている。舞台から客席をみた感じはだだっ広くないのでアトホームな感じ。

照明が自慢のもので、天井照明室が完備しているのと蛍光灯の調光が出来るのが特徴。照明装置は九十二個にのぼる。十日音響測定をしたところ満点に近い結論が出ており、音楽会には最も適している。そのほか楽屋の広いこと、昨年初めて国際見本市に出品された英国製の映写機を持っていること、舞台の使い方で反対の立場にある日舞と洋舞、旧劇と新劇のどちらにもいいように中庸をとってあること、なども特徴である。

地下は食堂や荷物預り所になっており、隣の美術館との間は繋って集会に利用出来るようになっている。建築費は建物だけで二億七千万円、設備を入れると三億三千七百万円。こけら落し後は使用申込みが殺到しており土・日曜は十二月まで全部予約ずみ。平日でも十月まではほぼ埋っているという。

さて、式典に続く柿落シの記念公演、「三番叟・橋掛ノ舞」は三宅藤九郎、仕舞「船弁慶」は梅若六郎、翌十八・十九の両日、能楽協会名古屋支部による記念公演がある。

――以下次号――

☆……☆

☆……☆

◆仲夏の舞台から◆

「金剛能楽堂舞台披キ記念能」「名古屋能楽堂定例公演」「名古屋淡交会別会」「後藤得三・佐藤芳彦十三回忌追善能」と「豊田市能楽堂定例公演」

竹尾邦太郎

「翁」　シテ永謹。新・金剛能楽堂舞台披キ。見所の桟敷席が椅子席に替り、舞台入母屋造りの庇と橋懸屋根庇に瓦を載せる独得の佇まいは檜皮葺きに一新されたとは言え、歴史の重味を感じさせる旧・室町舞台の鏡板・床・柱・頭貫（かしらぬき）・蟇股（かえるまた）・軒桁・たるき・貫人口などはほとんどそのまま移築され、古風な趣をよく留めているのが嬉しい。

正先の叩頭は浅いが間は長く、舞はゆったりと大きい。足拍子には新・能楽堂を拠点に流儀を統率してゆく揺ぎなき自信、生得の雅な雰囲気に京の能大夫の気品をみる。謹厳よりは清々しい喜悦溢れる翁である。千歳は正邦、緊張味十分、爽やかに勤め、三番三は千五郎の揉ノ段の壮快。翁帰りの後、揉出シを一ノ松で下居に聞き、へおおさへおおさへ、と真直ぐ正先へ出る見慣れた和泉流と異なり、揉出シを後見座から常座に出で正座で聞き、へおおさへおおさへ、とスミへ出てゆく大蔵流が珍しかった。（1時間6分・6月18日・金剛能楽堂）

「真盗人」　シテ小三郎、畑主・高義。盗みは暗闇に紛れてが常套、月明下ではあるまい。漆黒の闇は樹下、田畑開けた空間の暗闇は目が慣れるにつれ見えてくるもの、その徐々に見えてくる気配あまり感じられず、盗みにだけ性急だったのでは。なお、畑に寝そべり瓜の所在を探るところ、他流他派は「転（ころ）びを打つ」が野村又三郎派では「転（まろ）びを打つ」。（27分）

「松風・見留」　シテ松風・六郎、面若女・檜白二・白地

（⑥面へつづく）

暑中御見舞申し上げます

狂言やるまい会
野村又三郎
野村小三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎
〒460-0021 名古屋市中区[illegible]ビル
野村事務所　気付
電話〇五二（[illegible]）[illegible]

鳳の会
林和利
佐藤友彦

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓　後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

㈱大阪能楽会館
〒530-0015 大阪市北区中崎西2-3-17

梅猶会定期能
9月6日、12月7日
梅猶会の平成十五年度定期能九月公演、十二月定期能の番組は次のとおり。
▽九月六日（第三回）
大阪能楽会館
十二時半開演
能「巴」梅若猶義
狂言「栗焼」茂山七五三
能「三井寺」梅若善高
能「国栖」梅若基徳
ほか仕舞
▽十二月七日（第四回）
大槻能楽堂
研究能（十一時始）
「殺生石」井戸良祐
定期能（午後一時始）
仕舞二番
能「花筐」池内光之助
狂言「文荷」茂山千五郎、茂山正邦
舞囃子「巻絹」梅若吉之丞
能「玄象」井戸和男
入場料／前売券四千円（当日券五千円）、学生前売券二千五百円（当日券三千円）
申し込み、問い合わせ
梅猶会定期能連絡所（豊中市新千里南町3丁目18-12、梅若善高方、TEL 06・6831・7854）

新作能面展
中部能面研究社
中部能面研究社（磯部峯雲氏主宰）は八月二十七日(水)より三十一日(日)まで名古屋市博物館三階ギャラリーで「第一回新作能面展」を開催する。後援愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、入場無料、開館午前九時三十分、閉館四時三十分。（入場四時十五分まで）

狂言なのり座
井上靖浩
佐藤融
野村小三郎

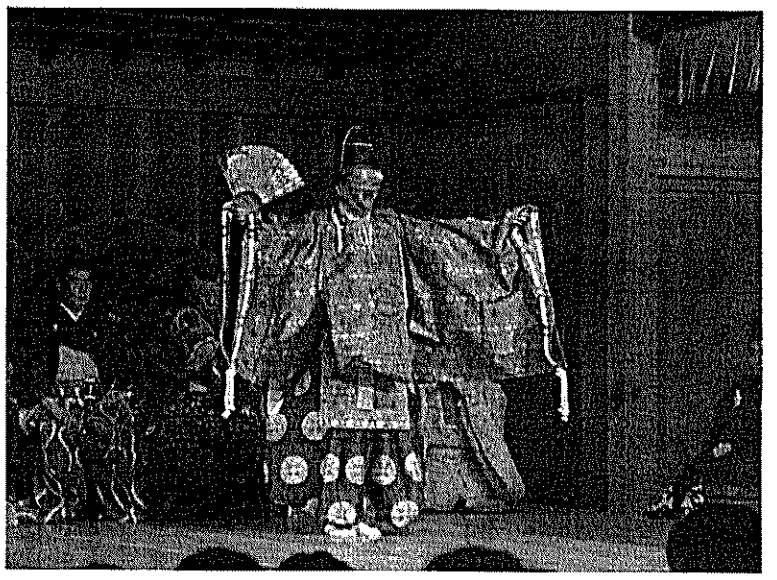
ウシマド写真工房
京都市西陣局区内北野上七軒
TEL（〇七五）四六二-一三四一

能楽舞台
名古屋市中区栄五-六-四
電話（〇五二）一一八三番

彰諷閣
名古屋市天白区植田西二-八〇二-二
電話（〇五二）八〇五-三三〇一
連絡先　名古屋市緑区鳴海町有松裏40-9
電話（〇五二）六二一-四二三八

能楽の友社

（⑤面よりつづく）



金剛能楽堂舞台披キ祝賀能　「翁」金剛永謹

（原田七寛氏撮影）

金撫子文摺箔着付・赤地水草ニ流水卜白鷺文縫箔腰巻・淡浅黄裾ニ金霞文水衣。ツレ村雨・晋也、連面・襟白・白地金露芝文摺箔着付、腰巻と水衣はシテに同じ。

先ず、汐汲車を引き僅かに生計を立てざるを得ない境遇を嘆き、浦風の運ぶ夜の波の音の淋しさは月のほか友も無い浮世の儚さ、連吟の哀調が出色。形影相伴う風情に舞台へ入るシテは、初同（邦久・邦弘ら）へ澄む月、に気を取り直すもその明るさ。へ影恥かしき我が姿、と静かに面を伏せ、左手を右胸にそっと押し当て、得も言われぬ恥じらいの表情濃やかに美しくみせ、返シ句にゆっくり左手を戻すにも心持充分、シテ松風の人間像が端的に現わされる。汐汲の段は、へ影を汲むこそ心あれ、と慎しく二度汐を汲み、返シ句に砕け散り煌めく月の影を水桶に沁々覗き見るところ、詩的情趣も溢れる。

宿乞うワキ旅僧・勝久との対面は、問答が行平の一首に及ぶと、懐旧の念も新たなシテ・ツレのクドキの連吟が名調で心持ち深く大いに聞かせる。クセは行平形見の烏帽子・狩衣に弥増の思いを募らせるところ、へ捨てても置かれず、と居ても立っても居られない風情に出ると、へ取れば面影に、と抱える長絹をひしと掻き抱き、切なくきりりと小廻り二度、心の裡を活写する。物着に烏帽子・長絹を着けるが、烏帽子は後見がやや大ぶりな物と替えたのではなかろうか。若しそうなら不可解。物着に錯乱して立つとツレが驚き止めるところは極く淡泊。へ立ち別れ、とシオリのまま二ノ松へ抜け、戻ると中ノ舞から型所、へ磯馴松の、と左袖返シ松に詰め寄り、へ懐かしや、と膝をつきシオルが、露骨に抱きつかないのが慕情却って深い。左袖戻してまじまじと松を見て立つと、思いの丈は破ノ舞へ。扇翳シ松の外側廻って一ノ松へ抜け、右袖返シ左袖披キ松を見込む舞のトメは小書「見留」、鮮やかである。キリは〈松に吹き来る、と扇ハネつつ舞台へ戻り、下居にワキへ合掌などあり、へ暇申して、立つと六ツ拍子に波の音を聞かせ、へ吹くや（後の山颯）、を下シ扇に見せ、へ須磨の浦かけて、と一ノ松へ、謠を残して幕へ入るとワキは常座で見送り、へ松風ばかりや残るらん、の返シ句に松立木を見返って合掌から右ウケ拍子は踏まずトメ。心理描写に細心のシテ、慎ましいツレ、神妙なワキ、詩情豊かな舞台だった。アイ又三郎、囃子は六郎兵衛・嘉津幸・眞之介、主後見を嘉夫。（1時間47分・6月20日・能楽堂定例公演）

「道成寺・赤頭」　シテ三津子、披キ。面若女・襟白二・白地撫子文摺箔着付・黒地丸文尽縫箔腰巻・桜ニ鳳凰文紅入唐織壺折。面と着付、近江女に鱗箔でないのが妖しい雰囲気を欠く気もするが、鐘の供養に赴く次第から道行へ、逸る思いは捲を取りへ急ぐ心か、の昂ぶりに奇矯な一面を窺わせる。女人禁制を言うアイ能力・祐一との問答では、余人に非ずと能力を籠絡、舞に漕ぎつける気丈な娘の一念、女流のシテの資質もあろうか、お侠（きゃん）な印象を受ける。物着に金色烏帽子をつけ、二ノ松から鐘を見込み、急調大鼓のアシラヒで一気に舞台へ入ってくるところ、供養の庭に助走をつけて飛び出す勢い。乱拍子は三段で中ノ段、ワカを刻み込み、小書で常とは逆に右へ小さく廻る。踏む乱拍子に籠る女人の情念、キッと見上げる鐘への思いは急ノ舞へ奔騰。きびきびした細かい足遣い美しく、烏帽子刎ね、その右手の扇で鐘の縁を打つや鐘の下へ廻り込み、両手を鐘の縁に掛け、拍子踏んで高く飛び上がると見る間に、鐘が落ちる鐘入も鮮やか。変事を知らせ、ほうほうの体で這い回り退出するアイ祐一の事々しさ、ワキ敦弘の語には少々勿体ぶった口吻、も好アクセントである。

後場は、面白般若・赤頭・着付を赤地金鱗箔、腰巻を白地火焔文縫箔に替える。緋長袴を活発に捌く折りの姿は見られないが、鱗落シの脱ぎ捨てる様な荒々しさ、鐘をキッと見上げきりきり巻いてゆく柱巻キの瀟洒の強さ、精気に溢れる。キリは一ノ松に逃れ、萌黄打杖を胸杖に構えて鐘を見込み、無念の執心をみせて幕へ走る。後シテも妖女よりは猛女の様にみた。囃子は次郎・舜一郎・眞之介・國和、地謠は完治・芳伸ら、主後見を慧観、鐘後見は四郎。なお鐘吊は靖浩・融、一発で吊り上げるのは当然のことだが見事。（1時間37分・6月23日・名古屋淡交会別会）

「井筒」　シテ栄夫、面は小面。序ノ舞に袖披クことなく巻いて済ませたのは残念。井桁は丈の低い方で芒は手前左側。へ業平の面影、と左袖返シ右手扇で芒を右へ薙ぎ伏せる型から〈見れば懐しや、と井を覗き込むが、芒は左側ではなく右側の方が極るのではなかろうか。更に〈我ながら懐かしや、と今度は膝をつき、井桁に左肘をもたせて沁々覗き込むのは一入の懐旧の念、栄夫年功（1時間42分）

豊田市能楽堂定例公演
「鈍太郎」野村又三郎　（杉浦賢次氏撮影）

「蚊相撲」　「江州守山は蚊所ぢゃ」とは言っても東国では不案内だろうが、江州が曽て蚊帳の一大生産地であったと知れば頷けようか。例えば溝川・水路張り巡らせた低湿地の愚東、「武州葛飾は蚊所」とあれば東国の人々も更に馴染もう。シテ大名・萬、召し抱えた異形の者は「人間に交り人の血を吸はうと存ずる」目的意識持つ小アド蚊ノ精・与十郎とあって、相撲を取るも早技の一刺しにやられ、奥の手は大団扇で煽り倒そうと再度の挑戦。満面朱を注ぐ萬の力一杯の舞台は面白さも一二〇パーセント、資質だろうが醒めたアド太郎冠者・匡の白皙とも好対照。（35分）

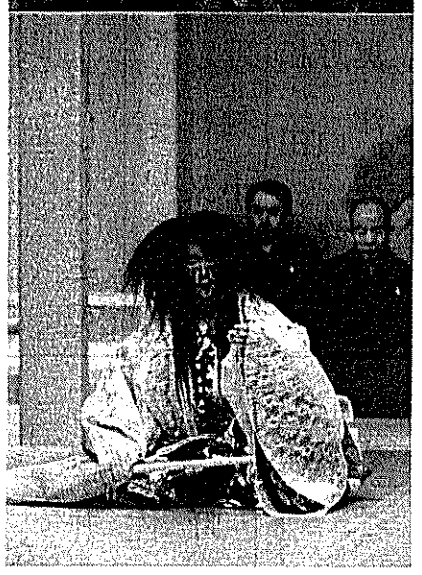
「通小町」　シテ四位少将・泉、面痩男・黒頭・無紅七宝繋ニ鶴菱文厚板着付・浅黄大口・萌黄水衣、灰青色無地熨斗目を披キ一ノ松、ツレ小町・喜美雄の受戒を遮りワキ僧・常好の退去を求める凄味は、へ（包めど我も）聴に出でて、と被衣脱ぎ捨て、へ尾花招かば、とツレを招くところ、そっとする薄気味悪さ。へ犬となって、とはったと打合せ、舞台へ出ればへ袂を取って引き止むる、と背後からツレの袖を右手に掴み、左手は肩を押えるが、小作りな少将と大柄な小町では見た目の景がよくない。当初、案内チラシはシテ泰男、病のための変更も本番組には間に合って泉になったが配役の大事を思う。しかし、呪縛された様に立ち竦むツレに、さすが名手のシテ泉、悲愴な思い懇々と伝わる。弄ばれたとしか思えぬ恋路の苦衷を〈涙の雨か、と笠を両手に翳シて廻るイロエの心象描写が深長なら、あと一夜〈待つ日にならぬ、と上体のめる様に逸る心を見せ、憔悴の色も濃く〈姿は、と立つところも妙。ただ「井筒」の栄夫もだが、下居から立つところ、膝・腰の衰えが心配。（42分・6月29日・後藤得三佐藤芳彦十三回忌追善能・横浜能楽堂）

「鈍太郎」　妻・高義と姜・健太郎から恋われる持て持て男のシテ鈍太郎・又三郎、都を三年留守に戻れば、妻と姜は口々に屈強の男を持ったと門前払いのささやかな抵抗。しかし、そこは女性心理に通じる曲者鈍太郎、脱俗すれば母性本能が掻き立てられ、元の鞘に収まるだろうと踏む狡猾。まんまと嵌る妻と姜、あまつさえその籠絡ぶりのあざとさは有ろう事か女二人の手車（写真）に囃して行くとは。ジェンダーに喧しい当節、男冥利に尽きるなどと言おうものなら生きては居られまい。されば良き昔とは言え、鋭太郎に非ず無神経の鈍太郎の命名は深謀遠慮があったろう。役を存分に楽しむ又三郎である。（28分）

「無明の井」　多田富雄作・橋岡久馬作曲節付。脳死と心臓移植は死と復活という極めて現代的な最先端のテーマ。この重い哲学的な命題を脚色、一九九一年二月の初演以来、内外に大きな話題を提供し、新作能には珍しく上演を重ねる幸運な名曲でもある。世阿弥が自身節付した曲を舞ったように、久馬の場合も同じ、自家薬籠中のものとして久馬の芸風が特によく発揮され、現われる得意曲。「無明」文字通りは「明無し」、即ち「目が見えない」は転じて「聡明さに欠ける」の意と言い、仏教では人生の真相に明らかでないこと、即ち「迷妄・煩悩の根源」という。「井」は曲趣から「命の水の存在」の象徴であろう。

他者を犠牲に移植を受け永らえるのを苦悩する女ツレ雅一がせめて魂の慰みを得んと命の水潤れた井に迎え水をするところ、それを阻止する漁夫（ノ霊）シテ久馬、己が魂の有り様の宙ぶらりんを思い知らされる恐れがあったのであろう。面早男・黒頭・紺地無地熨斗目着付・萌黄水衣・腰蓑の姿は正に幽鬼、その水は供養の水に非ず却って苦しめの因、と素早くツレの背後に寄るやへ取縋って、ツレの右袖しっかと押える（写真）怖さ。「通小町」に似る。せめき合う二人の亡魂、へ哀れみ給へ、と共に旅僧ワキ茂十郎にアシラフと、シテは海難に遭った北の海を右ウケて感慨深げに眺めやり、直ルとやっとツレから手を離すが、己が立場を察した心。ツレは作物に消え、シテは察した心を分ったという様に両の拳を大きく打合すが、橋懸を退いて行く姿は孤影悄然。送り笛に二・三足出ては立ち止まるのは「音取」の登場と逆の退場の珍しさ。女の自責の気持ちを無にしたのでは、の思いを反芻する心であろうか。アイ所ノ者は小三郎、長袴出立。初演時は半袴出立で大蔵流大島寛治、故老の趣があり好演であったが、今回は故老達から伝えられてきた昔話を聊かの得意を以て若者が滔々と語る趣で中々。

後シテは面淡男・黒頭・萌黄地花菱亀甲文厚板着付・紫地半切・白練水衣に棹を持つ。浮游する魂の在処を求めて彷徨うような出は一ノ松、へああ曠野人希なり、は荒寥たる風景が人間の精神世界の迷妄に重なり、へ我は生き人か死に人か、の悲鳴に響き合う。作物内、シテに呼応して呻くツレ、シテが舞台に入り、引廻シ取られると男女二人の亡魂はワキに合掌、回向を願えばワキは男女出会いの有様を問う。先ず、肉体の朽ちてゆく経緯の一般論を居グセで聞かせ、上ゲ端まえ、居立ってワキにアシラヒへ生死の有様、と強調するが、昔より同じと又腰を下ろし、上ゲ端は〈然るに我は漁とり、と声調を呪詛と聞く。上ゲ端あと、棹を取って立ち、この度は海難から仮死のまま臓器摘出に至る様を舞グセにみせる。浦に打ち上げられる様は流レ足に（「鵜」の空舟の後シテに似る）、へ医師ら語らい、ではオベの手立て説明するかの型（写真）、メスや鉗子の触れ合う音の怖さは左手耳に当て遮る型に、巧みに現わす。へなう我は生き人か死に人か、の悲痛な叫びは拍子一ツ踏みカケリの悩乱、狂おしく頭を振ると二ノ松へ走るのも凄まじい。キリは三途の川を渡ろうにも拒絶され、亡者になり切れず混迷の闇に投げ出されて浮かばれない魂の苦悶。左手つき立ち上がるといった破格も、陰惨な救いのない世界を現わすには肉体の屈折も得難い個性と言うべきか。瞬時も目の離せない油断ならない舞台である以上に、生の在り方を問う哲学的示唆に富む舞台だった。終始謹厳な茂十郎の重みと、融通無碍の久馬の一種の軽み、対照の妙も映える。地謠は久太郎・修一ら、囃子を学・達志・総一郎・國和、後見は邦久・和男・晃一。（1時間8分・7月5日・豊田市能楽堂定例公演）



㊤豊田市能楽堂定例公演「無明の井」
橋岡久馬・梅若雅一
㊦「無明の井」後シテ橋岡久馬
（杉浦賢次氏撮影）

徳川幕府開府四百年記念秋季特別展
徳川美術館

徳川美術館（名古屋市東区）では、十月四日から十一月九日まで徳川幕府開府四百年記念秋季特別展「輝ける慶長時代の美術～桃山から江戸へ～」を開催。絵画・書・工芸品を中心に展観する。

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成15年9月～10月）

◉ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞　（毎週日曜日午前7時15分～8時）
9月28日（再）「船弁慶」（宝生）　本間英孝ほか
10月5日　「山姥」（観世）　関根祥六ほか
10月12日　「天鼓」（宝生）　三川淳雄ほか
10月19日　「紅葉狩」（喜多）　塩津哲生ほか
10月26日　「江口」（観世）　藤波重和ほか
◉ＮＨＫ教育テレビ（土）12時30分～13時
（再）（火）5時30分～6時
10月4日　能「八島」▽10月11日　宗須与市語り
ゲスト：野村万作▽10月18日　能「八島」ゲスト：観世世栄夫▽10月25日　狂言「宗論」ゲスト：野村万作

演能カレンダー

◈名古屋能楽堂◈

（TEL 052－231－0088）

［9月］
23日(火)　第16回「能」久田勘鶴の会　（有料）
28日(日)　和泉流狂言大会　（無料）
［10月］
4日(土)　青陽会定式能　（番組①面）（有料）
5日(日)　名古屋皐楽会　（番組①面）（無料）
12日(日)　武田謡楽会　（番組①面）（無料）
13日(月)　名古屋幽花会秋季大会　（番組②面）（無料）
19日(日)　邦謡会発表会　（番組②面）（無料）
25日(土)　狂言ござる乃座　（番組②面）（有料）
26日(日)　三交会大会　（番組③面）（無料）

◈熱田神宮能楽殿◈

（文化課 052－671－0852）

［10月］
19日(日)　鳳鳴会大会　（番組②面）（無料）

復曲能「龍之口」

東海能楽研究会・長袖会が協力

日蓮上人法難霊跡　龍口寺で上演

日蓮聖人の法難に取材した復曲能「龍之口（たつのくち）」が九月十一日、藤沢市の霊跡本山・龍口寺で催され、龍口寺法難会の法要に、ひときわ精彩をそえた。

この催しは、主催復曲能龍之口上演実行委員会、協力東海能楽研究会、長袖会、呉竹会で藤沢市が後援、地元商店街振興組合、観光協会が協賛、毎年九月十一日から三日間、龍口法難会として盛大に大法要が営まれ、近在講中の万灯数十基、参詣は十万人が参集する賑わいを呈する法要での演能。

当日は午後六時開場、本堂内には二百人に近い観客で、法政大学名誉教授・表章氏から判りやすく能の解説ののち開演した。

上人の処刑をめぐり、弟子、鎌倉方の切迫する展開のうちに、子の刻の処刑で郎等が正に斬らんとするとき、目もくらみ、太刀が折れる舞台のリアルに、見所も静まりかえり有終の舞台がくりひろげられ、午後八時すぎ終演した。

出演は、シテ（日蓮上人）長田驥、ツレ松井俊介、和谷衡市、長田郷ほか、ワキ飯富雅介、ワキツレ楊元正樹、橋本宰、間・佐藤友彦、佐藤融、笛・大野誠、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・筧鉱一、太鼓・加藤洋輝、後見・松井彬、大島衣恵　地謡内田成信、金子敬一郎、大島輝久、高林呻二

能「姨捨」上演

10月25日　大槻能楽堂

大阪

大槻能楽堂では第三五八回自主公演能・特別公演として、能の演目のなかでも最奥の「三老女」のひとつ「姨捨」が十月二十五日上演される。

シテは観世流・泉嘉夫師、当日の演目は次のとおり。

お話「姨捨について」増田正造氏
狂言「文相撲」茂山忠三郎、茂山良暢、茂山茂

仕舞「弱法師」観世清和
能「姨捨」シテ泉嘉夫、ワキ福王茂十郎、ワキツレ広谷和夫、森本幸治、笛・野口伝之輔、小鼓・曽和博朗、大鼓・山本孝、太鼓・三島元太郎、間・茂山千之丞
後見・観世清和、泉泰孝、山本勝一、地謡・大槻文蔵、阿部信之、多久島利之、斉藤信隆ほか。
入場料　前売五千円。

大槻能楽堂＝大阪市中央区上町A番7号　電話06・6761・8055
なお、今回「姨捨」の上演に当って、シテの泉嘉夫師は「能の老女物の存在意義（国際的な視野における）乃至は、能自体の存在意義などについて多くの人に考えて頂きたい」との意図からエッセイにまとめ、能楽の友紙に別項（②面掲載）のように一文を寄せられた。

第1回廣田鑑賞会能「道成寺」古式上演

10月5日金剛能楽堂

京都

金剛流・廣田幸稔師はこのたび「廣田鑑賞会能」を発会、その第一回公演として、きたる十月五日(日)金剛能楽堂で、能「道成寺」古式を上演する。鑑賞会では、金剛永謹宗家が仕舞「高砂」祝言之式、廣田陛一師が舞囃子「砧」を上演する。

鑑賞会事務局TEL075・722・9123

伊勢の伝統の能楽まつり

10月19日　開催

伊勢

一色能、通り能、馬瀬狂言など由緒ある伊勢の伝統の能楽を継承する会（土谷喜八郎会長）は、十月十九日(日)伊勢市生涯学習センターで「第6回伊勢の伝統の能楽まつり」を開催する。入場無料。

能「半部」狂言「飛越」「伊文字」はじめ仕舞十一番、連吟、独吟、連調など五番。事務局電話0596・22・1720

和泉流狂言大会

九月二十八日(日)十時始
名古屋能楽堂

狂言「二人袴」「柿山伏」「蝸牛」「長刀応答」など二十三番、小舞など

主催　狂言共同社
狂言大声会・狂言友の会
朝日文化センター狂言教室
熱田生涯学習センター狂言友の会
中生涯学習センター狂言友の会

【入場無料】

青陽会定式能（第47期第4回）

十月四日(土)十一時開演
名古屋能楽堂

仕舞　松虫（キリ）　久田三津子
能　清経　田口（キリ）　高島良一　高橋瞭一　久田勘鶴　橋本宰　河村総一郎　後藤孝一郎　竹市学
仕舞　龍江　阿漕　松山幸親
能　楊貴妃　間　杉江元　今枝靖雅　河村真之介　後藤孝一郎　鹿取希世
狂言　長光　井上靖浩　今枝都男　井上祐一　後見　佐藤友彦
能　船弁慶　前後之替　間　久田勘吉郎　前野郁子　高安勝久　相元正樹　柳原富司忠　鬼頭好信　大野誠　佐藤融
附祝言
［有料］当日券　三千円、学生　千円　主催　青陽会

名古屋皐楽会秋季大会

十月五日(日)午前十一時始
名古屋能楽堂

番外仕舞　通小町　親世喜之
仕舞　嵐山　筒井俊貫
素謡　敦盛　東　中野理恵　山田貞子　梅村悦子　林政興
舞囃子　善知鳥　雲林院　竹村武　深見しげ（カケリ入）
仕舞　花筐　松風　源氏供養　梅村悦子　野田道子　水田純子（クセ）
番外仕舞　子方　坂真太郎　高橋瞭一　小島英明　中所宜夫　岡山
能　羽衣　奈倉早苗　飯富雅介　河村総一郎　福井啓次郎　加藤洋輝　藤田六郎兵衛　和合ノ舞　高橋瞭一　後見　観世喜之　五木田三郎　外山圭一　坂真太郎　小島英明　中所宜夫　小林喜久　観世喜正　佐久間二郎　駒瀬直也　地謡
終了四時半頃（素謡省略個所有）
主催　名古屋皐楽会
観世喜之
補導　名古屋喜謡会

［御来場歓迎］

武田謡楽会秋季大会

十月十二日(日)午前十時始
名古屋能楽堂

番外仕舞　通小町　阿竹登代子　武田邦弘
素謡　百万　橋本文明　佐藤ちゑ　新関隆己
通盛　片山芳昭　前山鎮男
仕舞　清経（クセ）　長谷川邦彦
蝉丸　林いそ子
女郎花　川合圭子
天鼓　小瀬古勝己
舞囃子　養老（五段）　野守　奥田悦子　斉藤忠佳　芦刈（五段）　鈴木利治
独吟　采女　花筐　阿竹登代子　下里紀子
舞囃子　白楽天　藤戸　小瀬古喜代子　松岡満寿子　三輪　市川敦子
番外仕舞　放下僧（小歌）　片山清司
女（アト）　片山慶次郎
阿漕　吉井順一
素謡　道成寺　今村香　吉井基晴　武田大志　井上祐一
舞囃子　頼政　善知鳥（角人）　田中葛子　渡辺一彦　弱法師（百万之舞）　山姥（立廻）　辻岡勝洋　井田順子
仕舞　遊行柳（クセ）　鐘之段　昭君　上野典子　松陰真澄　石橋恵子
素謡　熊野　田中朋子　林いそ子　桑原寿子　川原林澄　宮崎正之　江口　高橋千紗
舞囃子　箙　玄象（五段）　桑原寿子　加藤愛郎
番外仕舞　松虫（キリ）　武田欣司
附祝言
［御来場歓迎］
主催　武田謡楽会　武田邦弘

素謡　景清　駒瀬直也　佐久間二郎　矢橋浩吉　観世喜之
（皆伝格授舞）鸚鵡小町　田中英郎　観世喜正
舞囃子　頼政　野宮　若山弥栄子　深見一枝（拝舞）
番外仕舞　殺生石　観世喜正
独吟　桜川　山田延恒

寄稿

「姨捨」を披くにあたって

泉　嘉夫

能の演目のなかで姨捨・桧垣・関寺小町を「三老女」と称して、最奥に位置づけております。その姨捨を今回披かせて頂くこととなりましたが、それにつけても、四才で柏崎の子方で初舞台を踏んで以来、長い年月を経たものと、感慨を新たにしています。

ところで私は、五十才ごろからこの能について時折、思いをめぐらせておりました。

「姨捨」の文をよく俯瞰してみると、老婆を山に捨てる、という民話的な部分は、筋の展開部にわずかに動機的に述べられているに過ぎず、むしろこの国の秋の美しさを深く想い、「薄霧も立ちわたり、風すさましく雲霞きて…」とシテの老女は詠嘆します。しかしその想いは、単に秋の美への賛美にとどまらず、次第に月へと指向されていきます。

それにつけても、人が美しく老いてゆくことは即ち神に（この能において具体的には「仏」に）近づくことであり、「月」は神の象徴として、私達うつろいゆく人生の究極の光である、と思えてきます。またそこに充分なロマンティシズムの混在もある。

人が美しく老いること…「姨捨」はそのことを舞台化し、立体化して表現しようと意図した能である、と私は思います。

このように、人の精神を具体化し得る藝術は、能以外のジャンルにはおそらくあり得ないでしょう。とすると、人類の文化のひろがりの中で特異なある個性的な「場」を能は持っていると言えます。

桑原武夫氏（約四十年前の京都大学の人文科学研究所長で仏文学者）が「老人を主役の立場に置いて老いを表現すべく意図している作品は、西欧の文化の中にはなく、東洋の文化の中には存在するが、このことはよく研究してみる必要がある」と、ある講演の中で述べられたことを私は覚えています。

またもう一つ並列的に思い巡らすことがあります。

クラシックの音楽における弦楽四重奏曲は渋く地味で、なかなか聴くことの難しいものですが、その中でも特に精神性において孤高の位置を占めていると思うのはベートーヴェンの最晩年のいくつかの弦楽四重奏曲でしょう。ベートーヴェンは晩年、耳の病におかされますが、それ故にこそ特殊な精神の高揚があって、これらの作品が生み出されたのかもしれません。作品番号131・132・135・136などを聴いていると、姨捨の能と天空で精神的に一体化してしまいます。東洋と西洋の外形的には異質なものが一体化します。平易ではないが、素晴らしい。

さて今秋の姨捨。立派な方たちの支えによって、私のシテはどの程度まで理想に近づけるか、淡々とした努力を続けたいと存じます。

舞台を支えて下さる方々、御観能いただける皆様に感謝の念を捧げます。

最後に世阿彌の言葉。

しかれば当流に
　万能一徳の一句あり。
　初心不可忘
此句、三ヶ條の口伝在。
　是非初心不可忘。時々初心
　不可忘。老後初心不可忘。
此三、能々口伝可為。

（花鏡）

鳳鳴会大会

十月十九日(日)十二時始
熱田神宮能楽殿

素謡　養老　武田友志　兵藤善茂　武田宗典
屋島　武田文志　奥田昌人　小早川修
杜若　楳木映夫　武田友志
朝長　三川鉉平　武田文志　渡邊洋一
仕舞　敦盛　矢野義章　蝉丸　沢田房枝　天鼓　鳥山迪永
素謡　恋重荷　三村恵子　山崎佐東子　武田志房
求塚　三村恵子　浅井一元　武田宗和
弱法師　松井弘　木本仁之
雛子　百萬　浅井一元
海士　山崎佐東子
素謡　俊寛　成経　佐川勝貴　康頼　武田宗典　笹山忠　松木千俊
番外雛子　東方朔　武田友志　武田志房

――終了予定　午後五時二十分――

主催　鳳鳴会
幹事　武田志房　松井弘
豊明市間米町敷田一二二五―一〇一
電話　〇五六二―九二―〇二三五

◎入場無料
◎御来場歓迎（※素謡省略箇所有り）

◆お知らせ◆

毎年ご愛用賜りました『二井栄逸師画抄集能画カレンダー』は、2004年版は発行されません。

長年のご愛顧を感謝するとともに、謹んでお知らせ申し上げます。

平成十五年九月

能楽の友社
名古屋市千種区二―一八―一八
電話(〇五二)七三一―七九八四

名古屋幽花会秋季大会

十月十三日(祝)午前十時開演
名古屋能楽堂

番外仕舞　大江山　片山慶次郎
素謡　経正　倉澤寛　宮崎晃吉
仕舞　敦盛　伊藤やす子　吉野天人　橘憂香　浮舟　小田和季　籠太鼓　藤原美哉子
連吟　養老　宮川雅宏　長艸敏明　西野宏　徳岡孝二　石川輝夫
連吟　野宮
舞囃子　采女　村木玲子
善知鳥　比江嶋孝子

素謡　井筒　富田まさ子　地大公代
遊行柳　宮崎晃吉　岡本耕蔵　村川喜久子　辻井けい　懸瑛子
藤戸
独吟　景清　奥村昭男
能　融　村木寛茂　舞返　植田隆之亮　河村眞之介　曽和正博　前川光長　杉市和
間　野村小三郎
独吟　小袖曽我　高木寛敬
舞囃子　老松　松久祐子
三輪　懸瑛子
番外仕舞　阿漕　片山九郎右衛門
番囃子　頼政　松枝寅太郎　東山清和　河村総一郎　曽和正博　杉市和
仕舞　鐘之段　石原雅子
江口　小泉いく子
六浦　野村満子
仕舞　花東　桐山匡史　月北　冨田フク
習願寺　小澤宜子
枕之段　木村厚
番外舞囃子　弓八幡　片山伸吾

（五時半頃終了予定）

主催　名古屋幽花会
片山慶次郎

【御来場歓迎】

邦謡会発表会

十月十九日(日)九時半始
名古屋能楽堂

仕舞　俊成忠度　上野嘉宏
素謡　花筐　近藤とき子　種村とし江　橋本恒夫　松原幸男
当麻　牧野あい子　飯島美津代　美濃辺眞知子
山姥　高野千勢子　石黒由美子　田中美子
独調　鵜之段　瀬辺聡子　半田智子
仕舞　清経　近藤とき子
采女　横山国枝
船弁慶　南原彩橘子
舞囃子　菊慈童　森幹子
羽衣　三浦百合子
三輪　石原明子
素謡　遊行柳　加藤井知子　深川寿美子
独吟　勧進帳　潜口乙子
仕舞　半部　高野千勢子
卒都婆小町　野田博子
舞囃子　江口　二木輝子
定家　堀みどり
百萬　高木町子
素謡　求塚　上田牧子　下川智恵子　武藤弘子
独吟　道成寺　遠山美津子
仕舞　花筐　橋本恒夫
山姥　松原幸男
梅ケ枝　三口謙介
舞囃子　花月　森崎紀子
柏崎　西川喜代子
砧　井上苑枝
前
独吟仕舞　藤戸　梅田邦久　高橋節子
素謡　大原御幸　法皇　田中純一　局　三口謙介　内侍　竹内英雄　佐藤英生　高橋和成　上野嘉宏
番外仕舞　通小町　片山慶次郎
祝言　老松　梅田邦久

（終了六時頃）

主催　邦謡会
梅田邦久

【御来場歓迎】

狂言ござる乃座 in NAGOYA 6th

十月二十五日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

狂言　靭猿　大名　野村万作　太郎冠者　野村万之介　泉曳　野村萬斎　子猿　野村裕基　後見　深田博治
小舞　貝尽し　井上祐一　地謡　井上靖浩　佐藤友彦　佐藤融
素囃子　安宅　滝流　大鼓　河村眞之介　小鼓　後藤孝一郎　笛　藤田六郎兵衛
狂言　業平餅　在原業平　野村萬斎　鮮屋　石田幸雄　法衣　深田博治　稚児　野村裕基　侍　月崎晴夫　随身　竹山悠樹　随身　硯石晋照　音持　高野和憲　傘持　野村又三郎　鮮屋の娘　野村小三郎　後見　野村万之介

（終演予定時間・十五時三十五分）

主催　万作の会

【有料】
S席　八千円　A席七千円
B席　五千円　学生四千円
問合わせ＝03・3997・8778
取扱い＝チケットぴあ名古屋（052・320・9999）
名古屋三越プレイガイド（052・953・0777）

戦後名古屋能楽史 ㊼

〔第十二章〕

昭和三十三年（一九五八）

竹尾　邦太郎

（承前）

文化講堂開館記念公演は初日・二日目とも午前十時始と午後一時半始の二部制。六月十八日、第一部は番囃子「翁」林愿蔵・増田一雄、能「養老」柴田初太郎。第二部は舞囃子「羽衣」内藤泰二、狂言「素抱落」井上松次郎。十九日、第一部は番囃子「鶴亀」柴田収武、狂言「夷大黒」河村丘造。第二部は舞囃子「加茂」畑富次、能「猩々」竹市秀雄、両日とも能楽の外に当地の芸能がある。

愛知県文化会館の初代館長は世が世なら禄高六一万九千石の尾張徳川家十九代の当主徳川義親、柿落シで来名した和泉流三宅藤九郎とは因縁浅からぎる間柄であるが、中部日本新聞はこの機会に両人の対談を企画、六月二十三日付夕刊に「これからの狂言」の見出しで掲載する。

徳川　狂言に大名はつきもので真に愛敬のある大名が出てくる。しかも和泉流は私の先祖初代義直に抱えられたのだから、切っても切れない縁がある。

三宅　お説の通り和泉流は七代山脇和泉守元宜が、慶長十九年（西暦一六一四年）百石で京都から尾州藩に招かれ、その十九代目を私の長男保之が継いでいます。私は野村派と共に和泉流の分家に当るわけですが、東京はいま三宅派の狂言が盛んで、却って名古屋が本家と言えましょう。

徳川　世の中が変ってきたからテンポの鈍い能や狂言はよほど考えなければいかんと思う。この前も久しぶりに能を見たが観客席は舞台より謡本を見ている人が多いんだ。これじゃあ能が盛んではなく、謡がはやっているだけだ。狂言は能から独立すればよい。

三宅　今度の柿落シの「三番叟」は、能の「翁」から三番叟だけを抜いて独立させたもので、能の様式を破ったものです。「翁」一番では退屈なので東京産経会館の柿落シに相当揉めたけれど能楽協会から許してもらったのです。

徳川　私は能より狂言の方が現代性があると思う。狂言は庶民の中から起ったものでユーモアとエロと皮肉をもっている。「米市」は衆道がでるが決していやらしくない。「月見座頭」の、めくらが月見する仕草だって何とも言えないおかしみがある。よくフランス人はしゃれたパルザックのコントを持出すが、狂言のユーモアはそれ以上に面白いものだ。

三宅　狂言は能や舞踊に比べて非常にリアルなものです。そうでありながら様式が決っているので、内容が色っぽいものでも、厭味を感じない。昨年パリで朔達のやった狂言が、能よりずっと拍手が多かったのも、こんなところにあるのでしょう。新作も二十二・三の頃からやったが、これはあくまでも内容に現代の生活を採り入れたもので形式は守っている。武智君のように靴を磨いたり洋服を着て面をつけるのは理解できない。

徳川　いずれにしても狂言は盛んにしたい芸能だ。小唄も短いからはやるので、狂言も小謡・小舞などで親しみをもたせて、狂言のユーモアを解説してやれば、一般にも、もっともっと受入れられるだろう。

また【狂言】紙第十八号は共同社同人・歌村彦四郎が「狂言人語」欄に次のように書く。「六月十七日愛知文化講堂の開館式の柿落シに、和泉流狂言の三宅藤九郎氏が、翁なしの狂言の三番叟だけを能の様式を破った形で演ぜられました。元来が翁は天下泰平・国土安穏を祈祷する舞で別に意味のあるものではないので、三番叟だけ切放しても差支へない訳です。文化会館長の徳川さんと慶長依頼尾張藩のお抱への和泉流狂言の現在家元父子の三番叟は、つながりもあり昔なつかしい気が致します。」

多目的ホールとして建てられた文化講堂には当然能舞台も必要とされるわけであるが、この特設（仮設に非ず）舞台設置の経緯については【金剛】誌第十三巻第三号に寄せた当地の能楽評論家・西田三好の次の記事に詳しい。

愛知県文化会館に大講堂が出来るという話は数年前から聞いていた。

当時、熱田神宮の能楽殿建設計画が進められていたが、名古屋に大衆能がやれる会場が欲しいことは能楽人の誰もが考えていたときであったので、この文化会館の講堂に組立式の能舞台を備えることが、是非とも必要であると思っていた。それで私は私なりに一人で県の要路に話しかけて、能舞台設置の運動を始めた。

一方、期せずして、能楽師の人々が同じ考えで県へ陳情を行っていることを知って、目的が同じであるから、大いに意を強うした。

文化会館々長の徳川義親氏も、元々能や狂言の大の愛好者であって、この方面では、一かどの識見を持っている方であるから、話にゆくと、大いに共鳴して、嬉しいことには氏自身もその実現に乗り気になって下さったのである。

かくて、この運動には幾多の曲折はあったが、成功をみて、能舞台の設置が認められることになったのだ。しかも能舞台を設けるにあたっては、徳川氏自ら陣頭に立たれ、名古屋能界の人士を集めて種々と構造上の意見をきき、それをよく採用して設計されたことも嬉しいことであった。

間口十三間という大ステージに相応しく、能舞台の大きさは、三間半四方とし、後見座一間半、地謡座一間、橋掛り巾一間半、長さ六間の本格的な広さを持つものである。組立式舞台でこれだけの橋掛りを持つものは他にない。

設計者を、東、西に派遣して既設の組立式能舞台を視察したり、施工は、宮大工にあたらせるなど、慎重なる注意が払われ、鏡板の松は剮館長の太田三郎画伯の選定で、地元の画家、小寺礼三氏があたるなど、仮設舞台と思われない程の力の入れようであった。

会館職員の方々の能舞台に対する努力も大したもので、工事が進むにつれ、寝食を忘れての熱意で竣工を急がれていたのは全く涙ぐましいものであった。

はじめこの能舞台の予算は四十万円とされていたが、工事の進むにつれ、よりよきものにするため、次から次へと増額されて、遂に一五〇万円に達したと聞いて驚いた。それでも舞台の屋根だけは今期予算の関係から、どうしても設けることが出来ないので、次回に延ばされることになり、橋掛りだけは屋根も備えて堂々たるものである。

こうして本年六月十七日には、一七〇〇名を収容でき、近代的舞台設備を誇り得る文化会館講堂が完成し、その竣工式が挙げられ、しかも時を同じうして、待望の組立式能舞台も完成した。

仮組立の日、その舞台を見た私共は、日本一組立能舞台と言っても決して言い過ぎとは思えない程に立派な出来ばえと、その余りの豪華さに、名古屋能界がこれを使いこなせるであろうかと心配になりだした。

この舞台の実現には能楽師連の熱心な陳情運動が功を奏したことは勿論だがとりわけ徳川氏の能楽への深き理解と、惜しみない尽力とによるところが大きいと私は信じている。

【観世】誌九月号も「展望」欄でこの組立式能舞台を次のように紹介する。「六月竣工した愛知文化講堂は、収容人員千七百名のワンスロープ式客席で、そのステージ上に、四間に四間・橋掛り六間の仮設舞台が組み立ててある。百五十万円を要しただけあって見事な舞台で屋根だけ第二期に残されて未完である。」

六月二十日、幸清流小鼓方長老田鍋惣太郎が「小鼓藝話」をわんや書店から上梓する。これまでシテ方の芸談はあっても三役の芸談は極く珍しい。内容を三部に分ち第一部「小鼓の知識と打ち方」第二部「惣太郎芸談」第三部「舞台六十年の回顧」、付録に当地能楽界古老との座談会「名古屋能楽界の今昔」、編集に携わったのは宝生流嘱託の戸田秀雄医博で、十余年来田鍋惣太郎に師事し、日常の座談から一書を紡ぎ出した様子が覗える。噛んで含める様な話し言葉での展開は、深奥の内容も平易に伝えたいという心であり、また当地能楽界の歩みを知る上でも貴重な資料である。戸田秀雄は編集後記に言う。「田鍋先生は能界稀に見る進歩的思想の持主であって、これまで芸の秘伝・秘奥とされて素人の窺い知られなかった所までも公開、口述せられました。第二部の翁や道成寺の章の如きはこれでありまして、これは従来ややもすると封建的といわれた能楽界にとっては画期的な試みとも言えるでしょう。（抜粋）」と。本書が脱稿のとき、田鍋惣太郎の談話は「とかく名古屋は文化的に実力のある割に東西から低く評価されており、当事者としても残念だ。そこで名古屋能楽界が少しでも高く評価されるように出版計画をたて、半年あまりがんばった。」である。

六月二十一日、宝生会定式能は第二期第二回、素謡「草子洗」倉本雅、仕舞六番「養老」鈴木右門「敦盛キリ」畑富次「駒ノ段」柏原仁兵衛「三山」渡部三郎「半蔀」辰巳孝「鞍馬天狗」辰巳清、「井筒」宝生英雄、「伯陽」佐藤秀雄、「鵜飼」内藤泰二。二十九日は青陽会第二期第一回、「神歌」真柄米次、舞囃子「高砂」柴田初太郎、「大佛供養」塚本秀雄、「井筒」観世元昭、「名取川」佐藤秀雄、「鞍馬天狗」柴田収。同日、東区久屋町八の八、都心に竣工なったばかりの愛知文化講堂では朝日新聞社が名古屋で主催する第一回の朝日五流能が華々しく行われる。

――以下次号――

愛知文化講堂特設舞台の鏡板
〈演能は後年のもの（昭和44年大衆能舞囃子「熊坂」和島富太郎）〉

田鍋惣太郎著
「小鼓芸話」（わんや刊）と著者

三交会大会

十月二十六日（日）九時半開演
名古屋能楽堂

番外仕舞　松虫キリ　久田三津子
素謡　通小町　伊藤和美　加藤保典　竹井喜信
小督　渡辺幹子　藤井一美　加藤保典　増永悦子　立松美貴子　林賢一
仕舞　高砂　田村クセ　松風　加藤保典　林賢一
素謡　野宮　後藤阿紀　早川功一
仕舞　難波　清経キリ　天鼓　渡辺幹子　伊藤和美　林賢一
能　百萬　飯富雅介　後藤孝一郎　鬼頭好信　大野誠
子方　久田勘吉郎　村瀬登美子
舞囃子　花月　藤井一美　遊行柳　藤井圓隆
能　花筐　飯富雅介　橋本雅宰　杉江元　河村真之介　福井啓次郎　竹市学
子方　光松真央　鈴木多美子　光松見知子
舞囃子　野宮　後藤阿紀　砧　戸松花枝　船弁慶　後原田千恵子
能　井筒　由内満智子　杉江元　笠鉱一　柳原冨司忠　鹿取希世
舞囃子　弱法師　井上祐一　三輪　早川功一　政　秋田恵美子　後藤弘次郎　家　瀬戸勝治　雨　月中入前　橋岡慈観
仕舞　定　番外仕舞
附祝言　（終了予定五時半頃）
〔入場無料〕
〔御来場歓迎〕
主催　三交会　久田三津子　TEL七〇五―一五八四

第24回　名古屋金春会能

十一月二日（日）午後二時開演
名古屋能楽堂

能　角田川　金春穂高
狂言　吹取　井上祐一
能　絃上　本田光洋
主催　名古屋金春会

申込み・問合わせ
事務局　TEL052・842・7931
入場料五千円（正面指定席）
四千円（中正面指定席・脇正面自由席）
三千円（学生席）
（番組詳細次号掲載）

◆盛夏の舞台から◆

「第四回御酒落名匠狂言会」「観世会」「第四回伝統芸能上演会」と「青陽会」

竹尾邦太郎

㊨㊤第4回御酒落名匠狂言会「寝音曲」野村萬・野村祐丞
㊤同狂言会「奈須与市語」鹿島俊裕

「鬼瓦」訴訟落着して国へ帰るさ、暇乞いに信仰する因幡薬師に詣り、これを国許に勧請したいと堂の普請を見て廻るシテ大名・千作。虹梁（こうりょう・虹形に反りをもつ梁）やら蟇股（かえるまた、矢尻の雁股から。上下の横木の間を支える二股の短柱）、破風（はふ・棟の両端の三角形部分）など、細部に亘る眼識の人が鬼瓦を知らぬようもないが、そこは瞬時に妻の面影を見た照れ隠し、「あれは誰やらに似てあったが」と太郎冠者・茂に関心を向けさせる。辺り憚る人のない心安さは、余人には欠点と見える妻の顔の大振りな造作の一々、喜々として言い立てる無邪気は、己が言辞に現実味を帯びて真に迫る思いは懐しさに泣き出す始末。大名の心の温もりは即ち千作の心のぬくもり、国許へ戻れば直ぐ奥様に会える、と太郎冠者に諭され気分は一転、「汝もそれへ出て共々に笑へ」の笑ヒ留もほのぼのと千作絶好調。（16分）

「子盗人」博奕ですったら盗って元手を、の単細胞はシテ弘之、まんまと侵入したはよいが独り寝の赤児のあどけなさにほだされ、抱き上げ「肩くまにのせうか」と「かうろ〳〵〳〵や」あやす裡に立場を忘れる迂闊。見つけられ、ドジなこそ泥が赤児を盾に逃げ果せるあたふたぶりに憎めない弘之の個性。何某・靖浩、女・蔵。（18分）

「那須与市語」鹿島俊裕の披キ。浅黄の真新しい長裃に颯爽若武者与市の、全源氏の面目をかけた緊張感。長裃の捌き様、きびきびした仕方の切れの良さにはきはきした詞の堅実味も清々しい。（14分）

「寝音曲」主・祐丞、シテ太郎冠者・萬を召して身辺を探り、謡を所望する。前夜の謡を聞かれてしまったと知る太郎冠者は此れが習いになるのを恐れ、飲んで女共の膝枕でないと、と固辞するが性む主ではない。振舞われる大盞をぐいぐい煽って飲み干し舌鼓打つ太郎冠者、盞を重ね舌鼓からフーッと大きく息を吐くや「お前も一つ上りませぬか」などと懇図〳〵絡み掛けるのも時を稼ぐ魂胆。早う早うと急かされ主の膝を借りれば「ヤイ女共、ちと謡はうか」と戯れつき、主の顔を撫でに掛かるのは大盞三杯の酔った紛れの故意らしい。「さてさて気味の悪いことぢゃ」と主、この辺りシテとアドの呼吸の妙。頭を上げると声が出ないと言いつつへ哀れ一枝を、と「花の袖」謡い果せると、ならば座っての命にへ千秋万歳、は声を嗄らし、立てばへ君は千代まで八千代、ときて「あ痛あ痛」と「声が出いで病が出ました」のていたらく。しかし此れは未だ正気の証、膝枕に落着けばようよう酔いも全開、我を通す緊張から解放された陶酔は「玉ノ段」の名謂。へさるにてもこの侭に、と立ち上がり舞い出すのは、この侭では酔いの面白味はなかろう、の心、舞い謡う逸楽境には、「やい、そこな奴」の怒声も咄嗟には「や」と怪訝なばかり、謡と舞の巧み、萬も千作に劣らず絶好調。（27分）

「牛盗人」牛盗人を訴え出れば褒美は何なりと願いを叶える、との告知に小童・米倉宏貴が出頭、兵庫三郎・祐一を名指せば、太郎冠者・融と次郎冠者・靖雄に引っ立てられた同人は訴人が我が子と知り驚愕するも、子の本心を知って感涙に咽び、牛泰行・友彦も親を思う子の健気に感じ入って褒美に親を下げ渡し大団円。当世では多分珍しいであろう孝子譚は白洲の場の見応え聞き応え十分。子方の宏貴君の好演が舞台を攫う。（38分・7月13日・第四回御酒落名匠狂言会）

「自然居士」亡き両親の追善に供えられた小袖は少女（子方・勘吉郎）が身を売り整えた布施と知り袖を濡らすシテ自然居士・勘鶴、義を見てせざるは勇無きなり、とばかりその小袖を首に掛け、少女取り戻さんとワキ人商人・雅介を追う意気込みが充分なら、人身売買は商取引上は合法と太々しく反発して拮抗する憎体なワキも気力横溢、問答が圧巻。「（命を取るとも）ふつつと（下りまじい）」と右手の扇で左の掌を打ち安座のシテの気魄に、根負けのワキはワキツレ宰と相談の上、どうせ少女を渡すなら、と舞が得手と知るシテを散々に玩弄しに掛かる。要求される侭に中ノ舞、舞グセ、鬱ノ段、羯鼓、と舞い進む面白さは就中羯鼓。脇正、合膝して打つや合膝返シに打って直り中ノ舞の位になってゆくところ、柔らかく軽やかな舞ぶりは少女の解放も目前の心の余裕か。キリ、へ鬱をなほ擦り、と撥を捨て子方へ走るのも今や面子は消え純粋な喜びだけがあった。（1時間6分）

観世会「安達原」古橋正邦、高安勝久、楢元正樹

「八幡前」何も無いシテ靖浩、有徳人・弘之が一芸に達した者を美人の娘の聟にすると聞き「一芸を整へ聟入を致さうと存ずる」と恬然として恥じないのが如何にも人の好さ。一芸伝授と云われ、教え手・祐一はその無邪気を愛で、先ず射手を名乗らせて鳥を射損じる失敗を見越し、機智の秀句に相手の関心を向けさせる策を授ける。以下は「萩大名」と同工、「いかばかり神も嬉しと思すらん八幡の前に」までは教え手のプロンプターで辛うじて付けるが、肝心要の「鳥居（鳥射）立ったり」の結句が付けられず退散の憂き目。聟になり得なかったがあっけらかんの靖浩、聟の何たるかも知らぬげな初心（うぶ）な若者を好演。（37分）

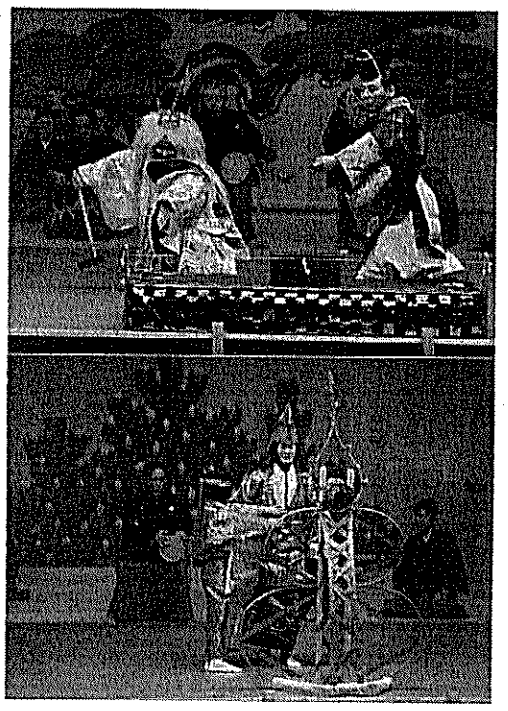
「安達原」「日も暮れて」と着詞（つきぜりふ）から忍び寄る寂寥の思いは左上を見るワキ祐慶・勝久、へ定めなの生涯やな、と萩小屋で呻く様に不遇を嘶つ哀感一入のシテ老女・正邦、シテとワキが出会う冒頭の景がよい。面深井・襟浅黄・紺無地厳斗目着付・段秋草文無紅唐織のシテ、糸ノ段はへ長き命の（つれなさ）、と左手に繰る糸を一瞬浮かせて止めると、へ思ひ明石の、と急に手を早め廻し出し、へ音をのみ独り、の返シ句に双シオリのところ、心のうちの問（つか）えの取れぬもどかしさ、口惜しさがよくでる。シオリ解き一呼吸、「いかに客僧達」とワキにアシラヒ、「さらばやがて」と直りつつ立つと、中入は押し殺したげるも「今一度とっくり見届けてから」と確かめるのは一寸珍しく、下から上へ覗き見て腰を抜かす辺りも細かい。

後シテは柄の大きさが映える迫力の折りの場。キリでへ眼眩みて、と扇で面をパッと蔽うのはいかにもそれ。トメは三ノ松へ走り、飛返り立って留拍子、正邦の偉丈夫が活きたダイナミックな舞台。（1時間9分・7月20日・観世会）

「附子」蓋を閉め厳重に紐を掛けた桶の中味は猛毒の附子と釘を刺す主・友彦に留守居のシテ太郎冠者・靖浩と次郎冠者・融は恐いもの見たさ。風に乗る毒気に当たらねば大事ない、と毒気を扇で追い払い、怖々紐を解き、蓋を取るこの過程。意味のある此処の仕方を無にする様に後見が紐を桶に巻き直し、蓋を下げてしまうのは如何なものか（伝書の固習）。

附子が砂糖と分かり競って食うところ（桶があちこちするのに蓋が邪魔になる？）、浅ましさは好奇心旺盛の所為ばかりとも言えず、奉公人根性の卑しさは主の愛蔵の品々を毀損して死ぬつもりの強弁。狡知は太郎冠者。主に楯突くにも程があろうと思わせ少々はしゃぎ過ぎ。主にも高圧的な尊大さがもっと欲しいところ。（27分）

「小鍛冶」御剣新調を告げる勅使ワキツレ正樹、宣旨と聞き恐懼する名工宗近ワキ雅介。技量伯仲の相鎚持たぬ悩みに宗近は氏神に縋る。そこへ奇特は既に宗近の苦衷を知る稲荷明神の化身シテ童子・驍の呼掛である。てきぱきした舞台運びが清々しくワキ陣が空気を引き締める。草薙の剣の霊験を言うクセは二ノ上ゲ端前、へ遠山にかかる薄雪を、愛で頭取り暫時眺め居る詩境が一転、ひたひた寄せる夷（外敵）が火を掛ける所、へ尊は剣を抜いて、と立つや辺りを切り払い薙ぎ払う太刀に擬する扇の小気味よい太刀捌きの速さが冴え、クセ留にはへ伝ふる家の（宗近よ）と抜き足に廻りワキへ下居に巧妙な狐足の一端を見せる。素性問われれば、先ず鉄床の準備を言い、へ（その時我を待ち）給はば、でパッと直り、へ必ずその時節に、と今度は徐にワキへ向くのも、ワキの気を惹きつける呼吸の妙。へ夕雲の、と立ち、静かに直ルとへ失せにけり、と一足退き、返シ句に右へ廻り来序（誠・嘉津幸・鉱一・好信）で中入する。アイ末社神・融の立シャベリから注連結鉄床一畳台が正先へ出されると後場。ワキの祝詞を受ける地謡（衡市・郷ら）が少々乱れるが、後シテは番組に記載のない小書「白頭」で早笛の颯爽の出。面泥小飛出・白頭・狐戴・白地卍繋文縫箔着付・白地山道ニ唐花文半切・白地飛雲ニ輪宝文袷法被（肩脱ギ）は白式の尊容。千鳥掛に爪先立ちの独特な狐足で一ノ松に出、立ち止まり直ぐ舞台へ入るが、さっと袖返シ屹度ワキに面切ルところなど胸がすく。一畳台上はシテとワキ交互に鎚を打ち下ろすと、シテが台から飛び返りざま袖返ス（写真）ところも鮮やかに、へ天地に響きて、と頭取り上下に面使フ躍動感も見事。へ天下第一の、の数拍子の歓喜も晴れやかにトメは三ノ松、俊敏な狐足の美しさが素晴らしかった。（51分・7月21日第四回伝統芸能上演会。当地他分野の邦楽を含む古典を次世代へ繋げ伝えてゆこう、という使命感のもと活動する当会もはや四年目、能楽関係は例年通り狂言と能各一番。伝統を重んじ鏡板が若松の年は主催の東海能楽研究会（代表・筧鉱一）の所有する大和絵師森村宜稲揮毫による老松の鏡板を用いる。入場無料のため見所はいつも満席になるが今年は超の付く人気。「附子」の主が登場すると拍手が起こったのも愛敬。）



㊤第4回伝統芸能上演会「小鍛冶」長田驍、飯冨雅介
㊦青陽会「富士太鼓」祖父江修一、子方冨田哲史

「忠度」シテ幸江。前は、へそれ花に辛きは嶺の嵐や、とスミで杖を左へ寄せ薄く見上げへ山風の、と面伏せる心持ちの繊細は、へ山の桜も散るものを、と脇正に胸杖して落花を眺める風情の詩趣。後は、面中将・梨子打・襟白赤・宝輪ニ波ノ丸文紅白段厚板着付・白地波涛紅葉文大口・唐花菱文浅黄単法被の瀟洒気品の公達忠度。合戦の場は「六弥太を取って抑へ」るところ、柔らかな身のこなしの組打ちの型がきれいだが、右腕打ち落されて最期の覚悟はへ光明遍照、の片手合掌の所、理屈だが扇を持つ右手を左へ寄せて法被の左袖の下へ入れる型は無いものか。（1時間24分）

「富士太鼓」先ずワキ臣下・勝久、名宣から楽人富士の死の経緯重々しく述べるところに風格。娘（子方・冨田哲史）を伴うシテ富士ノ妻・修一、ワキとの問答に夫は太鼓の役を巡り殺されたことを知る。形見の装束を渡されて悲嘆に暮れるクドキは深く琴線に触れてくる。物着に亡夫の形見を着ければ、俄の狂乱は仇をなす太鼓に向かい、阻止する娘（写真）を説得の掛合となるところ、シテと子方の心が通い上々。撥で舞う楽の達者は、へ持ちたる撥をば、からの型所ハキハキと、キリは烏兜・舞衣を脱ぎ裳着胴の姿は笠を取ると、踏む拍子はへ思ひは忘れじと、の強調。一ノ松へ抜けるとへ憂き人の形見、と笠を翳シて羯鼓台を見込み、右ウケ留拍子踏んだ。深井の面に愁いがあり、襟浅黄・白地摺箔着付・藍地水辺文縫箔腰巻を基に、水衣から烏兜ニ舞衣壺折、基に戻り裳着胴の三態、姿が美しかった。（1時間18分）

「痩松」山賊の隠語は獲物の多寡が即ち肥松痩松。シテ融、アド女・俊裕。親里へ帰る女を長刀で脅し袋を強奪、中味を当たる山賊の隙をみて長刀を手に入れ逆襲する女。山賊の身ぐるみまで剥ぐ気丈な女が初々しく、「女山立よ、出会へ出会へ」と山賊の悲鳴には大髭の面子も切実。（16分）

「鵜飼」シテ一致。前場、生業のため殺生戒を犯さざるを得ない漁翁の、頑固さ頑迷さといったものが、気負った口吻でサシ・下歌・上歌と謡い続けるところに巧まず出る。漁の様を求められる鵜ノ段は生気溌剌の裡、へ月になりぬる、と正先近くで脇柱上を眺め、扇と松明ポトリ落とし退る双シオリに虚脱の哀れ。後場はワキ僧・元の弔いに後シテ閻魔大王は、法華経の徳を讃え、悪人も仏果を得る経の力、へ奈落に沈み果てて、と組落シにその悪人の姿を鮮やかにみせた。（47分・8月3日・青陽会）

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

NHK放送予定（平成15年10月～11月）

◉NHK－FM能楽鑑賞　（毎週日曜日午前7時15分～8時）
10月26日　「葛城」（観世流）　浅井真州ほか
（前号「江口」から変更）
11月2日　「三輪」（観世流）　野村四郎ほか
11月9日　「鵜」（宝生流）　寺井良雄ほか
11月16日　「卒塔婆小町」（金剛流）　今井清隆ほか
11月23日（再）「自然居士」（観世流）　梅若吉之丞ほか
11月30日　「薩摩守」ほか（和泉流）　三宅右近ほか
◉NHK教育テレビ（土）「能・狂言」（14:30～15:50）
11月29日　復曲「箱崎」観世清和ほか

岐阜で市民の劇場　能楽鑑賞会
10月28日　能楽鏡座が上演

岐阜市・岐阜市公共ホール管理財団主催・第二一六回「市民の劇場・能楽鑑賞会」が能楽鏡座により十月二十八日(火)岐阜市文化センター小劇場で催される。

能楽鏡座は、名古屋、岐阜、京都をそれぞれ中心に活動している若手能楽師のグループ、観世流シテ方味方団、藤田流笛方・大野誠、幸清流小鼓方・後藤嘉津幸、石井流大鼓方河村眞之介、和泉流狂言方野村小三郎の諸氏で構成。

十月二十八日の「能楽鑑賞会」の番組は次のとおり。

ろうそく能「葵上」（シテ味方団、ツレ上野嘉宏、ワキ飯冨雅介、ワキツレ原大、アイ、野村小三郎、笛・大野誠、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、太鼓・中田弘美）

狂言「昆布売」（大名・野村小三郎、昆布売・奥津健太郎）

舞囃子「放下僧」（シテ・浦田保親）

入場料金（全自由席）一般三〇〇〇円、高校生以下一〇〇〇円、岐阜市文化センターは岐阜市金町五丁目七番地。問い合わせ先＝岐阜市文化センター（☎058・262・6200）

豊田市能楽堂開館5周年
名匠鑑賞能
11月30日記念公演

豊田市能楽堂では「豊田市能楽堂開館五周年記念特別公演」として「名匠鑑賞能」を十一月三十日(日)開催する。

今回は、五周年記念の特別公演として、人間国宝六人が出演、観世流能「砧」和泉流狂言「清水座頭」が上演される。午後二時開演。

番組次のとおり

解説　羽田　昶氏（武蔵野大学教授・豊田市能楽堂企画運営委員）

狂言（和泉流）「清水座頭」座頭・野村萬、瞽女・野村又三郎、後見・山下浩一郎

能（観世流）「砧」梓之出　シテ片山九郎右衛門、ツレ味方玄、ワキ宝生閑、ワキツレ大日方寛、アイ野村与十郎

笛・藤田大五郎、小鼓・曽和博朗、大鼓・柿原崇志、太鼓・金春惣右衛門　後見片山慶次郎、青木道喜

地謡　片山清司、梅田邦久、武田邦弘、古橋正邦、祖父江修一、清沢一政、橋本忠樹、上野嘉宏

入場料　全席指定（税込）正面席一万円、脇正面席八千円、中正面席六千円

販売場所＝豊田市能楽堂（☎0565・35・8200）チケットぴあ（☎052・320・9999）

主催　豊田市・豊田市教育委員会、共催　豊田市文化振興財団。

羽島市能楽を楽しむ会
11月9日　羽島市文化センター

羽島市能楽を楽しむ会では、十一月九日(日)「第五回羽島市能楽を楽しむ会」を羽島文化センターで開催する。午後一時始。

能組は、金剛流能「藤」（シテ牧野元子）、和泉流狂言「盆山」（シテ野村又三郎）

入場料　前売券二五〇〇円、当日券三〇〇〇円、学生券一〇〇〇円、親子券三〇〇〇円

入場券取扱所＝羽島市文化センター（☎058・393・2231）牧野元子方（☎058・392・1278）鈴木正美方（☎058・398・6013）

後援　羽島市教育委員長、羽島市文化協会、羽島市観光協会。

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［10月］
25日(土)　狂言ござる乃座　（有料）
26日(日)　三交会大会　（無料）
［11月］
2日(日)　名古屋金春流友会　（無料）（番組①面）
　第24回名古屋金春会　（有料）（番組①面）
9日(日)　名古屋観世会定式能　（有料）（番組①面）
16日(日)　名古屋宝生会定式能　（有料）（番組②面）
22日(土)　大蔵狂言会・なごや会　（無料）（番組②面）
23日(日)　久田観正会秋の大会　（無料）（番組②面）
24日(月)　名匠狂言会　（有料）（番組②面）
28日(土)　名古屋能楽堂定例公演　（有料）（番組②面）
30日(日)　郁諷会大会　（無料）（番組②面）

◆豊田市能楽堂◆

（TEL 0565－35－8200）

［11月］
30日(日)　豊田市能楽堂開館5周年記念特別公演
　～名匠鑑賞能～　（有料）
［12月］
20日(土)　豊田市能楽堂開館5周年記念
　～狂言づくしの会～　（有料）

名古屋金春流友会
十一月二日(日)午前九時三十分始　名古屋能楽堂

連吟　松風　松岡賢二　小野瀬荘樹
仕舞　清経　旅一史　三輪　寺崎明子
仕舞　春日竜神　広瀬稲弘　采女　原松枝
仕舞　蝉丸　下村卓也
仕舞　花月　氷見泰子　東北　川澄幹雄
仕舞　玉葛　錦見理恵子　放下僧　加藤剛
仕舞　羽衣　林澪　経政　林志滝
仕舞　鶴亀　豊田均　芭蕉　加藤正嗣
仕舞　車僧　小池信之
仕舞　実盛　酒井正義　鶴ノ段　酒井丈夫
仕舞　千手　箕浦遵　通小町　伊藤雄二
仕舞　殺生石　広瀬雅弘
仕舞　弱法師　松本久子　藤戸　後藤美代子
仕舞　山姥　林由華
仕舞　融　井上隆敬　東北　加藤英昭
仕舞　天鼓　前田登　阿漕　林功　通小町　武馬正和
舞囃子　経政　近藤雅美　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市学
舞囃子　松風　福本澪子　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市学
舞囃子　西王母　久保田美奈子　河村眞之介　柳原冨司忠　加藤洋輝　大野誠
舞囃子　熊野　松本武　河村眞之介　柳原冨司忠　大野誠
独吟　葵上　青木邦友　笹ノ段　永田孝司　木崎三郎
富士山　伏原靖二　邯鄲　甲村健一
紅葉狩　木村英男　玉葛
富永康文
（一時三十分頃終了）

名古屋金春会
名古屋春栄会
デンソー能楽部
名古屋春敲会
トヨタ車体謡曲部
中京大学金春会

［入場無料　ご来場歓迎］

金春流能
十一月二日(日)午後二時開演　名古屋能楽堂

番組

仕舞　網ノ段　吉場広明
仕舞　松虫　高橋汎
野守　佐藤俊之
地謡　金春憲和　本田光洋　本田芳樹　本田布由樹

能　角田川　金春飛翔　金春穂高　飯富雅介　椙元正樹　笈　後藤孝一郎　鉱一　大野誠
子方　金春
後見　横山紳一　鬼頭尚久
地謡　箕浦遵　広瀬雅弘　加藤正嗣　伊藤雄二　豊田均　井上靖浩　佐藤融　金春憲和　高橋忍　佐藤俊之　福井哲也
狂言　吹取　井上祐一　佐藤後見　今枝靖雄

名古屋観世会定式能（納会）
十一月九日(日)十二時半開演　名古屋能楽堂

［入場料］
五〇〇〇円（正面指定席）
四〇〇〇円（中正面・脇正面自由席）
学生席三〇〇〇円

事務局　名古屋市昭和区松風町2－15－2（フシハラ内）　TEL052・842・7931

主催　名古屋金春会　名古屋春栄会　㈳金春円満井会

附祝言（六時頃　終了）

能　絃上　師長　本田芳樹　姥　本田布由樹　竜神　鬼頭尚久　本田光洋
高安勝久　杉江元　橋本宰
岡狂言　佐藤友彦
後見　横山紳一　金春穂高
地謡　河村総一郎　福井啓次郎　加藤洋輝　竹市学　井上隆敬　永田孝司　武馬正和　林功　加藤英昭　佐藤吉場広明　金春安明　高橋忍　小島芳樹

仕舞　淡路　高橋忍
誓願寺　金春安明
融　金春憲和
地謡　佐藤俊之　横山紳一　吉場広明　前田登

附祝言

主催　名古屋金春会　名古屋春栄会　㈳金春円満井会

能　海士　観世　淳夫　観世　靖之丞　播中之舞　宝生　欣哉　坂苗融　大日方寛　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤洋輝　藤田六郎兵衛
間　井上祐一
後見　上野嘉宏　片山清司
地謡　外山圭一　松山幸親　加賀敏彦　清沢一政　祖父江修一　小島一英　大槻文蔵　久田勘鬼
附祝言　主催　名古屋観世会（終了四時半頃）

［有料］
当日券（自由席）八千円（枚数に制限あり）

茶壺　狂言　佐藤友彦
仕舞　富士太鼓　片山清司
通小町　大槻文蔵
地謡　大野弘之　佐藤融　後見　今枝靖雄　本田光洋　古橋正邦　武田邦弘　高橋暎一

小督　能　祖父江修一　清沢一政　梅田邦久　高安勝久　笈　久田舜一郎　鉱一　大野誠
恐之舞
間　井上靖浩
後見　久田勘鬼　小島一英
地謡　高島良一　本田勲　須部甫　高橋暎一　上野嘉宏　武田邦弘　片山清司　古橋正邦

沢藤 地域に話題よぶ演能
復曲能「龍之口」の上演

東海能楽研究会（覓鉱一代表）は一前号既執のように、日蓮聖人ゆかりの藤沢・龍口寺で復曲能「龍之口」を九月十一日に上演、門前の商店街などでつくる湘南龍の口門前会などが実行委員会を組織してこの上演を積極的に支援した。

この演能は、読売新聞も大きく取り上げ、愛知県の研究者と能楽師でつくる東海能楽研究会の活動を報道、門前会の池田義一会長のことばとして「門前町として長い歴史を継承していかないといけない。この能が、この地で根づいてほしい」との談話をつたえている。

なお、この催能に当たって龍口寺の窓口になって頂いた執事長・今吉海秀氏から次のような書信が届けられている。

拝復

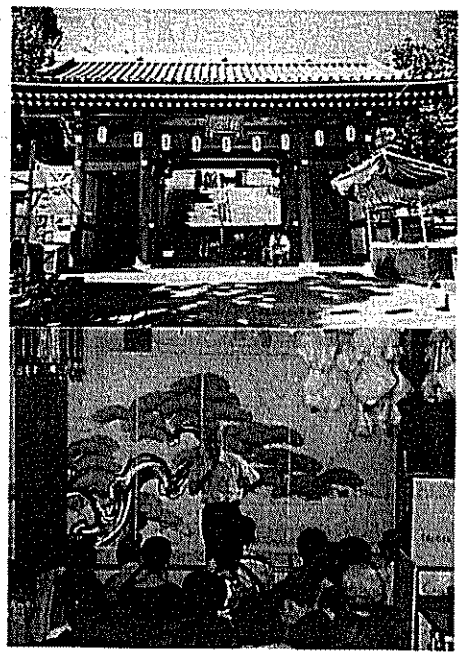
先日、十一日大変お世話になり有難うございました。地元の体制がギリギリになってようやく出来た事と、龍口寺の方も十二日の法難会に向けての準備のため、まともなおもてなしも出来ず、失礼いたしました。

能は始めてという方が殆んどのようで、反応の方も心配しましたが、観客、地元商店街、市当局いずれに聞きましても大変好評だったようで、中には能の同好会でグループで来られた方もいて、その方たちの感想が大変よかったそうです。

取り敢えずアルバムとビデオテープ、当日のプログラムを同封してお送りいたします。

先ずは取り急ぎご用件まで

龍口寺
執事長　今吉海秀



㊤龍口寺山門㊦当日復曲能について説明する法政大学名誉教授表章氏

演能の記録

オアシス21 能・狂言

「愛・地球博」をかかげる萬国博の開催があと五百日に迫っているが、能楽協会名古屋支部主催により、名古屋市・栄公園内のオアシス21・銀河の広場特設会場で、ユネスコ第一回世界無形遺産「能楽」を表ぼうして、十月十八日「第一回オアシス21能・狂言」を上演。

演目は、宝生流能「羽衣」（シテ竹内澄子、ワキ高安勝久ほか）和泉流狂言「墨塗」（井上祐一、井上靖浩、佐藤融）観世流能「土蜘蛛」（シテ久田勘鶴、ツレ梅田邦久、久田三津子、トモ八神孝充、ワキ飯冨雅介ほか）

後援・愛知県、名古屋市、愛知県教委、名古屋市教委、愛知県芸術文化協会、名古屋中央大通連合発展会。連携協力・財団法人2005年日本国際博覧会協会など。

豊春会演能 来秋「姨捨」上演

豊春会（豊嶋三千春師主宰）は「豊春会秋の会」を十月十九日、京都・新金剛能楽堂で開催。

能組は、能「佛原」（シテ豊嶋三千春、ワキ清水利宣、笛・森田光廣、小鼓・竹村英雄、大鼓・谷口政喜、間・茂山あきら）

狂言「栗焼」（茂山千之丞、丸石やすし）、舞囃子「邯鄲」（豊嶋訓三）、独吟「勧進帳」（谷口雅彦）ほか仕舞五番

なお、豊春会の平成十六年春の会は、五月十六日、能「東岸居士」（豊嶋三千春）秋の会は十月十七日「姨捨」（豊嶋三千春）の上演が予定されている。

葛野流大鼓方 飯島佐之六氏逝去
北陸能楽界に貢献

葛野流大鼓方・飯島佐之六氏は九月六日金沢市内の病院で逝去された。享年五十九

葬儀・告別式は八日、セレモニー会館兼六駅西で執り行われた。喪主は長男・大輔氏。

故人は昭和十九年八世飯島六之佐氏の長男として生まれる。父および瀬尾乃武氏に師事、二十九年初舞台、重要無形文化財総合指定。日本能楽会会員、北陸能楽会に大きく貢献した。

演能案内

名古屋宝生会定式能（第46期 第4回）

十一月十六日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

能 三番組
竹内澄子 輪
高安勝久 河村総一郎 加藤洋輝
後藤嘉津幸 大野誠
間 野村又三郎

狂言 素袍落
後見 倉本衣斐 雅愛 地謡 平田正文 石森智幸 大森尚人 久野幸三 和久荘太郎 衣斐正宜 辰巳満次郎 内藤飛能
松田高義 野村小三郎 野村又三郎

仕舞 養老 葛城
後見 伴野俊彦 稲川寿一 衣斐正宜 辰巳満次郎 久野幸三
地謡 馬繰富四夫 石黒孝

能 土蜘
後見 倉本雅介 玉井博祐 地謡 柴田勲 青木堯 柴田賢治 寺部一威 石黒孝 馬繰富四夫 辰巳満次郎 稲川寿一
間 野村小三郎 杉江元淳 飯冨雅介 福井啓次郎 加藤洋輝 大野誠

附祝言

主催 名古屋宝生会
名古屋市天白区島田二―三〇一
島田橋住宅二―一三一〇
佐藤耕司方
電話・FAX〇五二―八〇三―七三七二

〔有料〕
当日券会員券一万円（2枚綴）

大蔵狂言会・なごや会

十一月二十二日（土）午前十時三十分始
名古屋能楽堂

狂言 末広がり　果報者 牛田敏明　太郎冠者 丹羽宏和
狂言 寂音曲　主人 丹羽節　太郎冠者 中村正子
小舞 景清　中村正子
狂言 文蔵　主人 樽本道子
狂言 栗焼き　太郎冠者 松川佳澄
狂言 箕被

（終了午後四時頃）
このほか狂言、小舞など
〔入場無料〕

指導 大蔵弥右衛門 大蔵弥太郎
問い合わせ＝津島市天王通り4―4 牛田敏明
TEL0567―26―2854

久田観正会秋の大会

十一月二十三日（日）午前九時半開演
名古屋能楽堂

番組
素謡 高砂　橋本桂 橋本清 神谷功
素謡 藤戸　村瀬隆夫 渡辺清彦
仕舞 花筐クルイ　坪井美記江
素謡 求塚　大久保由実 小池房子 吉田隆美
素謡 砧　斉藤利子 田中信子 瀬戸綾子

能 俊寛
吉田勝巳 内田永男 岡田信道
高安勝久 笛 久田舜一郎 鼓 大野誠
間 野村小三郎
舞囃子 草子洗小町　杉山範彦 笛 久田舜一郎 鼓 大野誠
野宮　橋本桂 笛 久田舜一郎 鼓 鬼頭好信 大野誠
猩々　小田あさ乃 笛 久田舜一郎 鼓 大野誠
子方 坪井美記江 同山前川幸子 同山前川千鶴子 同山星野路子 同山前野郁子

素謡 安宅　丸山敏子 水藤喜三郎

舞囃子 江口　大竹富三江 河村眞之介 柳原冨司忠 鹿取希世
杜若　後藤玲子 仲村スミ 河村眞之介 柳原冨司忠 鹿取希世 後藤玲子

能 松浦佐用姫
高安勝久 河村眞之介 柳原冨司忠 鹿取希世
番外仕舞 笠之段　野村又三郎 久田勘鶴

附祝言

（終了予定五時頃）

主催 久田観正会 鷗華会
名古屋市名東区一社三―一六二
久田勘鶴
TEL（〇五二）七〇五―一五八四

〔入場無料〕
〔御来場歓迎〕

名匠狂言会

十一月二十四日（月・祝）午後二時始
名古屋能楽堂

解説 林和利（名古屋女子大学文学部教授）

和泉流 鼻取角力　大名 野村又三郎 太郎冠者 佐藤友彦 坂東方の者 井上祐一 後見 野村小三郎

素囃子 男舞　大鼓 河村総一郎 小鼓 福井啓次郎 笛 竹市学

和泉流 金岡　金岡 野村万作 妻 石田幸雄 大納言
地謡 高野和憲 野村万之介 深田博治 竹山悠樹
後見 月崎晴夫 野村良午

大蔵流 悪太郎　悪太郎 茂山千之丞 伯父 茂山千作 僧 茂山千五郎

（午後四時三十分終演予定）
〔入場料〕（全席指定）
S席八五〇〇円
A席七五〇〇円
B席六五〇〇円

主催 中日新聞社

名古屋能楽堂定例公演

十一月二十九日（土）午後二時開演
名古屋能楽堂

番組
（和泉流）狂言 千鳥　太郎冠者 佐藤友彦 酒屋 井上祐一 主人 佐藤融 後見 今枝靖雄

（観世流）能 三輪
里女 三輪明神 梅田邦久
玄賓僧都 飯冨雅介 河村総一郎 助川治 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
白式神神楽
里人 井上靖浩
後見 久田勘鶴 片山九郎右衛門
地謡 高島良一 本田熱 須部甫 清沢一政 武田邦弘 片山清司 古橋正邦

（終演予定午後四時四十分頃）

主催 能楽普及事業実行委員会
名古屋市・(財)名古屋城振興協会
(財)名古屋市文化振興事業団
協賛 能楽協会名古屋支部

〔入場料〕
前売一般三千五百円
学生二千円
（当日一般四千円
学生二千五百円）
取扱所
名古屋能楽堂（052・231・0088）
チケットぴあ（052・320・9999）
市内プレイガイド

郁諷会大会

十一月三十日（日）午前十時始
名古屋能楽堂

番組
運吟 賀茂　名古屋大学観世会
東北　名古屋大学観世会

（③面へつづく）

戦後名古屋能楽史㊽

〔第十二章〕

昭和三十三年（一九五八）

竹尾　邦太郎

（承前）

朝日五流能は二部制。番組が発表されると冒頭に次の挨拶がある。「歴史を誇る朝日五流能は、毎年東京、大阪、九州各地で催され好評を博していますが、今年から名古屋でも開催することになりました。戦前、朝日会館能として同好者に親しまれたものを、より規模の大きい五流能として復活、各流の権威者を揃えて花々しく再出発することになったわけです。幸い、こんど落成を見た愛知県文化会館のホール（愛知文化講堂）に立派な仮設能舞台が用意され、復活第一回の朝日五流能が、その舞台びらきを兼ねて、世界に誇る古典芸能を広く一般に公開できる機会を得ましたことは、主催者の最も喜びとするところであります。この意義ある催しが成功しますよう、大方の御援助を切望してやみません」

そして、この度の催能の持つ意義や現代とのつながりなどに付き、当地の識者・能楽関係者を招いて事前に座談会を開き、六月十四日、夕刊紙上に掲載する。出席者は前・県立女子大学長高木市之助、能楽協会名古屋支部長田鍋惣太郎、能評論家野村広二、県文化財専門委員森川勘一郎の四氏。

◆五流能が名古屋で催されることについて

森川　私は何よりも能の大衆化に大きな推進力となると思う。能は一部人士のものと言われるが、私の知る限り、一般の人達も見たいという人はかなりいる。能は確かに分りやすい芸能ではないが、度々見ているうちに深い興味を誘わせるものだ。問題は会場、料金などの点で大衆に近付き易くすることだ。そうしたら能のファンはもっともっと増える。ところが今までは安いクラスの入場券も無く、また関係知人を通じてでないと手に入らないという有様だった。新聞社主催のものとして広く窓口が開かれたことは喜ばしい。

高木　五流の演能を一年かかって普く見続けることは玄人定連でなければ出来ないことだ。それが一日で見られるのは素晴らしい。

田鍋　今までも各流派がなるべく公平に上演できるよう努力してきたが、無駄な労力、経費がかさみ、一堂に一日間、集めるということは難しかった。

野村　名古屋の能の歴史は東西に匹敵するものだが、今では能について全国的に考える場合、いつも疎外されてきた。それが今度初めて、相撲でいえば本場所がかけられる訳で、それだけでも意義は大きい。

◆能をむつかしく考える人がある様だが…

高木　芝居や踊りと同じに考えていいものだ。

森川　芝居なら吉右衛門も菊五郎も見る人が、能になると一流にこだわったりする。

野村　袴を着けて見に行かなくてはという固苦しさがあると思い込んでいるのではないか。

高木　そんなところから一般の人に敬遠されているのだが、半面、定連と舞台の間には馴合いが生じているという所もある。固苦しい観能エチケットなど無視しても会場が卑俗に流れたりはしない。

森川　そう、夜の屋外で行われ、気楽に見られる薪能でも会場の雰囲気は調子の高いものだ。

田鍋　問題は舞台だ。能楽師が熱演し、その緊張が見る方に直に感じられれば低俗化の心配など吹っ飛んでしまう。能はむつかしいという人でも良い能を見ると〝よく分る〟と言う。

高木　その点文化講堂での五流能は他流仕合の真剣勝負で、舞台と観衆の馴合いもなければ、会場の性質からして能楽堂的な固苦しさもなく、観賞上からも啓発の面からもいいことだ。

◆能の魅力は〝幽玄〟にあると言われるが……

高木　幽玄の内容は時代と共に随分変っている。常識で考えられているもの、華道の幽玄、能の幽玄、何れも微妙な違いをもっている。

野村　強く逞しい美という幽玄も能にはあるし……。

高木　能の中でも観阿弥はドラマチックだし、世阿弥はオペラチックだ。能の魅力は幅が広い。

田鍋　能が綜合芸術ということも見落としてはならないことだろう。いくらシテがよくてもワキや囃子が悪ければ舞台がだれる。鼓を打つ、シテが登場する――その現われた瞬間、役の人格がパッと表現されているためには鼓の打ち方一つが重大な役割を果す。

高木　シテ、ワキなど役者と囃子方とは前以て申合せしているのか。

田鍋　以前は申合せをしたものだが、今はぶっつけ本番だ。芝居なら座付の囃子方がいるが、能では分立していて主従関係は無く、舞台が対決の場だ。妥協の余地が無く、力のあるものに引きずられるという結果がはっきり出る。

野村　名手同士のシテと囃子が喧嘩していて、シテは相手が鼓を打っても登場せず恥をかかせようと思っていたが、実際に鼓が鳴ったらいつの間にか足が出ていた――という伝説がある位だ。気合いの芸術といえよう。その意味で最も日本的な芸能だ。

◆能と現代との結びつきが分らぬという人もあるが……

森川　テンポののろさが現代人にはピタリと来ぬということだろうが、狂騒の時代であるだけに、却ってのんびりしたものを求める気持ちは各方面に強い。

野村　謡曲ブームが生じているのもそれだ。

高木　ただ問題は謡を習う人に能の分る人が少ないということだ。能楽堂で自流の能が上演されていると、謡本にかじりついている人をよく見受ける。能が分らなければ、謡も本当には謡えない筈だが。

田鍋　能は見るものだ。五流の精鋭を集めた今度の催しが謡本首っ引き組にも能を〝見せる〟機会になろう。師匠達も謡と能を切離して教えるようなことはしないでほしい。

高木　能は元々大衆的なものだった。世阿弥も「見所を楽しませる」ことの重要性を説いている。世阿弥のいう見所は現代の大衆と違うにせよ、鑑賞者と演者は常に緊密な関係をもっていた。

森川　今の能楽師には〝素人に分るか〟という気持があるのではないか。もっとへり下った気持で大衆の声を聞くべきだ。

野村　現代との繋がりが無いというのは能そのものの罪ではなく、右のような外部的な障壁が災いしているからではないか。最近若い能楽師の中に演能の芸統を継ぐという気持からでなく、自己表現の具としての芸術と考える人が出てきているのは頼もしい。

高木　確かに古典を現代的感覚で掴むという事は必要だ。しかし大衆性ということに惑わされて、今迄磨きあげたものを崩してはなるまい。いかに能を大衆に近づけるといっても、ジャズやロカビリー――と同様には扱えない。やはり大衆にもある程度の教養が要求される。その意味から私は学生の能への関心に最も期待する。

野村　能は無意識の芸術、狂言は意識の芸術と割切った評論家がいたが…。

高木　そうしたイデオロギーで割切れぬものが古典芸能だ。そしてそういう割切り方の出来ぬところを能は掴んでいるのだ。

田鍋　日本人の根本的な心情を能は掴んでいると私は思っている。芸統を継ぐということと、日本人である自己の表現ということは両立するものだ。

右の座談の内容の中には主催者の意を掬み少々斟酌するところ無きにしも非ずで、既に前年には第三回を数えた中日五流能があり、また、田鍋惣太郎の主催する年二回の名匠観賞能が、一日で五流の能とは言えないまでも、五流名手の舞台を提供し続けているのは衆知の事である。なお、この年に限り中日五流能がなかったのは競合を避ける為だったろうか。

さて当日の番組は第一部（午前十時始）「翁」観世元正・大蔵弥太郎（三番三）、観世元昭（千歳）、「佐渡狐」茂山幸四郎、「三輪・岩戸ノ舞」喜多実、仕舞三番「笠ノ段」岡久雄「鵜ノ段」野口禄久「玉ノ段」本田秀男、「葵上・梓ノ出・無明ノ祈」金剛巌。第二部（午後四時始）「弱法師」近藤乾三、仕舞三番「屋島」和島富太郎「松風」武田太加志「藤戸」豊嶋弥左衛門、「熊野・読経ノ伝・膝行・村雨留」梅若六郎、「止動方角」佐藤卯三郎、「山姥・白頭」桜間道雄、三役は能楽協会名古屋支部の出演の外、ワキ福王茂十郎、囃子方に森田光春、曽和博朗、谷口勝三・亀井俊雄、小寺金七、狂言は既出の外に茂山喜三の来演がある。

七月六日、観世元規三十三回忌・観世元継十三回忌・鬼頭為太郎二十三回忌追善能は五流から出演があり、囃子方も杉市太郎、大倉六蔵、吉見嘉樹、小寺金七らの参加もあって多彩。観世流太鼓方宗家観世元信は次のように挨拶する。

「道成寺」シテ本田芳樹、披キ。面曲見（鉄漿・眉に寂しい翳をみる）・襟白浅黄・白地金鱗箔着付・濃紺地丸文尽縫箔腰巻、金春流の極り無紅亀甲地鶴菱文唐織壷折。三ノ松へツツツと出、一旦止まると動悸鎮めるかに静かになって運ぶところ、「結縁のため参らばやと思ひ候」の決意の昂ぶり、へ急ぐ心か未だ暮れぬ、と気忙しげに数歩出るところ、白拍子の緊張感は演者の緊張感、特と伝わる。物着に黒烏帽子、一ノ松からキッと入る迷さに乱拍子への気合は小鼓・嘉津幸との迫真の一騎打も上々。中ノ段の数拍子に一気に高潮し、へ（道成）寺とは（名付けたりや）、と弾む息に拍子一ツ強く踏むやへ山寺のや、と鮮烈な急ノ舞。鐘入は金春のお家芸「舞込」を期待したが、右手で紐を解き放ち、烏帽子脱ぎ捨て鐘へ接近、扇で鐘の縁を探り当てると見えた瞬間、シテの眼前で落下の奇禍。

舞台はホールの仮設、広い間口の上部に長い鉄パイプ二本、短いもの一本、工字形に張り渡し、強度をつけるためワイヤーで前後を引っ張り、工字の縦軸に滑車が取り付けてあった様だったが、アイが鐘を吊る時も何か不安定な気がしないでもなかった。

鐘後見は余人に非ずシテの父・光洋で本当によかった。多分ぐらっときて危険を察知、早く落としたのであろう。シテの身体に怪我気。太郎冠者の小舞に「暁」の地を謡い、兵（つわもの）ぶりは「羅生門」に仮託した太郎冠者との連吟の一くさり、へ弥猛心の一つなる兵の交はり頼みある仲の酒宴かな、に大いに発揮する。幸雄の熱演と相俟ち、シテを乗せる術心得た万作の巧さ、アド主は博治、肩肘張った役に嵌る。（26分）

「棒縛」番組はシテ太郎冠者・万作、小アド次郎冠者・幸雄、事前に役が入れ替る。案山子よろしく両腕水平に両手首を棒に括られれば、後ろ手に両手括られるより運動量は見た目もシテの方が多かろう。舞台過多の万作を庇う深慮だろうが盗み酒に酔い痴れ、肴の小舞に長い「七つ子」舞い通す元

◆盛夏から初秋の舞台◆

「第20回記念・天王薪能」「第19回衣斐正宜後援会能」「金剛定期能・第一回」「第34回鳳の会」と「初秋能・第二部」

竹尾邦太郎

（④面へつづく）

（②面「観謡会」番組つづき）

謡　富士太鼓　水野　熊谷　臣子　晃子　野崎　和江

三輪　志津　明子　名倉　惠子　大島　修　中澤　孝文

仕舞　班女　舞アト　宮口　山美　源氏供養　水野　臣子

舞囃子　忠度　中野　裕子　筧　鉱一　後藤孝一郎　大野　誠

葛城　熊谷　晃子　筧　鉱一　後藤孝一郎　鬼頭　好信　後藤孝一郎　大野　誠

謡　隅田川　渡辺　郁子　久田　勘鶴　松山　幸親

舞囃子　杜若　名倉　惠子　筧　鉱一　後藤孝一郎　鬼頭　好信　後藤孝一郎　大野　誠

野守　佐治　光幸　筧　鉱一　後藤孝一郎　鬼頭　好信　後藤孝一郎　大野　誠

謡　卒都婆小町　門脇　千鶴　上田　貴弘　大介

舞囃子　巻絹　志津　明子　河村眞之介　福井啓次郎　鬼頭　好信　鹿取　希世

松風　蛻之舞　赤尾　正　河村眞之介　福井啓次郎　鹿取　希世

藤戸　渡辺　郁子　河村眞之介　福井啓次郎　鹿取　希世

仕舞　清経　クセ　門脇　千鶴　野宮　中澤　孝文　笠之段　片山　明美

舞囃子　胡蝶　野崎　和江　河村眞之介　福井啓次郎　鬼頭　好信　鹿取　希世

熊坂　伊藤　明美　河村眞之介　福井啓次郎　鬼頭　好信　鹿取　希世

謡　鉢木　佐治　光幸　濱田　国松　赤尾　正

番外仕舞　龍田　キリ　前野　郁子

附祝言

主催　郁謡会　前野郁子

（終了予定五時半頃）

「御来場歓迎」

「此の度御地に於て祖父元規並びに亡父元継の追善能に際し当流の功労者故鬼頭為太郎の追善も併せ行はせて頂きます事は偏に皆々様の御芳情御支援の賜と深く感謝致します　尚此の機に流儀の職分にそれぞれ秘曲大曲を勤めさせたいと存じますゆゑよろしく御鞭撻の程御願申上げます又催主八郎にはその亡父為太郎の抱懐致して居りましたる元規追善の遺志を果させるものであります　右乍簡単一言御挨拶迄申上げます」

能組は独打「海人」山口義郎・鬼頭五朗、舞囃子「三笑」高橋静夫、「鷺」柴田初太郎・橋岡久共（王）、「悪太郎」井上松次郎、小謡「巴」中野寛兵衛、独吟「花筐クセ」林愿蔵、舞囃子二番「姨捨」橋岡久太郎「舟弁慶」和島富太郎、仕舞八番「花月クセ」飯田新子「道明寺」加藤良久「天鼓」竹市秀雄「松風」山田仁三郎「藤戸」大塚一二「敦盛」内藤泰二「杜若」鈴木右門「鵜ノ段」辰己清、一調「松山鏡」観世元信・橋岡久馬、仕舞五番「雨月・中入前」杉村竹翠「富士太鼓」殿島修二「半部クセ」久田秀雄「紅葉狩」加藤丈太郎「項羽」河村鉦二、連吟「晋願寺」増田一雄・早川輝吉、舞囃子二番「三輪」本田秀男「山姥」辰己孝、仕舞四番「邯鄲・楽アト」飯山嘉俊「東岸居士」山本勝一「柏崎・道行」観世武雄「昭君」大槻文蔵、「鵜飼」観世喜之。橋岡久太郎の名演と世評高い東京での最晩年の舞囃子「姨捨」、その礎は名古屋の此の舞台にあったろう。当時七十四歳、囃子は杉市太郎・大倉六蔵・吉見嘉樹・小寺金七、地頭橋岡久馬である。蛇足だが、また此の日は大相撲が年六本場所制になり、準本場所であった名古屋場所が本場所に昇格、金山体育館仮設国技館での初日であった。

――以下次号――

〔③面よりつづく〕

がなかったのが何よりだが、好演のシテ初め皆さぞや残念無念の気持ち察するに余りある。改めて鐘を上げシテは中入。この事あってアイ友彦との問答にワキ雅介、「とにかくに還らぬこと」が妙に説得力をもち、仕方交えたワキ語に熱演すれば、後シテも折り落される組落シや、頭震わせ怨みの鐘を見込み、走り込むところ、大いに精彩をみせる。近い将来の本舞台での再演を望みたい。ワキツレ元・宰、アイ祐一、地に安明・広明ら、主後見は金記、囃子は六郎兵衛・嘉津幸・鉱一・国和。（1時間46分・8月10日・第20回記念天王新能・津島市文化会館大ホール）

袴能「雲雀山」　曽て、装束納のあと装束始までの期間、袴能は盛夏の景物の一、季語になって「袴能老師が容（すがた）涼しけれ」の一句も歳時記にある。

糧言で雲雀山に殺される運命の中将姫（子方・近藤諷一郎）に惻隱の情の従者ワキツレ英志、姫を匿うと生計のため乳母シテ乾之助（茶色袴・白紋服）を里へ花売りに遣る前場、暫しの別れも切ない姫と乳母は孫と祖父の共演・瘦躯愁いに沈む乾之助の佇まいに感情移入させられる。後場は鴛色袴、利久鼠色紋服に替え花売りに心を尽すところ、カケリの亢奮から舞クセに然り気なく姫の身上を洩らし、痛わしの思い身を以て吐露する沈潜した趣の中ノ舞へと、素（す）で見せる袴能の引き締まった美しい姿に乾之助の面目、豊成ワキ欣哉との問答も、難詰する語気に役への集中力の激しさ、爽快な舞台だった。（1時間18分）

「瓜盗人」　現代の畑泥棒はどうやら集団行動の大胆不敵、高價な桜桃・葡萄・桃・メロンなど大量に強奪するあくどさ。酷い御時世であるが、これは未だ「李下の冠、瓜田の履」の箴言が活きていた古（今もそうあって欲しいが）のこそ泥のお話。

盗みが善い理屈はないが、他人の丹精したものを「唯取るなといふは不心得なれども」と充分理解はするシテ友彦は憎めない。犯人は現場に立ち戻る、の謂で自ら案山子に扮し待ち受ける畑主・融、やがてやって来た盗人が抵園会の出し物の稽古に及べば、暫しは盗人を操り、操られているとは露知らず興ずる盗人。畑中でのこの遊楽気分、悪者が先に切れる現代ではこうはゆかないだろう。友彦・融の親子共演はほのぼのムード。（30分）

「俊寛」　シテ正宜、淡萌黄花帽子・小格子着付・黒水衣・白紺染分腰箕、杉水桶を持つ。寔んだ双眸に痩けた頬の面に不遜の相。水を酒と言い包める拗ね者もへ露の間に、と下居すれば古の思い出にシオリ、へ今は何時しか、と落胆の心に安座。へ落つる木の葉、を堕ちた我が身に重ね、落葉の着地までを眼前に追うかに首を垂れるところ、心象風景も鮮やか。への盃、と桶を持ち、左手底に添え立つと大小前、下居から昂ぶる気持ちは〈物思ふ〉時しもは、と膝を音立て崩すとがっくり安座双シオリの激情である。

赦免状の段は、へこは如何に、の悲愴感、状を左手に右手でシオルとクドキはただ沈痛。クセはへ書ける文字は更に無し、と背後に状を投げ捨て、夢ならばへ覚めよ覚めよ、と右手二度強く床を叩くところに、遣る方ない憤りを未だ失わない血気。船出は、ワキ赦免使・雅介が踏む強い拍子一ツに機切られるや、たたらを踏み退って安座の呼吸がよく、へ姿も次第に、と立って引かれる様に出ると右手を翳し、へ船影、を見送る哀感も一入、正宜充実ぶりをみせれば、剛直のワキ雅介に存在感。（1時間・8月23日・第19回衣斐正宜後援会能）

「高砂」　新築成った金剛能楽堂での記念すべき第一回定期能。ワキは曽て金剛座付であった高安流の宗家勝久、冒頭の名宣に爽やかな格調。シテ宗家永謹、馴染んだ紺地愉梅飛鶴文袷狩衣の袖をさらりと捌く後シテの神舞の清々しさが御世を寿ぐ。（1時間18分）

「口真似」　到来の酒に相手欲しい主・良暢に太郎冠者シテ忠三郎が無理に連れて来た男は名うての酔狂人・千三郎、太郎冠者の粗相を恐れる主は「これからは某が言う様する様にせい」と命じ、早速「お盃を持て」と命じれば、その通りを真似て酔狂者に命じる太郎冠者。このでんで収拾がつかなくなり当惑する主。何が何だか分からず困惑する酔狂人。為ることなすこと「段々難しうなった」とは言い条、主命忠実に従うとみせて真顔の下は酒を飲まさぬ主への抵抗もあるらしい太郎冠者・忠三郎が実によい味。（19分）

「小鍛冶」　シテ道一、前は童子。草薙剣の霊験譚はへ枯野の草、と居立って右ウケ、草を這う火勢を眺める態に下を見、へ（火焔を）放ちて、と直ルやへ尊剣を抜いて、と白刃に擬した扇を颯と一閃切り払うと地の返シにすっと立つところ鋭気颯爽。後は赤頭・泥小飛出の稲荷明神の俊敏。ワキ宗近・宗二朗の相槌打って台上から飛び返り、へ天地に響きて、と頭把って音の余韻を追うかに面使うところ、ワキツレ大臣・大に膝行して太刀を授けるところ、キリは二ノ松へ走り飛返りざま　被キ立ってトメルところ、など痛快だった。（1時間1分・8月24日・金剛定期能・金剛能楽堂）

「鼻取相撲」　太郎冠者・靖雄とぐるになり、内実を匿し殊更尊大に振舞う大名シテ友彦・稚気に我が儘の属性が巧くでる。召し抱えたばかりの阪東方ノ者・靖浩の得手は相撲と聞き、大名自ら相手をするが、「鼻取」の奇手に負けるところ、現行の「猫騙し」に紛いを土器の要害で固め再挑戦は勝利するが、三戦目は油断の隙に足を取られて倒され自尊心大いに傷つけられる。要害投げ捨て鬱憤晴らしの相手は太郎冠者、「己れはそれに何をしてゐる」と頭にくる大名である。（47分）

「奈須与市語」　今枝郁雄、披キ。兵衛實基の推輓で扇的の射手に抜擢されはしても恐れ多く一度は断わる与市に激怒の判官、命の背く輩は「鎌倉さしてお下り候へ」と扇で激しく床を打つところなど、披キらしき客気。鋭角的な型の中に、矢を射る型など派手さがあり華やか。ただ扇が落下のところ、「一揉み二揉み」のゆるやかな所は無く「さっと」早々に水没の印象。キリを急ぐ気持ち解らぬでもないが。（13分）

「酒講式」　現在も一部にありそうな、休罰を止めるように手土産持参で先生を訪ね善処を願う親、の図式。しかし明治四十三年（一九一〇）河村鍵三郎・河村保之助で上演以来、日の目を見なかった稀曲。

折檻され不登校になった童の親アド弘之、酒を携え手習いの師匠シテ老僧・祐一を訪ねれば、「そちの息子はいかう手を上げて御座るぞや」のお追従。親が体罰のこと聞き正そうとすれば逸らかし、恬として恥じない老獪さに言い包められそうで、ならば酒を飲ませてと深慮の親、両人の駆け引き（写真）が秀逸。酒が入れば固より左党の老僧、盃を重ね肴に小舞は「柳の下」の上機嫌、そこへ日常の過飲を親に諫められれば態度にわかに硬化し「意趣があっての事であらう」と絡みだす。騎虎の勢いは老僧、酒飲みの式目は掟、酒講式」などと偉そうな事を言い出すが飲み干した盃の中を右手で浚って舐る卑しさである。酔態のまま床几、「そもそも酒に百遊の徳あり、と語り出すが睡魔に頭ぐらつき、はっと気付き続けるが「よくよく聴聞し給へ」と言った途端に転げ落ちる醜態。引き摺られ、「とっとと行きをれ」と親に突き放される老僧、祐一・弘之両人の息の合った舞台は年齢を選ぶであろうが永年上演が無かったのが不思議である。（41分）

「蝸牛」　主・祐一の用命通り符合一致してシテ山伏・友彦を蝸牛と思い込む太郎冠者・融、玩弄されているとは知らず主の忠告も物かは「でんでんむしむし」と囃されると乗せられ浮かれ出し、遂には主まで太郎冠者の後ろに付いて行く始末（写真）、して遣ったりと相好を崩すシテ友彦、アンサンブルの妙。（28分・8月30日・第34回鳳の会）

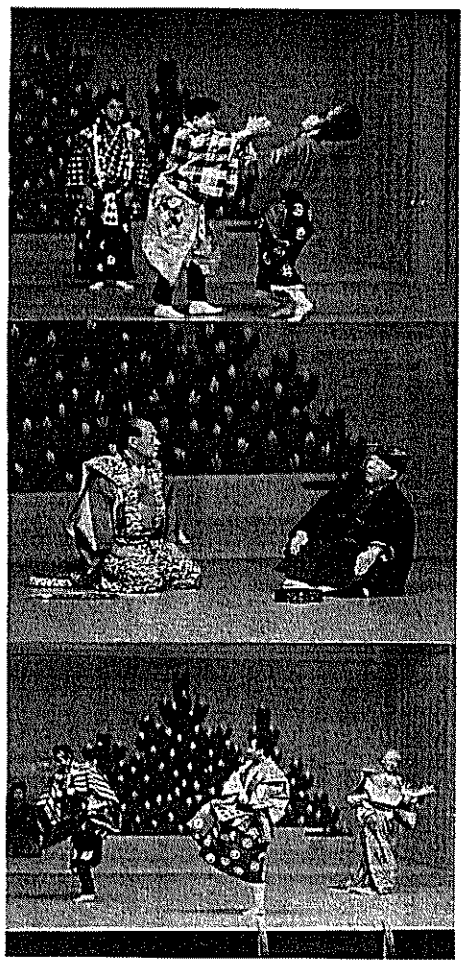
「玉髪」　シテ敏彦、面若女・楪白赤・白摺箔着付・赤地縫箔腰巻・淡萌黄水衣。へ色づく木々の初瀬山、をワキ旅僧・元と共に眺めるところに風情をみせるが、一・二歩出てへ川音、を聞くのに殊更腰を屈めるのは大仰。居グセは上半身が少々左に傾ぐのも気になる。アイ靖雄、慎重は言葉大事に過ぎて間延びの嫌い無きにしもあらずか。後シテは面・髪帯・着付は同断で赤地唐織脱掛ケ、左に付髪を垂らす。カケリは足捌きにすっきりしたところが欲しいが、へ払へど払へど、のハネ扇に心持ち十分。へ長き闇路や黒髪の、と付髪を左手で掘り、しごくようにして眺め、へあかぬや、とその侭小廻りするところ、如何にもへ結ぼほれゆく思ひ、を視覚に訴える。（1時間17分）

「萩大名」　シテ大名・友彦が当座一つ詠めぬのを小馬鹿にしたような太郎冠者・靖浩。得々と一首披講し、「あの、これ程の事がなりませぬか」の語気も少々きつく聞いたが…。（29分）

「邯鄲・傘ノ出」　喜多流の小書。シテ験、白い爪折の長柄の傘を差し、や、前掲姿勢でとぼとぼ一ノ松へ。へ浮世の旅に迷ひ、の除々たる声の深刻、蓬髪に紛う黒頭に半切・袷法被の姿は、へ仏道をも願はず、とは言い条、掛絡を付け右手に数珠の何やら頼りない求道者。道行一杯に常座、着調から「また村雨の降り来り候程に此の処に旅宿せばやと思ひ候」とシテ柱へ宿を乞うと、「さらばお傘を参らせ候へ」と女宿主アイ融は傘を預かり後見座へ置き、床几を持ち出し正中のシテに勧める。すでに腰の唐団扇を右手に数珠は左手に替えたシテ、アイとの問答は矢張り沈んだ印象である。一転、夢の中は、来序で台に上がるに位をみせ、へ日月遥し、と居立ち双手挙げるところ、壮大な庭園を誇示するが、大臣ワキツレ宰の奏聞を左ウケたまま上の空で聞く様なのは、未だ栄華の酔い醒めやらぬ為か、不審。舞童の舞の裡に掛絡を外し数珠を置き扇脱ぐと、台上の達拝掛の「楽」は伸びやかに広々と舞い、空下りは右足下ろし床に着け直ぐ引き上げる。後ろ向きに台に腰掛け暫時クツロギ、舞台に入って舞続け舞上げる。へ万木千草、するする一ノ松へ抜け、へ面白や、と袖返シ膝着いてユウケンする所に妙味をみせ、飛込みはへ百官卿相千戸万戸、と舞童・大臣昔切戸へ消えるのへ面使ヒのあと、舞台へ入ると拍子二ツ強く踏み鮮やかに飛込み美しく横臥。夢醒めては、へ栄華の程は、と左手で指折り数え、へ計り難しや、と扇左に寄せ、へげに何事も、でがっくり膝をつき〈南無三宝、と唐団扇で打つ型から返シに台を下りるが、再び台に上がり、へ知識はこの枕なり、と枕を頂き、へ望み叶へて、の返シに台を下りる。小書でアイが「早や御立にて候か、さあらばお傘を参らせ候」と預った傘をシテに渡すと、「近頃祝着にて候」と受け取るシテ。両人入れ違い、「重ねて御出で候、お宿を参らせうずるにて候」のアイの声を後にシテは幕へ、アイは台に残した枕を取りにゆき、それを抱えて幕へ退く。降り止まぬ初秋の雨、盧生は果して望み叶え大悟できたのかどうか。物思わせる舞台だった。子方橋本萌子が良く舞い、アイも適役。ワキ雅介、コシ正樹・淳、囃子は誠・嘉津幸・鉱一・洋輝、地は大作・充雄ら、後見は郷・正。（1時間22分・9月7日・初秋能第二部）

☆……☆

☆……☆



㊤第34回鳳の会「鼻取相撲」左から今枝靖雄・井上靖浩・佐藤友彦㊥「酒講式」大野弘之・井上祐一㊦「蝸牛」左から佐藤友彦・佐藤融・井上祐一（杉浦賢次氏撮影）

鳳の会「奈須与市語」今枝郁雄（杉浦賢次氏撮影）

大槻能楽堂 11月自主公演

大阪　大槻能楽堂では自主公演〝能の魅力を探るシリーズ〟として「伊勢物語と能」のテーマで、十一月に「井筒」と「隅田川」を上演する。

◎十一月十五日㈯午後二時開演

お話「伊勢物語」と「井筒」　村瀬　和子

狂言「惣八」　茂山忠三郎、善竹忠重、善竹忠亮

能「井筒」（シテ山本順之、ワキ福王和幸、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・清水皓祐、大鼓・守家由訓

◎十一月二十五日㈫午後六時開演

お話「伊勢物語」と「隅田川」　村瀬　和子

狂言「千鳥」（茂山千五郎、茂山千作、松本薫）

能「隅田川」（シテ片山慶次郎、子方・青木沙奈子、ワキ宝生閑、ワキツレ則久英志、笛・野口伝之輔、小鼓・林光寿、大鼓・河村総一郎）

前売一般三八〇〇円、当日四三〇〇円　大槻能楽堂☎〇六・六七六一・八〇五五

名古屋宝生会 16年度予定番組

名古屋宝生会の平成十六年度予定番組は年四回定式能が予定されている。上演は次のとおり。

第一回　一月二十五日㈰

竹生島　衣斐　正宜
熊野　玉井　博祐
その他　仕舞　狂言

第二回　六月二十日㈰

海人　竹内　澄子
班女　佐藤　耕司
その他　仕舞　狂言

第三回　九月十九日㈰

隅田川　倉本　雅
融　酌ノ舞　佐野　萌
その他　仕舞　狂言

第四回　十一月二十一日㈰

竜田　衣斐　愛
芦刈　辰巳満次郎
その他　仕舞　狂言

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

NHK放送予定（平成15年11月～12月）

◆NHK－FM能楽鑑賞　（毎週日曜日午前7時15分～8時）

11月23日	（再）「自然居士」（観世流）	梅若吉之丞ほか
11月30日	「薩摩守」ほか（和泉流）	三宅右近ほか
12月7日	「玄象」（観世流）	観世喜之ほか
12月14日	「綾鼓」（宝生流）	佐野萌ほか
12月21日	「江口」（金春流）	本田光洋ほか
12月28日	「木六駄」（大蔵流）	大蔵吉次郎ほか

◆NHK教育テレビ（土）「能・狂言」（14:30～15:50）
11月29日　復曲「箱崎」観世清和ほか
12月27日（土）（13:00－13:45）
～伝統の至芸～三世茂山千作
狂言「素袍落」ほか

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆
（TEL 052－231－0088）

［11月］
22日(土)　大蔵狂言会・なごや会　（無料）
23日(日)　久田観正会秋の大会　（無料）
24日(月)　名匠狂言会　（有料）
28日(土)　名古屋能楽堂定例公演　（有料）
30日(日)　郁諷会大会　（無料）（番組①面）
［12月］
7日(日)　歳末助け合い協賛能　（有料）（番組①面）
［1月］
3日(土)　名古屋能楽堂正月特別講演　（有料）
4日(日)　鳳の会第35回公演　（有料）（番組②面）
12日(祝)　名古屋清饌会　（無料）
24日(土)　藤田・龍吟の会　（有料）（番組②面）

◆熱田神宮能楽殿◆
（文化課　052－671－0852）

［12月］
6日(土)　名大観世会定期自演会　（無料）（番組②面）

◆豊田市能楽堂◆
（TEL 0565－35－8200）

［11月］
30日(日)　豊田市能楽堂開館5周年記念特別公演
～名匠鑑賞能～　（有料）
［12月］
20日(土)　豊田市能楽堂開館5周年記念
～狂言づくしの会～　（有料）

歳末助け合い協賛能
能3番、狂言1番
12月7日　名古屋能楽堂

中部能楽師会主催、能楽協会名古屋支部共催による「歳末助け合い運動・協賛能」は毎年十二月に開催、協会名古屋支部所属の各流能楽師による演能で、愛好者の協力を得て開催しているが、ことしは12月7日(日)名古屋能楽堂で、能三番、狂言一番はじめ舞囃子、仕舞で行われる。

能組は、観世流能「箙」（シテ松山幸親）、観世流能「三井寺」（シテ久田勘鶴）宝生流能「黒塚」（シテ衣斐愛）の能三番。

狂言は和泉流「磁石」（松田高義、野村又三郎、大野弘之）、舞囃子は金春流「初雪」（シテ加藤富貴子）、仕舞は金剛流「鵜之段」観世流「井筒」観世流「鉄輪」喜多流「阿漕」の四番。

午前十時半始、入場券は前売券二千五百円（当日券三千円）、学生券千五百円。

前売りは市内各プレイガイド、チケットぴあ（052・320・9999）、各出演者宅。

なお、昨年は義援金として、愛知県、名古屋市へそれぞれ二十五万円ずつが寄付されている。

復曲能「当願暮頭」
新春1月24日公演
藤田・龍吟の会

藤田・龍吟の会では、明年一月二十四日(土)、自主公演能として復曲能「当願暮頭」を上演する。

能「海士」の讃岐・志度寺に伝わるもう一つの物語、埋もれていた名作「当願暮頭」が名古屋で初上演される。

復曲初演は平成三年、国立能楽堂研究公演。台本堂本正樹・節付梅若六郎　再演出大槻文蔵の諸氏による。

復曲能「当願暮頭」（シテ大槻文蔵、ツレ観世鉄之丞、ワキ宝生閑）

舞囃子「海士」（シテ山本博通）

午後二時開演。入場料（全席指定）A席一三、〇〇〇円、B席一一、〇〇〇円、問い合わせ・申し込み、藤田六郎兵衛事務所（052・571・6341）（番組②面）

大阪　大槻能楽堂新春公演

大槻能楽堂の2004年新春公演は1月3日・4日に行われる。

◉1月3日(土)午後2時開演
能「翁」（観世喜之）
狂言「猿聟」（茂山千作）
能「羽衣」（泉嘉夫）

◉1月4日(日)午後2時開演
能「翁」片山九郎右衛門
狂言「親猿」山本東次郎
能「邯鄲」観世栄夫

入場料金　一般・当日五五〇〇円（前売五〇〇〇円）

入場券発売所　チケットぴあ、大槻能楽堂（06・6761・8055）

大阪梅猶会定期能新春公演

大阪梅猶会定期能の新春第一回公演は、2004年1月18日(日)大阪能楽会館で開催される。午前十一時始

「神歌」（梅若善高）
能「屋島」（池内光之助）
狂言「鬼瓦」（茂山忠三郎）
能「千手」（梅若猶義）
能「善界」（井戸和男）
ほか仕舞四番

入場料　回数券（四回分）一万六千円、一般前売券四千五百円（当日五千円）

入場券取扱所　大槻能楽堂（06・6761・8055）大阪能楽会館（06・6373・1726）阪急プレイガイド（06・6373・5446）および出演楽師。

演能案内

郁諷会大会
十一月三十日(日)午前十時始
名古屋能楽堂

番組

連吟　賀茂　東　北　名古屋大学観世会　水野　臣子　熊谷　晃子　名古屋大学観世会　野崎　和江

素謡　富士太鼓　三輪　融　志津　明子　名倉　恵子　大島　修　中澤　孝文

仕舞　班女　源氏供養　宮口　由美　水野　臣子

舞囃子　忠度　中野　裕子　後藤孝一郎　筧　鉱一　大野　誠
葛城　熊谷　晃子　後藤孝一郎　筧　鉱一　鬼頭　大野　好信　誠

素謡　隅田川　渡辺　郁子　久田勘鶴　松山幸親

舞囃子　杜若　名倉　恵子　後藤孝一郎　筧　鉱一　鬼頭　大野　好信　誠
野守　佐治　光幸　後藤孝一郎　筧　鉱一　鬼頭　大野　好信　誠

素謡　卒都婆小町　門脇　千鶴　上田　貴弘　上田　大介

舞囃子　巻絹　志津　明子　福井啓次郎　河村眞之介　鹿取　鬼頭　希世　好信
松風　赤尾　正　福井啓次郎　河村眞之介　鹿取　希世
藤戸　渡辺　郁子　福井啓次郎　河村眞之介　鹿取　希世

仕舞　清経　門脇　千鶴
野宮　中澤　孝文
笠之段　片山　明美

舞囃子　胡蝶　野崎　和江　福井啓次郎　河村眞之介　鹿取　鬼頭　希世　好信
熊坂　伊藤　明美　福井啓次郎　河村眞之介　鹿取　鬼頭　希世　好信

素謡　鉢木　佐治　光幸　濱田　国松　赤尾　正

番外仕舞　龍田　キリ　前野　郁子

附祝言　（終了予定五時半頃）

「御来場歓迎」

主催　郁諷会　前野郁子

ユネスコ第一回世界無形遺産認定
歳末助け合い運動
協賛能（第三十五回）
十二月七日(日)午前十時半始め
名古屋能楽堂

能組

金剛流仕舞　鵜之段　吉川　周子　地謡　牧野　元子　西脇　和子　伊藤　雅子　羽多野　良子　熊谷眞知子

観世流仕舞　井筒　今沢　美和　地謡　星野　路子　三村　恵子　久田　三津子　加藤　春枝

観世流能　箙　松山　幸親　杉江　元　河村眞之介　後藤嘉津幸　大野　誠
後見　近藤　幸江　武田　邦弘　地謡　高島　良一　黒田　博　八神　孝充　本田　勲　高橋　瞭一　祖父江　修一　古橋　正邦　清沢　一政
問　井上　祐一

金春流舞囃子　初雪　加藤富貴子　地謡　筧　鉱一　福井啓次郎　鬼頭　好信　竹市　学　伊藤　雄二　小島　芳樹　鬼頭　尚久　金春　穂高　正嗣　前田　茂穂　広瀬　雅弘　加藤

観世流仕舞　鉄輪　古橋　正邦　地謡　本田　嘉宏　上野　祖父江　修一　高橋　暸一

観世流能　三井寺　久田勘吉郎　久田勘鶴　高安　勝久　相元　正樹　河村総一郎　柳原富司　忠　鹿取　希世
後見　前野　郁子　泉　嘉夫　地謡　外山　圭一　八神　孝充　須部　市　加賀　敏彦　上野　嘉宏　武田　邦弘　梅田　邦久　清沢　一政
問　佐藤　友彦　井上　靖浩

和泉流狂言　磁石　松田　高義　野村又三郎　大野　弘之　後見　今枝　靖雄

喜多流仕舞　阿漕　長田　郷　地謡　和谷　衡市　長田　暁　小出　甚吉

宝生流能　黒塚　衣斐　愛　飯富　橋本　雄介　宰　筧　福井　鉱一　良治　加藤　竹市　洋輝　学
後見　竹内　澄子　玉井　博祐　地謡　竹内　良伯　青木　亮　平田　正宣　稲川　衣斐　竹内　淳一　寿一　佐藤　久野　幸三　耕司　正文
問　佐藤　融

附祝言　（終了予定午後四時）

主催　中部能楽師会
共催　能楽協会名古屋支部
お問い合わせ　052・241・3146　福井方

〈入場券〉
前売券　二、五〇〇円
当日券　三、〇〇〇円
学生券　一、五〇〇円
〈前売り場所〉
市内プレイガイド
チケットピア（〇五二－三二〇－九九九九）
各出演者

神戸新春能

1月10日文化ホール

神戸

神戸市民文化振興財団・神戸文化ホール恒例の「神戸新春能」は、2004年1月10日(土)催される。

番組は次のとおり

舞囃子「三笑」（吉井順一、久田勘鶴、勝部延和）

能「清経」替之型（山村啓雄、笠田昭雄）

狂言「縄綯」（茂山千之丞）

能「松浦佐用姫」（観世清和）

開演午後一時、入場料（全席指定）一階席6000円、二階席5000円。

入場券、問い合わせ＝神戸文化ホールプレイガイド（TEL078・351・3349）

第七回名大観世会定期自演会

十二月六日(土)十一時半始
熱田神宮能楽殿

連吟　賀茂
仕舞　嵐山　森綾
　　紅葉狩　小島里恵
仕舞　西王母　近藤さち子
　　巻絹キリ　堀本英光

舞囃子　玉鬘　岸麻美子　中村奈美
　　関根真爾　利見佳宣
仕舞　網之段　竹内実里
　　猩々　水谷真介
仕舞　蘆刈キリ　岡田麻記子
　　七騎落　石橋直子

舞囃子　清経　片山明美　河村眞之介
　　大野拓也　大野誠

仕舞　岩船　田中美穂
　　邯鄲楽アト　内川麻梨

連調　田村クセ
　　招待仕舞　椙山女学園大学能楽部
　　南山大学観世会

舞囃子　船弁慶　吉田隆　岡田涉
　　堀本英光　水谷真介

狂言　文蔵　森綾　石橋直子

連吟　東北
仕舞　経正キリ　岡田涉
　　合浦　利田祥子
仕舞　鉄輪　宇野直樹

舞囃子　野宮　中澤孝文　河村眞之介
　　世古口浩紀　宮島富久雄
　　招待仕舞　京都大学観世会

舞囃子　野守　水野賀夫　細井裕之　東松舞
　　村松史織　宮島富久雄

仕舞　鵜亀　加藤啓
　　茅平　山田洋之
　　熊野　渡辺剛
　　笠之段　鳥居宗克
　　小鍛冶キリ　佐藤謙

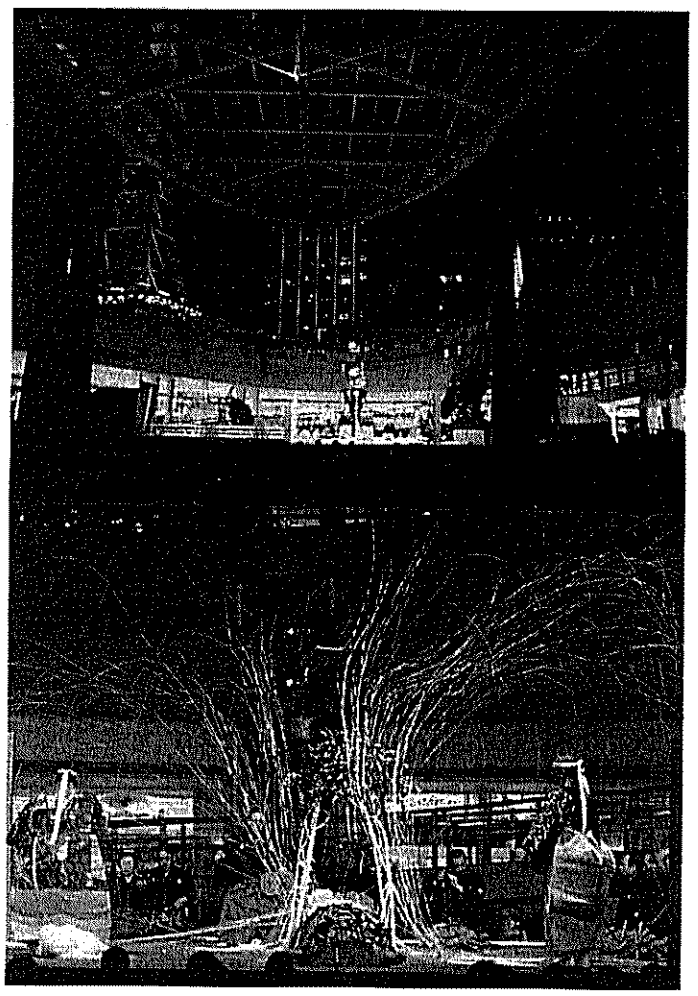
能　橋弁慶
子方　堀本英光
トモ　近藤さち子
　　清水和也
　　吉田隆
　　竹内実里
　　内川麻梨
間　芦師　森綾
　　鹿島俊裕

第1回 オアシス21能・狂言

能楽協会名古屋支部（福井啓二郎支部長）では、前号既報のように10月18日(土)、名古屋市・栄公園内オアシス21・水の宇宙船下「銀河の広場」特設会場で、第一回「オアシス21・能・狂言」を開催した。

この催しは愛知県、名古屋市、愛知県芸術文化協会などの後援に加え、特別協力として財団法人2005年日本国際博覧会協会も連携協力し、入場無料（椅子席着席券のみ有料前売）で催された。

演目は、宝生流能「羽衣」、和泉流狂言「墨塗」、観世流能「土蜘蛛」で、「愛・地球博」の愛知万博を迎える名古屋の中心で展げられる幽玄の舞台が新たな話題をよんだ。



〔写真〕(上)銀河の広場・特設会場　(下)能「土蜘蛛」の上演（杉浦賢次氏撮影）

鳳の会 第35回 公演

平成十六年一月四日(日)
午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

解説　名古屋女子大学教授　林和利

素囃子　楽
笛　大野誠
小鼓　後藤嘉津幸
大鼓　河村眞之介
太鼓　鬼頭好信

狂言　三人夫（さんにんぶ）
笑酒のお百姓　井上靖浩
淡路のお百姓　佐藤融
尾張のお百姓　鹿島俊裕
奏者　井上祐一

狂言　痩松（やせまつ）
山賊　大野弘之
女　今枝靖雄

狂言　胼（あかがり）
太郎冠者　井上祐一
主人　鹿島俊裕

狂言　米市（よねいち）
太郎　佐藤友彦
何某　井上祐一
立衆　佐藤融
　　井上靖浩
　　今枝靖雄
　　今枝郁雄
　　林泰礼
　　鷲見政行

☆演者と語ろう〝Q&A〟
終演後会場で、井上祐一、佐藤友彦を囲んでお客様の狂言に関する疑問、質問に演者が直接お答えします。

入場料（全席指定）
A席　五、〇〇〇円
B席　三、五〇〇円
学生　二、〇〇〇円
会員A席　四、〇〇〇円
会員B席　二、五〇〇円

お問い合わせ
井上祐一方　052・834・6112（TEL&FAX）
佐藤友彦方　052・911・8784（TEL&FAX）
名古屋女子大学林研究室　052・801・4035（直通）
チケット取扱い＝チケットぴあ　052・805・3875（FAX）　052・320・9999

主催　鳳の会
後援　名古屋市

藤田・龍吟の会

平成十六年一月二十四日(土)
午後二時始
名古屋能楽堂

後見　前野郁子　水野賀夫
　　久田勘鶴　宇野直樹
　　地謡　水谷真介　山田洋之
　　岡田涉

（午後五時頃終了予定）

附祝言

能組

舞囃子　海士　山本博通　河村眞之介　加藤洋暉
　　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛
　　分林道治
　　地謡　上野雄三　上田拓司
　　味方玄

弟当願　観世銕之丞
復曲能　兄暮頭　大槻文蔵

当願暮頭（とうがんぼとう）
宝生閑　宝生欣哉　殿田謙吉
亀井広忠　助川治
大倉源次郎　藤田六郎兵衛
間　井上靖浩　佐藤融

後見　西村高夫　武宮康之　上野雄三
　　赤松禎英　寺沢幸祐　山田拓司
　　地謡　分林道治　片山清司
　　味方玄　山本博通

主催　藤田・龍吟の会
中部日本放送
中日新聞社

〔入場料〕（全席指定・税込み）
A席　一三、〇〇〇円
B席　一一、〇〇〇円
学生席（直接藤田六郎兵衛事務所へお申込み下さい）

演能解説

復曲能
当願暮頭

台本　堂本正樹
節付　梅若六郎
再演出　大槻文蔵

昔、讃岐の国に兄弟の猟師がいた。今日は志度寺で法華供養があるというので、兄の暮頭（ぼとう）は法会に加わろうと、弟の当願（とうがん）を誘うが、当願はそれを断って狩に行ってしまう。

さて、寺では法要が始まり、暮頭は聴衆に交わって供養の座に連なった。狩場に向かったものの供養のことが心にかかった当願は、急いで引き返して兄を探す。しかし、心の中は狩が気になってしかたがない暮頭は、法会の只中、群衆と弟の目前で毒蛇に変身し、万濃池に飛び込む。（中入）

やがて、僧たちが諸天に祈ると、暮頭が姿を現す。そして当願が兄を思いやり、涙ながらに立ち向かうと、暮頭は蛇体となった我が身を恥じ、自らの眼をつかみ取って「竜女の宝珠」として弟に与え、再び波間に沈んでゆく――。

生活のために山に入りつつも、殺生を懺悔する弟。殺生の罪から逃れたいと法会の座に連なりながら、心は狩場に彷徨う兄。狩猟を生業とする兄弟の姿を対照的に描いて、人間の心の矛盾、その相克が噴出して蛇体となるというテーマに迫った異色の能である。

復曲初演は平成3年、国立能楽堂研究公演。

今回は、早くからこの曲に注目し、「生活苦が鬼という形を取るのだ。嫉妬の鬼より何と切実だろう」「何にせよ鬼形をあくまで人間の本体として捉え、それを我々すべての原罪として表現した本曲は、真に近代的で、仏法でも兄弟愛でも解決されない業が『生活』そのものだとする視点は凄い」（「番外曲水脈」七、「能楽タイムズ」昭和54年2月号）と絶賛した、堂本正樹が、自身で手がけた台本による、別バージョンで再演する。

戦後名古屋能楽史 ㊾

〔第十二章〕

昭和三十三年（一九五八）

竹尾　邦太郎

（承前）

盛夏、虫干をかねた装束納で本格的な装束能は秋の装束始までお預け。これも舞台に冷房設備が無いためで、代って練成会・ゆかた会・歌仙会などの名で素謡や仕舞が中心の社中の会が専らになる。熱田神宮能楽殿は舞台披キ以来九三年、設備概要に拠れば煖房は備えられてをり、その方式は「温風煖房装置をなし観客席天井のノズルより温風を吹き出す。中間季は新鮮空気に依り換気をなし夏期は冷凍機を設置すれば冷房も可能」という状態で、冷房完備には至っていない。余談だが、先号で触れた大相撲名古屋場所は七月二十日に千秋楽を迎えたが、あの広い金山体育館に冷房装置のある筈もなく、酸素ボンベから放出する酸素でせめてもの涼を取ったというのが語り草になっている。因に優勝は栃錦を破った十三勝二敗の若乃花、パレードは金山から上前津・大須・栄町・広小路とメーン・ストリートを行進し、初めてのことあって沿道は人で埋まり、行き交う市電やバスの窓からも歓声が飛んだという。

月が替り八月、幕藩体制瓦解後の名古屋能楽界の有力な後援者の一であった岡谷家の当主で名古屋商工会議所副会頭・名古屋能楽会副会長の岡谷正男氏が十二日、航空機事故で急逝する。ニュースは、午後七時五十三分羽田発小牧行の全日空ダグラスDC3型機がエンジンに故障を起し下田沖で遭難、と報じる。行先から死者三十三名の中に名古屋在住者が多く大惨事となる。『観世』誌九月号はこの事に触れ、「八月十一日（ママ）静岡沖で墜落した全日空旅客機には、名古屋能楽会の副会長として熱田神宮能楽殿の建設に尽力された岡谷正男氏が不幸にも乗り合わせていられた。流儀のため情熱をもってお世話いただいていた氏を一朝にして失ったことは痛惜に堪えないところである。謹んで氏の御冥福を祈る次第である」の記事を載せ、また『狂言』紙九月号（第十八号）は同人歌村彦四郎が「狂言人語」欄で次のように逝去を悼む。「青天の霹靂とでも申せませうか、此度岡谷さんの航空事故による御災難は能楽界は申すに及ばず、名古屋財界に於ける損失の最大のものであります、定めて御老父も御歎きの事と御同情申上げます。ほんとうに惜しい方を亡くしました。謹んで哀悼の意を表し御冥福をお祈りいたします」

ここに御老父とは貨山岡谷惣助翁、翁は昭和三十一年十月、和泉流狂言共同社先覚物故者追善の狂言会パンフレットに「想い出」と題し次の一文を寄せているが、これをみても代々名古屋能楽界を支援してきた岡谷家の、当主を失ったことは返す返すも痛恨の極みであった。

想い出　岡谷貨山

私が狂言を習初めは、小学校入学草々で、女中に連れられて末広町の門水先生のお宅に通いました。大凡そ三、四日おき位にお稽古にうかがった記憶がいたします。其の時分井上先生も、すじ向いで時々お出になった様に覚えます。

舞台が門前町の商品陳列館奥に有りました。御催しの時は、見場はさじき掛けで、毛せんをしき、茶箱、重組と云う、のんびりした見所風景を想い出します。其の時分は、当地は狂言が全盛であった様に覚えております。

井上、伊勢、河村、角淵、山脇老と云う其の道の大家がお揃いで、前日が申合せ、翌日が衣装たたみと、三日間毎日風流に面白い楽しみの日を子供心にも感じました。半世紀の昔を想い出し、夢の様な想い出で御座います。

八月十五日、徳川美術館で折から開催中の由緒ある能装束・絵巻などの所蔵展に能楽評論家北岸佑吉氏が来館、「能の美学」と題する講演がある。二十八日、今次大戦で灰燼に帰した名古屋城再建の気運が高まる中、能楽協会名古屋支部は中部能楽師会と共催で名城献金能を冷房完備の愛知文化講堂特設舞台で催す。協賛金は一口二百円、後日、益金十万円を名城再建後援会に献金する。当日の番組は舞囃子三番「小袖曽我」佐藤太俊・河村鉦二「加茂」内藤泰二「絃上」和谷亀二郎、連吟「杜若」加藤良久・芥川秀子・飯田新子、狂言「三人片輪」佐藤卯三郎、能二番「巴」大塚一二「土蜘蛛」柴田初太郎。

装束始は九月七日、前年に続き名古屋能楽会が主催する二部制の招待能となる。第一部は舞囃子「龍田」豊鵜一喜、狂言「不須」井上松次郎、能「経政」辰巳孝。第二部は舞囃子「邯鄲」柴田初太郎、狂言「荻大名」河村丘造、能「花月」豊鵜弥左衛門、で番組立も前年同様に舞囃子・狂言・能の各一番。十四日は観世会第四回、連吟「玉葛」飯田新子・芥川秀子、仕舞三番「敦盛」加藤丈太郎「三輪」加藤良久「鵜ノ段」岩田与司、素謡四番「通盛」林愿蔵「大原御幸」藤波順三郎「正尊」林喜右衛門「岩船」鬼頭五朗、素謡会で名古屋観世会々員総出演の外に藤井久雄の来演がある。十九日は京都で珍しい催会があり、その話題は当地にも聞こえて『狂言』紙が第二十号のコラム欄「狂言人語」で取り上げる。

◆能舞台のファッション・ショーに狂言登場　去る九月十九日新装豪華を誇る京都観世会館能舞台に、クリスチャン・ディオール社の秋の流行ファッション・ショーが開かれました。先ず大名と太郎冠者（茂山七五三・千之丞）が天狗の羽団扇で巴里の空へ飛行して、「太郎冠者、あれがパリーの灯ちや」「ムーランルージュでござります」、「きれいな女が来るワ来るワ」と云うセリフで、ファッション・モデルが橋がかりからしやなりしやなり登場と云う構成らしい。一応の効果はあったそうですが、ながら生きをすると奇想天外の変った事にお目に掛かれるもの、世阿弥も地下で嬉し泣き笑いをして、其の上クシャミをしていることでござろうで。（歌村彦四郎）

九月二十一日、大槻門の杉村竹翠師範十周年記念素謡会は素謡五・連吟二・独吟三・仕舞十九・舞囃子一番の賑やか。催主の杉村竹翠は素謡「竹生島」と舞囃子「山姥」のシテを勤め、師の大槻十三は仕舞「砧」と素謡「玄象」、大槻秀夫は仕舞「熊坂」、大槻文蔵は仕舞「嵐山」、そのほか東西から橋岡久太郎・観世元昭・梅若猶義・梅若盛義・田村勇・泉嘉夫らの来演があり、当地観世会々員が賛助出演する中で脇方高安滋郎の独吟「松山鏡」が珍しい。五日後、二百二十日を半月余りも過ぎた二十六日、後に狩野川台風と名付けられた台風二十二号が伊豆地方を襲う。偶々名古屋から帰京する梅若六郎師はこの台風に遭遇し、その時難渋したことの手記を十月五日付日本経済新聞のコラム「某月某日」欄に寄せ、『観世』誌が十二月号に転載したのが以下である。

――昨夜から一睡もしない。私がこの高千穂（西鹿児島始発の急行。朝十時五十分発で翌日の夕方五時五十三分に東京着。名古屋・東京間の所要は五時間四十三分）に名古屋から乗ったのは昨日（九月二十六日）の十二時十分、その日の六時に東京に着くはずなのに、台風22号のため蒲原駅で停まったまま夜を過した。明け方の三時ごろ（二十七日）やっと汽車が動く。三十五分で行くというのに三時間かかって沼津へ着いた。沼津で再び一時間の停車。――夜が明けたのでなんとなくほっとする。昨夜は悪夢のように恐しかった。風速三十メートルで汽車は止まる。そのうえ不気味にゆれる。海は近いし、高潮の時は注意してくれという車掌のアナウンスだ。ウイスキーで気をまぎらしたが、それがきれた時の心細さといったらなかった。三島へ着くとまた汽車は止まった。午前中は動かないとのことだ。これでは絶望的である。きょうは一時までに横浜紅葉坂の新音楽堂へ行かねばならぬ。そこで横浜港開港百年祭記念能に能を演ることになっている。

――ボーイにハイヤーを都合してもらい、九時頃乗ろうとすると外人の牧師さんと婦人と紳士三名と、日本人の年寄りが同乗させてほしいという。そこで五人で乗って箱根を通り、至るところ台風のツメあとを見ながら横浜へ着いた。十二時十分である。どうやら私だけは無事に目的地につくことができた。

括弧内は筆者。なお京浜地方も台風禍で道路が寸断、東京からの自動車が七時間もかかって装束が間に合わず、六郎師の「隅田川」は見所の了解のもと搔能になったという。

月が改まり十月十五日、第二期第二回青陽会は八月の夏季練成会の成果を踏まえ、素謡「竹生島」竹内六郎、「橋弁慶」加藤丈太郎、仕舞「井筒」柴田初太郎、独吟「天鼓」林愿蔵、「葛城」久田秀雄、「箕被」河村丘造、「殺生石・白頭」山本勝一。十九日、能楽人士もオーナー・ドライバーとなる時代に高速道路の先駆け、名神高速道路が起工式を挙げる。名古屋から西宮市まで一八六・一キロを二時間足らずで走行可能、たぶん能楽師の往来も便利にはなるだろうが安全運転を心掛けてもらいたい。総工費は七百九十三億円、四年後に完工の予定という。二十六日は秋の名匠鑑賞能第三十四回、観世と金春の二流の出演で能は三番、就中、「定家」は当地では昭和十年の日加寿能以来廿三年ぶりと番組に謳う。「俊寛」本田秀男、「狐塚」河村丘造、「定家・心味之拍子・埋留」梅若泰之、仕舞二番「花筐」梅若六郎、「玉之段」観世清次郎、「桜川」観世武雄、舞囃子「絃上」桜間龍馬、「熊坂・替ノ型」観世喜之。翌二十七日、愛知県は県表彰条例により毎年文化の日に各分野の県功労者を表彰しているが、本年度の個人二十一氏と二団体を発表した。文化部門では唯一人、名古屋能楽会顧問の田鍋惣助（惣太郎）氏七十三歳が選ばれる。表彰理由は「十六歳で初能を演じ、幸清次郎はじめ先代宝生九郎、観世清廉に師事し、幸清流小鼓方の長老として重きをなしている。名古屋能楽堂の再建につくし、能楽会の専務理事として発展の基礎をつくった」というもの。此の栄誉を狂言共同社同人の歌村彦四郎は「誠に当然の事ながら中部能楽界の誇であり、目出度き極みであります。ここに双手をあげて慶祝の意を表するとともに、お躾をおいとひ下さいまして今後共斯界のために、お力添え下さることをお願い致します」と賛辞を惜しまない。また同時に教育部門から能・狂言にも造詣の深い高木市之助氏七十歳が選ばれている。

――以下次号――

◆九月能繁期の舞台点描◆

「観世会」「名古屋能楽堂定例公演」「九皐会」「宝生会」「第十六回久田勘鷗の会」

竹尾邦太郎

『通盛』後場、赤地唐織を白地縫箔腰巻・白地舞衣に替えたツレ清司、死出装束めく白づくめの清婉は真に〈小宰相の局の幽霊、である。シテ通盛は四郎、面中将・黒垂・梨子打・襟白浅黄・四ツ花菱文厚板着付・白地破レ花菱七宝文大口・紺地破レ立湧ニ鳳凰文単法被・太刀の軍装。小宰相の局との別れの場に酌を取り盃をさすクセ中。〈虞氏が涙も、と膝行するとへいかで勝るべき、と小宰相の局の右肩に左手を掛けるところ、愛情表現が強く印象に残る。（1時間24分）

『萩大名』気慰みには懇意にしている下京辺の造り庭へ、の太郎冠者・千三郎の言に「何ジャ、心安いか」と大乗気のシテ大名・千作の喜色、勇み出掛けんとするところへ「先ず待たせられい」と機先を制する太郎冠者。ああ亦例の、と見所は先が分ってはいても期待し、その期待は裏切られない千作の融通無碍の境地。自身の失言に恬として恥じないばかりか庭主・千五郎の嗜みを知れば、「これもよい心掛けヂャ」とお追従する辺りは少々くどい程。（30分）

『葛城・大和舞』小書で雪山を出す。シテ九郎右衛門。前場、雪中難渋のワキ山伏・隆之亮に呼び掛け、雪道の運ビの慎重は一ノ松、〈笠は重し呉山の雪、とワキに相呼応する連吟に通い合う心しみじみ。面曲見・襟白浅黄・金露芝文白摺箔着付・黄土地鉄線文縫箔腰巻、白練萱折に非ず紺縷水衣のシテ。以前、故先代銕之丞の黒縷水衣を不審したが、降る雪を見上げれば「真黒になって降る」（末六駄）ことで納得、雪山との対照でそれが映えるのも分るが、紺はどうなのだろう。さて、暖を取らせ休息を勧めるクセ中、〈我が身の歎きをも取り添へて、と山伏へアシラフその然り気無さに心持ちをみせる機微が妙。

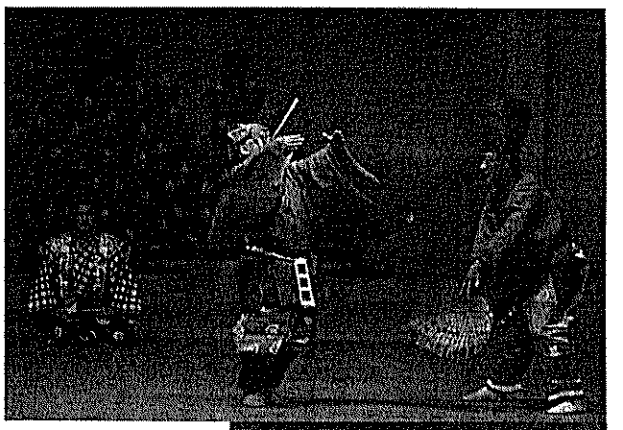
後場は、地の〈さも著き（神体の）、で漸く引廻シが取られると、面増・葛紅葉天冠・襟白二・銀露芝文白摺箔着付・緋大口・金鉄線文白地舞衣萱折の後シテが居る。小書で舞は白木綿付榊で神楽を舞う。正先で下居、榊を左右に祓い（写真）頭上に戴くと立ち、位進んで〈高天の原、の地になる。

［④面へつづく］

観世会「萩大名」茂山千作・茂山千三郎

「葛城・大和舞」片山九郎右衛門

（杉浦賀次氏撮影）



名古屋能楽堂定例公演
「蚊相撲」
左より佐藤融・井上祐一・大野弘之

「花筐・筐ノ伝」　武田邦弘　（杉浦賢次氏撮影）

〔③面よりつづく〕

〈恥かしや、と袖屏風に面を隠し、〈浅間にも、と逃げる様に一ノ松へ行くところ、地を残し〈明けぬ前に、と流シで蒼惶と幕に入るところ、女神の気持ちさこそ。（1時間21分・9月15日・観世会）

「蚊相撲」　折から秋場所酣の時宜を得た選曲。求人に応募する異形の者は蚊ノ精・祐一、「相撲を得て取ります」の売り込みは「弓、鞠、庖丁、碁、双六」と並べ立てないところが山脇派か。それだけに相撲一本に絞った自信は手強く、必勝の意気込みで大団扇煽り立てるシテ大名・弘之に二度吹き飛ばされても執拗に喰らいつき、大名の足を取り倒すなどは煩い蚊の本性。（32分）

「花筐・筐ノ伝」　当世ならブーケ（花束）にメッセージ（伝言）が添えられた宅配便が離別の知らせと分かり、現地妻が栄転した男を追う構図である。

シテ照日ノ前・邦弘、前は若女・襟白二・金菊菱文白摺箔着付・紅白段秋草文唐織、後は唐織を花車文赤地縫箔腰巻に替え、白綾壷折・女笠、文を懐中し、首に守袋を掛け、狂ヒ笹を持つ。〈野暮れ山暮れ、と舞台へ入り、〈玉穂の宮に、の返シ句に再び二ノ松へ往くところ、気は急くだろうが殆んど小走りの態は忙しない。小書で溢れんばかりに花を盛った花籠、後生大事と持つツレ侍女・一政がワキ官人・勝久に叩き落されたを聞く「あら勿体なや候」の心は、その花籠持ち舞うクルヒ。〈花を手向け、と正中、開いた扇の上、花籠置いて右膝つき〈南無や、と合掌、〈御面影は、と居立って右ウケ〈忘れ形見までもお懐かしや、のシオリに切々の思い。〈（安積の沼の）花がつみ、で花籠左手に立つと舞進むが哀感も一入。王の子方勘吉郎君、緋指貫・白単狩衣、歳を重ね以前の同曲より落着く。（1時間23分・9月19日・能楽堂定例公演）

「砧」　シテ芦屋某ノ妻・喜之、ワキ夫・勝久。砧打つ音が遠国に抑留された夫に感応したという唐の故事に倣い心慰める砧ノ段。砧を間にツレタ霧・直也と差向えば、そぞろに夫が思い出され、〈衣に落つる松の声、に耳を澄ませ、砧じっと見詰め、〈夜寒を風や（知らすらん）、と面クモラスところ憫々として胸を打つ。夫の帰国さらに延びたと知り、〈恨めしや、のクドキに〈偽りながら、のあと言葉を失うが、絶句で無く込み上げる悔しさだったろう。

後シテは面曲見を泥眼に、襟白二・撫子文白浅黄段摺箔着付は同断で、浅黄大口・白綾壷折・杖の姿。邪婬の業深き身は矢張り愚痴邪見のクドキ、〈打てや打てやと報いの砧、と容赦のない答を受けた意趣にワキを見据え、〈怨めし、と一足詰メ杖一ツ突き、〈因果の妄執、とシオルも哀れ。（1時間32分）

「千鳥」　溜る付けも払わず酒を求めに遣る主・又三郎の厚顔。嫌な使いも主の気持ちを心得るシテ太郎冠者・高義、「御神事に禁酒では済みますまい」と頬が緩むのも己が才覚見込まれた自負、よい味を出す。一方、度々の苦い目に今度こそ騙されまいと心構えする酒屋・小三郎だが、拒絶することの無いのが即ち太郎冠者に心を許している証。津島祭の一挿話、千鳥を伏せる所では、太郎冠者の挙動不審に気付く酒屋に、太郎冠者の〈ちりちりや、も酒屋の気配を知って〈ちー、のまま互いに顔見合わせニヤリとするのが、意味深で可笑しかった。（31分）

「融」　都に汐汲む老翁シテ宜夫を訝る旅僧ワキ雅介、其処が塩釜の浦を移し御殿を営んだ豪気な融大臣の旧跡と知り、興を掻き立てられ時を忘れ様々を訊ねる所、両者の問答・掛合テンポよく惹き付けるが、〈夕されば、の歌の中の五・七〈野辺の秋風〈身にしみて、を抜かしたのは瑕瑾。汐汲みは正中先で放り出す田子が綺麗に返り騒々しく無く上々。

後は紫指貫・青単狩衣の姿、初冠の垂纓の歪みが少々気になる。〈曲水の盃、と仕手柱に向かい膝をつき汲むところから早舞へ、気分の昂揚はノリ良く爽やかな舞ぶり。（1時間26分・9月20日・九皐会）

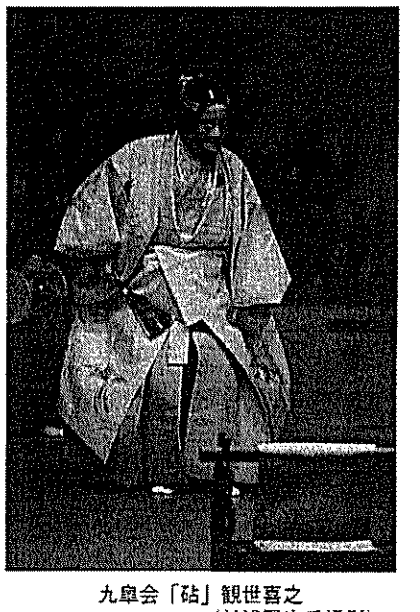
「八島」　源平の古戦場を訪ね宿を乞うワキ僧・雅介を一旦は断るも、都人と聞き宿貸すシテ漁翁・満次郎、求められ語る合戦譚の歯切れよく、鍔引は〈引く力に、と面の前で合わせる両の拳を左右にぐいと引きちぎる型に充分の強さをみせる。

後はクリからクセへ、どっしりと床几に掛かり夢物語ずるシテ義経は亡霊も威厳。弓流の場は、弓が敵に渡り小兵と言われれば〈無念の次第なるべし、とワキに同意求める心にアシラヒ、上ゲ端あと〈（弥猛心の）梓弓、ですっと立つと数拍子踏み指込開キ、〈後記にも（佳名を留むべき）、とさっと袖返スのも胸がすく。疾風迅雷の趣のカケリからキリは、月に白む〈剣の光、を沁々見詰める（写真）颯爽の風姿に満次郎の面目。（1時間33分）

「因幡堂」　妻・靖雄の里帰りをこれ幸いに離別する男シテ弘之、再婚相手をお薬師に祈願すれば御告げは西門に佇む女。いざ願い実現となると照れる男だが、好色そうな眼の色に嬉しそうな面も、固めの盃の女の飲みっぷりには少々苛立ち、被衣を剥ぎ取れば離縁したつもりの妻。「これは亦お薬師も聞かれぬことぢゃ」と歓き節が似合う弘之に若妻靖雄が旨く絡む。（20分）

「竹雪」　宝生と喜多の現行曲だが喜多の上演を知らない。宝生も昭和三十九年の熱田神宮能楽殿以来で三十九年ぶりの稀曲。

幼い嫡男月若を残し、妻と娘を離別した左衛門、参籠の留守を後妻に託し月若の面倒見を頼めば、殊更の頼みは月若に辛く当たるを告げ口された故と曲解の後妻、月若を虐げる。居た堪れず実母と姉の許へ走る月若だが、父の沙汰と言伝の使用人に連れ戻されるや、肌着一枚にされて竹に積る雪を払わされる。酷寒、雪に埋れ凍死の月若、使用人の知らせで駆けつけた母と姉が悲しみの裡に雪を掻けば冷たい骸。帰宅し事を知った左衛門、己れを悔い死にたいと痛歎する時、天の声は竹林の七賢の力で月若を蘇生させると言う。深刻な内容の世話物だけに遠い曲となっているが、実の親が子を殺し、子が親を殺すニュースが紙上を賑わす当世、さほど抵抗はなかろうが天の声は届かないだろう。



九皐会「砧」観世喜之
（杉浦賢次氏撮影）

さて舞台、後妻アイ友彦は使用人アイ融を伴い何事もなく出、名宜笛の出で左衛門ワキ勝久は名宜から参籠のこと月若のことを言い、後妻との問答で後の重要な伏線となる竹の大事は雪を払うこと、篤と申し付ける。「目出度う御帰りを待ち申し候」と常座に見送る後妻に、言うだけを言い中入の左衛門に役の冷たさをみせ勝久好演。「さてもさても腹の立つ事かな」と歯軋りせんばかりに、事を構えて陰険な後妻が月若呼び出す説教の場は、如何にも憎気な友彦が出色なら、身の悲運を嘲ち実母シテ萌の許へ走る月若・子方辰巳和磨君も達者。〈継母御の、と三ノ松の母の懐に飛び込む心の月若に、左手を月若の右肩に置き、寵れ果てた我が子の〈面影変る、と右手でシオル母、萌しみじみ母性愛をみせ涙を誘う。一方では「あら不思議や月若が見へぬ」と癇癖の後妻、先刻承知とばかりに使用人を実母の処へ遣る。その間に竹の柵で囲った竹雪の作物を正先へ出すが、柵がプラスチック製では趣がない。

月若が連れ戻されてからは仕置きの残酷。扇を引ったくり、「肌の物一つにて」と壷折の唐織を剥ぎ、竹の雪払うよう命じて継母は幕へ引っ込んでしまう。寒さに〈払ひかね帰らんとすれば、と仕手柱へ、門を〈聞けよ、と仕手柱を叩き、駄目と分かり〈月若助けよと合掌から彷徨う様に舞台大きく回り、大小前から作物前へ足が縺れる心に早足で出て横臥、雪に埋もれる態に白被衣を掛けられるが、和磨君他役を食う旨さ。〈母は泣く泣く雪を掻けば（写真）、と骸を掘り返す切なさは、現われる骸にエブリ（雪掻き）を捨て、笠を脱ぎ、傍へ寄り、膝をつき、双シオリの母に左手だけシオル姉。姉は〈継母御をば恨むまじ唯父御こそ恨めしう候へ、の心で、憚らずに泣ける心境ではなかったろう。竹を愛好する左衛門に竹林の七賢が感応する結末は少々唐突だが各役の力演で好舞台。地は良雄・正宜ら、後見は石黒孝・耕司、囃子方に六郎兵衛・孝一郎・真之介。（1時間13分・9月21日・宝生会）

「砧」　シテ勘鶴、前は面深井・襟白浅黄・淡浅黄摺箔着付・秋草文黄萌黄段唐織。砧ノ段は〈怨みの砧、と作物に少々遠く下居。〈（夜寒を）風や、と松籟を聞く態からフッと面を上げ〈知らすらん、と立つところ、冷たい秋風に心の寂しさは一入の秋思。虫の音に交りへ落つる（露涙）、と再び砧を間にツレタ霧・拓司と打つ砧の、〈ほろほろはらはら、の地（貫弘・宣長ら）が聞かせる。

後シテは面泥眼・稲穂ニ鳴子ト雀文鈍色縫箔腰巻・白綾（鶉菱地紋）壷折・杖。クドキに、〈打てや打てやと報ひの砧、と常座から正先の作物を見込むや〈怨めしかりける、と杖を前へグッと二足出るところ迷妄の執念の凄まじさを見る思い。情炎を燃やす女の性（さが）勘鶴入念にみせる。（1時間42分）

「佐渡狐」　佐渡に狐の有る無し云々は小事、事は名誉に関わる大事とばかりに大奮闘の小三郎の元気に対抗する越後ノ百姓・高義の向こう意気。奏者・又三郎が無知な佐渡ノ百姓を誘導してゆく辺りは流石に老練。（26分）

「菊慈童」　子方を精力的にこなして大活躍の勘吉郎君、「合浦」に次ぐシテ。直面・黒頭・襟赤・白摺箔着付・緋大口・紅葉ニ菊文赤地唐織壷折・菊葉団扇を持つ。「楽」の舞も見事なら謡も元気一杯、場数を踏んでいるだけあり舞台度胸満点だがその余裕が仇か、視線が落ち着かないのが残念である。なお菊薬屋と一畳台の菊籠の菊が造花で、しかも萎れた風情だったのは折角の菊の季節、味気なかった。（38分・9月23日・第16回久田勘鶴の会）

㊤　宝生会「八島」辰巳満次郎
㊦　宝生会「竹雪」左から佐野萌、和久荘太郎、被衣の下に子方・辰巳和磨　（宝生会提供）

25周年迎えた栄謡曲クラブ

12月14日記念謡会

謡曲愛好のつどいとして月例会を催している「栄謡曲クラブ」（三口謙介氏主宰）は、昭和54年に発会して以来、熱心な愛好者によって会が続けられているが、きたる12月14日(日)、昭和区滝川町の楽調庵舞台で、「発会25周年記念謡会」が催される。

世話人の三口謙介氏は「多くの皆様のご厚情と熱心さに励まされて今日まで休みなく謡いつなげてきて25年を迎えるに至りました。誰にでも謡に参加できる親しみやすい曲を選んで、謡歴の浅い人には自信を、謡歴の長い人にはもう一工夫を、〝気を抜いた謡はいけません〟というキャッチフレーズで回を追うごとに充実して来ています。」と感謝のことばを述べている。

当日は「老松」「野宮」「隅田川」「俊寛」ほか。会費千円、昼食代は別途。午前10時開始、午後3時半頃終了。謡会終了後内海で記念の祝宴が催される。

問い合わせ＝名古屋市千種区星ケ丘2―50、打越荘9―307三口謙介方。電話052・781・8856。

久田政子さん

久田勘鶴氏母堂

観世流シテ方久田勘鶴氏母堂久田政子さんは11月6日逝去した。享年88、通夜は10日午後7時から、告別式は11日午後1時から名古屋市千種区の平安会館今池斎場で執り行われた。喪主は久田勘鶴氏。

霊前には観世宗家はじめ多数の供花が飾られ、能楽協会名古屋支部福井啓次郎支部長、大鼓方・筧鉱一氏、友人稲垣つね子さんらが別れのことばをのべ、焼香の列がつづき故人の冥福を祈った。

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7　9　8　4
ＦＡＸ（052）733－2　8　3　7
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　　100円

ＮＨＫ放送予定（平成15年12月～16年1月）

◈ＮＨＫ－ＦＭ能楽鑑賞（毎週日曜日午前7時15分～8時）

12月28日	「木六駄」（大蔵流）	大蔵吉次郎ほか
1月4日	「東国下」（観世流）	橋岡久馬ほか
1月11日	「玉鬘」（金剛流）	豊嶋訓三ほか
1月18日	「淡路」「胡蝶」（観世流）	藤井徳三ほか
1月25日	「殺生石」（宝生流）	高橋勇ほか

◈ＮＨＫ教育テレビ　「能・狂言」番組
1月25日(日)　15：00
金剛流　「鶴亀」　シテ廣田陸一
「石橋」　シテ金剛永謹ほか

◈ＦＭ年始特集　新春謡曲狂言（11：00～11：50）

1月1日	観世流番囃子「高砂」	シテ観世銕之丞
1月2日	和泉流狂言「八句連歌」	シテ野村萬ほか
1月3日	喜多流「鉢木」	シテ喜多六平太ほか

◈ＴＶ年始特集　教育ＴＶ「新春能狂言」
（7：00～8：00）

1月1日	能「羽衣」（宝生流）	シテ三川泉
1月2日	狂言「伊文字」（大蔵流）	シテ茂山千之丞ほか
	「大般若」（和泉流）	シテ井上祐一ほか
1月3日	能「田村・白式」（金春流）	シテ桜間道雄ほか

演能カレンダー

◈名古屋能楽堂◈
（TEL 052－231－0088）

［1月］

3日(土)	名古屋能楽堂正月特別講演	（有料）	（番組①面）
4日(日)	鳳の会第35回公演	（有料）	（番組①面）
11日(日)	名匠能	（有料）	
12日(月・祝)	名古屋清韻会	（無料）	（番組①面）
17日(土)	学生能・狂言の会	（無料）	
24日(土)	藤田・龍吟の会	（有料）	（番組②面）
25日(日)	名古屋宝生会定式能	（有料）	（番組②面）
31日(土)	万作を観る会	（有料）	

◈豊田市能楽堂◈
（TEL 0565－35－8200）

［1月］
10日～12日　第12回恵美寿会　（無料）（番組②面）

観世寿夫記念 法政大学能楽賞（第25回）
茂山忠三郎 氏　野村　四郎 氏　受賞

法政大学（清成忠男総長）は、一九七九年（昭和五十四年）に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに二十四回の贈呈を重ねているが、本年も各方面の識者の推薦による候補者について、選考委員（白井五郎［法政大学常務理事］・金春惣右衛門・水落潔・西哲生・表章・西野春雄・山中玲子）が慎重に審議した結果に基づき、第二十五回の受賞者として、狂言方大蔵流・茂山忠三郎氏、シテ方観世流野村四郎氏を決定した。

両氏の受賞理由は次のとおり。

［受賞者］
茂山忠三郎氏

［贈呈理由］　古格を守った骨太の演技を飄々とした味わいで包んだ氏独特の芸風は、近年ますます円熟の境地に向かい、数々の名舞台を現出しているが、特に本年の（木六駄）は、おおらかで温かな笑いを生み出し、多くの観客を魅了した。各地での公演により狂言の普及に尽くしてきた功績もきわめて大きい。

［受賞者］
野村　四郎氏

［贈呈理由］　揺るがぬ基礎技術に立脚し、作品の内容や演出の深い理解に支えられた氏の能は、近年ますます華麗さを増し、優れた舞台成果を現出しているが、特に本年の（三輪誓納）（采女）で見せた卓越した演技は、観る者に深い感銘を与えた。芸に対する真摯な取り組みや後進の指導における尽力も高く評価される。

褒章と叙勲

紫綬褒章
ワキ方福王流
福王茂十郎氏（六〇）
旭日小綬章
狂言方大蔵流
茂山忠三郎氏（七五）
旭日双光章
笛方森田流
野口傳之輔氏（七〇）

催花賞
横浜能楽堂（代表　山崎有一郎氏）

法政大学は、服部康治氏からの観世新九郎家文庫受贈を記念して一九八八年（昭和六十三年）四月に「服部記念法政大学能楽振興基金」を設定し、同基金に基づく事業の一つとして、能楽三役の功労者および能楽の普及・発展に貢献の大きい個人・団体を顕彰する「催花賞」を設定している。この名前は観世新九郎家伝来の「催花」の額にもとづいて名づけられた。

第十五回の催花賞の決定に当たって、各方面の識者から推薦された候補者について、法政大学研究所と別項記載の能楽賞選考委員とが慎重に選考した結果横浜能楽堂（代表・山崎有一郎氏）に決定した。

［受賞者］
横浜能楽堂
（代表　山崎有一郎氏）

［贈呈理由］　一九九六年（平成八年）の開館以来、次々と斬新な企画を打ち出し、常に魅力ある公演や講座を主催して、地域の子供たちや市民を能・狂言の世界にいざない、能楽の普及・啓蒙と活性化に力を尽くしてきた功績は、まことに多大である。その運営と活動は、新時代における新しい能楽堂の在り方を示している。

学能楽賞と催花賞の贈呈式は、明年一月十五日午後六時から赤坂プリンスホテルで行われる。

名古屋能楽堂演能案内

名古屋能楽堂正月特別公演
平成十六年一月三日（土）午後二時始
名古屋能楽堂

（観世流）
能　翁
泉　嘉夫　野口隆行　奥津健太郎　笠　鉱一　柳原冨司忠　大野　誠
泉　雅一郎　福井良治
後見　上野　嘉宏　武田　邦弘　松田　高義　野村小三郎
狂言後見　地謡　後藤嘉津幸　外山　圭一　本田　勲　黒田　博　須部　甫　加賀　敏彦　祖父江修一　梅田　邦久　高橋　暸一

（和泉流）
狂言　三人長者
野村又三郎　野村小三郎　松田　高義　河村眞之介　助川　治　柳原冨司忠　竹市　学　後見　伴野　俊彦

（観世流）
能　養老
樹夫　松山　幸親　天女　祖父江修一　樹鶏　久田　勘鶏　山神
水波之伝　杉江　元　高安　勝久　橋本　宰
後見　上野　嘉宏　梅田　邦久
地謡　高島　良一　八神　孝充　本田　勲　黒田　博　須部　甫　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市　学　清沢　一　武田　邦弘　高橋　暸一
（午後五時頃終了予定）

主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・(財)名古屋城振興協会
(財)名古屋市文化振興事業団
能楽協会名古屋支部
協賛
入場料　前売一般　四五〇〇円（当日五〇〇〇円）
学生前売　二五〇〇円（当日三〇〇〇円）
取り扱い所＝名古屋能楽堂（052・231・0088）
チケットぴあ（052・320・9990）
市内プレイガイド

鳳の会　第35回　公演
一月四日（日）午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

解説　名古屋女子大学教授　林　和利

素囃子　楽　笛　大野　誠　小鼓　後藤嘉津幸　大鼓　河村眞之介　太鼓　鬼頭　好信

狂言　三人夫（さんにんぶ）　美濃のお百姓　井上　靖浩　淡路のお百姓　佐藤　融　尾張のお百姓　鹿島　俊裕　奏者　井上　祐一

狂言　痩松（やせまつ）　山賊　大野　弘之　女　今枝　靖雄

狂言　胼（あかがり）　太郎冠者　井上　祐一　主人　鹿島　俊裕

狂言　米市（よねいち）　太郎　佐藤　友彦　何某　井上　祐一　立衆　佐藤　融　井上　靖浩　今枝　靖雄

名古屋清韻会
一月十二日（祝）午前九時三十分始
名古屋能楽堂

素謡　玉鬘　木下　美容　佐藤　加代子　冨田　邵子　久保田和代　浅井　庸子　安藤　敏子　斎藤真佐子　岩田　正子　中村喜久子　御牧　紀代　諸方　陽子　野村　和子
地謡

山姥　樽本　圭子　田中　文子　本野　照子　田中　泰子　青山　信江　森　清子　冨田　初子　中村　玲子　平岩　昌子　伊藤るり子　佐季　富美　山田　富子
地謡

弱法師　佐藤　尚雄　中原　恭夫
地謡　平岩　明　林本　政夫

舞囃子　松風（戯之舞）　西岡　隆子　天鼓　山本　淳子
紅葉狩（急之舞）　川崎あきゑ　安宅　谷口　寛子
難波（五段）　加藤美智子

仕舞　雲雀山　山本美代子　網之段　宮澤　祐子
玉之段　春日井夕紀子　龍田　河野カズエ
鉄輪　長瀬　砂絵　芭蕉　名倉　菊子

能　誓願寺　鬼頭貴代子　泛佐之走　室生　欣哉　大日向　寛　御厨　誠吾　野村又三郎　間
河村総一郎　後藤孝一郎　観世　元伯　藤田六郎兵衛

仕舞　嵐山　加藤新一郎　巻絹　北原良一郎
独吟　勧進帳　富士道周明

名匠能
一月十一日（日）午後二時始
名古屋能楽堂

狂言　伊文字　山本　則直
能　三輪　梅若　六郎

［有料］
主催　中日新聞社

名古屋能楽堂演能案内

☆演者と語ろう〝Q&A〟
終演後会場で、井上祐一、佐藤友彦を囲んでお客様の狂言に関する疑問、質問に演者が直接お答えします。

入場料（全席指定）
A席　五、〇〇〇円
B席　三、五〇〇円
学生　二、〇〇〇円
会員A席　四、〇〇〇円
会員B席　二、五〇〇円

主催　鳳の会
後援　名古屋市

お問い合わせ
井上祐一方　052・834・6112（TEL&FAX）
佐藤友彦方　052・911・8784（TEL&FAX）
名古屋女子大学林研究室　052・801・4035（直通）
052・805・3875（FAX）

チケット取扱い＝チケットぴあ　052・320・9999

今枝　郁雄　林　泰礼　鷲見　政行

（②面へつづく）

観世寿夫記念 法政大学能楽賞 受賞者の略歴

茂山忠三郎氏

狂言方大蔵流。日本能楽会会員。1928（昭和3）年4月3日、三世茂山忠三郎（良一）の次男として京都に生まれる。前名倖一。茂山忠三郎家は、江戸時代から伝わる京都の狂言の名家。父に師事し、32年（業平餅）の子方で初舞台。48年に（三番三）と（釣狐）、49年に（那須語）、51年に（花子）を披く。同年立命館大学専門学校文学部卒業。58年先代が没したため、65年に忠三郎を襲名し、茂山忠三郎家の四世当主となる。

66年（狸腹鼓）で文部省芸術祭奨励賞を受賞。72年重要無形文化財総合指定。74年、大蔵会別会の（三井寺）間狂言で文化庁芸術祭優秀賞受賞。78年大蔵会銀座狂言会での（空腕）で同じく文化庁芸術祭優秀賞受賞。同年「茂山忠三郎・狂言の会」を発足、毎年、東京・京都・大阪・福岡で公演を行い、狂言の普及振興にも努めてきた。88年、同会での（木六駄）で文化庁芸術祭優秀賞受賞。92年秋、紫綬褒章受章。2001年、忠三郎狂言会における（伯母ヶ酒）太郎冠者の演技で芸術祭大賞受賞。本年秋の叙勲では旭日小綬章を受章。

84年金剛流バチカン公演に参加し法王の前で狂言を演じた他、海外公演でも活躍。本年は舞台生活七十周年にあたり、記念公演を催した。後継者に長男良暢氏。

野村　四郎氏

シテ方観世流。日本能楽会会員。1936（昭和11）年11月27日、和泉流狂言方六世野村万蔵の四男として東京に生まれる。52年、観世流シテ方を志し、二十五世観世左近に内弟子として入門。初シテは55年の（俊成忠度）。62年独立、以後（猩々乱・石橋・道成寺・恋重荷・砧・八島大事・鷺・卒都婆小町・鸚鵡小町）等を次々に披演。78年に重要無形文化財総合指定。87年、野村四郎の会（求塚）で文化庁芸術祭優秀賞受賞。94年芸術選奨文部大臣賞受賞。98年秋、紫綬褒章を受章。

ヨーロッパ、アメリカ、インド等世界各地での公演に参加する他、ワシントン大学・ハワイ大学等で能楽の指導にあたるなど、海外への能楽の普及にも貢献してきた。近年は、高浜虚子作の（実朝）、夏目漱石「水底の感」等に作曲・作舞・上演や、邦楽アンサンブル「熊野の物語」「相聞」「竹取物語」の上演等、新しい試みにも取り組んでいる。一昨年（檜垣）、本年は（三輪）奮納）を初演。来年4月には（姨捨）披曲の予定。流儀を超え、能楽界の重鎮として活躍中である。現在、観世会常務理事。鎮仙会理事。日本能楽会常務理事。東京芸術大学音楽学部邦楽科教授。後継者に長男の昌司氏。

◆催花賞

横浜能楽堂

財団法人横浜市芸術文化振興財団が運営。戦後の能楽復興の拠点の一つであった旧染井能舞台を現代に甦らせ、1998（平成8）年6月に開館した。山崎有一郎館長を中心に職員一同力を合わせ、演者たちの積極的な協力のもと、次々と新新な企画を打ち出し、能楽の普及と啓蒙に尽力している。

感性豊かな子供たちを対象に、開館以来毎年開いている「こども狂言ワークショップ」（入門編・卒業編を終えた子どもたちが「横浜こども狂言会」に出演）、子育て中の母親たちのための「ブランチ能」（1999～）、さまざまな障害を持つ人たちにも健常者と一緒に気軽に能・狂言を楽しんでもらおうという「パリアフリー能」（2000～）などの普及事業のほか、学術的な復元能「秀吉が見た『卒都婆小町』」の実験（2002）、港横浜にふさわしく海外に目をむけた「日韓古典芸能祭」の開催（2000～2002）などでも成果を上げるなど、その活動は多岐にわたる。

上記以外の主な自主事業に、ワークショップ「みんなで謡う『高砂』」（1997～2000）、企画公演「20世紀の至芸」（2000）、「狂言再発見」（2002）、「甦る銀幕の能」（2003）、「90年目の新作能」（同）、特別普及公演「能楽堂へ行こう！」（2003）、「夏休み夢舞台」（同）、開館五周年特別公演「この面で舞いたい」（2001）、講座「能の匠たち」（1997）、「映像で見る20世紀の名人」（2000）、「能楽史事件簿」（同）などがある。

金剛宗家 能の世界展

1月2日からJR伊勢丹で

都京 京都新聞社、美術館「えき」KYOTOの主催で、「幽玄の美、金剛宗家　能の世界展」が新春1月2日㈮から1月25日㈰まで、京都駅ビル内・JR伊勢丹7階の美術館「えき」KYOTOで開催される。

「能の世界展」のガイド

金剛家は南北朝時代から、観世・宝生・金春とともに、大和猿楽四座の一つとして活躍していた金剛座の流れをくむ能楽金剛流の宗家。

金剛流は、その特徴とする華やかな舞から「舞金剛」「収蔵されている歴代の質の高い能面から「面金剛」と称されているように、独自の芸風を育て継承していくなかで、能楽の発展に大きな役割を果たしてきた。

今回の展覧会は、能楽の名門である金剛家秘蔵の貴重な能面、舞金剛の美しさをになう能装束をはじめ能扇など数々の名品を公開。演劇の根源ともいわれる能楽の歴史と金剛流の「幽玄の美」を紹介するものである。（パンフレットより）

後援：京都府・NHK京都放送局、協力：金剛宗家、財団法人金剛能楽堂財団。

開館時間：午前10時～午後7時30分（1月2日㈮午後6時30分、1月25日㈰午後5時閉館）

入場料（税込）一般七百円、高・大学生五百円、小・中学生三百円。

問い合わせは、ジェイアール京都伊勢丹、電話075（352）1111（大代表）

入場券取り扱いは、JR西日本各駅みどりの窓口、京都新聞文化センター、チケットぴあなど。

能「猩々乱」

五色の会、能を観る

岡崎 花朋会敷舞台、朋の会（補佐宇高通成師）は、十二月二十三日（火・祝）花朋会敷舞台（岡崎市大西町奥長入47－4）で「五色の会・第5回能を観る」を公演する。後援岡崎市教育委員会。入場料当日五千五百円（前売五千円）、午後二時始曲。

演能は次のとおり。

仕舞「遊行柳」宇高通成

狂言「鵜牛」山伏・野村小三郎、主人松田高義、太郎冠者・野村又三郎

能「猩々乱」シテ羽田野良子、ワキ高安勝久、笛・左鴻泰弘、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村其之介、笛・前川光長

後見・廣田幸稔、小鴨梨辺華、伊藤雅子、地謡・宇高通成、宇高竜成、竹市幸司、小野芳朗、百々康治、天野幸輔

狂言装束展

鳳の会公演で展示

1月4日名古屋能楽堂での鳳の会公演では、狂言共同社所蔵の装束のなかから狂言装束数点が展示される。

（①面より名古屋清韻会番組つづき）

舞囃子　砧　御牧紀代　江口古井佐李
通小町　篠田幸子

素謡　鸚鵡小町　渡辺節子　室生閑

舞囃子　頼政　桑原信夫　忠度　佐久間美親
歌占　福間克彦　融　浅井一芳
熊坂　加藤千一

仕舞　祝言　老松　大槻文蔵

【御来場歓迎】　主催　名古屋清韻会（終了予定6時）

第48回　学生能・狂言の会

一月十七日（土）午前十一時始
名古屋能楽堂

能「西王母」、狂言「棒縛」ほか

【御来場歓迎】　主催　名古屋学生能楽連盟

藤田・龍吟の会

一月二十四日（土）午後二時始
名古屋能楽堂

能組

舞囃子　海士　山本博通　河村眞之介　加藤洋輝　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛　分林道治

復曲能　第当箱　観世銕之丞　兄幕所　大槻文蔵
当願暮頭（とうがんぼとう）　宝生閑　宝生欣哉　殿田謙吉　亀井広忠　助川治　大倉源次郎　藤田六郎兵衛

間　井上靖浩　佐藤融　地謡　上野雄三　上田拓司　味方玄

後見　西村高夫　赤松禎英　武富康之　上野雄三　寺沢幸祐　山田拓司　分林道治　片山清司　味方玄　山本博通

【入場料】（全席指定・税込み）
A席　一三、〇〇〇円
B席　一一、〇〇〇円
学生席（直接藤田六郎兵衛事務所へお申込み下さい）

主催　藤田・龍吟の会　中部日本放送　中日新聞社

名古屋宝生会定式能（第48期）（第1回）

一月二十五日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

能　竹生島　内藤飛龍　玄斐正宜　橋本雅介　宰　飯冨昌元　正樹　佐藤融　河村眞之介　福井啓次郎　加藤洋輝　大野誠

狂言　張蛸　井上靖浩　大野弘之　佐藤友彦

仕舞　春日龍神　和久荘太郎

仕舞　忠度　辰巳満次郎

能　熊野　竹内澄子　玉井博祐　杉江元　橋本宰　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世

【有料】　当日券一万円（2枚綴）

主催　名古屋宝生会
事務所　名古屋市天白区島田二－三〇－島田橋住宅二－一三一〇　佐藤耕司方
電話・FAX　〇五二・八〇三・七三七二

豊田市能楽堂演能案内

第十二回　恵美寿会

第一日　一月十日（土）
第二日　一月十一日（日）
第三日　一月十二日（祝）

一日目（一月十日（土）午前十時始メ）

仕舞　右近　玄斐正宜　松原彰雄　福里健

素謡　翁　松原彰雄　福里健

舞囃子　養老　浦野正二　籠太鼓　竹内淳一

能　砧　玄斐愛　金児昌子　飯冨雅介　河村総一郎　柳原冨司忠　麦谷清一郎　大野誠　井上祐一

能　羽衣　森孝子　橋本宰　飯島大輔　福井啓次郎　麦谷暁夫　鹿取希世

舞囃子　春日龍神　山田あき子

能　野宮　鈴木マチコ　飯冨雅介　筧鉱一　福井啓次郎　大野誠　井上靖浩

舞囃子　蟬丸　横井とめ子

能　絃上　天野元成　中村泰美　竹内良伯　犬塚恵　杉江元　椙元正樹　飯島大輔　後藤孝一郎　麦谷暁夫　竹市学　佐藤融

二日目（一月十一日（日）午前十時始メ）

素謡　翁　北原寿久　荻原忠太

仕舞　難波　竹内喜代香

素謡　俊成忠度　沢村雅利　亀井茂一　小林光由　前田育宏

藤栄　江口しげこ　小田由紀子　神村美智子　塚本照子　長尾幸子　青山博子　野村澄子　前畑正子　岡野寺子　山本洋子　鈴木久恵　竹内早川恵子　良伯澄子　淳一　中島暉夫　平田正文　竹内平岡一子　小野郁子

能　藤　佐藤志津子　杉江元　飯島大輔　福井啓次郎　麦谷暁夫　竹市学

素謡　半蔀　八木富子　瀬辺てる子

仕舞　敦盛　三橋茂三　車僧　天野元成

（③面へつづく）

戦後名古屋能楽史 ㊿

〔第十二章〕

昭和三十三年（一九五八）

竹尾　邦太郎

（承前）

十一月一日、東海道本線・東京―神戸間を七時間二十分で結ぶ国鉄自慢の電車特急こだま号が運転を開始、神戸駅を午前六時三十分に発車した上り第一こだまは定刻通り午前九時十八分（所要二時間四十八分）に名古屋駅に到着、東西からの能楽師の来演が至極便利になる。二日、前年三月に当地女流能楽師の汎流儀の結社である謳調会による観世・宝生・金剛の三流婦人能楽鑑賞会が賑々しく開催され、好評を博したことは記憶に新しいが、この度は、藤門会を主宰の加藤良久を始めとする観世流の女流師範が相寄り、それぞれの門下生が一堂に会する初の女性師範連合会を催す。これに先立つ十月三十日付中部日本新聞は「市民版」欄で次のように紹介する。

「最近の能会は観衆の半ばを女性がしめるほど能に親しむ女性が多くなってきた。これらの人々を指導してゆく中京の女子師範、観世流加藤良久、芥川秀子、飯田新子の三氏に名誉師範の中村つゆさんが参加して、こんど初めて連合の社中会を中部日本新聞後援で十一月二日午前九時、熱田神宮能楽殿で催すが、連合会について三人は次のように語っていた。

この会を通して女子の領分をひろげていきたい。門下の交流をはかることはお互の勉強になることで、芸の上では男女の区別はない。」当日の番組は素謡六・連吟六・独吟六・仕舞九・舞囃子十九の計四十六番、番組冒頭に主催者による次の挨拶がある。「秋冷の候御清栄をお喜び申し上げます。さて、今回当地では始めての婦人師範合同の大会を催し、各社中一堂に会して素謡、独吟、仕舞、舞囃子をいたすことになりました。なにとぞ皆様お誘い合せの上、にぎやかに御協賛下さいまして、錦上、花をお添え下さいますよう御願いかたがた御挨拶申し上げます」重陽の節句、九日は観世会第五回、素謡「小鍛冶」真柄米次、仕舞二番「羅波」高橋静夫、「野宮」柴田初太郎、「小督」山本博之、「松風・戯ノ舞」梅若万三郎、「鎌腹」井上松次郎、「鉄輪」橋岡久太郎、シテの外にワキ福王茂十郎、大鼓瀬尾乃と東西からの来演がある。

十二日、久しく御無沙汰であった能楽界では人気のレクリエーション野球が、好敵手の西川鯉三郎チームを迎えて神宮球場で行われ、能楽チームは五対四で惜敗。『狂言』紙二十一号は「その折、出場の若先生の打球振りを見て、お弟子の一人曰く、お稽古の時あれほど腰のことを喧しく言われる先生のあのバットを振る腰は全くなっていない、と、まことに辛辣な一言。何をやるにも腰にかわりはない、若先生以て如何となす、咄（とつ・叱る声）」と、揶揄、更に同紙は主将・観世流太鼓方鬼頭喜太郎の「能楽チームの試合報告」を掲載、熱戦の後を追懐する。

十一月十二日午後一時より神宮球場に於て舞踊西川チームと対戦す。一塁側に西川チームが陣取り、先ず優勝杯をわがチーム田鍋惣一郎監督より返還す。愈々田鍋惣太郎氏の始球式により水谷球審の右手高らかに上り試合開始、時正に一時五十一分、試合は最初よりエキサイトし、一回敵に二点の先行を許すもこれに屈せず、吾軍は二回大量四点を上げ逆転す。その後敵もさるものヂリヂリとつめより、六回に同点とされ、九回に及んで遂に一点を許し四対五にて惜敗、ここに涙を酒と替えて呑み次回の対戦に奮起せんとす。

なお、中部能楽師会、協会支部を始め各会各位より御援助を賜り、更に当日は数十名に及ぶ応援の方々にも此の紙上を借りて厚く御礼を申し上げます。

十六日は当地で隆勢を誇る小鼓方幸清流が宗家幸円次郎と名古屋幸清会・幸清流職分一同とで共催する名古屋幸清会。舞囃子「菊慈童」、「三井寺・無俳ノ伝」観世寿夫、舞囃子「野守」辰巳孝、一調「花筐」青木恒治、林愿蔵、「茸」河村丘造、「俊寛」宝生英雄、一調「定家」田鍋惣太郎・本田秀男、仕舞「阿古木」山田仁三郎、「紅葉狩・鬼揃」観世武雄。宗家は番組に「此度御当地に於て名古屋幸清会を開催致す事となりました。会の主旨と致しましては福井、後藤両名に一層勉強の機会と致し、流儀職分方の応援を願ひ恒例の催しと致したい心組で御座居ます。何卒流儀御声援の思召しを以て御知友お誘合せ御来会賜ります様　御願ひ申上げます」と、述べるが、恒例の催し、と言い条、その後に回を重ねたことを知らない。なお、田鍋惣太郎は自著『小鼓芸話』の中、「愉快に勤めた思い出の能」で次の様に語っている。

十一月十六日には、同じく「定家」（前月、名匠鑑賞能で梅若六郎と勤めた能）「定家・心味之拍子・埋留」の一調を本田秀男氏と願いましたが、この時は本田氏が再三宅へみえられましてお申し合せを願いました。本田氏は初め大鼓で立とうとしてみえた方ですから、充分得心の行くまでご研究になったと思われます。これだけ努力されたのですから、当日はもちろん立派で面白くお相手させていただきました。サシのトメ一句謡ってクセに入り、クセトメまでですが、静かなるもので別にそんなに変った手があるわけでなく、品位を出すのに苦心を要するものであります。本田氏は名古屋にとって大へん御恩をうけた方で、特に装束のつけ方は、柴田初太郎氏でも皆、この本田先生に教わったものなのです。

右に関連し、柴田初太郎も、主宰する掬水会の門下生が師の米寿を記念して纏めた冊子『烏童閑談』の中で、「私は若い頃、金春流の本田秀男師とは非常に仲がよく、能の着付、金春の秘伝などについて教えていただきました」と述べている。

十一月二十日、オリエンタル中村百貨店創業八十八年の記念行事に先代梅若実（初世）五十周年祭記念能が文化講堂特設舞台で行われる。番組は三宅襄の講演「先代梅若実翁について」のあと、仕舞三番「敦盛」山崎英太郎、「天鼓」平井宗一郎「殺」柴田初太郎、独吟「放下僧」林愿蔵、「蝉丸・替装束」梅若実（二世）梅若六郎、「素袍落」茂山千五郎、仕舞三番「葵上」山本勝一、「雲林院」梅若泰之、「実盛」梅若武久、「舟弁慶・重キ前後替」梅若六郎、と梅若一門総出演の豪華。三役も当地以外からワキ松本謙三、囃子に田中一次・亀井俊雄・金春惣右衛門、狂言方は茂山七五三・千之丞の来演がある。「蝉丸」のシテ逆髪を勤めた二世実はこのとき八十一歳、演能翌日の中部日本新聞「市民版」欄は「衰えみせぬ実の至芸」と、二段抜き見出しで「実が緋の長袴で一歩一歩と心にしみるように舞ったが衰えをみせぬ至芸に見所は酔えるようであった」と写真入で報じる。また、小鼓を勤めた田鍋惣太郎は『小鼓芸話』の中で、「十一月二十日には、先代梅若実五十年祭で、故実氏の逆髪、現六郎氏の蝉丸をお相手致しましたが、翌年夏に実氏は亡くなりましたから、名古屋での氏の能は、おそらくこれが終だったようです。文化講堂で一門の大催しでありましただけに立派なお能でありました」と回顧する。ところで余談だが、皇室を素材とする「蝉丸」、戦中は不敬に当るとして真先に槍玉に挙げられ上演不能となったことは家永三郎著の『猿楽能の思想史的考察』法政大学出版局刊に詳しいが、十一月二十七日、皇族・旧華族外の一般家庭から皇太子妃となるのは初めての正田美智子嬢と皇太子明仁親王殿下との婚儀が成立する。これも時代の流れであろう。時代の流れといえば十二月一日、本邦初めての高額紙幣一万円札が発行される。週間朝日編の『戦後値段史年表』に因れば、昭和三十四年四月の国家公務員上級職の初任基本給は一万二百円、お札一枚で足りる。

前後したが十一月二十九日、先に航空機事故で遭難した岡谷正男名古屋能楽会副会長追善の秋季九皐会が社中により松坂屋ホール能舞台で行われ、番組挨拶の中で「岡谷正男氏は名古屋財界の第一人者であったことは御承知の通りでありますが、能界に於ても、社団法人観世九皐会理事、名古屋九皐会副会長、名古屋能楽会副会長等の要職に在って、矢来能楽堂の建設、熱田神宮能楽殿の建設には多大の貢献をせられました。又斯道については観世喜之師に師事して蘊奥を極められ、その大成を嘱望されてゐたのでありますが、今次の不慮の死は財界はもとより、能界にとっても絶大の損失と申すべく洵に痛惜に堪へないところであります。今次大会の番組は、岡谷氏の最後の稽古となった高野物狂、又最後の舞台となった道成寺をはじめ、岡谷氏が生前舞台で謡ひ且つ舞はれました氏が愛著の深かった曲を選んで編成いたしました。会員一同最善の演奏を捧げて氏の御冥福を祈りたく存じます」とある通り、親族・友人知己の連吟「鐘ノ段」岡谷康治・岡谷喜三郎・岡谷順之助、独吟三番「砧」井上五郎「木賊」伊藤祐茲「鵜ノ段」松尾宗吾、仕舞「百万」植村真太郎、なども手向けられ、番外に「神歌・法会之式」観世武雄・増田一雄、小舞「祐善」佐藤卯三郎、能「隅田川・鉦之拍子」観世喜之、がある。

十二月七日、宝生会定式能は第二期第三回、素謡「清経」辰巳清、仕舞四番「女郎花」倉本雅「玉葛」小川芳「葛城」鈴木右門「鉄輪」辰巳孝、「蟻通」畑富次、「福の神」井上松次郎、「花筐」野口禄久。十四日は戦後二回目の乱能、世阿弥祭を謳い主催は中部能楽師会、能楽協会名古屋支部と社団法人名古屋能楽会が後援する。番組は「鶴亀」西尾孫太郎、舞囃子「盛久」高安滋郎、一調「山姥」林愿蔵・田鍋惣太郎、「文荷」加藤良久・飯田新子、「安宅・勧進帳・瀧流」藤田六郎兵衛、舞囃子「胡蝶」佐藤卯三郎、「三人片輪」藤田六郎兵衛・高安滋郎・青木恒治、「葵上・梓ノ出」田鍋惣太郎。『狂言』紙二十二号はその様子を次の様に伝える。「お互に持場違いの役々に大汗をかき、猿公の太閤秀吉が演じたら斯くあらんと思われる。西尾氏の鶴亀の帝王、藤田、惣一郎両氏の安宅には同山に囃子方若手総出の超力演で、ワキを舞台外まで押しまくって凱歌をあげるなど、当日一ばんの大人気。模擬店も賑わって盛会であった」と。二十日に掬水青陽会があるが研究会で非公開、この乱能が実質的には納めの催会となった。なお押し詰った二十五日、東海テレビが第一チャンネルで開局する。

◇……◇

面紹社主催 新春能面展

鶴舞中央図書館で

能面研究会「面紹社」（保田紹雲氏主宰）は、新春一月六日㈫から三十一日㈯まで名古屋市鶴舞中央図書館一階展示コーナーで「新春能面展」を開催する。

同展は今回で十二回を数え、同研究会会員十四人がことし中に新たに制作した能面を出展。また展示に当たっては、能面とそれを使用している舞台の様子とを関連づけて、理解を深めやすくするため、能の舞台を描いた能絵と、それに使用する能面が組み合わされている。

能面は、翁、黒式尉、小面、若女、近江女、十寸髪、深井、小牛尉、平太、蝉丸、悲童、童子、猩々、小癋見、小天神、小飛出、大飛出。

能絵は、能英樹画「英樹画集」（1月6日～15日）、月岡耕漁画「能楽百番」（1月17日～23日）、宇和島伊達家伝来「能絵鑑」（1月24日～1月31日）いずれも原寸大複製。

1月17日と1月24日に展示替え、休館　1月13、16、19、26日。

出展は、能面作品20点、能絵（参考展示）18点

事務局＝愛知県海部郡大治町花常東江端三九。TEL052・441・1538

（②面より恵美寿会番組つづき）

能　葵上　山田あき子　千田梅僂子　橋本　今枝　梅元　正樹　宰　河村真之介　柳原冨司忠　麦谷清一郎　竹市　学　囃

素謡　鷺　安原　宗光　浜野　和夫　宮本　綱谷　上村　菅野　忠夫　一郎　繁　石崎　中村　俊雄　長田　喜一　嶋田　上嶋　義弘　昭雄　植男　吉枝　孝二　孝之　阿部　伴十　重二　平林　政次

能　胡蝶　門脇　達祐　高安　勝久　河村総一郎　麦谷　晩夫　後藤孝一郎　大野　誠　囃　仕舞　松　虫　井上　祐一　クセ　野崎　幸子　松　風　笠本　操　八　島　石崎　喜一　江　口　開　孝二　キリ

舞囃子　百　萬　板倉　京子

能　殺生石　彦坂　光余　飯富　雅介　河村真之介　麦谷清一郎　後藤嘉津幸　鹿取　希世　囃　佐藤　友彦

三日目（一月十二日〔月・祝〕午前十時始メ）

素謡　翁　中村　武史　服部　雅夫

素謡　大原御幸　中埜　恵生　松村　晋也　平田　正文　中島　輝夫

仕舞　班　女　伊藤　君子　阿　漕　土川　喜枝　笠ノ段　竹内　繁　高野物狂　浦行　山本　龍馬

独吟　咸陽宮　吉田　忠良

連吟　敦　盛　浅野　浩子　中村しきぶ

能　枕慈童　山本あけみ　飯富　雅介　鬼頭　好信　橋本　宰　柳原冨司忠　大野　誠

仕舞　大江山　水野　恭子　羽　衣　中村　泰美　キリ　小袖曽我　中林　幸子　塚原佐知子

素謡　鶴亀　池田　宗次　田住喜久雄

舞囃子　頼　政　小林　福子

能　田村　大島田鶴江　杉江　元　飯島　大輔　後藤嘉津幸　鹿取　希世　囃　仕舞　鶴　亀　石村　善梧　祇　王　関上喜代枝　梶川　陽子

素謡　邯鄲　川出　琴子　吉田　範子　大鹿　鞠子　佐藤　洋子

舞囃子　岩　船　小坂　絢子

能　船弁慶　佐野　松村七雅子　幹　後ノ出　留ノ伝　高安　勝久　梅元　正樹　河村真之介　福井啓次郎　鬼頭　好信　竹市　学　囃　井上　祐一

主催　恵美寿会　衣斐正宜

名古屋市昭和区御器所三―一三―一九　御器所パークマンション八〇二　TEL052・882・5600

◆錦秋の舞台から◆

「名古屋金春会」「観世会」「宝生会」

竹尾邦太郎

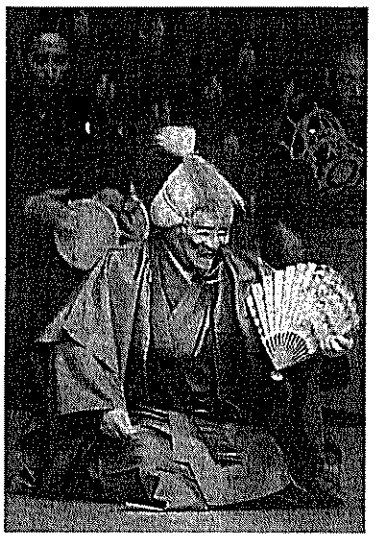
「角田川」子を尋ね流離う狂女シテ穂高、面曲見・襟浅黄・露芝文白摺箔着付・秋草文納戸地縫箔腰巻・淡浅黄水衣・男笠、青々した模造の持チ笹（感心しない）。へ（我が思ひ子は東路に）有りや無しや、とクルリ脇正へ向きを替え、へ問へども問へども、と持チ笹で目付柱へ招クのが、焦燥に駆られて鷗に縋る心に思えて面白い。へ限りなく遠くも来ぬるものかな、と幕へ眺めやる感慨は一ノ松、その思いに耽ってばかりは居られず、へさりとては、と蒼惶として正中へ戻り、へ狭くとも、とワキ渡守・雅介へ指ス乗船願う切羽詰った気持は、有無言わせぬ哀願に変り、へさりとては乗せさせ給へ、とワキへ詰メ左膝つき合掌の所、心象を鮮やかにみせる。

船中の場はシテ・ワキ問答前の初同のキリ、へ角田川にも着きにけり、で後見が笠を退く（その必要ありや）ので、流是ではあろうが下居の膝元が見た目に寂しい。心持ち十分なワキの語、身じろぎもせず聞き入るのは、その内容に躰が硬直すると思わせ、徐々にクモルと、「遂に事終って候」でひっそりシオル（写真）のが、哀しみの深さを殊増す。下船促され、「なうなう船頭殿」とようやくシオリを解くと、ワキとの問答に現実味を帯びてくる我子の死、へこれは夢かや、と持チ笹取り落し双シオリのシテに、棹を手放すワキ。クドキの深刻は、へこの世の姿を母に、とワキへ向き合掌の所、哀切。

念仏の段にワキから鉦を首に懸けて貰い立つと、へ心は西へと、で幕を見込み塚を眺めると、念仏に心耳を澄ます態。子方は未だあどけない幼児飛翔君、その幻に撞木を取り落しへあれは我が子か、の叫びはへいよいよ思ひは、の双シオリに、親子共演の実感であるだろう。へ見えつ隠れつ、と幻を追いシテ柱前へ跪く虚脱感はキリの諦感へ、へ東雲の空も、と目付柱の方へ左手を指シ、へ明け行けば、と小廻りから塚をしみじみ眺めると塚へ寄り、へ草茫々、と左手で撫で下ろすと静かに退り、直ッて左膝着き双シオリの留、若さも仄見えるが誠実な舞台に好感。（1時間17分）

名古屋金春会「角田川」
金春穂高、飯冨雅介
（辻井清一郎氏撮影）

「吹取」清水の観音に妻乞いする男シテ祐一、五条の橋で笛を吹き、惹かれて現われる女・融を娶れ、の霊夢授かるが笛に不調法、アド何茉・靖浩を代役に立て同行する。折から橋上は月の出、詩興催す何茉は一向に笛を吹く気配もみせない。一刻も早くお妻に会いたいと急かす男に、月を愛で涼しい顔の何茉、息の合った掛合いが好い。さて現われた被衣の女、当然笛の何茉に煩く纏われば、好奇心から被衣覗き込む何茉、「はっちゃこはもの」と狼狽え逃げ出す。一時はお妻を取られはせぬかとやきもきした男、安堵の呆けた顔が可笑しい。（28分）



名古屋金春会「絃上」本田光洋
（辻井清一郎氏撮影）

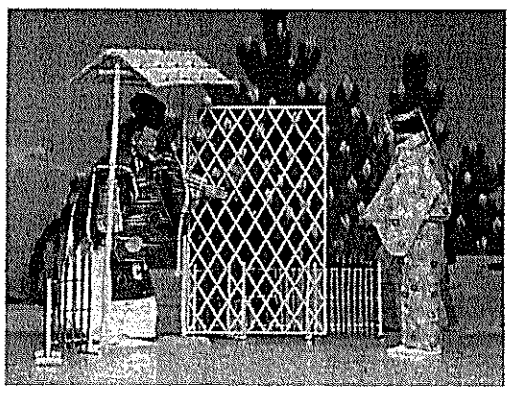
「絃上」琵琶の奥義究めに入唐を志す師長ツレ芳樹、若さの客気が純。雨の大臣と持ち上げられ弾き始めると折柄の村雨、琵琶に擬した扇抱えたまま〈古屋の軒の板庇、打つ雨を気にして上を見るや〈管絃の障り、とあっさり扇畳み中断。それを訝る老翁シテ光洋、雨音のためと知れば苦（茅筵）を〈さっと葺き、の扇の型、いかにも素早く鮮やかである。〈今こそ一調子、の底力あるシテ謡に調律の妙を悟る師長は、是非にとシテに演奏を所望（写真）、己れの力量を思い知って従者ワキ勝久に促され、そっと発たんとするが、この辺り微笑ましい。

アイは面登髭に非ず賢徳が珍しい末社ノ神・友彦の立シャベリ。師長の事績・村上天皇と梨壷女御が海人夫婦と現じ師長の入唐留まらせた逸話・琵琶の三名器の事・その一「獅子丸」を龍神に持参させ師長に授ける事、など立板に水の長広舌は実に十七分の見事。後シテ村上天皇は面中将・初冠・淡紫指貫・紫単狩衣の気品、名宣の荘重から幕へ龍神ツレ尚久を呼び出す辺りも重々しい。颯爽と出た龍神が獅子丸を師長に授けて一ノ松へ控えると、シテは師長の弾奏に興じる態の早舞三段。悠揚迫らぬ舞ぶりに光洋力量をみせ、キリは龍神を先立てると、二ノ松でキリリと両袖巻キ上げ、はらりと戻すと開キ左ウケ留拍子踏む。前ツレ姥は布由樹、シテ方本田家親子共演の清朗な舞台だった。（1時間28分・11月2日・名古屋金春会）

「小督・恐ノ舞」高倉帝の身辺私事重々しく述べて謹直ぶりをみせる勅使ワキ勝久と、恭々しく小督局探索の勅命を拝する仲国シテ邦久、短い前場が凛とした雰囲気に引き締まる。

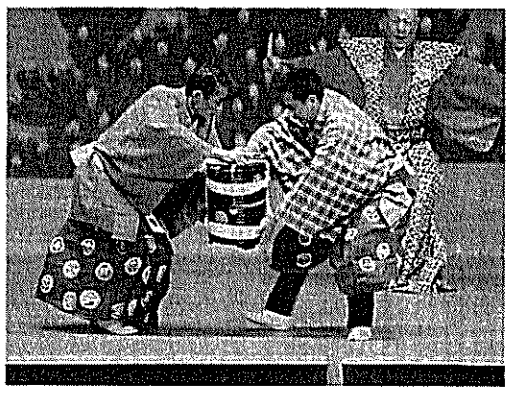
後場は嵯峨野、小督局ツレ修一と侍女トモ一政の賤が屋の内、柴折戸は常座の辺りを残し垣内を広く取る。駒ノ段は橋懸、仲国は狩衣の袖を折込みへ明月に鞭を揚げて、と馬の足を早め一ノ松、詰足に馬を御して止まる様は足使いの巧み。舞台へ入り門前、侍女が「框を押し開く」ところで引き開くことになったが、門の表裏違えて据えた誤りであろう。閉められては、と「框を抑へ」る仲国（写真）、小督局との掛合に門違いと拒まれるが、門を隔て声を頼りの、このシテ・ツレ掛合が雰囲気を出す。狩衣の袖を下ろし、内に入ってからは、帝の親書を渡す挙措の生真面目。玄宗貴妃の故事を小督局自身に重ねてみるクセを抜き、へこれまでなりや、と返書拝受して下がると名残の酒宴である。職責全う晴れやかな男舞の端正は、キリのへ唐衣ゆたかに、と膝着き左右の袖を抱き合わせ、暇を乞う所も床しい印象だった。瑕は駒ノ段の中で太刀が鞘から抜けそうだった事、地謡でへけれ、にへける、が混じり耳にざらついた事である。

なお演能当日のこの日、月の出は午後五時半、仲秋ではないが月齢は十五・六の正に満月。能楽堂の帰途、源仲国と小督局が眺めた、と同じ月を、時空を超えて眺める不思議に一入の感慨を覚えた。（1時間10分）



名古屋観世会「小督・恐ノ舞」
左から　梅田邦久、清沢一政
（杉浦賢次氏撮影）

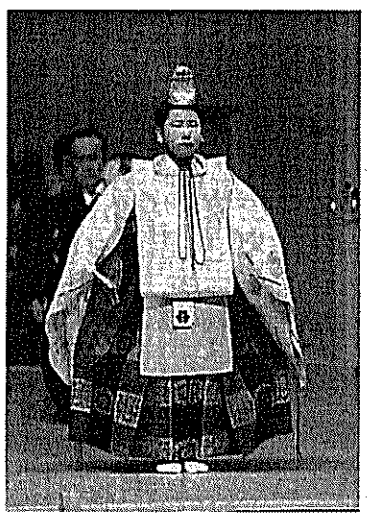
「茶壷」連尺とは担い紐、その一方に肩を入れて酔い潰れているシテすっぱ友田舎者・融に近付くシテすっぱ友彦、目覚めないと分かるや空いている連尺に自分の肩を入れ、寝たふりをする。他人の荷を摩り替えて盗む置き引きの変形である。目覚めて互いに茶壷の所有権を言い争う二人に、所の目代・弘之が中に入る（写真）が、すっぱに狡く立ち回られ、言い包められ埒があかない。とどの詰まりは「論ずるものは中から取れ」と目代が漁夫の利を占めるが、卑しさ根性悪さを発揮して友彦、すっぱの精彩。（27分）



名古屋観世会「茶壷」
左から　佐藤友彦、佐藤　融、大野弘之
（杉浦賢次氏撮影）

「海士・懐中ノ舞」前場、ワキ従者・欣哉とワキツレ融・寛を伴い西下の子方房前大臣・淳夫君の、名宣と亡母追善に赴く事を言うところ（写真）、更にはシテ海士・錺之丞に出遇い、己が出自を明かされた事を言うところ、詞も謡も堂々と力強く、キッパリした口跡が立派。シテは面曲見、海士の境涯を観念するサシ・下歌を省き、ワキとの問答から海底の明珠にまつわる故事が明かされ、現実が見えてくるところ、互いの確りした語調に迫力。玉ノ段は一ノ松、勾欄に寄りへ直下と見れども、とグッと下を覗き、へ辺りも知らぬ、と二ノ松、珠を取り得るか否かはへ不定なり、と二ツ拍子強く踏むところ、焦燥を色濃くみせる。舞台へ戻っては、へ故郷の方ぞ恋しき、と正中を数歩出て幕を見込む心に募る思いを、へ南無や志度寺の、の数拍子には己を鼓舞し且つ緊急の加護を願う思いを、強く印象づける。へ宝珠を盗み、以下の型もキビキビ極め、海底から引き上げられる所など文字通り浮かび出る様に見えた。

名古屋観世会「海士・懐中ノ舞」
観世錺之丞
（杉浦賢次氏撮影）



名古屋観世会「海士・懐中ノ舞」
観世淳夫
（杉浦賢次氏撮影）

後場は後シテ龍女の報謝。面泥眼・黒垂・龍戴・段替地金鱗箔着付・赤地金波頭文大口・紫地唐草菊桐文舞衣壺折、右手に扇、左手に経巻をもつ。正中膝をつき経巻開いて読誦、へ有難の御経やな、と両手に戴き、静かに巻くと小書でそれを懐中して立ち、いわゆる泣キ掛で早舞を舞う。途中、三ノ松へ流れ、三鼓の流シで戻ると位進み、子方に経巻を手渡すと子方は床几を下りてそれを開く。経の功徳の力も房前大臣の亡母への孝養、舞の清朗な趣は龍女の位である。（1時間43分・11月9日・観世会）

「三輪」シテ澄子、前は面曲見・襟浅黄・白地金菊菱文摺箔着付・花色地無紅秋草文唐織、左手に木葉。ワキ玄賓・勝久を訪ね、しっとりした問答掛合から山居の秋色を描写する初同、へ下樋の水音も、で右ウケ静かに耳澄ます態に面クモルうら寂しい雰囲気が、夜寒に衣をと願うところに利く。ワキへ進み、膝つくと、ワキはシテの差し出す左腕に衣を注意深く掛けるが、この了重さが好ましい。

後は、引廻シが下ろされると、面増・金風折烏帽子・緋大口・白地長絹の端麗な姿。クリ・サシ・クセで語られる三輪の神婚説話はクセのへされども（この人）、で作物を出る。クセ留のへ恥かしや、でワキから面そむける様に右ウケ曇ルのが印象的。へ隠れし神を出さんとて、と扇を幣に替え、へ千早ぶる、と戴くと神楽になる。舞中、幣を担げくるくる廻って後見の方へ招いて進み、幣を扇に再び替えて直ルところ、昂る心に舞も高潮。舞上げ、キリの型も慎重に極め、堅実な舞台は爽やか。ただ作物の引廻シは紫色。前場が杉立木で後場が岸壁のイメージなら茶色が妥当、しかも切能の「土蜘」の塚の引廻シも同じ紫色である。能二番に二番共引廻シの作物というのも煩いが、同色というのはどうみても頂けない。（1時間25分）

「素袍落」主・高義から「汝も連れて行くぞ」と伊勢参宮を確約されているシテ太郎冠者・小三郎、内心の喜びは顔に現われ、主の伯父・又三郎方への使いも心浮き浮き、充実ぶりを発揮。伯父方で門出にと振舞われる酒に、酔態も堂に入ったもので熱演だが、伊勢土産の贈り主を二度三度間違って言い立てるところが無かったのは少々物足りない。若し時間短縮のためならとんでもない事。（23分）

「土蜘」シテ耕司、金色沙門帽子・襟紺格子厚板着付・白大口・黒水衣、怪しさより厳めしさ。頼光は荘太郎、へ化生と見るよりも、と小袖を撥ね除け、右肩脱いで太刀を取り、一畳台を飛び降りてシテと渡り合うところ。若さの柔軟な身のこなしである。一方、切り違いざま一畳台へ跳躍するシテの躍動感は、頼光の太刀を躱し、蜘の糸を投げつけ、橋懸へ消え失せる中入の走り込みも俊敏。後シテは土蜘ノ精。へ千条の糸を、と打杖で巣を切り払い、へ投げ掛け投げ掛け、と此の度は独武者ワキ雅介へ繰り出す糸の手際の鮮やか。宝生の決りだろうが塚の作物は一畳台に据える。若手はいざ知らず、働キの場ともなればシテの動きは大きくなるより寧ろその逆と思えるが、時に応じて一畳台無しの方が。（49分・11月16日・宝生会）